『佛教大觀』發行の辭

惟ふに、佛教がわからなくては、日本の歴史も解釋が出來ない、日本の文學も味ふことが出來ない、日本文明の由來するところも知ることが出來ない。然るに、その佛教といふものを知りたいといふ人々の、いつでも當惑するのは、唯識三年倶舍八年など〻言つて、兎角、面倒臭い研究に、長い月日がか〻つて、手つ取り早く、佛教の大系を飮み込ませて呉れる人のないことである。從つて、

一、佛教は、どういふ風に研究したらよいか。
一、佛教は、大體、どういふことを說いて來て居るものか。
一、佛教が、印度に興り、支那を經て、日本へ傳つた道筋は、どういふ風になつて居るか。
一、日本に現存して居る、佛教の宗派の狀態や、その教義の大要を知るには、どうすればよいか。
一、日本の國家と佛教との關係は、古來、どういふ風になつて來て居るか。
一、西洋の學者が、盛に、佛教を研究して居るといふことだが、その狀況を、詳に知る方法はないか。
一、佛教の經典は、その數甚だ多いが、その一々の經典の內容を、解說したものはないか。
一、禪學といふものが、非常に流行して居るが、一體、それは、どういふことを教へるものか。
一、印度には特殊の論理學が發達し、佛教は、常に巧に、それを運用して居るといふことだが、一體どんな論法だらうか。
一、寺塔佛像法器僧具等、佛教美術研究の、基礎材料を說明したものはないか。

など〻いふ質問が、絕えず繰り返されるのである。今この『佛教大觀』は、確に、是等の人々に、滿足を與へ得るものであることを確信する。

第一編　佛教概論　東洋大學教授　加藤咄堂先生著
第二編　印度の佛教　文學博士　荻原雲來先生著
第三編　支那の佛教　東洋大學教授　境野黃洋先生著
第四編　日本の佛教　東洋大學教授　境野黃洋先生著
第五編　歐米の佛教　宗教大學教授　渡邊海旭先生著
第六編　禪學要義　曹洞大學教授　加藤咄堂先生著
第七編　佛典の解說　文學博士　常盤大定先生著
第八編　佛教美術概論　宗教大學教授　小野玄妙先生著
第九編　佛教論理學　文學博士　村上專精先生著
第十編　佛教研究法　龍谷大學教授　深浦正文先生著

以上の各編は、悉く、現代有數の學者が、特に、各〻その專門とするところの科目を選擇して、執筆せられたのであるから、世の徒に、大家の姓名だけを列ねて、その實、杜撰な代作もので間に合せて居るが如きものとは、大にその面目を異にして居るのであつて、これ、この『佛教大觀』の、窃に誇りとするところである。

大正十二年一月　丙午出版社にて　高島米峰識す

佛敎研究法

深浦正文著

序

佛教に對する研究の近代的傾向は、先づ主として言語學に基礎をおいた漢・梵・巴・藏等の古典研究と、次には主として考古學の基礎に立てる多方面の史的研究とが、最も優勝の地位を占め、各相當の成績を擧げつゝある。此にも一つ盛に行はれなければならないものがある。それは歐米思想を參考した佛教の哲學的研究である。これも必ず一般の注意するところとなり、次第に相當の成績を擧ぐるに至るであらう。此くして、哲理と史證との兩面から、原始佛教と發展佛教とを通貫したる、佛教全體の渾然整然たる思想的體系が明にされ、古今南北に不

斷なりし文化的勳績も明となり、近き將來に於て宗教としての崇高雄大なる實相が開顯せられ、その個人的及社會的體驗が、永遠に普遍に、人類の生命として力として、必然のものと承認されざるを得ない時が來ると確信する。

何れにするも、吾々は佛教の研究に向つて急がねばならない。吾々が佛教徒であるからとか、東洋人であるからと云ふ理由計りでなく、人類が過去に產み出した諸有の思想中、最も偉大なるものゝ一として公認されて居るに拘らず、唯これのみが研究されずに殘つて居ると云ふ不自然なる學術的闕陷を除くためにも、更に徹底的には、人類の爲に、永遠に普遍に妥當なるべき根本生命に對する體認の爲にも、佛教の研究は必然

であり急要である。この意味に於て佛教の研究は、世界人類全般に亘りて奬勵せらるべき意義と價値とを有するものである。少くとも予は此く信ずる。佛教々學の學的內容それ自體が此の如き自負と使命とを有するものと認めて十分な實質を具へたものであるからである。

遠きに行かむとするものは一歩より始める。この理想を實現する爲には、先以て佛教を正しく理解しなければならない。その最良の方法は諸有研究の礎材たる佛教的文獻を正しく理解するにある。此に於てか、佛典の研究法が何より先に吾人の爲に必要となる。

吾友深浦正文君は、京都龍谷大學教授として知られたる新

進の佛教學者である。君嘗て東都遊學の次、談偶予が丙午出版社の爲に錄せる佛教研究法のことに及び、互にその必要と方法とに關して相論じたことがあつた。君は龍谷大學に就職後當時互に談ることころを實現せむが爲に、その該博なる蘊蓄を傾注して、遂に克く佛典研究法一卷を完成せられ、嚮日丙午出版社の需に應じ、新に佛教研究法と題してこれを上梓せらるゝことゝなり、此に序を予に徵せらるゝの機緣に遭遇した。予は諸有意味に於て、この好著の公にせらるゝに至つたことを慶ぶものである。特に此著述は、嘗て互に語つた予の腹案を參考せられたと云ふことであり、殊に佛教研究法と改題し、丙午出版社から出版せらるゝに至つたと云ふことは、予が同社と

約して久しく果し得ざるところを、この著に依て果し得た感があり、勝手ながら、幸に恃信の縛著から解脱し得た喜に就ては、著者及丙午出版社主の善巧方便に對し感謝せざるを得ない。江湖の君子淑女、希くばこの好著に依て相共に佛教の研究に進み、一面深廣にして涯底を存せざる無量の法門藏を鑽仰しつゝ、他面には人間生活の第一義的體認に於て萬劫の悔なからむことを期したいものである。

大正壬戌の秋九月

湘南函嶺の客舍に在りて

島地大等識す

例言

一、近年書史學が唱道されてから、各種の學術討究に、旺んにこの方法が採用さるゝやうになり、ために、學徒の享くる便益の多きことは、齊しく識者の認めつゝあるところである。而して本書は、もとより完全に、這箇書史の性質を帶びてゐるわけではないが、たゞいさゝか、その形式に則つて記述せむと試みたものである。

一、惟ふに、方今佛敎の硏究は、日々に旺んに赴ける狀態にあつて、初學の徒、孜々として適書の尋求に努めてゐれど、奈何せむ、廣汎なる佛敎典籍に向つて、何れがその好適なるかを知るに苦しむもの、比々みな然るべき有樣である。本書が、這箇書史の形式を以てその指針に擬へむと試みし所以は、こゝに多く贅するまでもなからう。

一、蓋し、書史の形式を以て佛典の解題を試みたるもの、曩には、東京帝大講師島地大等氏の「佛敎硏究法」がある。惜むらくは、未完のまゝに杜絕されて、事既に久しと雖、洵に佛學入門の指針として、極めて恰好の適書たるに反かない。

予、往年東都遊學の際、藏經國譯のことより氏に知られ、會、該稿におよぶや、予はその未完なるを惜んで、氏に、これが終結を全うされむことを慫慂努むるところがあつた。さりながら、居常多忙なる氏にあつては、到底その實現を期待し難き事情あり、ために、却つて氏より、その起草を予に勸告して止まれなかつた。これ予が、淺學自らを測らずして、敢て本書を敍說するに至つた所以である。

一、本書の一部は、最初、わが龍谷大學佛敎學講座の特殊講義として講述を試みたところであるが、其後、いさゝかこれを平易に加減して、『龍谷大學通信講義』誌上に掲載し、一昨大正十一年一月より一ケ年に亙つて、一往の完結を告げた。本書は、これが一纏めにしたものである。かく、定期講義の分載に成れるものとて、忙しき學務の餘暇、隨時に綴りしものであり、且はこの種の性質上、著しく紙數が限定されし窘束等より結果して、前後の不調、繁簡の不整等隨所に滿ち、甚だ慊らざるものたるは、もとより自認せるところである。さりながら、今簡單にこれが改版を期し得られぬ以上、それ等の不備は、悉く讀者の寛恕を請はねばなるまい。殊に、『敎理篇』の如き佛敎研究の主要部分に於て、極めて略筆に

止むのやむなきに至れる如きは、最も遺憾とするところである。さるにても、今これを刊行するに方つて、かの講義の舊稿に幾分の小訂を施し、更に末段に一章の增補を行うて、稍、その面目を整へ、特に卷尾に書名・人名の索引を附して、本書の使命を多少にても全からしめむと期し得た點は、なほせめてもの幸甚として滿足すべきところであらう。

一、終りに臨み、わが島地講師が、上述の事情よりして、目下宿痾の靜養中にもかゝはらず、特に序詞を草して寄せられたるは、洵に予の感謝に耐へぬところである。こゝに記して、いさゝかその恩顧に應へようとおもふ。

大正十二年一月

龍谷大學佛敎學研究室にて

著　者　識

佛教研究法 目次

第四部　教理篇……二一九

目次終

佛教研究法

深浦正文著

序論

今や世界の文化は一轉し、時代の精神は更生した。人間思想の趣くところ、かくて、物質的浮薄の夢より醒めて、漸く心靈上の糧を覓めむとする傾向を呈するに至つたのである。洵に機運といはねばならぬ、時勢と見做さねばならぬ。而してこの風潮が、わが佛敎を眞面目に研鑽し、これを識味體驗せうと努むる學究者を續々輩出せしむるやうになつたのは、極めて自然の數と謂つべきであらう。然り、わが佛敎は、今や最も意義ある學究者を得ようとしつゝあるのである。

さりながら、一口に佛敎といふも、いはゆる八萬の法門、廣漠として容易に捕捉するところを知らず。從つて、これが門内に入ることすら甚だ困難なるに、ましてその堂奥に辿ることの如何に難事たるべきかは、もとよりいふを俟たぬ。則ち多くの學究者は、折角この大堂を憬

れて蝟集し來れるに、たゞ徒にその門前にさ迷ふのみで、如何にしてこれに分け入らむかに躊躇逡巡せるが、渠等目下の狀態である。これ等初學の入門に對して、佛敎研究の方法を說くことの緊要なるは、今更いふを俟たぬところであらう。特に古來の硏究が、單に文字訓詁の末に滯つて、更に秩序を立てゝ敎義の核心を摑むことを努めず、あたら註釋硏究に陷つて、思想の中樞に觸迫するの態度を缺けるわが佛敎にあつては、これが硏究の方法を講じて、不當の努力と意義なき手數とを避け、眞に佛敎そのものゝ眞髓に體達せしむべく導くことが、斯學學界に於ける現時の急務といはねばならぬ。これ吾人が本講に於て、敢てその要求の一端に應じようとする所以である。

但し、こゝに佛敎硏究の方法を敍するといふも、もとよりこれ、たゞ初學の楷梯たらしむるに過ぎずして、由つて以て、學術的理論を高調せうとするのではない。從つて、その硏究法といふも、かの論理學にいはゆる方法論(Methodology)のやうな、一般硏究上に於ける科學的原理を論究するものと撰を異にし、唯々佛敎硏究上の實際的方法を敍して、これが參考資料を提供せうとするに過ぎぬ。されば、佛敎の分科形式を論じ、その淺深次序をあげつらふが如きは、もとより本講の期せざるところ、讀者請ふ、その皮相の解說を咎めざれ。

然るに、凡そ廣く佛敎を硏究するに當つては、その主要なる資料を、先づ以て文獻と藝術と

の兩面に仰がねばならぬ。もとより佛敎そのものゝ內容の豐富なるに順じて、これが硏究資料も各種多樣なるべき筈で、それは論を俟たないところであるが、併しもしこの二種を措いては、佛敎の硏究は、到底望むことが不可能である。いはゆる文獻とは、一切の佛敎的文書であつて、藏經その他の佛敎關係書籍を該攝していふ。いはゆる藝術とは、一切の佛敎的繪畫・彫刻・建築及び儀禮等の諸種を總括せる稱である。これ等は、何れも直接間接、最も須要なる資料であつて、就中、文獻は藝術を明かにし、藝術は文獻を確實ならしめ、相扶相成、以て硏究上の効果を有力ならしめる。而して、特にその中幹をなすものは、卽ち文獻にありといはねばならぬ。

今佛敎硏究の方法を論ずるに當つて、別してその文獻資料たる佛典の解說調理の方法を究むる所以、卽ちこゝにある。されば本講は、既にこれ佛敎硏究法中の佛典硏究法である、文獻資料を以て佛敎硏究に入らむとする實際的方法を指示するを以て、その本務とする。從つてその敍說の樣式たる、佛典硏究の主要項目と見做すべき藏經・佛傳・敎史・敎理等の各種に亙つて、先づその槪念を明瞭にせむために、それ等の略解を施し、而して次に、その硏究上に於ける比較的關係深き參考文書を紹介して、某項・某題を究めむには、如何なる文獻記錄に依るべきかを指示せうとするに他ならない。要は、既述の如く、專門の學理よりも、初學の實際上の便宜に充つるを目的とするからである。さればこれ、いはゆる月を指す指、門を敲く瓦の類、學者、由つて

以て佛敎の大堂の門内に進み入ることを得ば、乃ち本講の目的は足りるのである。もしそれ、藝術資料を以て佛敎研究に入らむことを敎說するが如きは、吾人の分野にあらずして、須く專門の學士に俟つべきところ、請ふ、斯道の先達の出づるあつて、これが南針を與へられむことを望むや切である。

さらば、以下、直に本論に入つて、叙說の步を進めよう。

本論

第一部　藏經篇

第一章　藏經の意義

さて、佛教研究に於ける文獻資料即ち佛典中に於て、その根本文書を覓むれば、須く藏經を第一に擧げねばならぬ。實に藏經は、佛敎聖典の集大成として、文獻資料中の首位を占めゐることは、今更いふを俟たぬところである。自餘の、古來よりの佛敎學者の手によつて成れる記錄典籍の如きは、たゞこの藏經を基調として、それより流出派生せる枝末文書たるに過ぎぬ。これ本講の最初に藏經篇の一部を設けて、初學の諸士をして、藏經に關する一般概念を扶植せしめ、由つて以て佛典研究の起點を的確ならしめようとする所以である。

いはゆる藏經とは何ぞや。曰く、これ支那にあつて、佛敎々說の叢書又は集成を意味されたる稱呼であつて、また大藏經といひ、一切經と呼び、三藏經と稱へられてゐる。藏とは、梵語の Piṭaka の譯名であつて、まさしくは籠の義に當り、攝藏をあらはす言葉である。即ち籠は、

種々の花卉を入れ、果實を滿たし、その他雜多のものを包容するやうに、多くの佛敎典籍が攝藏包容されたる叢書集成そのものを、喩を以て籠の名を附したのである。これもと印度にあつて、佛說の一代敎を、經・律・論に收束せるいはゆる三藏（Tri-piṭaka）——更に嚴密にいへば三籠——より得たる名目であつて、經の集成は經籠（藏）、律の集成は律籠（藏）、論の集成は論籠（藏）との如く、集成を意味するものに與へられたる籠の名目が、支那に翻譯さるゝに當つて、同一の意義を有する藏の字を以てあらはされ、これよりして、更に藏經の稱呼が起つて來たわけである。次に經とは、梵語の Sūtra の譯名であつて、まさしくは線の義に當り、貫穿または攝持を意味する言葉である。卽ち、線を以て花束を貫穿して、花環を作るが如く、佛說の眞理を、經を以て貫穿鑿通して、よくその體系を詮表するに名くる（攝持とは、經がよく所化の有情を擁護攝持するよりして、しかいふ）。普通、佛陀の所說を詮表せるものを經と稱するは、卽ち三藏中の經のことであつて、これその原意であるが、今のいはゆる藏經の經は、更にその意義が擴張されて、普く佛敎義理を詮表せる典藉を指示せるものである。よつて藏經の稱たる、卽ち佛敎々說の叢書集成をあらはすことゝなる。而して、上に擧げし三藏經の名は、藏經の主部が三藏を以て成れるより稱するところであつて、また一切經・大藏經の目は、藏經の浩瀚をあらはす形容語と知るべきである。但しこの稱たる、支那にあつて、既に六朝の頃よ

り用ゐられたるを案ずれば（『佛祖統紀』第卅三・第三十八）、その由來するところ、甚だ遠しといはねばならぬ。もしそれわが國にあつては、中古主として一切經と稱せられてゐたものが、鎌倉時代以後に及んで、大藏經の名が多く用ゐらるゝに至つたやうである。

第二章　藏經の原本

抑々かゝる佛說の叢書たる藏經が編纂さるゝに至つた由來は、遠く、かの佛滅後程なく摩訶迦葉（Mahākāśyapa）等によつて行はれし結集（Saṁgīti）に起因すといはねばならぬ。巴利律藏の『小品』即ち『チューラヴッガ』（"*Cullavagga*"）第十一の所明によるに、佛涅槃の時に當つて、癡人善賢（Subhadra）これを幸として、佛制戒の拘束より自由を得たるを喜んだのを見て、迦葉は、速に合議結集の必要あるを認め、非法・非律の流行を未前に防がむとして、乃ち王舍城（Rājagṛiha）附近に於て、五百の大德を集めて、佛說の編纂を行つたといふ。これいはゆる第一回の結集であつて、その後また數回に亙り、重ねてこれが行はれた。但しその初めにあつては、いはゆる佛說の編纂といふも、たゞこれを合議組織するといふ意味に止つて、未だ、これを書寫して傳弘されるまでには至らず、從つて、たゞ口誦を以て相承されるといふに過ぎなかつた。その書寫記錄を見るに至つたのは、遐か後代に屬するところである。さりながら、既に

その記錄原本が成つたとしても、これが形式は、決して一樣ではなくして、その記述の言語上に著しき相違あるを知らねばならぬ。その相違とは何ぞといふに、曰く、巴利語（Pali）にて記されたると、梵語（Saṁskṛit）にて記されたるとが卽ちそれである。

由來佛敎は、その傳播の地理上より區分して、南北兩方面に劃される。もとよりかく地理的に區分することは、決して正鵠を得た所談とはいふことが出來ないが、而も一面に於ては、この區分法を用ゐることの、至便なるを覺ゆるを以て、今また、姑くこれに則つて、この兩方面を眺めむに、そのいはゆる南方佛敎とは、現今の錫蘭島（Ceylon）を中心として、緬甸（Burma）・暹羅（Siam）・安南等の諸地方に流布せる佛敎の總稱であつて、いはゆる北方佛敎とは、現今の尼波羅（Nepal）以北、西藏・支那を中心として、蒙古・滿洲・朝鮮・日本等の諸地方に傳播せる佛敎の總稱である。而して、この兩方佛敎を對照して、その特殊の異點を檢出せば、決して一二にして止まるべきではないが、如上記した言語上の相違は、その最も著しきものであつて、卽ち南方にあつては、巴利語を以て記され、北方にあつては、主として梵語——特に佛敎梵語といつた方が適當である——及びこれが飜譯諸語を以て記されてゐるのである。而して大體に於て、巴利語にて書かれたものは小乘敎であつて、梵語にて書かれたものは大乘敎である。

さて、いはゆる巴利語聖典は、"*Dīpavaṁsa*"（『錫蘭島史』）の記すところによるに、紀元前

八八年に即位せる佛法興隆の英主アブハヤ、ヴッタガーマニ王（Abhaya-Vaṭṭagāmaṇi）の時、マハーヴィハーラ寺院(Mahāvihāra)に於て、從來口誦を以て相傳されてゐた土語の三藏が、始めて記錄書寫されたといふことである。その後、紀元第五世紀の初め、摩揭陀國(Magadha)の碩學覺音三藏（Buddhaghoṣa）渡島して、始めて巴利語を以て土語の三藏を復譯し、かつこれに註疏（Aṭṭhakathā）を附して、こゝに巴利語聖典の大成を見るに至つた。現今この聖典は、錫蘭・緬甸・暹羅等に存在して、その部數・卷數等、明かに確定し得らるゝ。その中暹羅所藏の藏經は、一八九三年、皇帝チュラロングコルン五世(Chulalongkorn V.)登極二十五年を紀念せむために、暹羅文字を以て刊行されたところであつて、普くこれが、諸外國の大學・學會等に寄贈されたことは、今なほ世人の耳朶に新なるところである。

次に、いはゆる梵語聖典は、原始の佛敎語よりして梵語——佛敎梵語——に復譯されたものゝやうである。但し、こゝに原始の佛敎語といふも、釋尊は、かの錫蘭敎徒が確信せるやうに、果して摩揭陀の俗語のみを以てして、少しも梵語を使用されなかつたかどうかは、輕々に判ずることが出來ぬところであつて、恐く對機の別なるによつて、梵語の雅調にも依られたと推察されぬでもない。こゝを以て、現時の梵語聖典そのものが、もとより、佛陀金口の速記であるとは考へることが出來ぬけれども、由つて以て、梵語聖典が巴利語聖典よりも新しきものとは

決して速斷することが出來ぬのである。

然るに、この梵語聖典の普く世に紹介されたのは、なほ、極めて近代のことに屬する。その紹介の功勞者としては、先づ以て英人ホヂソン氏 (B. H. Hodgson) を擧げねばならぬ。一八二二年、氏一度官途を以て尼波羅に入るや、豐富なる梵語聖典の、この國に收藏されたるを知り、乃ち公職の傍孜々として力をこれが蒐集に注ぎ、その結果實に三百八十部に餘る新古の寫本聖典を收得して、これを歐洲學界に提供した。從來佛敎としいへば、巴利語聖典のみと考へられてゐた歐洲學界が、こゝに俄然として、厖大なる梵語聖典あるを敎へられて、如何に驚嘆の眼をそばだてしことであらう。かの有名なるフランスの碩學ビュルヌーフ氏 (E. Burnouf) の傑作 "*Introduction à l'histoire du bouddhisme indien.*" Paris, 1845 (『印度佛敎史序論』) 並に『法華經』の佛譯 ("*Le lotus de la bonne loi.*" Paris, 1852.) の如き、みなこれに刺戟されて出でし反響であつて、洵に渠の偉績や不朽に存すと謂つべきである。而もこれ等の梵本の紹介に際して、渠の發表せる幾多の論文は、實に斯學研究に於ける重要なるものであつて、特に一八七四年に出した "*Essays on the Language, Literature and Religion of Nepal and Tibet.*" London (『尼波羅西藏之言語文學宗敎論』) の如きは、それ等諸研究の集大成されたものである。

ホヂソン氏に次いで、第二回尼波羅聖典蒐集者は、該地公使館付の醫官ライト氏 (D. Wright)

であつて、氏は、一八七三年より同七六年に亙り、苦心努力して三百二十餘部の多數佛典を蒐集し、なほその上、婆羅門教（Brahmanism）に關する夥多しき古本類等をも獲得し、その効績實に初回に優るものがあつた。ケムブリッヂ大學教授ベンドウル氏(C. Bendall)、これが總目錄を作つて、"*Catalogue of the Buddhist Sanskrit Manuscripts in the University Library, Cambridge.*" 1883（『ケムブリッヂ大學圖書館佛教梵筴目錄』）といふ。これによつて、佛典の研究にはもとより、また尼波羅年代の推定、古代梵字の研究等にも資するところ、實に尠くはないのである。

以上は、尼波羅に於いて佛教の梵語聖典を發見せる代表者を擧げたのであるが、然らば、何故この國には、かく多くの梵語聖典が收藏されてゐたかといふに、印度に於て、佛教の末葉たる紀元第九世紀の前後よりして、回教徒（Mohammedan）の侵入あり、いはゆる「コーラン・貢献・刀劍」（'Koran, Tribute or Sword'）の精鋭を以て、異教を迫害蹂躙すること極めて辛辣、到るところ、寺塔を破壞し、佛像・經卷を毀損した。これがために佛教徒は、難を他國に避けねばならぬことゝなり、乃ち中印の僧徒の一部は、梵筴の幾分を擁して近隣に安全の地を覓めた。元來このヒマラヤ（Himaraya）山中の邊陬尼波羅が、卽ちその避難所の隨一であつたのである。元來この地は、印度・西藏間の通路に當り、國內には夙に佛教々化の普きあり、加ふるに、その氣候

寒冷にして、この種の典籍を保存するには最も適してゐたといふ。かくしてこゝに移藏された聖典、並にその轉寫本が永く傳持されて、以てホヂソン氏等の發見に逮んだのである。

尼波羅に於ける蒐集事業は、その後にあつても、なほ小規模ながら、數回の遠征を續けられてゐたが、その他に、最近に及んで、西域・中亞方面に於ける探險踏査が續々として試みられるやうになつた。卽ち、英人スタイン氏(M. A. Stein)によつて、先には(1900–1A. D.)于闐(Khoten)より、後には(1906–8A.D.)燉煌より多大の發掘あり、また獨人グリュンウェーデル氏(A. Grünwedel)によつて高昌(Turfun)より(1904–6A.D.)、佛人ペリオ氏(P. Pelliot)によつて燉煌より(1909 A.D.)、何れも數多の蒐集を遂げられた。わが本願寺また橘瑞超氏を遣して、龜茲(Kucha)及びその附近より珍貴なる發掘を收得したことは(1909–13A.D.)、普く世人の知れるところである。而して、これ等の發掘蒐集にかゝる獲物は、何れも現に、各自々國の公私の學庠・文庫等に襲藏されてゐるのである。凡そ、かくの如き頻々たる中亞探險によつて發見された學界の收獲は、實に偉大なりといふべく、啻に佛敎經典の研究のみならず、廣く東洋學研究の上に於て著しき進捗を來し、特に佛敎學にあつては、最近の研究は、言語學的、歷史學的、考古學的研究より進んで、漸く敎理の內面の研究に入らむとするの槪がある。これ洵に、如上新資料發見の結果と見做さねばならぬ。豈學界の至慶ではないか。

以上、藏經の原本たる巴梵兩語の聖典に就いての一端を概說した。もとより眞に一端たるに過ぎぬ。もしそれ、その現存聖典の內容組織等に就いては、各々專門の分野に亙るべきものであつて、到底今の盡すべきところではないから、こゝにはこれを省略することゝせう。而して梵語聖典の原本よりして、更に漢譯藏經を出し、西藏々經を出し（西藏は、一部分、漢藏より重譯されたものがある）、また、西藏・漢藏より重譯せる蒙古藏經あり、滿洲藏經あり。最近また泰西諸語に譯出され、或は現に進行の途にあるものもある。わが國に於ても、梵本國譯の事業、今や漸くその緖に就かむとしてゐる。而して、これ等はみな北方梵語佛敎の系統であるが、更に南方系統たる巴利語佛敎の翻譯にあつても、學界また漸次これに着手せむとする機運に向つてゐる。かくして佛敎學界の前途は、正にこれ百花繚亂の趣ありと謂つべきである。

然るにこゝに注意すべきは、これ等各種各語の藏經甚だ多樣なれど、就中、その量に於て最も完備せるものは、實に漢譯藏經たることを忘れてはならぬ。これその譯業の、最も早くよりして、幾多長年月に亙つて行はれしが爲であつて、漢譯のみに存して他に見るを得ざる經典が實に多々ある。啻に量のみならず、その質にあつても、譯業を最も主要とせる國民性表現の結果として、漢譯經典は、決して他譯のそれに對して、遜色を取らないわけである。されば佛典研究資料の第一位に數ふべきは、須く漢譯藏經にありといはねばならぬ。この意味に於て、漢

字と最も緣近く、最も親しみ深き吾等邦人は、全然その言語系統を異にせる歐米人士に比して佛典研究上、先天的利便を有すといひ得られよう。世人多くは這般の旨を辨へず、かゝる貴重なる幾多の資料をば、自ら進んで調理剖檢せむとは努めず、徒に泰西諸家の所說に附隨してその糟粕を甞め、更に何等省るところなからむとするの傾向が甚だ尠くはない。その無定見、その無節操、洵に思はざるの甚だしきものである。もとより歐米學者の研究にあつても、その方法の、科學的論理の下に明確なる結論を導いて、未開の原野を艾除しもて行くところ、吾の大に範として學ばねばならぬ點ではあるが、さりとて、その結果の悉くが眞であるとは、どうしていへよう。近くは、如上の言語系統の相違よりして、意外の謬見に結果することなどが、決して尠くはないのである。一例を擧ぐれば、有名なるフランスの支那學者レミューザー氏(A. Rémusat)が法顯の『佛國記』を佛譯し(" Foĕ Kouĕ Ki ")、これが一八三六年に刊行されてゐるが、その中に、拘薩羅國(Kosala)の條下にある原文「刻二牛頭栴檀一作二佛像一」といふを「牛頭を刻むに栴檀をもつてして、佛像と作す」と誤解して、その意に譯述してゐる。英國の古物學者として有名なるファーガッソン氏(J. Fergusson)、この誤譯の文意を據處として、自著の" *Tree and Serpent Worship.* " London, 1868(『樹木及龍蛇崇拜』)の中に、得々然と、佛教が牛頭を拜するよりして、動物崇拜の低級宗教なることを述べてゐる。その謬根はレミューザ

ー氏にあれど、何れにしても、漢語と全然その系統を異にせる言語を自國語とせるよりして、かゝる滑稽に類する過誤を招いたわけである。尤もこれなどは、特に極端な例證ではあるが、とにかく歐米學者の佛典、殊に漢譯・漢語の佛典の研究が、吾等邦人よりも、如何に不便困難を感ずべきかといふことは、この一事によつても了解されようと思ふ。さりながら、かくいへばとて、渠等の研究結果を、悉く無價値のものとして顧みるなといふのでは無論ない。もとより渠等に學ばねばならぬ點の多々あることは、上にいうたとほりであるが、徒にそれに盲從附隨して、何等の省慮を迤らさゞるが如きは、洵に自他に對しての最大恥辱たることを警覺せむとするのである。學者幸に這般の趣旨を會得して、吾等邦人が斯學の研究に當つての至便を享受せることを自覺せば、希くは勇猛精進、以てその研鑽の前途にいそしみ專らなれ。

第三章　藏經の漢譯

吾人は、前章既に、漢譯藏經が各種藏經中に於て、最秀最優たることを一言した。もとより各種藏經を比較して、これが言語學的討究を試みるに當つては、それ等あらゆる藏經を研究資料として重んずべきは論を俟たないところであるが、しかし何れの場合にあつても、漢譯藏經がその主たり本たる價値あることは、儼として動かすべからざるところである。さればこの藏經

篇にあつても、須く漢藏の內容組織を明瞭にし、學者をして、これが取材運用の資に供するところがなければならぬ。よつて本章以下藏經の語を、特に漢藏を中心に取意して、その內容組織の概要を叙說することゝせう。

それ支那佛敎にあつて、その最も著しき特徵を擧ぐれば、先づ第一に譯經の事業に指を屈せねばならぬ。これ洵に、その他の諸國に、同例を見ざるところであつて、漢譯藏經が自餘の藏經に比し、夐に優れて完備してゐるのも、實にその結果といはねばならぬ。この漢藏の翻譯は遠く後漢の明帝永平十年(67)に始まり、元の初期まで、凡そ一千二百年間に亙つて行はれた。元の世祖至元二十二年(1285)に慶吉祥等によつて集成された『至元錄』の統計によるに、この期間に於ける翻譯者一百九十四名、譯出の佛典一千四百四十部・五千五百八十六卷と數へられてゐる。而して、この長時期に亙る翻譯に於て、いはゆる新舊の二期を劃すべきことは、普く世人の知れるところであつて、今その各時期中に於ける代表的譯家を擧ぐれば、先づ舊譯時代にあつては、第一に姚秦の鳩摩羅什(Kumārajiva)を數ふべく、次いで後漢の安世高・支婁迦讖(Lokarakṣa?)、吳の支謙、西晉の竺法護(Dharmarakṣa)、東晉の佛陀跋陀羅(Buddhabhadra)、北凉の曇無讖(Dharmarakṣa)、北魏の菩提流支(Bodhiruci)、陳の眞諦(Paramārtha)等、これ等はみなその時代の錚々たる偉人であつて、何れも、月支(Tukhara)・安息(Parthia)・康居(kirgiz)・

罽賓 (Kaśmir)・于闐・龜茲等、いはゆる印度・西域地方より來朝した沙門である。次に新譯時代にあつては、唐の玄奘獨りその盛名を擅にしてゐる。渠は在天十七年間、親しく五竺の言語を究め、深く敎義の蘊奥を叩き、歸來、新制の翻譯法を以て原意の移植に努め、遂に譯經史上の一大時期を劃すべき偉績を擧げ得たのである。その後、義淨・金剛智(Vajrabodhi)・不空(Amogha-vajra) 等、各自特殊の方面に發揮するところあり。かくして、新舊の兩譯雙々相俟つて、大小の三藏殆んど具備するに至つた。

さりながら、かくの如き長時期に亙つて幾多の翻譯出で、時代の經過と共に漸次その數を加增せることゝて、これが散逸亂離を防がむがため、當初以來の翻譯經典を組織統一すべき目錄の必要を生じたことは、極めて當然の次第である。但しこれ、支那の國民性として、文字記錄を尊べるよりしてこの成果に趣けることは、もとより爭はれぬところであつて、印度の如き、唯々音聲を尊び記憶を主とせるがため、會々かの結集の如き擧に於ても、單に合議誦出の範圍に止り、少しも記錄文字の成果なき等に比べて、大に逕庭の存せるところといはねばならぬ。乃ちこの國民性の趨向として、歷代の學者、これが作成に大に力を注ぎ、東晋の代に、かの有名なる彌天の道安が、『綜理衆經目錄』を編してより以來、大小經錄の輯成、その數實に六十に垂むとするの夥多あつたといふことである。就中現今存せる經錄は、二十餘種ある。而して

これ等多數の經錄は、何れも長短得失があつて一準ではないが、中にあつて、比較的精密に組織され、殆んど完備に近いものとしては、實に『開元釋敎錄』にありといはねばならぬ。この書は、唐の開元十八年(730)智昇の撰にかゝり、洵に藏經研究の中樞指針として、普く學者に重用されてゐるところである。この經錄にあつては、當時現存の經典、總じて一千七十六部・五千四十八卷と數へられてゐる。乃ち一時はこれを以て、藏經の定數として一般に認められた。世にいはゆる藏經五千卷と通稱されるのは、實にこの經錄所揭の計數に由來するところである。但し、もとよりこれを以て不變の定數とする事は出來ぬ。則ち上にもいうたやうに、時代の推移に伴ひ、譯出の經典も隨つて漸次加增し、且また一方、支那に於て撰述された史傳・音義・目錄等の類の入藏されるといふやうな事情もあり(この支那撰述の入藏に就いては、いつも必ず帝王の勅命によつて欽定されることになつてゐた)、藏經の範圍は、かくして後代に至るに隨つて次第に擴張され、ためにその部數・卷數には常に異動を來し、さてこそ終には著しき相違を呈するに至つたのである。凡そこれ等に關聯する須知の要項は、以下章を重ねて順次に叙說を試みようと思ふ。

第四章　藏經の開雕

かくの如く經錄既に成り、それによつて、藏經の範圍が略々一定されるやうになつたが、然らば次に、これが印刻を見るに至つたのは、何れの時代であるかといふに、宋代の開版を以てその嚆矢とせねばならぬ。もとより唐代にあつて、既に多少の印刻の成つた迹を文献に徵し得られないではないが、全藏刻成の大業としては、實に北宋の太祖が、開寶四年(971)に勅して企圖せしめたるに始まるといふべきである。世にいはゆる『蜀本』と稱する藏經は、卽ちこの時の開雕を指すものであつて、これが完成には、次の太宗の太平興國八年(983)まで、實に十二年の日子を費したのである。かくて、一度その刻成を見るや、わが東大寺の奝然直に入宋してこれを請來し、次いで高麗の韓彥恭また入宋して、かの地にこれを請來した。爾來この種の事業は頻々として續起し、啻に官公の事業としてのみならず、私版の企圖もその都度著しく、かくて最近刻成されし『頻伽本』に至るまで、大小官私の開雕、實に十數回の夥多しきに及んでゐる。就中、南宋の紹興二年(1132)の頃、湖州の王永從一族の發願によつて始められた『思溪本』(『湖州本』または『浙本』ともいふ)、及び元の至元十五年(1278)の頃、杭州普寧寺に於て、道安・如一等の募緣によつて始められた『杭州本』は、わが『縮刷藏經』校刻に際し、對校として

用ゐられたものであつて、『縮藏』にいはゆる、前者は『宋本』、後者は『元本』なるものである。また明の萬歴十七年(1589)の頃、密藏・幻余等の發願によつて始められた『萬歴本』(『楞嚴本』または『明本』ともいふ)は、從來の摺帖(折本)の型を破つて、始めて方冊の形式を取り、普く流布の功を奏したものとして名高く(嚴密にいへば、方冊の形式は、これより先、浙の武林に於て刻成されたものを以て最初とする。但し、今は傳はつてゐないから、その如何なるものなるかを知るに由がない)、且また、わが『黃檗本』の覆刻の臺本となつたことも、普く人の知れるところである。後、人あり、この『萬歴本』に次いで、更に『續藏』・『又續藏』を輯成してこれに附加した。『明續藏』・同『又續藏』と稱せらるゝもの、卽ちこれである。更に清の雍正十三年(1735)に、勅を以て始められた『龍藏』は、再び摺帖の形式を採り、製本印刻實に贅を極めたもので、わが國にあつては、獨りわが佛教大學にのみ襲藏されてゐる珍籍である。更にまた最近清の末葉(1911)、上海頻伽精舍に於て刊行されたいはゆる『頻伽本』は、わが『縮藏』を翻刻せるものである。

以上は、支那本土に於ける藏經開雕の一端であるが、このほか、更に隣國たる高麗と契丹とに於て、また刻藏の擧のあつたことを逸してはならぬ。卽ち、支那に於て『蜀本』の大成を見し結果として、本土に於ける刻藏事業の進展はもとより、更に延いて高麗に影響して、顯宗の二

年(1011)、勅命によつて藏經印刻の擧あり。また契丹にあつても、道宗の咸雍四年(1068)、新規の刻藏事業が企てられた。而して高麗にあつては、その後、既雕の藏經兵火に罹つて燒失したから、高宗の二十三年(1236)、更に規模を大にして再雕の企圖を起され、かの『蜀本』・『丹本』及び初雕の『國本』を比較對校して、十五年餘の日子を費し、實に空前の良本を刻成するに至つた。有名なる『高麗藏經』とて珍重されてゐるのは、即ちこの再雕にかゝれるものをいふ。わが『縮藏』は、これを以て底本として刊行されたのである。されば、如上の『頻伽本』が『縮藏』を翻刻せるよりして推說せば、『頻伽本』の刊行は、やがてこれ支那に於ける『麗藏』の復活といつて然るべきであらう。何となれば、從來支那に於て刊行された諸藏にあつては、未だ曾て『麗藏』を底本とするものがなかつたからである。

次にわが國刻藏の史實を討ぬれば、始めて藏經全部の印刻されたのは、近世德川時代の初期にあつたといふべきである。但し、そのこゝに至れる過程には、幾多印刻の變遷歷史を有せることは、もとより論を俟たないところである。今遠く溯つてその史迹を案ずるに、かの法隆寺の百萬塔內に收められたる四種陀羅尼(Dhāraṇī)が、奈良朝時代即ち神護慶雲四年(770)に刻成され、これが即ち現存せるわが國最古の印刻として、多大の價値あることは、普く世人の知れるところであるが、既にこの頃よりして、たとひ一部分にもせよ、經典の印刻を見たること

は、洵に注目すべきところである。凡そ何れの國土にあつても、印刻の始めて行はれたのは、悉く宗敎關係の文書にある。これひとへに、宗敎情操の亢上が、やがてその宗敎をして、廣く流布し奉持せしめむがために、乃ち文書の印刻を行ふに至つたものと解せねばならぬ。百萬塔內の陀羅尼印刻の如きは、その最も著しき例證といふべきである。さて、爾來平安朝以後に至つては、印刻の術漸く開け、經典の開雕轉たその數を增し、鎌倉時代・室町時代に及んでは、未完ながらも藏經開雕の擧のあつた迹を窺ひ得べく、なほまた木製の活字を以て印刻する方法を創められるやうになり、啻に佛敎の典籍のみならず、その他の文書・記錄の印刻も、かくして甚だ旺んに趣いた。朝倉龜三氏の『日本古刻書史』(明治四十二年刊)は、這般の消息を傳へて詳細を極めてゐる。專攻の學士の、必ず一讀を要するところであらう。

然るに、以上の印刻の如きは、僅に一部分づゝの小事業たるに止つてゐたが、こゝに藏經全部の開雕を企て、わが國藏經完刻の先驅をなしたものは、實に德川初期に於ける天海の木活藏經である。但し、近時、京都大藏會委員の手によつて、この天海の事業に先つこと二十餘年、伊勢の宗存てふ僧が、『麗藏』を模倣して摺刷を試み、これが全部完成の企圖を起した事實を發見した。乃ちこれによれば、天海の事業は、必ずしも獨創的でなかつたといはねばならぬ。さりながら、そのよくこれを完成せしめたのは、やはり天海の事業に俟たねばならぬから、今ま

たこれを以て、その第一者として數へる次第である。天海は、人も知る、日光を開き、東叡を興し、比叡を旺んにした偉僧であつて、德川初期三代の歷遇甚だ厚く、乃ちこの精力とこの外護とを以て、寛永十四年(1637)より始めて十二年に亘り、藏經全部の完刻を成就した。但し渠は、その完成を見るに至らずして歿し、その後五年を經て、漸く全部が成し遂げられたのである。この版は、木活を以てせる鮮明なる摺帖であつて、宋の『思溪本』、元の『杭州本』を相承し(?)、而もその企圖が將軍家光指命の下に成つたものであるから、紙質優良、最も贅を盡してゐる。世に『天海本』または『寛永寺本』等と呼び、一にまた『倭藏』の稱がある。但しこの版は、その摺刷極めて少數なるに加へて、その內容成績も、餘り良好ではなかつたから、これが流布することと殆んどなく、乃ち次に鐵眼をして、更にこの種の事業に起たしむるに至つたのである。

鐵眼は、有名なる黃檗の隱元禪師の弟子であつて、平素、わが國未だ藏經の刻板のなきを患へ、乃ち『刻大藏緣起疏』を草して、普く天下の有志に訴へ、寛文九年(1669)より開雕の事業を始めて十三年の日子を費し、漸く完成することを得た。いはゆる『黃檗本』と稱せらるゝもの、卽ちこれである。既に一言したやうに、この版は、明の『萬曆本』の覆刻であつて、『明本』の缺點短所は、そのまゝ悉く繼承されてゐるが、方冊本として、入手並に携帶の便があつたために、廣く國內に普及し、わが國各地に現存せる藏經中の大部分は何れもこれである。これ卽ち、『明

本』がかの地に普及の効のあつたのと、その揆を一にしてゐるといはねばならぬ。惟ふに、『明本』を刻せる密藏・幻余の兩者は、何れも禪家の出である、而して今『蘗本』を雕せる鐵眼、また同じく禪家の資である。敎外別傳・不立文字を標榜せる禪門よりして、文字敎説の藏經の開雕事業に與れる學僧を出したことは、洵に奇異の感があるといはねばならぬ。

因みに附言すべきは、上述の鐵眼の刻經緣起や、又は上經奏文等によるに、何れも、わが國古來未だ曾て藏經の開雕のなかつたことを述べてゐる。これによつて、人或は渠を目して、天海の刻藏事業を知らなかつたところと早計すれど、そは單なる皮相の見であつて、僅々二十餘年以前(鐵眼刻藏着手の寛文九年より溯つて、天海刻藏完成の慶安元年まで)の天海の事業を、どうして知らぬ筈があらう。知つて而も、一言のこれに言及することなきもの、これ恐く、その眼中に『天海本』がなかつたためではあるまいか。蓋しこれ、『天海本』の不良を痛切に反顯せるものと見るべきであらう。

さて、鐵眼の『蘗本』は、由來その普及の目的に急なるの餘り、原本を選擇するの餘裕なく、ために『明本』の錯誤をそのまゝ踏襲せる結果、爾後、學者中これを遺憾とするもの尠なからず、かくして終に忍澂・順藝等の篤學をして、これが對校事業を起さしむるに至つたのである。忍澂は京都鹿ヶ谷の住僧であつて、『蘗本』の誤脱の多きを知るや、早く良本を得てこれを對校し、以

て完全なる模本を作らむことを念願し、乃ち建仁寺所藏の『麗藏』を以て『藁本』に對校し、寶永二年(1706)より始め、五年の日子を費してこれを成就した。順藝は丹山の號を以て知られ、越前の眞宗學僧であつて、また夙に藏經對校の念願を懷き、具に辛酸を嘗めて而も屈せず、同じく建仁寺の『麗藏』を以て『藁本』に對校し、文政九年(1828)より始めて十一年間の長時日を經、孜々としてよくその初念を貫徹し、遍く對校を終了して、更に『藁本』に缺如せる五百有餘卷の謄寫をも克成した。かく兩者の對校を經た結果、『明本』の缺點誤謬は悉く除かれ、かくしてこゝに完全なる模本を見るやうになつた。これ等の事業は、必ずしも刻藏とは同一視の出來ぬところであるが、併しその努力や苦心等に至つては、敢てその是非をあげつらふことが出來まいと思ふ。丹山成功の翌天保八年(1837)、建仁寺出火して、その所藏の『麗藏』殆んど烏有に歸した。されど幸にこれ等對校本の存せるあり、かくして校者の功績、また愈々著しきものがあるといはねばならぬ。

明治時代に至るや、泰西文明の惠澤により、印刷上に活版の術が傳へらるゝやうになり、乃ちこれを藏經開雕の上に應用せむとして、島田蕃根氏等東京に弘敎書院を興して、明治十三年(1880)より同十七年に至り、いはゆる『縮刷藏經』なるものが刊行さるゝに至つた。本藏は『麗藏』を以て底本となし、『宋』・『元』・『明』の三藏をこれに對校して、その異同を欄外に表示し、

且彼此の缺本を補入して、その所收の數は著しく加增され、かくして最も學術的の特色を有してゐる。加ふるに、菊版形の方冊本であつて、取扱の便、購入の易等、到底『蘗本』の比ではない。これ實に、既刊藏經中第一の價値を有するものといふべく、爾後の學界が、これがために利便を稟けしところ、如何ばかりか測り知られぬ次第である。

その後、明治三十五年(1902)に至つて、京都藏經書院よりして、いはゆる『卍藏經』なるものが刊行された。こは麗明對校と稱する如く、かの忍澂の對校本を底本としたものであるから、その內容は『麗藏』と同一になつてゐるが、形式は全く『明本』卽ち『蘗本』そのまゝの襲用である。從つて、その所收の次第・卷數等、大抵『明本』と變らない。前の『縮藏』に比べて、その學術的價値は、夐に劣るといはねばならぬ。本藏は、明治三十八年を以て完成し、その後、同處に於ては、更に引續いて、『卍藏』に洩れたる主として支那選述の章疏を收容して、『大日本續藏經』の名の下にこれを刊行し、大正元年(1912)を以て完成した。こは既に藏外の範圍に屬するもので、かの『明續藏』や『又續藏』と同じく、如上諸種の正藏經と稍々その性質を異にせるものではあるが、またこれ、藏經開雕の附帶事業として特筆すべきもので、而もその所收內容の浩瀚なることは、實に古今叢書中にその比を見ざるところである。

以上述べしわが國の藏經は、『天海本』を除くのほか、その他は何れも現に各地の寺院・學庠

等に收藏されて、容易に吾人の手にせらるべきところであるから、これが開離に關しては、多少その記事に詳細を期したわけではあるが、限りある紙面に、十分の意を盡す事が出來ぬから、これにて止めることゝする。なほ次章の叙說と對照せば、遺漏の多少は補はれようと思ふ。

第五章　藏經の組織

如上述べしところの藏經各種の版本は、何れも一長一短の特色を有し、夫々各自固有の面目を持してゐる。よつてそれ等一々の特色を列擧して、これを比較對照することは、必ずしも無用の沙汰とはいへぬが、既に前にも一言したやうに、現今廣く流布して、容易に手にせられ得る版本としては、僅に『龒本』・『卍藏』及び『縮藏』の三種に過ぎず、而もその中『龒本』と『卍藏』とは、同一『明本』系統のものとすれば、畢竟これと『縮藏』との對照に結歸するわけであるから、今は各本一々の特色を擧ぐることは姑く擱き、主として『縮藏』を中心として、その內容組織の一班を叙說することゝせう。由來『縮藏』は、既述の如く、かの優秀の稱高き『麗藏』を底本として、更にこれに三本の對校を加へ、その學術的完備せること、餘他に全く類例を見ざる良本なれば、學者の依用するところも一にこれを以てし、從來はもとより、向後に於ても、これ以上の良本の刊行されぬ限りは、永へに不朽の生命を有するものであるから、乃ち藏經としいへば、

この版本を中心として語つて然るべきであると思ふ。

然らば『縮藏』は、如何なる次第に組織され、如何なる內容を具備してゐるかといふに、從來の諸本とは著しくその趣きを異にして、特に面目の新たなるものがある。由來藏經の組織たる從來の諸本にあつては、何れも『開元錄』の分類に則つて、先づ經・律・論藏等の大別を初めに置き、更にその一々に大小の二乘を分ち、而して特にその大乘經中にあつては、いはゆる五大部の樣式に從つて、般若・寶積・大集・華嚴・涅槃の順列に配せらるゝのが通例であつた。その般若の最初に置かるゝ所以は、般若（Prajñā）は卽ち諸佛の母たるがためである。然るに明代に智旭が『閱藏知津』を著し、『開元錄』の次序を改めて天台の五時に則り、華嚴・方等・般若・法華・涅槃と順列し、かの五大部の寶積と大集とを併せて方等中に收め、更に法華を涅槃の前に置いて以て五時の次序に應じ、その組織大に學術的色彩を帶ぶるに至つた。而もこはたゞ經藏のみに就いての所談であるが、律藏・論藏及びその他にあつても、『知津』の新創と見做すべき點が甚だ多い。而してわが『縮藏』は、主としてこの『知津』の次序に則つて組織されたものであつて、これ卽ち從來の諸本と全くその形式を異にせるところ、洵に學術上著しき進展の價値を認めざるを得ないのである。今便宜上、その內容組織を表示して、これが了解の一助とせう。學者、須く領得すべきである。

縮刷藏經

- 經藏
  - 大乘
    - 華嚴
    - 方等
    - 般若
    - 法華
    - 涅槃
  - 小乘
- 律藏
  - 大乘
  - 小乘　附、疑僞
- 論藏
  - 大乘
    - 宗經論
    - 釋經論
    - 諸論釋
  - 小乘　附、雜部・外道・疑僞
- 秘密藏

（以上　印度撰述）

- 雜藏
  - 經疏
  - 論疏
  - 懺悔
  - 諸宗
  - 傳記
  - 纂集
  - 護教
  - 目錄
  - 音義
  - 序讃詩歌

  （以上　支那撰述）
  - 日本撰述

これによつて見るに、その組織、經・律・論・秘密の四藏に、西土卽ち印度撰述の總てを包容し、雜藏に支那撰述の主要を網羅し、更に附錄して、日本撰述にわが國各宗の開祖の述作を收攝してゐる。その中、小乘律中に附屬として疑僞を收めたるは、卽ち疑似雜僞たる『目連問戒律中五百輕重事』をいふのである。また大乘論中に宗經論等の三種を分つたのは、卽ち『知津』の分類に依つたのである。その中初めに宗經論とは、佛教總部に亘れる概括的通申論をいふので、例へば、『瑜伽論』とか『唯識論』(『三十論頌』)とか、または『起信論』とかゞ卽ちこれに屬する。次に釋經論とは、特にある一部經典に就いての註釋的別申論を指すので、例へば『十住毘婆沙論』(『華嚴經』十地品を釋せる)とか『十地經論』(『十住經』を釋せる)とか、または『智度論』(『大品般若』を釋せる)とかゞ卽ちこれに屬する。更に諸論釋とは、いはゆる論典の註釋であつて、『瑜伽論釋』とか『攝大乘論釋』とか、または『成唯識論』とかゞ卽ちこれに屬する。また小乘論中に附屬として收めたる雜部等の三種の中、初の雜部とは、『四十二章經』とか『法句經』とかの如き、その義大小に通じ、または抄出節略されたるもの、または『馬鳴』・『龍樹』・『世親』等の各傳の種類を指し、次の外道とは、『勝宗十句義論』・『金七十論』の如き外道書を指し、更に疑僞とは『大明仁孝皇后夢感佛說第一希有大功德經』の如き僞作を指すのである。また支那選述中の分類は、同じく『知津』を襲用せることといふまでもない。而してその各々名目の如きは、容易に了

解され得ようと思ふ。乃ち顧みて、これを要するに、その組織、概して學術的統一を有せることを認むるに難くはない。その五時の次序に則れる如きは、もし論じもて行かば、もとより批難の存するところもあらうが、かの佛母たるの故を以て、般若を最初に、餘他を漫然これに羅列せしむる五大部の次序に比べて、とにかく配列の形式の根柢を有せるだけにても、幾分學術的の價値があるといふべきではないか。かつまた秘密部を整理し、並に日本撰述の如き從來の諸本に絕えてなかつたものを加へ、更に『麗藏』に漏れたる宋以後の撰述をば、他本に覓めて補入し、その所收內容の著しく增加されたるも、また餘他の諸本に優れてゐるところである。即ち本藏所收の總數一千九百四十五部・八千五百六十二卷の多きに上り、かの『開元錄』當時の一千七十六部・五千四十八卷を襲うたと考へらるゝ『蜀本』などに比べて、洵に天淵の差があり、近くその包容部卷の著しく加增されたる『龍藏』の一千六百七十八部・七千四百八十八卷たるに比べて、なほ夐に多數を示してゐるのである。況むや諸本の對校を表示して、その異同を瞭然たらしめたる如きは、特に珍重すべき長所といはねばならぬ。かく彼此の長を採り粹を聚めてこれを輯成するが如きは、かの中國てふ自我的觀念の强き支那などにては、到底望み得ざるところであつて、畢竟かゝる偏見なき邦人によつてなればこそ、克成されることが出來たわけである。見よ、かれにあつては、かの無比の良本といはるゝ『麗藏』をすら、自國の所產にあらざる

の故を以て、爾後の開離に於て、少しも依用しなかつたではないか。かれを思ひこれを稽へ、洵に由なき偏見の、學術上の進步にまで阻害影響を釀することの尠なからざるを認め難くはないのである。

但し、嚴密に藏經の組織を論ずれば、これを以て、決して完全のものとして滿足を表することは出來ないのである。五時の次序が、必ずしも千古不易の合理的判斷にあらざる限り、どうしてこれが絶對の依憑とせられよう。その形式に就いては、更に部類を以て分つ方法もあるべく、譯者・著者を以て纏むる手段もあるべし。その他、發音順・字畫順等の配列もまた一種の考案たるべく、洵に藏經の組織に就いては、猶考究の餘地多々ありといはねばならぬ。而して藏經の組織の根柢をなすものは、實に經錄なるを以て、もし經錄の上に、新機軸を出せる學術的組織を提出されることがあらば、向後の藏經刊行に資するところ、極めて多大なるものあるは、まさに當然の至りである。かの『開元錄』・『閱藏知津』などの、如何に各本刊行に就いて益するところの多かつたかを思はゞ、這般の消息は容易に了知されよう。啻に刊行上のみに止らず、特に學者に取つて、また至便を與ふることの尠なからざるも、もとより論なきところである。後の「藏經の目錄」の章下に於て、更にその旨を盡すべし。

第六章　藏外の叢書

こゝにいはゆる藏外の叢書とは、上來述べし藏經各本に收攝せられざる群書の集成を指すのであつて、かれが正藏經たるに對して、これは續藏經又は准藏經たるの地位にあるものである。既にいへるが如く、支那にあつては、入藏の因緣は、偏に帝勅の欽定にあらざれば得られぬといふ事情であつたから、支那撰述のものにして入藏の許可如何といふことは、實に重要問題に屬し、これによつてその書の價値が左右されるくらゐであつた。（稀には、印度撰述のものすら入藏を許可されなかつたものもある）。尤もかくいへばとて、そはたゞ世間的の價値標準に過ぎずして、入藏されたものが悉く優秀で、然らざるものが何れも劣等に止るといふには限らず、隨分入藏中にも如何がはしきものが尠くなく、藏外中にも立派なるものが夥多ある。よつて藏外の群書も、早晩これを彙輯して綜合統一すべき必要は、もとより認められてゐたのである。かの『明本』開雕後その『續藏』・『又續藏』の編纂刊行されたのも、一に這般の事情に起因してゐる。但しその採集範圍の廣汎ならざりしと、その弘布流行の周遍せざりしとは、洵に遺憾の至りであつた。もしそれ、これ等の點に於て第一に推すべく、眞に藏外叢書中の巨擘と稱すべきは、須く明治時代に大成された『大日本續藏經』に指を屈せねばならぬ。

本書は、略して『卍續藏』とも或は單に『續藏』とも稱せられ(『明續藏』は流布極めて稀なるため、單稱『續藏』の名は、專ら本書に與へられてゐるのである)、既述の如く、明治三十八年より京都に於て刊行されたところであつて、その採集の範圍は、印度・支那撰述にあれど、その主眼は特に支那撰述を網羅するにあつて、これがその大部分を占めてゐる。從つて、かの『明續藏』・『又續藏』中のもの丶如きは、殆んどこの中に收容されてゐるわけである。編者の計畫にては、これを以て第一輯とし、更に第二輯として、日本撰述を繼續刊行する豫定であつたが、何分その事業の容易ならざるため、これが實現を見るに至らず、第一輯すらも豫定より甚だしく省略されて、辛うじて完成を告ぐることが出來たのである。實に一千七百五十六部・七千百四十四卷、全容尨然として古今に絕せる一大叢書といはねばならぬ。而して編者は、更にこれに次いで、大正三年より東京に於て『日本大藏經』の刊行を企圖し、その形式は異つてゐるが、事實上『續藏』の第二輯と見做すべき日本撰述を刊行し、昨九年に至つて、全部四十八卷を完成することを得た。一方、この刊行に稍々先つて、明治四十五年より同じく東京に於て『大日本佛敎全書』の刊行が計畫され、一昨八年に至り、圖譜十軸・書冊百三十六卷の多數の出版を見るに至つた。この兩者、その所收の內容に於て、各々多少の長短得失はあれど、相依り相俟つて、共に學界に資するところ甚だ多大なるものがある。その他、この兩者の刊行と前後して、

『淨土宗全書』・『日蓮宗全書』・『眞宗全書』・『眞宗大系』等の刊行さるゝあり。これ等は、その名の示すが如く、特に一宗内部の要典の刊行であつて、夫々專門の學士を益することの大なるはいふまでもなく、なほその他にもまた、これ等と同種類の刊行が夥多しくある。もしそれ『佛教大系』の如きに至つては、藏內・藏外の本末論釋章疏を會今對照せるものであつて、主として教理の硏鑽上、至便盡きせぬものといはねばならぬ。更にまた一面、近年漢文佛典の和譯せらるゝ傾向旺んにして、『國譯大藏經』・『國譯禪宗叢書』・『國譯密教』等續々刊行され、今現に進行の途にあるものもある。これ等は何れも藏經の漢文和譯であつて、必ずしも藏外の叢書として敍すべき性質のものではないが、かの難解なる佛典を通俗化して、これが弘布の企圖に出でし點は、大に意義ありといはねばならぬ。惟ふにこれ、世界動亂の結果、人間思想の歸趨するところ、宗教信仰の情念より要求されたる反映と見做すべきであらう。而してこれ等の和譯諸書が、その解題に註釋に、大に本文の意義を明瞭ならしめたる點は、優に一種の佛典註疏として、乃ち本章に語るに恰當してゐる。學者、特に初學の士、先づ以てこれ等の和譯の閱讀よりして佛典咀嚼の逕路を辿らば、その進捗極めて容易なるものがあらう。附記して以て、入門の弄引に擬する次第である。

第七章　藏經の目錄

既に一言せるやうに、藏經の目錄は、實に藏經を組織する根柢をなすものであつて、經錄の解說は、軈てこれ藏經の內容を明瞭にすることゝなる。今本章の題下に於ては、這般の敍述を試みるがその本旨なれど、既に「藏經の組織」の一章を別掲して、その輪廓を描出したれば、乃ちこゝには、單に經錄の解題を記して、以て藏經運用の方規に擬したいと思ふ。

それ支那にあつて編成されし經錄に於て、現存二十餘種、就中その最も古成のものとして擧ぐべきは、梁の僧祐等の撰せる『出三藏記集』十五卷であらう。本書は何時の撰出にかゝるや、その年時明瞭ではないが、書中に「天監九年」(510) てふ文字が見えてゐるから、同年より以後數年間の成立と見做して然るべきであらう。而してその特色ともいふべきは、元來本書は、かの道安の經錄(一七頁參照)を增益したものであるから、一面かの錄の一班を傳ふるものとして價値を存するのである。これに續いて、隋の開皇十四年 (594)、法經等の撰せる『衆經目錄』七卷がある。本書は、西土・此土の賢聖の撰述を載錄する上に於て、周到なる用意を拂つてゐるのをその長所と認められる。『開元錄』の著者は、本書に對し四誤を數へて批難してゐるが、大體に於て正確なる經錄として、信を置くに足ると思ふ。(これと同名の經錄で、隋の翻經沙

門等の撰にかゝる五卷本もある。『麗藏』に收むるところは、更に唐の靜泰の重修せるものである。）更に本書より三年後卽ち開皇十七年に、費長房によつて撰されし『歷代三寶紀』十五卷、唐の麟德元年(664)に、道宣によつて出されし『大唐內典錄』十卷等、この種の續出多種ある。さりながらそれ等の總てに擢んでゝ、幾多經錄中の白眉と見做さるべきは、實に『開元釋敎錄』なりといはねばならぬ。本書は旣述の如く、唐の開元十八年(730)、智昇の撰にかゝるところで、實に從前の經錄の歸着點となり、向後のそれの出發點となり、藏經硏究の中樞たる價値を有するものとして、これに匹敵すべきものがない。本書總じて二十卷、就中前十八卷と後二卷とに大別され、前因後果たるの趣きを具へてゐる。前十八卷中、更に總（前十卷）・別（後八卷）に劃され、初め總錄には、主として漢代より唐代に至る譯經者を年代順に排し、その各々に就いて、所譯の書目・卷數を揭げ、而してそれには現在存缺の次序を一定し、更にその一々に註して、その書の初載の經錄・撰者・譯出の順序(こは、もしその書に異譯のある場合には、その書が第何回目の譯出なるかとの次第である)・譯出の年時・譯場・參加者等の各項を記し、最後に譯者の傳記を錄してゐる。如何に各方面を網羅してゐることだらう。なほ續いて、古今四十餘種の經錄を採り、別してその現存のものには、是非の短評を施してゐる。次に別錄は、これを七條に分ち、譯本の有無を討ね、支派の別行(ある經論中、特に一篇・一章が別出流行されたる如き

をいふ)を明かにし、或は遺漏を補缺し、疑惑を質詳する等、前の總錄の歷史的たるに對して、これは組織的たるの趣きを具へ、內容の整理大に備はる。(かの大乘經五大部の次序なども、この中に試みられてあるのである)。かくて最後の二卷は、前來所述の綜合結果として、現存せる經典五千四十八卷を收列し、卽ち藏經の定數を示してゐる。この定數が、一時藏經數量の標準となつたことは、既に述べしところである。これを要するに、本書の如きは、實に藏經に對する百面觀と見るべく、その配慮の綿密、用意の周到、唯々驚嘆するの他はない。『四庫全書提要』の撰者曰く、「佛氏舊文茲爲二大備一」と。その局外の褒揚すらなほかくの如し、以て如何に完備優秀なるかを想ふべきではないか。

さて本書に收錄せる五千四十八卷は、これを四百八十函に合集されてゐたが、智昇はその後更に『開元釋敎錄略出』四卷を撰して、その函數に一々千字文の次第によつて番號を附し、以てその混雜を防いだ。藏經の函帙千字文の番號にて記載さるゝこと、實にこれに始まるのである。

『開元錄』後、貞元十五年(799)、圓照によつて『貞元新定釋敎目錄』三十卷が撰されたが、こは畢竟『開元錄』以後の翻譯にかゝつたものを增補せるに過ぎない。爾後、元の至元二十二年(1285)に慶吉祥等によつて出された『至元法寶勘同總錄』十卷は、稍々注目すべきものである。本

書は經錄中の最後をなすもので、支那にあつては、譯經事業は元代を以て終末を告げてゐるから、これより以後に經錄の出づるものがない。本書の特色ともいふべきは、梵名の明かなる書目には、對配してこれを擧げてゐること、西藏（蕃本）目錄を參照してその具缺を記せること、及び、大乘經中、始めて顯密兩教を區分せること等であつて、何れも重要なる記事たるを失はない。

以上經錄の主要なるものに就いて、ほゞその概要を解說した。よつて、これに續いて、眞の經錄ではないが準經錄とも見做すべき『閱藏知津』の紹介を加へよう。本書は、明の智旭（藕益）が崇禎八年（1635）より永歷八年（1654）に至る實に二十年の日子を費して大成せる雄篇であつて、主として寂曉の『釋教彙門標目』に基いて纂輯せるもの、その卷帙四十八、藏經解題の書として至便比ぶべきなきものである。その特色の主なる點を擧ぐれば、先づ各經論に就いてその內容の要旨を摘記せること（大部のものには、稍々詳細に解說してゐる）、次に異譯の多種あるものには、特に符號を以てその主伴を分ち、何れがその中にて最も優秀なるかを指示せること、またその組織を改新して、かの大乘經の順序の如きも、『開元錄』の五大部の次第に代ふるに、天台の五時の次第を以てし、又方等中に於て、顯說部に對して密呪部を立て（先に『至元錄』にて顯密兩教の區分はつけられたが、本書は更にこれを整頓したのである）、また三藏以外に別し

て雜藏を開立せる等であつて、獨創の新設大に見るべきものがある。その經論解題の至要なるはもとより、異譯中に主件を指示せる如き、如何に初學をして多大の利便を與ふることだらう。而もそれだけ、その苦心努力の程は推察するに餘りあるといへよう。後世かの『縮藏』の編纂さるゝに當り、如何程本書がその模範となつたかは、彼此の組織を對照して、容易に首肯さるゝところである。たゞそれ、智旭自らは台家の資なるがため、所見多少自宗に偏し、かの僧肇・南岳及び智顗の述作を、印度の馬鳴・龍樹等のそれと對當に視て、同列に攝入せる如き擧あるは、多少問題として論ずる餘地があらうが、由つて以て本書の眞價に關することでは無論あるまい。

なほ因に附記すべきは、如上諸種經錄以外に、なほ藏經の各版に添附されたる目錄に就いてである。これ等はたゞ各版の目錄であつて、いはゆる經錄としての性質を帶びてゐるものでは無論ないが、これまた各版の組織を指示せるものとして、その披閱に際しては是非とも重要なるものである。

然るに既にいへるが如く、藏經の各版中、『蘗本』・『縮藏』及び『卍藏』の三本は、現に學徒の容易に手にし得るところであるから、從つてそれ等三本の目錄も、それに應じて必要なるはいふ迄もない。特に『縮藏』は、その內容の豐富なる點より、その目錄も餘他に優れて重要であら

う。但しそれよりも、實用上更に利便を與ふるは、藤井宣正氏の『現存日本大藏經冠字目錄』である。本書は、現存の藏經の書名を、冠字を以て五十音順に排列して、これにその撰者・譯者及び卷數を記し、略稱・異稱あるものは、更にその具略・本異の一々を擧げ、而して『縮藏』所屬の各部、及び『縮藏』・『蘂本』・『明續』・『又續』の帙冊を示せるものであつて、主として書名及び撰者・譯者・卷數等を容易に知り得る點に於て、一種の書名辭書の性質を有し、檢索の便宜に他錄に群を拔いてゐる。かつまた『縮藏』・『蘂本』等の披閱に於ても、本書に依らば、極めて容易に所要を尋求され得る。(本書は明治三十一年の刊行であつたから、爾後の『卍藏』・『續藏』等の採收に及んでゐないことは、もとよりである)。なほ撰者の志願にては、本書と相俟つて、部類目錄及び著者目錄を出さむとし、既に本書にも部類番號を附して、これが對照の計畫を立てゝゐれど、惜しいかな、それを果し得ずして夭逝されたのである。

『冠字目錄』と共に、學者の是非座右に備へねばならぬのは、南條博士の大作英文『大明三藏聖敎目錄』である。本書は"*A Catalogue of the Chinese Translation of the Buddhist Tripiṭaka*"といひ、普通『南條目錄』と稱され、明治十六年(1883)同師の滯英中、オックスフォードに於て刊行されたところであつて、實に世界的の一大名著である。本書は、『明藏目錄』(『明藏』に添附せる『大明重刊三藏聖敎目錄』をいふ)の英譯であるが、その特色の要點は、かの『至元錄』

所載の梵名に基き、傍ら泰西の言語學的研究に照して、經論の梵名を精定し、これを漢譯の題名と並擧せること、かつその各經論の一々に翻譯年代を明示し、同本異譯のものは、彼此その旨を附記せること、及び『至元錄』の所載を襲うて西藏即ち番本の有無を指示せること、並に附錄して、譯者の略傳を年代を逐うて順列摘記せる等にある。もしそれ現時の佛教學界の進步より顧みば、多少修正を要すべき點もなきにあらねど、苟くも歐米人士にして漢譯經典の研究に與らむには、唯一不可缺の指南たる權威を有せるものである。これより先、明治八年（1875）、かの『藏本』が岩倉具視公によつて英國に寄贈さるゝや、有名なるビール氏（S. Beal）、この資料に力を得て、幾多の研究を公にせる中、『藏本』を解題して "*The Buddhist Tripitaka.*" London, 1876（『佛教三藏』）といふを出したが、誤謬缺點多くして、到底學者の要求を充すことが出來なかつた。然るに本書一度出づるや、かの太陽の群星を壓するが如く、學界また餘他を顧みるなき有樣となつた。洵に尤もの至りといはねばならぬ。

かく本書は有益なる良本なれど、惜むらくは現時その品數極めて稀で、容易に獲らるゝところではない。よつてこれに代ふるに、英國の支那學者アイテル氏（E. J. Eitel）の "*Hand-book of Chinese Buddhism*"（『支那佛教必携』）を一言紹介して置かう。本書は普通『アイテルの梵漢辭典』として知られ、藏經の書名・撰譯者名、その他佛教術語等を梵漢並擧し、これに簡單なる

解說を附したもので、小冊子ではあるが、比較的便利な書物である。明治三年(1870)香港で初版が出で、程經て、更に幾多の增補を以て再版された。またわが高桑駒吉氏は、これに便利な索引を加へて、邦版の複刊を試みられたから、學徒ために獲易く、その利益甚だ多いといはねばならぬ。先の『南條目錄』にも、必ず本書を對照指示してある。但し本書にも、錯誤が尠くはないから、學者の注意を拂ふべき要があらう。

第八章　參考の書目

それ本講の目的は、佛典研究に就いての文獻資料を提示して、某項・某題を知らむには、如何なる參考書籍に依るべきかを了知せしめようとするにある。然らば今本篇にあつても、上來藏經に關する一般概念を叙說したからして、更に進んでは、かゝる調査を試みむには、如何なる文書の對讀を要すべきかを指示すべき順序となる。これ實に本講の眼目であつて、本章の標題はまさしく這般の意味に他ならない。但し、從來この種藏經の討究に與りし學者極めて尠く、その會ゝこれあるも、如何せむ何等の發表もなきために、依然この種の參考記錄を紹介することは、殆んど不可能なるわけである。かゝる理由より、上來本篇に於て、その缺を補ふために幾分の詳叙を期して置いた積りであるが、初學の入門に資する本講たる以上、これまたその概

說たるに過ぎざるは洵に止むを得ぬ次第である。今強いてこれが參考文書を擧ぐれば、

一　大藏經雕印考　　常盤大定稿（大正二年稿）

二　一切經の由來　一卷　村上專精著（大正四年刊）

の二種以外に覓むることが出來ぬ。後者は、曾て著者の主幹さるゝ雜誌『人道講話』に「大日本藏經史」と題して揭載されしものゝ修正單行であつて、『一切經の由來』といふも、既に舊文の標題にあらはせる如く、主としてわが國に於ける藏經の略史を叙したもので、支那開雕の諸藏の記事など、極めて簡單に通過せる憾みがあり、かくて、專門研究にたづさはるものには、もとより物足らぬわけではあるが、叙說極めて平易に、よく藏經の概史を語つてゐるから、初學に對しては恰好の手引たる價値があらう。前者は、『哲學雜誌』第三百十三以號下に數回に亙つて連載されしものであつて、考確精細なる一大論文である。その內容は、題名のとほり、支那及びわが國の藏經各版の開雕研究であつて、所說微に入り細に亙り、同を稽へ異を質し、實に藏經研究唯一の參考たる價値があると思ふ。吾人はこれを讀んで未だ何人によつても試みられなかつた斯學の荒野に、困難なる芟除の第一着手を敢てされた稿者の努力を欽仰せざるを得ないのである。なほ稿者は、これに關聯して、また雜誌『新佛敎』（第十五卷・第十二號）にもその略說を試みてゐる。これまた對讀して得るところがあらう。

右の他、松本（文）博士及びその他の先覺によつて、二三の雜誌に這般の關係論文の掲載されたのがあれど、その他にこれが參考に供するものとしては、遺憾ながら極めて寥々たる次第である。もしそれ三省堂の『日本百科大辭典』、及びわが佛教大學の『佛教大辭彙』等の記事中には、比較的參考に資せらるゝ解説を認め得らるゝ。『大辭典』には「大藏經」の項下に常盤氏之を記し、かつまた寺本婉雅氏によつて、西藏々經の解説をも加へられてゐる。『大辭彙』にもまた「大藏經」その他關係の項下に詳説され、重要なる記事が尠くはない。但しその「大藏經」の項目の卷は、未だ刊行されてゐないが、不日出版の運びに至ることであるから、こゝに附記する次第である。その他同文館の『哲學大辭書』にあつても、同じく「大藏經」の項下に、鷲尾順敬氏が解説の筆を執つてゐる。また一讀の必要があると思ふ。なほ藏經の研究に關して、前章所述の經錄類を取材運用すべき要あることは、改めていふまでもなからう。

藏經研究の成果は、かくの如き寥々たるものに過ぎぬ。わが國に於て既にかゝる狀態なれば、これに緣遠き餘他の諸國にあつては、到底覓め得られぬわけである。吾人は向後の學者が、更に大に努力勉強して、速に斯學の荒野を啓拓開成せむことを望んで止まぬ次第である。

第二部　佛傳篇

第一章　佛傳の研究

それ佛敎は、いふまでもなく、佛陀 (Buddha) たる釋尊の敎說が基調となつて立てられたものである。中には、釋尊以前の思想も混入され、殊に後代の發達佛敎にあつては、その包含内容洵に各種多樣であつて、決して釋尊一個の敎說とすることは出來難いところであるが、併しそれが根本の基調となつて、漸次流出開展したてふことは、瞭として爭はれぬ事實である。然らば釋尊の研究は、苟くも佛敎の學習にたづさはるものゝ、應に最初に試みねばならぬところといふべきであらう。これ卽ちこゝに佛傳篇の一部を設けて、聊か這般の南針を示さうとする所以である。

但し、こゝに注意すべきは、釋尊は、通途一樣の單なる人類と異つて、宇宙の眞相を證效せる生身の佛陀なれば、その研究に當つては、これを歷史上より眺め、單なる人類として取扱ふ場合と、またこれを信仰上より崇め、超人的佛陀として鑽仰する場合との二面の存在せることを知らねばならぬ。蓋し釋尊とて、その外面は、やはり人類の通規に從つて、世間的生存裡にそ

の一生を始終されしとはいへ、その內面に至つては、夐に人類に超越せる佛陀としての正覺の靈格なれば、その儔ひなき眞智と限りなき慈愛とは、遍く世人の崇敬の念を愈〻高めしむるやうになり、かくして人格的の聖者より理想的の佛陀として、卽ち如上の二面を生ずるに至つたのである。普通釋尊傳として討究するところは、前者卽ち歷史上に現はれたる人格的釋尊をその對象とし、また佛陀論（Buddhology）として檢尋するところは、後者卽ち歷史を超越せる理想的佛陀をその對象とせるやうである。さりながら、この二面は、果して然く截然と區劃され得べきや否やは、大に考究を要するところであつて、決して輕々に下斷さるべきものではない。何となれば、釋尊傳の硏究は、やがて理想的佛陀の思想にまで立ち到つて、始めて全うさるべきものであり、また佛陀論の考察は、歷史的釋尊にその起點を討ぬるに於て、眞に圓備を期せらるべきものであるからである。さればこれ、いはゆる一法の二義として見るべきもの、その間に何等特殊の畛別を施し得べきものではなからう。但し、かくいへばとて、佛陀論の考察を以て直ちに信仰上の莊嚴と早計し、これをば歷史上の事實に混入せしむることを許容するの意味に誤解してはならぬ。今更いふまでもなきことながら、歷史はどこまでも事實たるを要すべく、莊嚴は非實の理想たるに他ならないから、史實と修飾との混入は、絕對に甄別されねばならぬところであつて、これ實に、學術討究に從事するものゝ面目であり本務である。されば釋尊傳

の研究には、飽くまで詩話的莊嚴を脫して、眞に歷史的實傳を明かにするを緊要とする。而して佛陀論の如きは、もとより宗敎上の面目であるとはいへ、これを以て直に信仰上の莊嚴とは、決していはれないのである。既に然る以上は、所謂一法の二義といふを以て、直に史實・修飾の混合を許容するの意味に早計すべきではない。而して、今この歷史的と理想的との二面の連關を特に論叙せる所以は、學者動もせば截然とこれを區劃して、その一方にのみ偏頗し、爲に圓滿なる討究を期し得られぬ憾の尠なからざる事を警覺して、眞個佛傳の綜合的討究は、廣くこの二面を考察して、乃ちその始終を盡し得べきことを提言するに他ならないのである。

第二章　佛傳の概要

かくの如く佛傳の研究は、單なる歷史上の釋尊を討ぬるを以て足れりとせず、更に理想上の佛陀にまで亙つて究むる必要がある。さりながら佛陀の傳記としてこれを草する時は、もとより歷史上の釋尊のみに止まつて、理想的の佛陀をものすべくもあらねば、乃ちこゝには、その史傳の概要を叙說して、以て初學の便に供することゝする。

釋尊、具には釋迦牟尼（Sākya-muni）といふ。釋迦（Sākya）は種族の名にして、勇强を意味し、牟尼（Muni）は寂默をあらはす褒揚の稱なれば、釋迦牟尼とは、卽ち釋迦種族より出で

たる聖者との謂である。紀元前第六世紀の中葉、中印度劫比羅伐　堵（Kapilavastu）の城主首圖駄那（Śuddhodana）即ち淨飯を聖父とし、聖母摩耶（Māyā）との長子として誕生された。初め摩耶夫人は、その產期の漸く近づくや、印度古代の慣習により、鄕里提婆陀訶城（Devadaha）に歸つて分娩せむとし、途上、劫比羅の東方程遠からぬ臘伐尼園（Lumbinī）を過ぎられた。會々園中の樹華繚亂として滿開の姸を競へる際とて、乃ち夫人は姑しこれに憩うて、その美觀を愛賞された。折しも俄に產氣を催して、太子を分娩されたので、これぞ即ち後の世間眼たる釋迦牟尼にして、時に四月八日、旭光正に出で初めし早曉であつたといふ。臘伐尼園の地は、現今のルムミンデーイ（Rummindei）に當り、一八九七年、獨人フューラー氏（A. Führer）、この地に於て阿育王（Aśoka）の建設せる石柱の一部を發掘し、それに刻せる銘文によつて、即ち臘伐尼の舊趾たることを確定するに至つたのである。さて聖母摩耶は、產後幾日ならずして薨せられたから、その實妹即ち太子には聖姨に當らせらるゝ鉢邏闍鉢底（Prajāpatī）代つてこれが保育の任に就かるゝことゝなつた。婆羅門（Brahman）の一學者は、太子の前途の幸多からむことを壽ぎ、特に美名を選んで喬答摩（Gautama）と呼び、悉達多（Siddhārtha）と稱した。喬答摩は即ち舊譯の瞿曇のことで、地最勝の義たり、悉達多は成就と譯して、一切成就を意味する。何れも吉祥の美名たるに他ならない。

太子天資極めて聰明、文武諸藝學ぶに隨つてよく上達し、夐に凡俗の及ばざる素質を有してゐた。但し、性來大に憂鬱の傾向あり、只管冥想に耽り、思索を事とするを常とし、動もせば出家脫俗の志望があつた。聖父姨等、ために少なからず憂慮し、太子十七歲の時、提婆陀訶城主善覺（Suprabuddha）の女耶輸陀羅（Yaśodharā）を納れて妃となし、共に金殿の裡に住はしめ、かつ幾多の宮媛をこれに奉仕せしめて、日夜淸歌妙舞、ひたすら五欲の妙境に、沈める渠が思念を浮きたゝせうと努められた。婚後十年にして、耶輸陀羅一子を生む、すなはち羅怙羅（Rāhula）これである。かゝる中にも、太子の厭世思想は少しも止むことなく、人生の苦相に對する悶々の情は愈々嵩まり、あたら聖父等の心盡しも何等その効を奏し得ず、終には斷然たる決意を以て、一夜深更四隣寂たるの時、妻子・榮達あらゆる世福を棄てゝ宮城を遁れ出で、東方遙かに藍摩邑（Rāma）の一森林に入り、珠飾美裝を解いて一介素衣の修道行者となり果てた。時に太子二十九歲と傳へらる。

太子はこれより吠舍釐（Vaiśāli）に外道跋伽婆（Bhārgava）を訪ね、涅槃の道を求めた。而も未だ滿足なる解答を得なんだから、更に摩揭陀の王舍城附近に住せる阿羅邏迦藍（Ālāḍakalāma）を訪ひ、また阿蘭若林（Araṇya）に住せる鬱陀羅（Udraka）に逢うて、解脫の法を問うた。然るに、何れにあつても、猶且渠の心に安慰を得しめるものがなかつたから、竊に思ふに、他

の教示を仰いで求道に就かむよりも、自ら工夫考案を逦らさむには如かずとなし、乃ち尼連禪河（Nairañjanā）畔を彷うて優樓頻螺聚落（Uruvilvā）の苦行林に入り、こゝに於て嚴肅なる苦行（Tapas）の行者となつた。これより先、聖父淨飯、使を遣して太子の歸國を勸められたが、もとより應ずべくもあらねば、乃ち近親五人の從者を差向けて、常侍修行に就かしめた。いはゆる五賢衆これであつて、その名を憍陳如（Kauṇḍinya）・額鞞（Aśvajit）・跋提（Bhadrika）・十力迦葉（Daśabala-kāśyapa）及び摩男拘利（Mahānāma-kulika）といふ。後、佛初轉法輪の際、最初の佛弟子となつた五比丘は、即ちこの五賢衆である。太子はこれ等の人々と共に悲痛なる苦行を繼續し、一麥一麻の辛酸實に六年の久しきに及び、身形瘦衰し、皮骨相連るの慘狀を敢てした。而もかゝる苦行を以てして、なほ少しも解脫の曙光を認むる事を得なかつたから、乃ち苦行の何等意義なきを悟り、須く過勞の身體を恢復して、然る後徐に凝慮靜觀、以て解脫の道を案ずべきであるとなし、先づ尼連禪河に入浴して、積日の汚垢を淸めた。會々優樓頻螺の村長の女須闍陀（Sujātā）、乳靡を盛つて太子に奉つたから、太子はこれを受けて、漸く疲弊の體力を恢復することを得た。五人の從者これを見て、太子正道を退墮すとなし、當時幾多の行者の聚集せる婆羅痆斯（Vārāṇasī、今の Benares）に向つて走せ去つた。太子更に意とせず、進んで伽耶（Gayā、今の Buddhagayā）に向ひ、有名なる卑鉢羅樹（Pippala）下金剛座上に端身靜座し、

「我今若不レ證二無上大菩提一、寧可レ碎二是身一、終不レ起二此座一」(『方廣大莊嚴經』第八)の決心を以て至心に觀念した。傳說によれば、この時に當つて魔王波旬(Pāpīya)太子の成道を惧れ、種々の手段を盡してその靜觀を搔き亂し、以て誘惑の淵に陷しめむと試みたれど、太子泰然その危難を芟除して、專心悟道に集注したといふ。こは、太子が胸奥の煩擾の惱みより悟道の域への過程を象徵せる一篇の抒情詩と見て然るべきであらう。かくて心神安適し、深妙の禪定、自在の三昧に入り、大悟徹底、終に阿耨多羅三藐三菩提(Anuttara-samyak-saṁbodhi)を成就して、無上獨尊の釋迦牟尼佛となられたのである。時に寶算三十五歲、恰も二月八日の、東雲將に曉の曙光を現せむとする頃であつたといふ。而してかの卑鉢羅樹は、爾來佛陀の正覺に因んで、菩提樹(Bodhi-druma)の名を得るに至つたのである。

さて一度正覺成るや、爾後四十餘年の一生は、專ら說法度生に捧げて、濟生の實を擧げられた。初め、かの菩提樹下及びその他附近にあつて、猶姑し解脫の安きを樂しみ、人生因果の關係いはゆる十二因緣(Dvādaśāṅga-pratītyasamutpāda)の順逆兩觀に入つてゐられたが、會々ウトカラ(Utkala、現今のオリッサ Orissa)地方の商主帝梨富娑(Trapuṣa、また提謂といふ)・跋梨迦(Bhallika、また波利といふ)の二人世尊の所に來つて麨蜜を獻じたから、世尊乃ちこれに歸依佛・歸依法をさせられた。然るに先の五賢衆は、なほ波羅痆斯附近に止在してゐたから、乃ち

これを訪ね、鹿野園（Mṛigadāva）に於て渠等を敎化濟度し、よつて何れも出家の比丘（Bhikṣu）となつた。これ卽ち佛陀の最初の轉法輪（Dharma-cakra-pravartana）であつて、その四諦（Catvāri-āryasatyāni）・八正道（Aryāṣṭāṅgika-mārga）の敎說は、實に世尊獨自の正法であつて、佛敎全體を貫通せる樞軸をなせるもの、而してかのいはゆる五比丘は、また最初の佛弟子である。佛弟子既に成り、こゝに佛・法・僧の三寶（Triratna）始めて具足した。かくて五比丘に次いで、波羅痆斯の長者耶舍（Yaśa）及びその兩親、並にその知人等數十名、何れも佛門に歸依したから、乃ちその諸弟子を四方に派遣して、大に正法の宣布に努められた。更に自らは尼連禪河畔に於て、事火婆羅門の優樓頻螺迦葉（Uruvilvā-kāśyapa）等の三兄弟及びその諸弟子を度し、また王舍城に至つて頻毘娑羅王（Bimbisāra）を化し、且て契約せるところを果された。頻王大に喜んで、ために城外の竹林を献じ、尋いで僧伽藍を建てゝ世尊の止住を乞うた。これいはゆる竹林精舍（Veṇuvana）である。この時また舍利弗（Śāriputra）・目犍連（Maudgalyāyana）等が馬勝比丘（Aśvajit）の指示によつて歸佛せしところ、世尊はこの二人の學識衆に勝れたるの點を以て、比較的顯著なる地位をこれに授與され、ために古參の弟子中に幾分の不平を抱くものがあつたから、世尊乃ち「諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛敎」と四句の偈を說いてこれを誡められた。いはゆる七佛通誡偈といふがこれであつて、諸經の上に屢々見ゆるとこ

ろである。なほこの時また多少の制戒を規定され、これを波羅提木叉（Prātimokṣa）といふ。これ戒律の初めである。摩訶迦葉・摩訶迦旃延（Mahākātyāyana）等の出家またこの時であつた。かくて鄕里劫比羅城に歸つて至親を慰撫し、また說法敎導して同族を濟度された。聖父・聖姨・耶輸陀羅・羅怙羅・難陀（Nanda）等の宗親、何れも同歸した。その他阿難陀（Ānanda）・阿那律（Aniruddha）・優波離（Upāli）等陸續として敎團に投ずるものが加增した。殊に優波離は、卑しき首陀羅（Śūdra）の出であつたが、世尊の眼中何等種族の觀念を立て、階級の等差を認むる如きことなく、飽くまで一視平等の慈惠を垂れられたから、その敎團は、貴賤・僧俗・老幼・男女何れも一味の法悅に浸り、齊しく無上の勸化に浴することを得た。

世尊竹林精舍に還歸さるゝや、拘薩羅國舍衞城（Śrāvastī）の富豪蘇達多（Sudatta）乃ち往いてこれに謁し、親しく說法勸化を受け、後、王子逝多（Jeta）と共に有名なる祇園精舍（Jetavana-vihāra）を建立して、三寶常住の道場たらしめた。この祇園精舍は、先の竹林精舍と共に世尊一代の二大靈場として特に名高く、每年雨期に安居（Varṣa）を結して、弟子の修養を計られたが、多くはこの二處にあつて行はれる例となつた。

かく釋尊の勢力が愈々社會に旺んになつて來たから、それにつれて、これを惡む反對者も尠からず生じたことは、もとより數の免れぬところである。就中少女戰遮（Ciñcā）の中傷の如

き、提婆達多(Devadatta)の迫害の如き、特にその著しきものとして、普く知られてゐる。さりながら、その儔ひなき人格は、諄々たる說法と相俟つて、よく四衆を統理し、化益の功績愈々顯著に趣いた。その一代の敎線、實に中印の全土に遍く、遊化の聖跡點々恒河(Gaṅgā)の南北に鱗次してゐる。かの竹林・祇園の二大靈場をはじめ、有名なる耆闍崛山(Gṛidhrakūṭa)卽ち靈鷲山の如き、特にその尤なるものと謂つべきである。

佛陀晚年の行跡は、史乘漠として連續せる事實を討ぬるに由なく、如上述べし遊化の一班、及び信徒の貢献等の、僅に聖典中に散說せるところによつて、その幾分を髣髴するのみである。さはれ佛陀は、絕大の覺者、人類の救主たる信念のもと、終始勸導敎化に寧日なく、只管求道安慰をこれ事とせられし行跡は、瞭々として窺ひ知るに難くはない。かくて入滅の前一年、吠舍釐に於て菴摩羅女(Āmarapālī)を化し、それより波婆(Pāvā)の城に入り、當時聖軀漸く老衰、加ふるに病患轉た迫つて、苦痛啻ならざる難狀に在せるに拘らず、勇猛精進、更に拘尸那揭羅城(Kuśinagara)に入り、跋提河(Hiraṇyavatī)の畔沙羅雙樹(Śāla-vana)の間に於て、異學梵士に最後の敎化を試みられた。その般涅槃の期刻漸く迫るや、乃ち弟子を顧みて、おのが逝ける後は、專ら所說の法と律とに依るべきことを敎へて、滅後弟子の所依標準を的示し、かくて夜半に至り、安庠として圓寂涅槃(Nirvāṇa)に入られた。生身佛陀としての生涯は、かくてその

終りを告げたのである。寶算時に八十歲、實に紀元前約四八五年、二月十五日と傳へられてゐる。聖骸は數日を經て荼毘に附し、摩揭陀の國人、釋迦族の近親等、遺骨を八分し、寶塔(Stūpa)を建てゝこれを奉安した。最近一八九八年、ペッペ氏(W.C.Peppé)ピプラーヴー(Piprāvā、これ往時の劫比羅伐窣堵の地である)に於て、その舍利寶塔の一を發掘し、佛教史學上の一大貢献をなしたのであるが、その塔函の包藏裝置より推考するも、當時釋尊が世間の明眼として、如何に深く四衆より尊崇追慕され給うたかは、容易に想像されるところであるといふ。

第三章　研究の困難

釋尊傳の大要は、如上記したやうであるが、こはもとよりたゞ表面上の略叙に過ぎず、更に進んで學究的問題を左右するに至つては、到底かくの如き簡單なる記事を以て了るべくもあらぬ。實にその內容に於て、異說疑問百出蜂起、殆んど適從するところに迷ふであらう。これ一に、非歷史的なる印度の國民性の、由つて然るべき結果であつて、事實の眞僞を定むべき記錄文書の缺如は、やがて各々事件の上に、甲論乙說の異見重疊を來したわけである。佛傳研究の至難至厄、恐く何物の儔ひすべきものがなからう。學者希くは勇猛一番、この難厄の荊棘を芟除してよく千古の疑問を一掃し、由つて以て永代不易の重鎭をこれに投ずべし。さらば左に、

そのいはゆる研究難中の尤たる數條を列擧して、問題の存するところを指摘せう。

凡そ釋尊傳中にあつて、最も多くの異説を生ぜるは、その入滅年代であらう。先輩中に既に十六説を數へ、三十餘説を擧げ、四十幾説を列ね、而してその年代は、紀元前二千四百餘年の古より三百餘年の新しきに到るまで、實に上下二千餘年の間に亙つてゐる。近時にあつて、最も多くその異説を綜合掲記せるものは、藤井宣正氏の『佛教小史』(第一卷)であつて、東西幾多の異説を採集せること、實に五十種に垂むたるものあり、初學これを仰いで、そゞろ茫洋の嘆を懷かざるを得ざるに至るであらう。かくの如き多くの異説を派生せる所以は、實に佛滅が佛教史實を語るべき起點とさるゝため、從つてそれを規定すべき必要より誰人もこれに染指せる結果であつて、而してその根本は、上述の如く、印度の文獻が時間的觀念を全然缺如せるに起因することといふまでもない。曾てオックスフォールド大學教授ウイルソン氏 (H.H.Wilson) が "*Encyclopædia Britanica*" (『大英百科全書』) の中に、釋尊の實在を否定して、これたゞ信徒の揑造せる空想的人物に他ならないといふたのも、全くその史傳に徵すべき方法なきよりの放言と謂つべく、またケルン (H.Kern)・セナール (E.Sénart) の諸氏が、佛傳の構想を以て太陽神話に類儔せしめ、同じくこれを史乘より放棄せむとしたのも、猶且正確なる史實を獲難きがために起因せる所談である。さりながら、古來至聖大賢と仰がるゝほどの人は、何れも周圍よりこ

れを讃嘆的に莊嚴裝飾され、ために其の實在の眞相を去ること遠き一個の傳説(Tradition)として殘存されたること、必ずしも釋尊のみに限るべきではない。されば、その史實の上に異説反見多ければとて、乃ち一概にこれを史乘より抹殺し得ざることは、今更特筆するまでもないことである。而して從來學者間にあつて、佛滅の年代考證を試みし人は決して尠からず(次章「參考の書目」の下參照)、ためにほゞその定説たらむとせる年代を認められるわけではあるが、而もそれとて猶且推論の結果に止り、永代不易の確説とすることは出來ぬのであるから、これ實に佛傳研究上の大問題にして、抑々また最難事とするところであると思ふ。而して、入滅年代の異説百出たると共に、またその誕生年代の反見紛紜たるも正に當然の沙汰であつて、而して世尊在世の寶壽が七十九歳・八十歳及び八十歳以上の三説あるよりして、その誕生年代の、入滅年代に比して相讓らざる複雜を呈せることも、實に必然の數といはねばならぬ。但し入滅年代は、特に佛敎史實を語るべき紀元起點たるものなれば、從來學者の研究が、唯々この一事のみに集注されたるは、また至當の成果と謂つべきであらう。

かく佛滅年代の問題は、須要にして而も異説百出であるが、更にまた釋迦種族に關して、アールャ族(Ārya)・非アールャ族の問題がある。先輩既に論じて、種々研究の成果を示してゐるが、これは單なる種族の問題たるに止らずして、やがて南北佛敎の史的按配に相關せる問題とし

て、洵に重要視せねばならぬところである。

その他釋尊の家系に就いての異説もさることながら、更に納妃の年時に就いて、十七歲・十九歲の異説あり、その妃數に就いて、一人・二人・三人等と傳へらる。また羅怙羅出生の年時を釋尊出家以前とすると以後とするとの異説あり、逃宮出家の年時に關して、十九歲説・二十九歲説が立てられ、從つてその修行年時を、或は六年と數へられ、或は十二年と數へらる。また菩提樹下成道の年時を、一は三十歲とし、一は三十五歲とし、その日時を、一は二月八日とし、一は四月八日とされる。また成道以後自受法樂の時日を、或は一七日、或は二七日、乃至或は一年等と說かれてゐる。その他釋尊の一生を通じ、その傳記に相關せる事件に就いて、異説重々、もし嚴密に論ずる時は、殆んど一事として定説を討ぬるに由なき狀態であつて、かのウイルソン等をして、これを史乘より抹殺せしめたるも、また尤もの次第といはねばならぬ。凡そこれ等の異説紛紜たる中には、既述の如く、世尊の人格を鑽仰するの餘り、これを修飾莊嚴せる傳說の攙入變形等あるべく、或は模糊たる記錄の暗示を辿つて推論附會せる疑訝の鑿說想像もあるべし。これ等を一々甄別して、その實否の如何を究むること、洵に難中の難事といはねばならぬ。而もかゝる傳說事件が、後世發達せる佛敎々學の內容に相關相聯せることの尠からざるを思はゞ、學者須く策勵精進、よく這般の檢討に正面せむとの道心を起さねばならぬ。な

ほゝ次章の文献資料を叙する條下に於て、重ねてそれ等の事項に言及せう。

第四章　參考の書目

抑々佛傳研究の文献資料を討ぬれば、實に廣漠として、枚擧に遑なきくらゐである。姑くこれを語學上より分つも、巴利語文學に屬するもの、梵語文學に屬するもの、西藏語文學に屬するもの、或は漢字佛典に見ゆるもの、國字佛典に見ゆるもの、歐字佛典に見ゆるもの等、千差萬別頗る豐富である。而して本講にあつては、もとよりそれ等の一々を網羅して、その解說を試みるが如き專門の範圍に亙るべきではないから、比較的廣く學界に知られてゐる文書のみを列擧して、その略解題を加へることゝせう。但しこゝに注意すべきは、吾人は曩に佛傳の概要を叙して、單なる歷史的釋尊の事跡を紹介せるに過ぎなかつたが、既に一言せる如く、凡そ佛傳の研究にあつては、單なる歷史的釋尊の事跡を究むるを以て足れりとせず、更に進んで歷史以上の佛陀としての靈格をも推求するの要あれば、これが參考たる文献資料にあつても、史傳・事跡・口碑・傳說、あらゆる方面に亙つて檢尋するの要がある。特に美術上の資料は、這般の研究に最も重要なるものであつて、就中古代印度の建築・彫刻・繪畫等は、佛傳研究者の決して看過すべからざる寶貨である。さりながら、本講は、たゞ文献資料を提示するが主眼なれば、本

章の叙説も、文献上これに關するなるべく諸方面に亙つての紹介を試みようと思ふ。

さて、先づ初めに學徒の最も親しみ易きわが國現時の佛傳文書の代表的なるものより擧ぐることゝせう。それには次のやうな諸書がある。

一　佛教小史第一巻　藤井宣正著（明治二十七年刊）
二　釋迦種族論　一巻　井上哲次郎著（明治三十年刊）
三　佛陀論　一巻　惠美忍成著（明治三十二年刊）
四　釋迦　一巻　高山林次郎著（明治三十二年刊）
五　釋迦史傳　一巻　常盤大定・近角常觀・吉田賢龍合著（明治三十七年刊）
六　現身佛と法身佛　一巻　姉崎正治著（明治三十七年刊）
七　佛教統一論第三編佛陀論　一巻　村上專精著（明治三十八年刊）
八　釋迦論　一巻　高橋五郎著（明治三十九年刊）
九　釋迦　一巻　大屋德城著（明治四十二年刊）
一〇　釋尊の研究　一巻　羽溪了諦著（明治四十三年刊）
一一　宗教學上より見たる釋迦牟尼佛　一巻　加藤玄智著（明治四十三年刊）
一二　華嚴學上より見たる釋迦文佛　一巻　龜谷聖馨著（明治四十三年刊）

一三　美術上の釋迦　一卷　堀謙德編（明治四十三年刊）
一四　増訂釋迦牟尼傳　一卷　井上哲次郎・堀謙德合著（明治四十四年刊）
一五　釋迦牟尼傳　一卷　常盤大定著（大正六年刊）
一六　釋迦牟尼と其敎義　一卷　長井眞琴著（大正九年刊）

右の中、（一）『佛敎小史』は、「印度之部」とある如く、印度佛敎の發達史實を叙說せるもので、第一・第二の二卷あり、その第一卷は殆んど佛傳を以て埋められてゐて、優に一個の佛傳の單行著書と見做され得る。その考證實に該博にして、特に藏經中の幾多の資料を縱橫に參照引用して、的確なる典據を指示せる點は、餘他にその類例なき特色といふべく、而して上にも一言せる如く、佛滅年代に就いての討究などは、別して廣汎を極めてゐる。たゞそれ現時の學界は、その進展、本書刊行當時の比ではないから、新事實・新資料の提供につれ、その硏究も一段の發達を呈せることは、もとより當然の次第ではあるが、而も本書の硏究が、いはゆる創業の難事に向へる先驅者として、現時の斯學壇の地盤となつた點より論ずれば、本書の價値また特筆して然るべきものといふべく、されば、學者の須く一讀を要することも、もとよりの次第である。因みに、本書は久しく絕版となり、學徒の容易に獲られぬところであつたが、近時東京某書肆に於て再版の擧あり、不日その實現を見るに至るとか聞く。吾人は學界のため、その刊行の一

日も速かならむことを切望するものである。(三)『佛陀論』は、佛陀の傳記及びその教義の外に、更に進んで後代佛教の發達進步の歷程を叙說したもので、當時にあつては、比較的博引努めたるの迹を窺ひ得られる。(四)『釋迦』は、曾て博文館より少年子弟の讀物として刊行せる『世界歷史譚』中の一編として出されたものであつて、能文の聞え高き樗牛博士のものせるところとて、絢爛雄勁なる筆致を以て聖傳の一生を叙せるもの、後に『樗牛全集』中に編入されてある。(五)『釋迦史傳』は、太子時代の釋迦、修行時代の釋迦、說法時代の釋迦を、著者三氏が夫々分擔叙說せるものであつて、簡明に佛陀の生涯を知り得られる。(七)『佛陀論』は、題冠の如く、有名なる『佛教統一論』中の一編として出されたものであつて、前後二編より成り、前編は釋尊傳にして、後編は佛陀論を叙する。所說極めて的確、一事一件悉く原因を討ね結果を示し、明快なる論理の下、初心の學徒を啓發せしむる屈竟の適書と推稱するに難くはない。その佛陀論を叙せる所は、初學の稍々難解に亘る憾みなきにあらねど、各宗教義上に立脚せる佛陀論を列叙し、卽ち教理の一部に屬する理想論(卽ち佛陀論)の解說として、教理研究に資する所が尠くはないのである。曩に吾人が、佛傳の眞研究は、歷史的釋尊傳の考察よりして理想的佛陀論の檢討に至つて始めて全うされるといへるもの、洵に本書に於て、その最も恰好の形式を見出し得るのである。特に學徒の熟讀を薦むる所以である。(九)『釋迦』は著者の序に「佛陀及び佛陀を中心

としたる佛敎文學の概觀」といへる如く、一面佛陀の人格を紹介すると共に、更に佛陀を中心とせる佛敎文學の概要を叙說せるものであつて、通俗平明の記事中、初學をして尠からざる興趣を惹かしめ得る。單なる讀物としても、好適たるを失はないだらう。(一四)『增訂釋迦牟尼傳』は、井上博士が曾て『釋迦牟尼傳』と題して出せるものを、堀學士が更に考證的增補をなせるものであつて、所說の精細緻密を極めたる、殊に飽くまで科學的考證に富める點に於て、實に邦文聖傳中の權威と謂つべきである。而も啻に史實を鮮明にせるのみならず、或は釋尊の人格を東西の偉人のそれに對照し、或はそれより惹いて東西の人文思想を比論する等、正面・側面より終始事實の眞相を照灼尋求せむと試みし所は、嶄然として類書に一頭地を拔けるものといふべく、且また、その考證的增補によつて一段の價値を加へたることも、いふまでもない。加之、更に幾多の貴重なる附錄を添へて、或は釋迦種族を論じ、或は印度佛敎を抄し、特に佛敎各方面に亘れる東西の研究書目を列擧して各々その略解を加へ、縱橫學者の便宜向上を計れる點は、洵に敬重に値する良書と謂つべきであらう。(一五)『釋迦牟尼傳』は、主として『阿含』その他の漢譯藏經を基礎として述成せる聖傳であつて、博引旁證、精緻肯綮、前の(一四)と並稱すべき適切の史傳として、推讚に値ひするものである。曾て、明治四十一年にその初版が刊行されたが、大正六年に至り、更に改版刊行さるゝに至つたのである。

以上解題を加へた諸書は、何れも純粹の史傳、もしくはそれに類せるものであるが、更に史傳以外に於ける、或は教理方面より、或は美術方面より敍說せるものを解題せば、先づ教理方面にては、（六）『現身佛と法身佛』は、主として原始佛教經典を剖檢調理して、生身佛陀と法身佛陀との理論を敍說せるものであつて、その巴利語原本並に漢譯經典を對照比較して、精銳なる科學的討究を試みたるところは、大に學術的價値を有せるものとして推稱すべく、たゞ初學幾分難解の憾みはあれど、反覆熟讀して、得るところ決して尠くはないと思ふ。（一〇）『釋尊の研究』は、一名「佛涅槃の研究」と稱せる如く、主として佛陀の思想、特にその自覺內容たる涅槃の正理に就いて、東西の學說を檢討批判して成れるものであつて、眞面目なる學究書である。（一一）『宗教學上より見たる釋迦牟尼佛』及び（一二）『華嚴學上より見たる釋迦文佛』の兩書は、小冊子の中に、題號にあらはせる如き特殊の研究を試みたものである。（一六）『釋迦牟尼と其教義』は、主として巴利語佛典に資料を覓めて、佛傳並にその教義の一般を髣髴せしめむと試みたものであつて、平明の敍說は、初心の容易に會得さるゝところである。また、既述の（七）の後半（後編）が、同じく佛陀論を敍說せる大文字として、教理研究に至益を與ふる事も、特記すべき所であらう。次に美術方面にては、（一三）『美術上の釋迦』は、その題號の如く、佛傳を美術上より解說せむと試みしものであつて、印度その他の古代の佛教彫刻の寫眞・圖解を數多挿入して、一々これを佛傳の

事實に配當し、普く東西の學說を參照して考證集成せるもの、學術上異彩ある良書と謂つべきである。

その他、佛傳に關聯せる特殊著書として、(三)『釋迦種族論』は、釋迦種族の系統考證であつて、佛傳研究の、未だ然く進步せざる當時にあつて、飽くまで科學的の考察を恣にせるところ、大に敬讀するの値ひあり、(八)『釋迦論』は、批判的に釋尊そのもの――寧ろ佛敎そのものゝ敎義思想を解剖せるものであつて、また傾聽に値ひする點がある。但しこの書は、所論往々獨斷に亘り奇矯に失せる嫌ひあれば、讀者の注意を要すべきところであらう。

更に以上の他、姉崎博士の『印度宗敎史考』(明治三十一年刊)、荻原雲來氏の『印度の佛敎』(大正六年刊)等にも、佛傳研究に資すべき叙說が尠くはない。なほ辭書類中にあつて、特に注目すべき這箇の記事を擧ぐれば、『哲學大辭書』及び『日本百科大辭典』中に、何れも「釋迦牟尼」の項下に、井上・堀兩氏執筆され、その所明大に精細を盡して、宛然かの『增訂釋迦牟尼傳』を縮少せるかの觀がある。また『佛敎大辭彙』中にも、同じく「釋迦牟尼」の項下にその記事あり。佛敎上の立場より叙說せるところ、多少前者とその趣を異にし、雙々相俟つて好個の參考たり得るものである。

因みに、佛傳中特に重要問題たるべき入滅年代に就いて論說せる記事の二三を紹介して置か

ず。これに就いては、既述の如く『佛教小史』第一卷にその異說の幾多を網羅し、また村上博士は『佛教史林』初號（明治二十七年刊）以下詳細に考證を試み（これにあつては、單に佛滅年代のみならず、その誕生・出家・成道の年時・寶壽の考證までも遂げられてある）、また姉崎博士は『印度宗敎史考』に、小野玄妙氏は『佛教年代考』（明治三十八年刊）の附錄に何れも委曲叙說し、また望月信亨氏は、『佛教大年表』（明治四十二年刊）の卷頭に、該年表編纂に就いて、佛紀を劃定せむために縷々論證し、また『增訂釋迦牟尼傳』の著者は、その附錄にこれが叙說を試みてゐる。また馬田行啓氏は、『佛教史學』第三編・第三號（大正二年刊）以下に「佛傳年時考」と題して、佛傳中の要項たる出家・成道・入滅等に就いて、幾多の經論資料を列擧して論證してゐる。（これにあつては、佛滅といふも、年代の考證ではなくして、寶壽の考證である。出家・成道また同じ）。凡そ佛滅年代の如き問題は、前にも一言せるやうに、決して簡單に考證さるべきものではなく、かつまたその考證の成果も、何處まで確實性を有せるかは、大に明答に苦しむところであつて、如上の諸說にあつても、なほ論じもて行かば、その餘地多々ありと考へられる。されど斯學々航の進路を辿る參考としては、これ等先覺の諸說を須く傾聽一讀するの必要あるは正に當然の次第といはねばならぬ。これ卽ち叙說の煩雜をも顧みずして、こゝに列擧紹介する所以である。學者それ宜しく三思すべし。

以上列擧せる諸書は、何れも印度・支那聖哲の手に成れる佛傳文書を依憑とし、かつ泰西新進の諸説を參考して輯成されしものであつて、それ等の依憑資料が、佛傳研究の指南たり、特に印度撰述に屬するものが、餘他總ての研究の根基となれることは、いふまでもない。されば進んで精邃なる佛傳の根本研究に分け入らむとには、是非ともそれ等の一々を披閲參考して、思察するところがなければならぬ。されば次に、支那撰述及び印度撰述に溯り、旁ら泰西諸説を尋求して、その資料たる主要文書の紹介を試みようとする。

先づ支那撰述に就いて擧ぐれば、次の如きがある。

一七　釋迦譜　五卷　梁僧祐撰（致一）

一八　釋迦氏譜　一卷　唐道宣撰（致一）

一九　釋迦方志　二卷　同　撰（致一）

この中、(一七)『釋迦譜』は、現存の支那撰述の聖傳中にて最古に屬するものであつて、釋尊一代の事蹟を、廣く經・律を搜索して叙説せるものであつて、經・律一々の本文を抄出して各々の項下に列示せるため、佛傳に關するそれ等の要文を容易に通讀するの便がある。但し一部五卷の本文は、稍々長篇に亘つて、一讀過了の易きを缺く憾みあるがため、唐の道宣これを節略して、その始終の綱要を記述せるもの、これが卽ち(一八)『釋迦氏譜』である。(一九)『釋迦方志』は、

主として佛陀の遺法の弘傳せる西域・印度の史的地理を叙説せるものであつて、玄奘の『西域記』の如き新資料が參考依憑とされてゐるところもある。

その他、『續藏』中に、唐の王勃の『釋迦如來成道記』一卷、元の無寄の『釋迦如來行蹟頌』二卷等の收載されたるものあれど、佛傳文書として特筆するに値ひするものとては、恐らく如上の三種に過ぎぬであらう。由來支那撰述の佛典中にあつては、獨立せる佛傳として存するもの極めて尠く、大抵は別書中の一部に佛傳の記載されたるもの多く、從つて研究參考の眞價は、それ等の獨立せる佛傳文書よりも、各種佛教史實を叙せる文書中の一部に尋求して、寧ろ得るところ多きを覺ゆる。卽ち次に列擧する諸書の如きは、それ等佛傳を收載せる別書の尤なるものである。

二〇　歷代三寶紀　第一卷　隋費長房撰（致六）
二一　佛祖統紀　第一―第四卷　宋志盤撰（致八・續二ノ乙ノ四ノ一）
二二　隆興編年通論　第一卷　宋祖琇撰（續二ノ乙ノ三ノ三）
二三　釋氏通鑑　第一卷　宋本覺編集（續二ノ乙ノ四ノ四）
二四　佛祖歷代通載　第四卷　元念常集（致一〇・續二ノ乙ノ五ノ二）
二五　釋氏稽古略　第一卷　明覺岸編集（續二ノ乙ノ五ノ五）

この中、(三〇)『歴代三寶紀』は、總じて十五卷あつて、前三卷は佛陀降生以來の年譜、後十二卷は歴代譯述の經錄を收載してゐる。開皇十七年(597)の輯錄にかゝるを以て、一に『開皇三寶錄』ともいふ。佛傳は、その初卷に記述されてゐる。(三一)『佛祖統紀』は、總じて五十四卷あり、佛陀の古へより撰者の當時に至るまでの佛教法統傳授の迹を記述せるものであつて、佛典中にあつて、匹儔稀なる浩瀚なる史籍に屬する。就中、最初の四卷は釋尊の傳記を叙せるものであつて、記事詳細、優に獨立せる一個の佛傳たるの價値を存する。但し、撰者は台家の出なるため、主として自宗の立場に偏脚して記述せる點が、洵に遺憾とすべきところである。さあれ、比較的杜撰妙なきところ、信頼に値ひする良書として、學者に珍重されてゐるわけである。なほ佛傳以外の叙說にあつても、また詳細周到なる佛教史書として特筆の價値あることは、もとよりのところである。(三二)『隆興編年通論』或は具に『隆興釋教編年通論』といふは、總じて二十九卷あつて、佛教渡來以後南宋の孝宗の代に至るまでの釋門の事蹟を編年體に叙說せるものであつて、その初卷に佛傳が擧げられてある。題名の「隆興」といふは、本書編成の年號に他ならない。(三三)『釋氏通鑑』或は具に『歴代編年釋氏通鑑』といふは、周の昭王二十六年(甲寅)より北宋の太祖建隆元年(庚申)に至る一千八百餘年間に亘り、佛教上の事件を編年體に叙說せるものであつて、その初卷に佛傳が記述されてある。(三四)『佛祖歴代通載』は、總じて三十六卷あつて、

また主として編年體に、往古より元の惠宗の代に至るまでの釋門の事蹟を叙說せるものであつて、その第四卷に佛傳が收載されてある。前の『統紀』の台家に偏向せるに比すれば、公平の言大に傾聽に値ひするものがある。(三五)『釋氏稽古略』は、總じて四卷あり、支那に於ける歷代の佛敎事蹟を編年體に叙說せるものであつて、その、何れも出處を明記して、所說の根據を確實ならしめたるは、實に撰者の博覽を證すべきであつて、簡單なる記事中また便宜尠からざる參考たり得る。佛傳はその初卷に記述されてある。

以上の諸書に收載されし佛傳は、もとより佛傳そのものを目的とせる叙說ではないから、詳細なる記事を望み得ぬ憾みはあれど、比較的正確なる史籍として、專門研究の是非披讀せねばならぬところ、矧むや時に『統紀』の如き大記事のあるに於てをやである。而してそれ等諸書の本來の面目たる敎史の方面に關する點に於ては、何れも錚々たる雄篇のみであつて、支那の佛敎史實を檢尋するものゝ必要缺くべからざる寶典である。後の敎史篇の下、支那佛敎史籍を叙するところに至つて、重ねて言及せうと思ふ。

次に印度撰述に溯つて討ぬれば、次の如きがある。

三六 (漢譯) 佛所行讃 五卷 馬鳴菩薩造 北涼曇無讖譯(藏七)

三七 (梵文) *Buddha-carita.* By Aśvaghosa. Ed. by E. B. Cowell. Oxford, 1893. (*Anecdota*

Oxoniensia.)

二八 (英譯) *Budda-carita.* By Aśvaghoṣa. Tr. by E. B. Cowell. Oxford, 1894. (*Sacred Books of the East*, Vol. XLIX.)

二九 (英譯) *The Fo-sho-hing-tsan-king.* Tr. by S. Beal. Oxford, 1883. (*Sacred Books of the East*, Vol. XIX.)

三〇 (獨譯) *Buddhas Leben und Werke.* Von T. Schultze. Leipzig, 1898.

右の中、(二六)漢譯は、或は『佛所行讃經』といはれ、或は『佛所行讃傳』といはれて、通計二十八品、佛陀の誕生より八分舍利(五六頁參照)までの事蹟——卽ち佛傳の始終を敍說してゐる。その梵文は、さすがに稀代の文豪馬鳴(Aśvaghoṣa)の手に成れるものとて、全篇悉く優婉なる韻文を以て行られ、錦綉に交ゆるに珠玉を以てせる文巧の中、藻思縱横に貫き、氣韻表裏に漂ひ、實に梵文學の精華と稱されてゐる。從つて漢譯にあつても、またそれを學んで、終始悉く五字一句の偈頌(Gātha)を以て構成し、よく絢爛妙麗の雅調を整へてゐる。而もその敍說が飽くまで現實に立脚して、殆んど神秘に亙る分子を加味せざる裡に、心ゆく讃美の極を盡せる點は、洵に他に儔ひを見ざる絕品と謂つべきであらう。特に學者の玩讀を薦むる所以である。(二七)梵文は、前の漢譯の原書であつて、かのホヂソン氏によつて尼波羅より發見されし聖典中の隨一である。これを漢譯に對照するに、僅にその最初の十七品に相當する部分のみに過ぎずして、

殘餘の十一品は傳はつてゐない。かつその記述に於ても、彼此一致を缺ける點なきにあらざれば、漢譯は、この梵文以外の異本によつて翻ぜられしものだらうと思はれる。一八九三年、英國のカウエル氏(E.B.Cowell)、これを "*Anecdota Oxoniensia*"(『牛津逸書集』)の中に收輯して梓刊した。近時わが常盤井堯猷博士、これをローマ字に寫し、更に漢譯を附加して刊行した。學徒の便宜を蒙るところ、實に尠からざるものがある。なほ、カウエル氏、この梵文を英譯し、これが "*Sacred Books of the East*"(『東方聖書』)中に收輯されたるもの、卽ち(二八)英譯である。(二九)英譯は、ビール氏、前の漢譯より更に英文に重譯し、同じく『東方聖書』中に收輯されたるものである。(三〇)獨譯は、ビール氏のこの英譯を、更に重ねてシュルツェ氏(T. Schultze)が獨文に翻じて、この標題を以て刊行せるものである。以上列擧せる諸本は、何れも同一種類のものであるが、これ實に大乘佛傳中の最も主要なるものであつて、特に、印度撰述の佛傳中にあつて、著者の名の傳ふるものは、たゞこの書のみに限つてゐることを注意せねばならぬ。

三一 (漢譯) 佛說普曜經 八卷 西晉竺法護譯(宙四)

三二 (梵文印度版) *Lalita vistara.* Ed. by Rājendralāla Mitra. Calcutta, 1877. (*Bibliotheca Indica*, Vol. XLVI.)

三三 (梵文獨逸版) *Lalita vistara.* Ed. by S. Lefmann. 2 vol. Halle, 1902.

三四 (英譯) *Lalita vistara.* Tr. by R. Mitra. 1886.

三五 (佛譯) *Le Lalita vistara.* Tr. par Ph. Éd. Foucaux. Paris, 1884–'92. (*Annales du Musée Guimet*, VI, XIX.)

三六 (藏譯) *Ṛgya tch'er-rol-pa.*

三七 (佛譯) *Ṛgya tch'er-rol-pa, ou developpe-ment des jeux.* Tr. par Ph. Éd. Foucaux. Paris, 1847–'8

右の中、(三二)漢譯は、一名「方等本起」といひ、唐の地婆訶羅(Divākara)即ち日照譯の『方廣大莊嚴經』一名「神通遊戲」といふと同本異譯であつて、かれの十二卷・二十七品、まさしく逐語譯たるに對して、これは八卷・三十品、即ち抽抄譯である。共に佛陀の誕生よりその成道の初年即ち初轉法輪までの事蹟を述べしものであつて、その一代の始終に亙つてゐない點は、遺憾の至りとすべきところであるが、これまた大乘佛傳中の主要なるものたることは、もとよりである。瓜哇島(Java)ボロブドーア(Bōrō-budur)の舊趾の石壁には、この經の記事を圖示せる彫刻が存してゐる。こは、紀元九〇〇年の頃、印度の美術家によつて彫刻されしところであつて、オランダの殖民省は、これを寫圖して"*Bōrō-Boedore op het eiland Java, uitgegeben op last van Zijne Excellentie den Minister van Kolonien.*" Leide(『ボロブドーア』)と題し、ライデン市に於て出

版した。蘭人プライテ氏(C.Pleyte)は、更にこれを縮寫し、並に"*Lalita vistara*"の原文(三三)を獨譯解說して"*Die Buddha-Legende in den Skulpturen des Tempels von Bōrō-Budur.*" Von C. Pleyte. Amsterdam, 1902.(『ボロブドーア寺院彫刻佛傳』)と題し、アムステルダムに於て刊行した。このボロブドーア舊趾の彫刻は、實に印度のサーンチ(Sāñchi)やブハルフト(Bharhut)古塔のそれと匹敵するに足る佛敎美術の偉觀であつて、而してまた如上の二書は、佛敎史學及び美術の兩面に於て、最も珍重すべき寶典である。(三三)梵文「印度版」は、印度の碩學ミトラ氏(R. Mitra)が"*Bibliotheca Indica*"(『印度文庫』)中に收輯して、カルカッタ府に於て刊行せるものであつて、ミトラ氏は、またこれによつて英文に翻じ、かつそれに精密なる註釋を加へて刊行した。これ卽ち(三四)英譯である。學徒一讀して、得るところ多きを信ずる。(三三)梵文「獨逸版」は、別にドイツのレフマン氏(S. Lefmann)が、ハレ市に於て刊行せるものであつて、全部二卷に分れ、初卷は卽ち本文であつて、第二卷は卽ち異本を校合討究せるものである。フランスのフーコー氏、これによつて佛譯を試み、"*Annales du Musée Guimet*"(『ギメー博物館叢書』)第六及び第十九の兩卷として、パリ府に刊行せるもの、これ卽ち(三五)佛譯である。また本書は、別に西藏藏經中にこれを見出し得る。これ卽ち(三六)藏譯であつて、フーコー氏、またこの藏譯よりして、別に佛譯を出せるもの、これ卽ち(三七)佛譯である。

三八（漢譯）修行本起經　二卷　後漢竺大力・康孟詳共譯（辰十）
三九（漢譯）中本起經　二卷　後漢曇果・康孟詳共譯（辰十）
四〇（漢譯）佛說太子瑞應本起經　二卷　呉支謙譯（辰十）
四一（漢譯）異出菩薩本起經　一卷　西晉聶道眞譯（辰十）
四二（漢譯）過去現在因果經　四卷　宋求那跋陀羅譯（辰十）

右の諸經は、何れも小乘佛傳であつて、特に最初の三種は、漢譯佛典中最古の佛傳に屬するものである。就中、（三八）『修行本起經』は、釋迦牟尼の託胎・降生より出家・成道に至るまでの事歷を述べしもの、（三九）『中本起經』は、その初轉法輪より以後の化導の行跡を叙せるものである。よつてこの二經を對照するに、前者は佛傳の初分にして、後者はその中分に當れば、この二經は、もと一連のものたりしことを想像される。『佛本行集經』第六十によれば、佛傳の名稱は、小乘五部の部別に從つて相違し、その中「………迦葉維師名爲佛生因緣………」とある。いはゆる「佛生因緣」は、「本起」といふと同意義なれば、『修行本起』・『中本起』は、迦葉維部（Kāśyapiya）にて相傳せる佛陀の行狀記錄であると思はれる。なほ、『中本起經』の題號下に、細註して「次名四部僧出長阿含」とあるは、その意判然せず、いはゆる『長阿含』に出づとあるも、僅に『長阿含經』の第二分たる「遊行經」の初めに、この經（『中本起』）の「度奈女品」の類文を見出し得る

に過ぎないのである。(四〇)『佛說太子瑞應本起經』は、釋迦佛の本生に溯つて、過去世に菩薩行を修せるよりして、今世王城に降生し、乃至出家・成道に至る所以を敍說し、かの三迦葉敎化のことに及んで終末を告げてゐる。題號の「太子瑞應」の稱は、書中、太子降生に際して三十二種の瑞應示現せる事を記述せるがためである。この經は、前の(三八)・(三九)の別譯である。(四一)『異出菩薩本起經』は、これまた釋迦佛の因行・誕生・出家・成道・說法等に亙つて略敍せるものであつて、同じく前の(三八)・(三九)の別譯と思はれる。(四二)『過去現在因果經』は、略して『因果經』ともいひ、釋迦佛の本生に溯つて、過去世に普光佛に授記せられしことより說き起し、乃至今世の降生・出家・成道・化導等に亙つて、明快なる行文を以て記述されてある。かの釋尊逃宮の初めに方つて、阿藍迦藍(Āraḍa Kālāma)を訪れ、大にこれと對論して、數論(Sāṃkhya)の冥諦(Prakṛti)・非想(Naivasaṃjñānāsaṃjñāyatana)を說破せる記事の如きは、特に有名なるものとして知られてゐる。(三八)・(四〇)と共に同本異譯前後六種、而してそが三存三缺たる中の三存の隨一である。有名なる『因果經繪』は、この經の文意を圖示し、それに經文を對照併記せるものである。

四三 (漢譯) 慧上菩薩問大善權經 二卷 西晉竺法護譯(地十二)

四四 (漢譯) 佛說十二遊經 一卷 東晉迦留陀伽譯(藏八)

四五（漢譯）　佛本行經　七卷　宋寶雲譯（藏七）

四六（漢譯）　佛說衆許摩訶帝經　十三卷　宋法賢譯（辰十）

右の中、(四三)『慧上菩薩問大善權經』は、略して單に『大善權經』ともいひ、『佛說大方廣善巧方便經』(四卷・宋施護譯)と共に、『大寶積經』第三十八「大乘方便會」(東晉竺難提譯)の異譯である。(『至元錄』第四に、この經は、『寶積』第三十七「阿闍世王子會」と同本とあれど、そはまさしく誤謬といはねばならぬ)。これまた佛傳の大要を盡してゐる。(四四)『佛說十二遊經』は、極めて簡單なる佛傳であつて、最初、釋尊の種姓たる瞿曇氏の由來より說き、その降生・出家・成道・遊化等に亙つて恰好に摘要してゐる。『十二遊經』の稱は、成道後十二年間の遊化を述ぶるよりして名けられたのである。從つて、その十二年間、每歲安居の結處を說くに於て特に要を盡し、乃ち古往より比較的に重用されてゐるわけである。なほ、この書は、「佛說」と冠し(『宋』・『元』・『明』の三本倶にこの二字なく、たゞ『麗藏』のみにあり)「經」と題するも、最初に、佛說の形式たるかの「如是我聞」等の諸成就の言を置かざれば、藏經中にては、西土賢聖の撰述と見做して小乘論藏中に附載せる雜部に收攝されてゐる。(二九・三〇頁參照)。(四五)『佛本行經』は、一名『佛本行讃傳』ともいひ、通計三十一品、前の『佛所行讃』(三六)の如く、悉く偈頌の體を以て佛傳の始終を盡してゐる。但し、この書の題號は、『所行讃』の別名たる「佛本行經」といふと同一な

るより、兩者動もせば混同され易い恐れあるから、特に注意すべき必要があらう。(四六)『佛說衆許摩訶帝經』は、また同じく釋尊一代の行跡を記述せるものであつて、題號の「衆許」とは、經中所現の三摩達多王 (Samadatta) のことで、衆庶に推許されし王との意と考へられる。「摩訶」はいふまでもなく梵語の Mahā で、大の意なれば、衆許摩訶帝即ち三摩達多大帝の意であらう。『南條目錄』のこの經の條下 (No.859) に、この題號に就いて考證するところあり、披いて見るべし。但し、經中この王のことに關しては、僅々數語を列するに過ぎずして、本來佛傳を敍するを趣旨とせるに拘らずかゝる題號を附せることは、大に異例とすべきところである。

四七 (漢譯) 佛本行集經 六十卷 隋闍那崛多譯(辰七—九)

四八 (梵文) *Mahāvastu*. Ed. by É. Sénart. 3 vol. Paris, 1882–'97.

四九 (英譯) *The Romantic Legend of Śākya Buddha*. By S. Beal. London. 1875.

右は小乘の佛傳であつて、その中(四七)漢譯は、釋尊の過去世に於ける本生より說いて、今世に於ける降生・出家・成道・遊化、並に佛弟子歸順の因緣等に亙り、通計六十品、大小疎細の傳說を悉く合糅し、加之普く佛敎に關する諸種の記事を添へ、その敍說の廣汎なる、實に漢譯各種の佛傳中第一に位する。ミトラ博士が評して、'A cyclopœdia of Buddhist legends and doctrine' といへるもの、洵にその意を得たる言と謂つべきである。但し、佛傳に關する記事は、

佛陀の一生を盡さずして、成道六年頃の歸郷化導までに止れるは、惜むべき次第である。卷尾にこの經の題目を示し、小乘五部にあつて各々これを異にすることを述べて、「或問曰、當何名此經、答曰、………曇無德師名爲釋迦牟尼佛本行」とある。(四八)梵文は、記示の如く、フランスのセナール氏により、一八八二年より同九七年に亙つてパリに於て刊行され、浩澣なる三卷本が出てゐる。前の漢譯(四七)は、この梵文の異本を譯出したものだらう。なほ、この梵文の內容に就いては、ミトラ博士の "*Nepalese Buddhist Literature.*" Calcutta, 1882(『尼波羅佛敎文學』)に詳細なる記事あり、披いて見るべし。(四九)英譯は、ビール氏が前の漢譯を摘抄せるものである。

以上列擧せるところは、何れも、主として佛傳を目的として記述せる文書である。然るにこの他、本來佛傳を目的とはしないが、なほこれを散說挿叙せる別書が漢譯佛典中に尠くはない。例へば、かの小乘佛敎の根本聖典たる四『阿含』の如き、就いて一々尋求すれば、佛傳研究に資すべき有爲の記事が決して尠くはない。而してこれに對する巴利語『阿含』聖典は、その最も原始の佛を傳へしものとして、特に攻究するの要があらう。なほ巴利語聖典の中には、佛の本生を傳へし「ジャータカ」("*Jātaka*")卽ち「本生譚」なるものがあり、これまた披讀の必要がある。いはゆる「ジャータカ」は、卽ち四『阿含』外の『小集』("*Khuddhaka-nikāya*")中に收まれるもので

あつて、いふまでもなく佛の過去世の行狀を叙せるものである。その叙狀、禽獸の類を巧みに活躍させ、荒誕なる說話の裡に佛の難行苦行の求道策勵の相を寓示せるものであつて、直接には、佛傳研究の上よりも、寧ろ佛敎々義並に印度文學硏究上に非常に重要なる位置を占むるものである。かのカウエル氏等が、この書の英譯を出せしため、佛敎文學硏究に一新時期を劃するに至れるを以て見るも、如何に這般の價値に富めるかを窺知されるであらう。さりながら、これを以て、決して單なる佛敎文學としてのみ見做し去るべきではない。實にこれ、佛陀釋尊の人格を表現せる象徵史說である。もしこの象徵史說の內容と動機とに參徵考慮せむか、一話一譚悉くこれ佛陀人格の光輝であり響聲である。されば、これを以て歷史上に關係なければとて、どうして不問に附し去られようぞ。既に述べしが如く、佛傳の研究には、歷史的釋尊と理想的佛陀との兩面雙々相俟つて眞に完全を期し得らるべきもの、決して一を重視し他を輕視すべきではない。たゞそれ單なる感傷的修飾は注意してこれを甄別すべきのみ。これ實に佛傳研究の意義であり面目である。而して「ジャータカ」は、後者卽ち理想的佛陀を表現せる象徵佛傳と見做すべき以上、その特殊の聲價を有せることを知るべきではないか。學者請ふ、徐に熟讀玩味して佛敎々義の本源に透徹し、あたら浮薄皮見の事相討究に終ることなかれ。「ジャータカ」に關する研究資料左の如し。

五〇 (巴本) *Jātaka.* Ed. by V. Fausböll. 7 vol. London, 1877–'97.

五一 (英譯) *The Jātaka, or stories of the Buddha's former births.* Tr. by various hands, under the editorship of E. B. Cowell. 6 vol. Cambridge, 1895–'907.

五二 (英譯) *Buddhist Birth Stories, or, Jātaka Tales.* Tr. by T. W. Rhys Davids. London, 1880. (*Trübner's Oriental Series.*)

(五〇)巴本卽ち巴利語の原本には、本生譚總じて五百五十に垂むとする多數が收められてゐる。この書は、デムマアクのファウスベール氏(V. Fausböll)が實に二十年の歲月を費し、錫蘭・緬甸等の寫本を校合勘考して、苦心困難の末に刊行されたものであつて、その初卷に覺音の作なる佛傳を序文として添へてある。卽ち'Nidāna-Kathā'これであつて、普通「ジャータカ佛傳」として知られてゐる。こは卽ち、佛陀の降生より祇園精舍の建立に至るまでの史實を敍せるもので、小乘佛傳として要領を得てゐる。(五一)英譯は、全部六卷、カウエル氏指導の下に、幾多の碩學が分擔譯出せるものであつて、卽ち第一卷は一八九五年にチャルマース氏(R. Chalmers)が、第二卷は同年にラウス氏(W. H. D. Rouse)が、第三卷は一八九七年にフランシス氏(H. T. Francis)とネール氏(R. A. Neil)とが、第四卷は一九〇一年にラウス氏が、第五卷は一九〇五年にフランシス氏が、第六卷は一九〇七年にカウエル氏とラウス氏とが擔任して成れるもので

ある。この翻譯は、實に巴利語聖典譯業中の最も主要なる一であつて、而して上述の如く、これによつて佛教文學研究に於ける一新紀元を作れるに徵するも、その及ぼせる影響の大なるほどを想像されるわけである。(五二)英譯は、リス、デヸズ氏 (T. W. Rhys Davids) が巴本(五〇)を全譯せむと企て、僅かにその最初の一部分を譯出せるものである。かく一部分に過ぎないが、かの覺音の序文卽ち「佛傳」は譯出されてゐる。この書は "*Trübner's Oriental Series*"(『ツリュブナーの東洋叢書』)中に收めて刊行された。(因みにオランダのケルン氏は、その著 "*Der Buddhismus.*" 1875〔『佛教』〕中に、この「佛傳」を譯出記載してゐる。)

その他に、また梵語系統に於てもこれを覓め得られる。曰く、

五三 (梵本) *The Jātaka-mālā.* By Ārya-śūra. Ed. by H. Kern. Boston, 1891. (*Harvard Oriental Series.* Vol. I.)

五四 (漢譯) 菩薩本生鬘論 十六卷 聖勇菩薩等造 宋慧詢等譯(暑五)

五五 (英譯) *The Jātaka-mālā or Garland of Birth-stories.* Tr. by J. S. Speyer. London, 1895. (*Sacred Books of the Buddhists* Vol. I.)

(五三)梵本は、聖勇 (Ārya-śūra) の編纂するところと傳へられ、總て三十四の本生譚が擧げられてゐるが、その中の二十一だけは、前の巴本(五〇)に見ゆるところのものである。しかし、こ

の兩者を對比するに、梵本は、文辭に著しき修飾を加味して、宛然叙事詩(Kāvya)に類するの趣きがある。一八九一年、ケルン氏によつて、米國ハーバード大學『東洋叢書』("*Harvard Oriental Series*") 中の初卷に收採して刊行された。(五四)漢譯は、前の梵本を譯せるもので、全部十六卷中最初の四卷は聖勇の撰にかゝる本生譚なれど、爾餘の十二卷はこれが註釋である。(五五)英譯は、前の梵本を、オランダのスパイヤー氏(J. S. Speyer)が明晰なる英文に譯出せるもので、『佛教聖典集』("*Sacred Books of the Buddhists*")中の初卷に收採して刊行された。

以上列擧せる他に、なほ漢譯にあつては、『生經』(五卷、西晋竺法護譯)・『佛說譬喩經』(一卷、唐義淨譯)・『賢愚經』(十三卷、元魏慧覺等譯)・『雜寶藏經』(十卷、元魏吉迦夜共曇曜譯)・『撰集百緣經』(十卷、吳支謙譯)等の諸經に何れもその俤を傳へ、これによつて「ジャータカ」の全面は、ほゞ傳譯されたともいはれ得る。既に一言せる如く、由來「ジャータカ」は、實に印度文學の精華である。されば、古よりして普く流傳弘布されたところであつて、その一班、かのブハルフト古塔の門標や玉垣に殘されたる豐膽なる彫刻によつても知らるべく、一方また『パンチャタントラ』("*Pañcatantra*")・『ヒトーパデーシャ』("*Hitopadeśa*") 等の俗文學書に改作され、印度の修身訓話として流布されしに徵するも、そのほどを推察さるゝところである。かくて第六世紀の中葉、波斯古語(Pahlavi)に轉譯されしより、アラビヤ・ギリシャ・ラテン等の諸語に弘譯され、

がの有名なる『イソップ』("*Æsop*")・『ラ、フォンテーヌ』("*La Fontaine*")等の物語を作り出すに至り、遂に佛教本來の面目は失したれど、實に歐洲諸國の童話・訓話の源泉となつたのである。これ等の系統をたどり來るときは、洵に「ジャータカ」の文學研究も、また好個の對象原野として、學者の耕耘を待つてゐるではないか。敢て篤學の士の着手を促して止まぬ。

次に漢譯小乘律部中の關係文書を擧げよう。

五六　四分律　第三十一―第三十三卷　姚秦佛陀耶舍・竺佛念等共譯(列五)

五七　摩訶僧祇律　第二十三卷　東晉佛陀跋陀羅・法顯共譯(列九)

五八　彌沙塞部和醯五分律　第十五―第十六卷　宋佛陀什・竺道生等共譯(張一・二)

五九　十誦律　第二十一卷　後秦弗若多羅・羅什共譯(張四)

六〇　根本說一切有部毘奈耶雜事　第三十六卷　唐義淨譯(寒二)

六一　善見律毘婆沙　第一卷　蕭齋僧伽跋陀羅譯(寒八)

右の中、(五六)『四分律』は曇無德部(Dharmagupta)所傳の、(五七)『摩訶僧祇律』は大衆部(Mahāsaṃghikāḥ)所傳の、(五八)『彌沙塞部和醯五分律』は彌沙塞部卽ち化地部(Mahīśāsakāḥ)所傳の、(五九)『十誦律』は薩婆多部(Sarvāstivādāḥ)所傳の何れも廣律であつて、これ等の四は、いはゆる四律とて律宗所依の典籍である。(六〇)『根本說一切有部毘奈耶雜事』は新譯の薩婆多律で、前の四

律中の薩婆多律とは異れるもの、而してこれ等の何れにも佛傳の散說されたるところが尠くはない。各々一々の箇處に就いて知るべきである。(六二)『善見律毘婆沙』は、一に「善見論」と稱し、上坐部(Sthāvirāḥ)所傳の律藏を註釋せるものであつて、その原本は、かの南方佛敎の恩人たる覺音の撰せる"*Samanta-pāsādikā*"(『律註』)であつて、かくこの書は巴利語より漢譯されたるところとして特に名高く、また書中佛滅年代を推定すべき一方の典據と認めらるゝ記事ある點よりして普く知られてゐる。而して書中には、啻に佛傳のみならず、また屢々佛敎史實の散說されたるを見る。

以上の他、巴利律藏の『大品』("*Mahāvagga*")などには、極めて基本的の佛傳資料の挿說されたるあり、採つて以て最も信賴すべき典據とされ得る。されば這般の討究として、また篤學の士の勉强を俟たねばなるまい。因みにそれが原本は、オルデンベルヒ氏(H. Oldenberg)により、嚴密なる異本の校合を經、五卷の大冊として刊行されてゐる。卽ち"*The Vinaya-piṭakaṃ*" Ed. by H. Oldenberg. London and Edinburgh, 1873–'83 これであつて、實にこの刊行は、單り巴利語學界を益するのみならず、廣く佛敎學界全體より見て忘るべからざる大事業といふべきである。更にオルデンベルヒ氏とデヸズ氏との協同によつてその大部分の英譯が出され、これが『東方聖書』中に收攝されてゐる。卽ち"*Vinaya Texts.*" Tr. by T.W. Rhys Davids and H.

Oldenberg. Oxford, 1881-'5 ("*Sacred Books of the East*," Vol. XIII, XVII, XX.) これであつて、この英譯出でゝ、學徒容易に巴利律藏の眞意に直參すべく、殊にその初卷の序文の如きは、學界を裨益するところ決して尠くはないのである。またいはゆる「犍度」('Khandhaka')に屬する『大品』及び『小品』は、近く立花俊道氏によつて和譯され（大正九年）、『國譯大藏經』論部中に收攝して刊行されてゐる。取つて容易に通讀するの便宜がある。

右の他、別して釋尊入滅の相狀並にその前後に關して詳述せる文書として、涅槃部の諸經がある。いはゆる涅槃部の諸經とは、大小二乘に亘れる諸種『涅槃經』本であつて、就中大乘經本は佛陀所證の最高的理想を力說し、小乘經本は釋尊入滅の歷史的事實を敍述し、雙々相俟つて佛傳の終結を圓備ならしむる恰好資料たり得るものである。今漢譯中、小乘經本に屬するものを列擧せば、次のやうである。

（六二）遊行經　一卷　後秦佛陀耶舍・竺佛念共譯（昃九）
（六三）佛般泥洹經　二卷　西晉白法祖譯（昃十）
（六四）大般涅槃經　三卷　東晉法顯譯（昃十）
（六五）般泥洹經　二卷　失譯（昃十）
（六六）佛垂般涅槃略說敎誡經　一卷　後秦鳩摩羅什譯（辰十）

右の中、(六二)『遊行經』は、『長阿含』の第二分に屬するものであつて、その所說主として小乘敎意に立脚して大聖入滅の現相を叙してゐる。(六三)『佛般泥洹經』・(六四)『大般涅槃經』・(六五)『般泥洹經』は、大體に於て、何れも『遊行經』と同本異譯と見做すことが出來る。但し、『大般涅槃經』の一は、書中屢々大乘の法門を點出せるよりして、『明藏』にはこれをかの大乘經五大部中に收攝されてゐる。而して、これ等と類を同じうするものとして、巴利聖典の『長阿含』(“*Dīgha Nikāya*”)中の第十六經たる “*Mahāparinibbāna-sutta*” がある。互に對照研究すべきであらう。この巴本は、英國のチルダース氏(R.C.Childers)によつて、一八七八年にロンドンにて刊行され、更にデヸズ氏によつて、一八八一年に英譯され、『東方聖書』第十一卷中に收攝して、またロンドンにて刊行された。(六六)『佛垂般涅槃略說敎誡經』は、通常『遺敎經』の略稱を以て知られ、佛般涅槃に際して、最後に諸弟子を勸誡し給ふ直說として特に名高く、「是我最後之所㆓敎誨㆒」の一語無量の感慨を起さしめる。その內容は、波羅提木叉即ち別解脫戒を本師として、身口七支の邪惡を抑止し、八大人覺たる少欲・知足等の準據すべきを訓誨せるものである。普通小乘阿含部の結經なりといはれてゐるが、台家の所談に從へば大乘涅槃部の結經としてゐる。近時渡邊海旭氏は、馬鳴の『佛所行讃』(三七)の一部の抄譯なりとの新說を唱導した。這般の討究も、またその興味の尠なからざるものがあらう。ともあれ、佛傳の終結を告ぐる經典として、史學・敎

學何れよりするも、玩讀考察に値ひする要書といはねばならぬ。

次に大乘經本に屬するものにもまた數部を見出し得るが、大乘『涅槃經』は、大體に於て小乘『涅槃經』の如き直接の佛傳資料とは見做されない。たゞ唐の若那跋陀羅(Jñānabhadra)譯(會寧と共に)の『大般涅槃經後分』二卷にその參考に供すべき記事尠なからざれば、一言附記して置かう。この『後分』は、大乘『涅槃經』の後を續けるものであつて、また『茶毘分』とも稱し、一部四品餘、佛最後の敎誡より入滅・茶毘並に舍利の分布等に關し、詳細に記述されてゐる。佛傳の終結を究むる資料として、披見するの要があらう。因みにこの經の攝屬に就いて、古來大小その分野の異說があれど、大乘の分野に收附すべきことは、恐く爭はれぬところであらう。

以上ほゞ經典中の佛傳文書を列擧したわけであるが、なほ更に汎く大小の經律に亘つて散說されたる關係記事を討ぬれば、各種多樣、到底數へ得ぬくらゐに至らう。蓋しこれ、世尊の人格の偉大なると共に、滅後の聖賢の敬虔なる崇仰心裡より擊發されし結果と見るべく、かくして燦乎たる佛日の照耀は、實に無限の光芒を放射する所以を感戴せねばならぬ。

以上列擧するところの他、更にまた比較的科學的研究に富める泰西學者のこの種勤勉結果の一端を注目せねばならぬ。然るに凡そ歐人の成果にあつても、各自研究所依の本據とするところがあつて、互にその分野を異にしてゐるから、從つて今の敍說も、それ等大體の本據の別に

よつて記述するが便宜であると思ふ。

先づ南方所傳即ち巴利聖典に本據を求めて述成せる佛傳としては、有名なるオルデンベルヒ氏の著書がある。次の如し。

(六七) (獨文) *Buddha. Sein Leben, seine Lehre, seine Gemeinde.* Von H. Oldenberg. Berlin, 1881.

(六八) (英譯) *Buddha: his life, his doctrine, his order.* Tr. by W. Hoey. London and Edinburgh, 1882.

(六九) (和譯) 佛陀　一卷　三並良譯(明治四十三年刊)

(六七)獨文は即ちォ氏の原本であつて、氏は巴利語佛學者として有名なるもの、乃ち本書は巴利佛典の資料に基き、佛陀の傳記・教義並に教團の發展を叙説せるものであつて、その取材運用實に周到を極め、而も行るに秀麗なる文辭と的確なる理路とを以てして、巧妙なる組織を示してゐる。原始佛教の如何を知らむには、是非とも精讀せねばならぬ要書であらう。由來梵語佛傳と巴利佛傳とは、その色彩に於て著しき相違あり、前者は頗る神秘奇蹟の素質を帶べるに對し、後者は大に史的事實の眞相を傳へてゐる。乃ち烱眼なる泰西學者は、佛傳研究に於ても、這般の事情を洞察して、その態度を誤ることなく、その史的眞相を直示せる巴利佛典を主として依

用することに留意してゐる。巴利佛敎の研究の、著しく西歐の學壇に啓拓進捗されつゝあるは、蓋し如上の理由によるものである。この故を以て本書の價値を推さば、その重視すべきことは多くいふまでもなからう。たゞ本書にあつては、基督敎的偏見の、屢々顯出されたる箇處を認むる傾きあるが遺憾である。さはれ、そは著者として止むを得ざるところといはねばなるまい。初刊以後重版數度、而もその都度屢々新進研究を以て補綴し、以てその學術進捗の面目を示してゐる。因みに、これより先一八七五年、フランスのセナール氏"*Essai sur la légende du Buddha, son caractère et ses origines.*" Paris（『佛古傳論』）を著して佛陀に關する古代傳說を敍說し、そのいはゆる古傳は太陽神話の發展に過ぎざることを唱導したが、オ氏は本書に於て大にこれを論駁して、佛陀の史的實在たることを力說した。兩書を對讀考察するも興味が深からう。（六八）英譯は、獨文原本の初版を譯出せるもの、これまた既に數版を重ねてゐる。（六九）和譯は原本の第四版を譯出せるもので、明晰なる文辭を以て巧みに原意の移植に力めてゐる。學徒の容易に繙讀し得るところとして、こゝに推奬する。

七〇　*A Manual of Buddhism.* By S. Hardy. London and Edinburgh, 1860.

この書（七〇）は、巴利語及びその轉語たるシンハリース（Singhalese）にて傳はれる佛敎記事を

纂譯せるものであつて、佛傳・敎義等の各種方面に亘り、特に敎義の上に重要なる叙說を示されてゐる。撰者ハーデー氏(S. Hardy)は、永らく錫蘭に駐在して巴利學者として名高く、本書の外にも “*Eastern Monachism.*” London and Edinburgh, 1850(『東方寺院組織』)なる名著を出し、これにも佛傳に關する記事がある。

七一 (英文) *Buddhism.* By T. W. Rhys Davids. London and New York, 1899.

七二 (獨譯) *Der Buddhismus.* Tr. von A. Pfungst. Leipzig, 1899.

七三 (和譯) 釋尊の生涯及其敎理 一卷 赤沼智善譯(明治四十四年刊)

(七一)英文原本は一小冊子ではあるが、巴利佛典を資料として、巧みに佛傳・敎義・歷史等を叙說せるもので、文辭平明なれど、的確なる論據を擁し、佛敎研究至便の良書として普くその名聲が傳へられてゐる。その重版實に二十以上に及び、漸次修正を加へられて完備を期せられてゐる。(七二)獨譯はその第十七版を譯出せるもの、他にまたオランダ譯も出てゐる。(七三)和譯はその第二十一版を譯出せるものである。

七四 (英譯) *The Life or Legend of Gaudama, the Buddha of the Burmese.* By P. Bigandet.
2 vol. Rangoon, 1858; 3d. ed. London, 1879.

七五 (和譯) ビガンデー氏緬甸佛傳 一卷 赤沼智善譯(大正三年刊)

（七四）英譯の原本を討ぬるに、もと巴利語を以て佛傳及び敎義を記されたる "*Malalaṅkāra Vatthu*"（『最勝華物語』）といふのがあつて、その著者年代等明かでなく、而も遙に散逸して覓むるに由なきものであつたが、第十八世紀の末葉にその緬甸譯が出され、而してこの緬甸譯より更に譯出されたのが今の英譯である。かく既に巴利原本のなきものゆゑ、この英譯は稍々根本資料の價値を有して、極めて重要視されてゐる。いはゆる緬甸佛傳として知らるゝものこれである。譯者ビガンデー氏（P. Bigandet）は基督敎の宣敎師として久しく緬甸に止在し、以てこの譯出を試みたのである。その章を分つこと二十、卽ち緬甸佛敎の佛傳を精叙し、阿育の奉佛、緬甸の開敎等に亘り、殊に涅槃論に就いて詳細なる記述を試み、かつその何れにも精密なる脚註（フートノート）を加へ、周到なる用意を施されてゐる。所説に多少の誤謬なきにあらねど、緬甸佛敎を知る唯一の參考たることを失はない。（原本は十七章あつて、後の三章はビ氏の補綴にかゝるものである）。（七五）和譯は、ビ氏の二十章中原本の範圍に當る前十七章をその第四版によつて譯出せるものである。この他にまた佛譯も出てゐる。

六　*The Wheel of the Law.* By H. Alabaster. London, 1871.

この（七六）は、主として暹羅資料によつて佛敎を叙說せるもので、通篇三部に分れたる中、第二部に佛傳を叙してゐる。

次に北方所傳、即ち梵語その他同系の聖典に本據を求めて述成せる佛傳として、次の如きがある。

七七 *The Life of the Buddha and the early history of his Order.* By W. W. Rockhill. London, 1884. (*Trübner's Oriental Series.*)

七八 *Eine tibetische Lebensbeschreibung Śākyamuni's.* Von A. Schiefner. St. Petersburg, 1851.

七九 *Notices on the Life of Shakya extracted from the Tibetan authorities.* By A. Csoma, 1839. (*Asiatic Researches XX.*)

右の中、(七七)は西藏々經中より佛傳及び原始佛敎に關する史實を纂譯せるもの、(七八)もまた西藏所傳の佛傳たり。何れもその所依梵本『普曜經』(三二・三三)に同ずといはれてゐる。(七九)は、一八三五年にハンガリー人チョーマ氏 (A. Csoma de Körösi) が、西藏佛敎に關して "*Asiatic Researches*" (『亞細亞討究』)第二十卷に發表せる四大論文中の一であつて、さすがに西藏語學隨一の達者たる氏になれるところとて、西藏佛傳中最も完備せるものといはれてゐる。

八〇 (英文) *The Light of Asia.* By E. Arnold. London, 1879.

八一 (和譯) 大聖釋尊 一卷 中川太郎・濱口惠璋・狩野廣崖共譯 (明治四十一年刊)

(八〇)英文は、韻文を以て佛傳並に敎義を叙説せるもので、記事通俗なれど、その普及の効果に於て殊勳を奏せる名著として、一言紹介して置く。(八一)和譯は、また韻文を以て譯述してゐる。

その他ビール・エドキンス(J. Edkins)等の著書中また佛傳の記事を見るべく、もし辭書類に就かば、『大英百科全書』の'Buddhism'の項下に、廣く佛傳及び敎義に關して詳細なる叙述あり。また佛滅年代を論説せる著書も、二三指摘すべきがある。なほ廣く關係文書を檢尋せば、その資料實に棟に充つるの夥多に及ぶであらう。就中、概して、印度佛敎を傳ふる文書にして、精麁の差はあれ何れも之を叙せるは、正に然るべきところといはねばならぬ。從つてこれ等佛傳の文書以外普通の印度歷史の記事を討ねて、釋尊出世の時代思想、人文知識の一般を了知するいはゆる背景考究の必要あるは、殊更いふまでもないところである。眞の學術研究は、實にこの上に建設さるべきものと謂つべきである。今章餘り多岐に亘るを恐れて、これが叙説を缺くも、專攻の學士必ず這箇の用意を忘れてはならぬ。

以上、佛傳に關する各種の研究資料を列擧して、略叙紹介を試みたわけであるが、終りに臨み、なほ因みに一言附加すべき要項がある。そは卽ち佛陀の傳記が基督敎會中に纔入され、聖ヨサファット(St. Josaphat)の名を以て、十一月二十七日の聖者として、天主敎會の人々によつて禮拜されたることこれである。こは、その源、紀元第八世紀のころ、ダマスコ(Damascus)

の聖ヨハ子（St. John）なるものが希臘語で書いた『バルラアムとヨサフアット』（" *Barlaam and Josaphat* "）なる物語中より出でゝ、中世紀の聖徒崇拜の潮流に從ひ、一時に普く流布さるゝに至つたものである。而してその物語の內容は、明かに佛陀の傳記そのまゝの變形であつて、そは何人も一見して容易に氣付き得るところである。殊にその主人公の名稱 Josaphat（或は Joasaph ともいふ）とは、梵語の Bodhisattva と同音の轉訛であつて、Bodhisattva 卽ち菩提薩埵なれば、この物語は、これ明かに菩薩物語卽ち佛陀物語を傳へたものである。（佛陀のことを菩薩と記せるは、後世の佛傳に常に見るところである）。果して然らば、佛敎の開祖が、何をもつてかく異敎徒間に信仰さるゝが如き珍事を生ずるに至つたのであるか。曰く、今更ことごとしく論ずるまでもないところであるが、凡そ人文思想發達の上には、何等國境の區別もなければ、人種の偏執もない。潮流の相向ふところ、實に放奔不羈として、不斷透浸して止まないのである。從つてこの佛陀物語の如きも、印度に於ける佛敎の思想が、不知不識の間に歐洲に移植され、これがかの中世の聖徒崇拜の渦中に投入して、乃ちこの物語を產み出すに至つたものに他ならない。而してこの物語が忽ちにして羅・佛・伊・西・獨・英等の各國語に譯出され、さてこそその結果、佛敎の開祖が、基督敎中の聖者として、幾多かの敎の信徒に禮拜さるゝやうになつたわけである。實に奇妙の現象と謂つべく、異例の事件と稱せねばならぬ。かのマックス、ミュー

ラー博士が、これを稱して、小説よりも奇なる事實だといつて驚嘆したのも、實に尤もの次第といふべきである。上來屢々述べしが如く、由來佛陀の傳記には、種々の文藝詞藻が加裝され、殊にかの「Jātaka」の如き、佛の本生を叙説せる傳奇小説的(ローマンテイック)の物語さへ出てゐるくらゐである。さりながら、かくの如きは、何れも佛陀の人格の偉大なるよりして産出せしめし結果であつて、特に今の佛陀物語に於ける異教徒間にすら喧傳されたるが如き珍現象を考察せば、最も鮮かに這裡の消息を領得さるべきわけである。乃ち上來屢注記せる如く、そも學術上にあつて、史的考證の態度を緊要とすべきは、もとよりいふまでもないところではあるが、併し至聖大賢の傳記を討ぬる如きにあつては、特に普通衆人のそれとその趣を異にして、よくかゝる詩的物語の方面までも識味玩讀し、(これをそのまゝ歴史上に取入るゝは不可なるも、深くその內容と動機とに考慮を運らして)愈々徹細にその人格の眞髓に到徹してこそ、眞乎その學究を完備ならしむる方法と謂つべきであらう。科學に戻り史實に乖けばとて、徒にこれを排斥して顧みざるが如きは、決して學者の圓備せる用意といふべきではない。見よ、わが『太平記』が國史研究の重要なる資料として敬重され、またかの『西域記』が東洋學研究の不可缺の權威として推稱されつゝあるは、世人の周知するところではないか。彼此もとより該して同談すべきではないが、理論は何れもその揆を一にしてゐるわけである。乃ちこゝに附記して、特に這箇研學の態度を學者

の考案に訴へて止まぬ次第である。なほ近く右の物語の如何なるかを知らむとせば、『六條學報』第百十一號(明治四十四年刊)所載の故上田(敏)博士の「菩薩物語の由來」、及び松本(文)博士の『宗教と學術』(明治四十四年刊)を見るべし。何れも物語の梗概要領が紹介され、並にそれに關する論說の一端が述べられたれば、初心の容易に領得さるゝところである。また『大英百科全書』中の 'Barlaam and Josaphat' の項にもその解說あれば、取つて披見するが便利なるべく、もしそれヨセフ、ヤコブ氏 (Joseph Jacobs) によつて譯刊されし "*Barlaam and Josaphat.*" London, 1896 に就かば、更にその始終の詳細を窺知さるゝであらう。學者の討究を冀ふところである。

第三部　教史篇

第一章　教史の研究

それ學術の研鑽に當つて史的討究の最須最要たることは、今こゝにことゞゝしく言辭を費すの必要もあるまい。實に史的討究は、各々學術をば最も合理的精確なる釋明に導くべき進路であり要鑰である。これによつて事實の因果關係を了知するを得べく、またその發達變遷を詮明するを得るのである。諸種の學術、何れか須く史的討究より開始されぬものがあらうか。いはゆる科學的研究または合理的研究とは、實にこの史的討究を主眼とするに於て始めて命名され得べきものであつて、これ洵に學究の眞面目、眞意義といはねばならぬ。

翻つて思ふ、從來佛教の研究にあつては、何等這箇史的討究を辿るの態度に出でず、只管教理の上のみに文々句々の訓詁解釋を加施するを以て能事終れりとなし、もし史的關係に留意して、些少にても批判意見を加ふる措置を示さむか、一概に之を不遜として冒瀆呼ばゝりをなし、以てその罪過を鳴らすといふ有樣であつた。洵に思はざるの甚だしきものといはねばならぬ。かゝる古陋の偏見に浸染せるがため、事實の矛盾相違等の點に對しては、不合理極まる苦しき

會通をも敢てして、而も自ら何等の省慮をも加へむとせざる有様である。さてこそ字句文々の解説には、猶且數年の日子をも惜まずして投ずと雖、而もその何故に然るやの前後因果關係を案ずることなく、はたまた、その何故にかゝる結果に導けるかの時代思想の影響を稽ふることなく、その所談偏狹にして獨斷、附會にして荒誕、少しも傾聽に値ひするなき結果に終れるは、實に遺憾の至りといはねばならぬ。佛敎の研究が、餘他諸の學術の研究に比して、著しく時代に乖隔し、合理に背反せるは、洵にこの傾向がその根本主因となつて禍せるによるものである。

かくいへば、論者或は說いていはむ、それ佛敎は宗敎である、宗敎たる以上は、心靈の安慰をこそその主眼とすべきであつて、理性の應不は敢て問ふべきところではない、されば、これが合理に遠ざかり時代に乖けばとて、何の介意する要があらう、否、寧ろ理論を以て律し得ずして、時代に伴うて變せざるところに、その眞面目が發揮されるのではないか、要は理性の滿足にあらずして、心靈の安慰にあることを忘れてはならぬと。さりながら、凡そ諸般の事項にして、既にそれが研究對象となれる以上は、何れか理性の滿足を無視することが出來ようか。設し論者のいふが如く、佛敎の研究を以て單なる學解的目的に置かずして、更に修道的目的に置けるものにあつても、決して這箇違理の所談を以て、秀美なる敎義信仰を擁立し得べきものではない。

試みに問ふ、論者がいふところの心靈の安慰を期し得べき信念は、合理の判斷を外にして、果

して正確なる發得を期せらるべきであらうか。恐くは理性の首肯を離れては、何等價値なき迷信・邪信の外獲得されぬであらう。然り、實に正確なる信念は、理性の熔爐を濾過して始めて期得さるべきもの、もし然らざるに於ては、忽ち褪せ易き迷信・邪信に墮し去ることは、一般宗教信念發得の逕路を案じて、比々證明さるるところである。かゝる迷信・邪信の上に、いかでか心靈の安慰を覓められよう。されば宗教の第一義諦も、またこれ正確なる理性の上に望まるべきものなれば、合理的檢討の無視すべからざることは、論議の餘地なしといはねばならぬ。もしそれ學術的研究の結果、その敎義信仰に動搖を來す如きことあらむか、そは既に宗敎的價値を失せるものであつて、吾人の崇敬對象となるべきものではない。最上の宗敎は、學理の討究を俟つて愈々その眞價を發揮すべきものなることを知らねばならぬ。而してわが佛敎が、餘他あらゆる宗教に擢んでゝ幽玄なる哲理を含有することに氣付かば、それによつて、益々その學究に分け入らねばならぬことをも自覺すべきである。もしそれ學解的目的を以て佛敎の研究に向ふものにあつては、學術的研究の至要は、もとより論ずるまでもないであらう。

以上論叙が稍々枝葉に亘れるかの如き嫌ひあれど、要するに佛敎の研鑽に於て學究的態度を採ることの至要なるを高調したのである。而していはゆる史的討究は最も重要なる學究的態度なれば、佛敎の研究に於て、愈々這般の態度に俟たねばならぬことを了知せねばならぬ。思ふ

に西歐の學者は、その學風、さすがに科學的研究に立脚して各種學術を調理せることゝて、佛敎の習學に際しても、最初より先づ以てその史的討究に着手することを忘れなかつた。かの有名なるターナー氏（G. Turnour）譯刊の“*Mahāvaṁsa*”（『大統史』）は一八三七年に出され、またビュルヌーフ氏の『印度佛敎史序論』もその少後即ち一八四五年に出され、何れも今より八十年前後以前の産で、既にこの往時にあつて史的討究の急務の高調されしことを、これによつて想見すべきである。然るにわが國の學界の如きは、僅々三十年以前、村上專精博士などによつてその緊要なることを高調されたのを先驅とせねばならぬといふ幼稚な有樣であつた。吾人は、當時博士が、雜誌『佛敎史林』に據つて、佛敎の史的討究の急務なるを號叫されし文辭を披讀して、その著しく敎囿ける興奮的態度や、かつは如何に世人がこれを以て破天荒事と驚愕するならむかと豫想せるもの〳〵しき態度を追顧して、そゞろ微笑を禁じ得ざるものがある。然り、わが國佛敎學界に史的討究の緊要なるを唱導されしは、然く最近の事實であつたので、既に八十年以前、偷安の夢暖かなる天保舊幕の頃にあつて、早くもこの秀逸なる史的討究の成果を示せる西歐の學界に比べて、洵に慚赧の至りといはねばなるまい。

さりながら、學界の進展は決して昨の比にあらず、今や各種の知識は日々に開發し、佛敎の史的討究の須要、また識者を俟たずして認容されるといふ有樣となつた。洵に機運の致すところ、

實にこれ敎界・學界の至慶であり至幸である。乃ち吾人が、茲に敎史篇の一部を設けて這箇研究の進路を紹介指示せむとする所以も、殊更くだくだしく辯明するまでもなからう。

第二章　敎史の範圍

然るに凡そ敎史を叙せむとするに當つては、須く佛敎傳播の地域を明かにして、その思考の分野を確かむるの要がある。されば、こゝにいはゆる敎史の範圍とは、卽ち佛敎傳播の地域を意味するに他ならない。それ佛敎は、上下三千歲の悠久なる歷史を有するものなれば、これが分布の範圍も決して一地方・一區域のみに止らずして、實に廣汎を極め各邊に亘つてゐる。もしそれ現今流行の方域に就いて見むか、殆んど世界の全土に遍しと謂つべく、また史的變遷の分野に就いて見るも、發生の故地たる印度はもとより、錫蘭・緬甸（Burma）・暹羅・南洋・中亞・西域・支那・西藏・滿蒙・朝鮮・日本等、その範圍決して狹小ではない。而して今は史的分野を語ると勿論なるが、それらの中、先づ生地印度は、佛敎既に滅亡して幾久しく、現今にあつては殆んどその影を沒せる狀態にあれど、近年學者の間に多少信奉の傾向を生じ來り、學解と相俟つて稍々復活の兆を呈せる趣きがある。その他の諸地にあつては、純粹佛敎として、或は餘他の諸敎と混合して流行されてゐる。而して前にも一言せる如く、（八頁參照）、西歐の學者はこれ等傳

播區域の別なるに從つて、地理的に南北兩系に分ち、かつこれを大小二乘に配置せむとしてゐる。即ち錫蘭・緬甸・暹羅及び南洋等は南方佛敎（Southern Buddhism）にして、主として小乘敎の流行を見來りしもの、中亞・西域・支那・西藏・滿蒙・朝鮮・日本等は北方佛敎（Northern Buddhism）にして、主として大乘敎の流行を見來りしものである。就中中亞・西藏・滿蒙等は大乘敎と雖かのシャマン敎（Shamanism）との混合敎となり居れど、爾餘の支那・朝鮮・日本等は純粹の大乘敎にして、特に東方佛敎（Eastern Buddhism）と名くべき趣きを呈してゐる。而して如上の區別は、もし嚴密に論究する時は、種々の矛盾撞着を來して、屢々劃一を缺く憾みはあれど、實際の考究上多大の便宜を蒙ることがあるから、必ずしも排棄すべき說ではない。

さてこれ等の中にあつて、史的變遷の事實に徵し、最も顯著なるものを擧ぐれば、印度・錫蘭・支那・西藏及び日本の諸邦であらう。特に印度・支那・日本を以てその尤とすべきである。古來三國佛敎の名稱の下に、佛敎國の代表に擧示されてゐるのも實に尤もの次第である。これ疑ひもなくその傳播史實の悠久なると、その流布方域の廣大なると、かつはその敎徒信者の熱心なるとに理由する結果といはねばならぬ。されば今本講は、主としてこれらの地域を中心として史實の變遷を辿り、以て敎史討究の弄引に擬托せうと思ふ。

第三章　教史と資料

一　印度

佛弟子　抑々印度佛教の史迹を討ねむには、先づ以て釋尊の傳記よりして開始すべきである。尤もそれより以前に溯つて、印度の思想界の概況を一考し、以て佛陀教說の系統因緣をそれに覓むべき要あるは、いふまでもないことではあるが、しかしそれとて、猶且史實起點を釋尊に置ける上にての叙說の次序である。されば、釋尊の出世を以てその起點とすべきは、正に至當の沙汰といはねばならぬ。但し今本講にあつては、既に佛傳篇を別開して、釋尊の傳記を檢討したるを以て、その部はかれによつて了得せらるべく、よつて次には、卽ち佛弟子の傳記を考察すべき順序となるわけである。その佛弟子とは、佛陀在世、その人格を中心として和合せる僧伽（Saṅgha）の人々を指すのであつて、卽ち舍利弗・目連・迦葉・阿那律（Aniruddha）・須菩提（Subhūti）・富樓那（Pūrṇa）等、いはゆる十大弟子の人々を始め、釋尊教團に攝屬せる諸聖を指すのである。渠等は何れも親しく世尊一代の教化に浴し、大に正法傳弘の使命にたづさはれる聖賢であつて、洵にこれ等聖賢の行爲せる外面的事跡と、その抱懷せる思想的內容と

の檢覈は、教會・教理の各史的詮顯に資するところ甚大なるものあり、乃ちこれ佛教史上の要部に位せるものといはねばならぬ。而してまた特に注意すべきは、これ等の討究が、學解的考證以外、修道的目的に資するところ尠なからざるものあることこれである。何となれば、これ等の人々の生涯を訪ねて、何人も先づその奇異の感に一驚さるゝは、その行跡の大部分が、餘りに俗界味の豐かなる情緒生活に纒繞され、至純なるべき聖賢の生涯も、かくして殆んど惱ましき官能の煩擾鬪爭裡に始終せることであつて、さてこそ學者は、この斷てども盡きせぬ深抜なる人間欲求の暗面の如何に峻烈なるかにおのゝかさるると共に、而もこれ等の聖賢が、克くその至難なる峽瀨を通過操縱して、雄々しくも法を踰えざるの奮鬪を敢てした偉大さに欽仰せざるを得ざるべく、やがてこれ諄々たる佛陀の慈誨と相俟つて、いよ〳〵求道の士に嚴肅なる思念を惹起さしむべく、げに向上の一路は、這裡にゆたけく展開さるゝを認めらるゝからである。然り渠等の多くは、五欲の巷域に溺惑して、漸く人生の無常に目醒めた悲慘なる行者か、爾らずば、最初より謹嚴なる律法の制掟に格從して、あたら感官の不具に安靜を持した沈痛なる道士である。これ等の行跡は、如何に力强く修道の至難を省慮せしめ、緊張自守の道に生きむことを痛感せしむることだらう。これ實に佛弟子傳の檢討者の總てに暗示さるゝ警鐘覺螺でなければならぬ。乃ち吾人は、この修道的意味よりしても、特に這般の討究を學者に促さむとするもので

ある。

參考書　佛弟子を傳叙した參考文書として先づ第一に擧ぐべきは、

一　佛弟子傳　一卷　山邊習學著（大正二年刊）

である。この書は專門的學究の發表ではなけれど、平易なる所明に加ふるに、著者の敬虔なる態度を以て執筆されてゐるため、その謹嚴なる文辭は、佛弟子各々の行跡の事實と相俟つて、讀者を感動せしむるところ多大なるべく、されば、實に如上の修道的目的にもふさはしき恰好の書と謂つべきである。而してその叙說は、一事一項何れも仔細に出所典據を明示せるため、學徒由つて以て專攻の資に供せば、蓋し獲るところ多きを致すことゝ信ずる。邦文唯一の佛弟子傳として推稱するわけである。次に藏經中にあつてその主なるものを覓むれば、

二　增一阿含經　第三卷　東晋瞿曇僧伽提婆譯（昃一）

三　佛本行集經　第三十三卷以下　隋闍那崛多譯（辰八・九）

四　佛五百弟子自說本起經　一卷　西晋竺法護譯（宿六）

等あり。(三)『增一阿含經』に說くところは、第三卷弟子品以下記事極めて簡潔なれど、原始敎團の資料として重んずべく、(三)『佛本行集經』は、既述の如く（七九頁參照）佛陀の行跡に點綴して、

第三十三卷以下佛弟子の記事甚だ詳細を極め、(四)『佛五百弟子自說本起經』は、一小短篇ながら、偈頌を以て諸弟子の本因を叙せるもの、その記事は題號の如く、弟子各々の自說の體裁をなしてゐる。その他廣く長短の記事を探れば、經律中その資料點々甚だ多く、何れも學者の耕耘に俟たざるものとてはない。その一班、かの『佛弟子傳』の卷頭に列するところの文書によつて知るべく、普く有志の討究を促す所以である。

敎史略　印度佛敎史は、その始終を通じて、通常三期又は四期に劃される。尤もそは、史家の意見に隨つて夫々相違あるはいふまでもないところである。而して今こゝに述ぶるところは、唯史實の略抄に過ぎざるまゝ、それ等の所談は擱き、直に史實の叙說に就かねばならぬ。夫れ釋尊の入滅後にあつて、史上に顯はれし主要なる事實は、佛說の編纂卽ち結集の擧行である。蓋し佛陀最後の遺誡たる、滅後、法と律とに依るべきを敎訓せられし金言は、諸々佛弟子の間に深く肝銘されしところであつたにも拘らず、たまたまかの癡人善賢の叫びし暴言は(七頁參照)、いよいよ佛說編纂の急務を警覺せしむるに至り、いはゆる結集合議の實現を促すに及んだのであつて、實に遺敎の正統權威を保持せしむると共に、且は遐代流通を期してなされしものといはねばならぬ。乃ち滅後數月、最初の雨期に於て、上首摩訶迦葉は五百の比丘と共に、

摩揭陀の首都王舍城の附近なる毗婆羅山（Vaibhāra）の麓、七葉巖（Sattapaṇṇi-guha）に於てこの聖業を開始した。當時摩揭陀には、阿闍世王（Ajātaśatru）あり。王は往年、かの『觀無量壽經』に說ける王舍城の悲劇を釀成せる主要人物として名高き人、當時は既に世尊の敎誨に導かれて、只管佛敎の弘布にいそしみ、正法の外護に與つてゐた。仍つてこの結集に際しても、新に數多の會衆を收容すべき一大精舍を建設して、議場に提供し、以て聖業の進捗を容易ならしめた。かくて優波離は律を、阿難は經を誦出し、討議合誦七ヶ月に亘つて全うする事を得たといふ。いはゆる第一回結集これであつて、これを合誦者の數に從へて五百集法といひ、或は結集の場所に約して王舍城結集ともいふ。而してその結集といふも、たゞ佛說を誦出合議すとの意味に止つて、現今のいはゆる記述編纂の程度に亘らなかつた事は、既に述べし所の樣である。

さてこの結集の際には、もとより幾多の僧徒の集合せることゝて、多少意見の相違を釀せる結果を見たことはいふまでもないところであるが、その後歲月の經過につれ、その中の自由思想を抱けるものが漸次に增加し來り、これ等は、保守思想を守れるものとの間に、自然意見の衝突を來すに至り、いはゆる積極・消極二派の爭ひを以て、終に第二回結集の擧行を見るに至つた。滅後約一百年（或は一百十年との說あり）にして、吠舍釐に於ける弗栗恃族（Skt. Vṛji; P. Vajji）の比丘等、主として戒律の解釋に關し、いはゆる十事の異說を唱へたから、その許否

如何に就いて七百の比丘相集まつて討議されたるもの、即ちこれである。その動機かく戒律の十事の許否如何にあつたとはいへ、そは唯表面の理由に他ならずして、更にその奥底に、寛嚴二樣の思想的相違を醞釀せしに由來せることはいふまでもない。而してその結果は保守派の勝利に歸し、渠等は十事を以て非法として斥け、益々峻嚴なる操守にその面目を保持せうとした。茲に於てか自由派は、止むなく別に有緣の地を覓めて自說を擁立することゝなり、かくして保守と進取と——卽ち後世にいはゆる上座（Sthāviraḥ）と大衆（Mahāsaṅghikaḥ）との分裂の萠芽をこゝに見るに至つたのである。而してこの時の結集は、また合議者の數に從へて七百集法といはれてゐる。なほこれは、かく主として戒律の解釋に就いての會合ではあつたが、更にまた廣く敎理上の異同にも關係してゐたと推察されるのである。

さて敎團分裂の動機をかく十事非法の紛諍に置くは、南方所傳卽ち『島史』・『大統史』等の所說に從つて記したのであるが、北方所傳にあつては、これを以て摩訶提婆（Mahādeva）卽ち大天の五事の新說に基すと傳へられてゐる。世友（Vasumitra）の『異部宗輪論』に述ぶるところ卽ちこれであつて、これによれば、滅後百餘年、有名なる阿育王時代に、大天が五事の新說を唱へ、これに贊成せる一派を大衆部と名け、これに反對せる一派を上座部と名く。上座部は大天の新說を目して、妄語と罵り非佛敎と斥け、大衆部はこれを擁して、正說と立て眞佛敎と唱へ、

互に強硬なる拮抗を續けし結果、上座部は終に北移して迦濕彌羅（Kaśmira）に去つたといふことである。而してこれ等南北兩傳の是非如何は姑く別項に讓るとするも、ともあれ、これ等の事情よりして敎團分裂の旗旛が愈々鮮明に趣いたことは、爭はれぬところである。

かくて根本の分裂始まるや、爾來思想の發達は、各自いよいよその所見を異にして、これ等の雙幹より更に幾多の枝條を分派し、大約三百年の間に終に二十部の多岐に亘るに抵つた。『智度論』第六十三に五百部に分裂したとあるが如きは、もとよりその多數を形容せる辭に過ぎざれど、如何にその異說立派の多かつたかを想像するに難くはない。就中大衆部に四回八裂（一說・說出世・鷄胤・多聞・說假・制多山・西山住・北山住の八部）あり、上座部に七回十裂（薩婆多・犢子・法上・賢胄・正量・密林山・化地・法藏・飲光・經量の十部）あり、これに根本二部を加へて、いはゆる小乘二十部といふ。而してこれ等各部の內容を檢すれば、こは單に分裂といはむよりも、寧ろ小乘思想より大乘思想に趣ける過渡の狀態として認むるの適當なるを覺ゆる。即ちこれを以て大小兩乘の楔子と見ねばならぬのである。洵に原始佛敎は、小乘敎義に於てその俤を窺ふべきはいふまでもなく、大乘敎義の如きは、實にこれ等の過程よりして後世に發達せるものなることを知らるゝのである。

さて滅後二百年を經て、紀元前第三世紀の末葉、阿育王出で、佛敎の發展著しき進捗を見るに

至つた。王は有名なる正法保護の明君として、かの基督教に於けるコンスタンチン大帝（Constantin）に比せらるゝところであるが、その初めは殘忍の資を以て、主として殺伐の擧行を敢てし、殊に南方羯餕伽（Kaliṅga）の征討に方つては、悲慘顫慄の結果を示した。茲に於てか王の心は大に動き、悔悟痛惜の情甚だしく、爾來全く干戈を絶ち、只管慈悲忍辱を示して、以て正法の護持弘布に奉仕せむと誓つた。さればその印度統一の威勢を以て、普く佛教を國內・國外に流通せしめ、從來、中印恒河の邊に跼蹐して、いはゆる地方的佛教たるに止れるを擁布し、その全印はもとより、廣く四隣の異域に弘傳して、まさに世界的宗教に擴張し、またいはゆる第三回結集を擧行して正法の紛亂を防ぎ、更に普く有德の教使を四邊に派遣して、大擧無上の法雨を灑澤し、布令・造寺・慈悲・祭政、一として庶民の欽仰に沿はざるなく、洵に達磨阿育（Dharmāśoka）の名聲千載の下に輝くの偉業と德行とを實現した。就中第三回結集は、首都波吒釐子城（Pāṭaliputra）卽ち華氏城の鷄園寺（Kukkuṭārāma）に於て目犍連子帝須（Maudgalyāyaniputra Tissa）を上首とし、衆僧一千を選び、九ヶ月に亘つて行はれたもので、合議者の數に從へて一千集法といひ、また結集の場所に就いて華氏城結集ともいふ。而して四邊に於ける開教は、實にこの結集の直後に行はれたものであつて、錫蘭・南海・中亞・希・埃等に抵るまで、廣域の法澤は、偏にこれ王の偉業に俟つところである。

かくの如く阿育王によつて一度世界的宗教となれる佛教は、その後約四百年間、迦膩色迦王(Kaniṣka) 出世の頃までには、國外のアフガン (Afghanistan)・中亞方面に於て健全なる地盤を捷ち得、更にこれより東漸して、支那の大地に法雨を灑ぐべき途路を拓き、益々傳播の地域を廣むるに抵つたのである。さりながら國內に於ては、障緣害事頻りに臻り、一時佛教の暗黑時代を見るべき止むなきの狀態に陷つた。然る所以は、滅後三百餘年卽ち紀元前第二世紀の末葉、富奢蜜多羅 (Puṣyamitra) 孔雀王朝 (Maurya) を亡ぼして簒立し、いはゆるシュンガ王朝(Śuṅga)を創むるや、偏に婆羅門教を崇拜して佛教に迫害を加へ、堂塔を破棄し名僧を殺戮したと傳へらる、またその後の王朝にあつても、引續き佛教に好意を示すことがなかつた結果、乃ち佛教は中印に於て衰頽の悲運に趣くやうになつたのである。されどこれ等迫害を受けし避難者の趣けるところ、主として北印にあつては、却て佛教大に隆盛を來し、特に當時北印奢揭羅 (Śāgala) に滯住せる希臘王彌蘭 (*Skt.* Milindra, *Gr.* Menandros) は、長老那先 (Nāgasena) 卽ち龍軍の教化によつて佛教に歸依し、大に正法護持の美擧を示した。兩者が佛教々義特に無我に就いて問答往復せる書をば、巴利語にて "*Milinda-pañha*" (『彌蘭陀問』)といひ、漢譯にて『那先比丘經』と稱へ、世人周知の有名なる對話篇である。而して後世佛教美術の代表に指示さるゝいはゆる健駄羅美術が、主として當時に大成されしことも、洵に佛教興隆の程を思はせるもので

ある。啻に健駄羅美術のみならず、中印に於けるサーンチやブハルフト古塔の門垣に刻されたる豐膽なる彫刻に就いて案ずるも、その時代にもとより多少の前後はあれど、久しく中印が萎微不振に沈みきつてゐたのでないことが想像されるわけである。

さて、かく中印にあつても、佛敎が一時の悲運より遁れて、漸く復興の萠兆に趣けることゝて、勢ひ敎界内に異說反見を樹つるもの多く出で來り、卽ち玆に幾多の分派を見るに至つた。蓋しこれ敎法隆盛の反影と見るべきで、敎團の膨脹は、その必然の結果として反見異說を釀するに至ることは、今更いふまでもないところである。かくして迦膩色迦王の時代頃には、部派十八を算するに至り、これに根本の二部を加へ、いはゆる小乘二十部の生じたことは、既に一言せる通りである。

迦膩色迦王は支那西邊に住せし月支種族の後裔であつて、滅後六百年、紀元第二世紀の初めに卽位し、いはゆる貴霜王朝（Kuṣaṇa）なる一大帝國に君臨したのである。その事跡漠然として明示し難きは遺憾の至りなれど、佛敎史上第二の阿育大帝を以て目せらるゝ正法保護の恩人である。王の事跡中特に有名なるは、その配下に於ていはゆる第四回結集の擧行されたことである。卽ち王佛門に入つてより脇比丘（Pārśva）の指導に從ひ、世友以下五百の碩學を迦濕彌羅に會せしめ、十有二年、具に三藏の纂輯を試み、特にその註釋を編したといふ。その一部

と稱せらるゝ論藏中の『毘婆沙論』は、新舊の兩譯現に藏中にあつて流布されてゐる。而して教說の記錄書寫を見たるは、實にこの時を以て最初とすと傳へられ、またこの時に大乘經典の結集が行はれたとも傳へられてゐる。更に附記すべきは、有名なる文豪馬鳴がこの結集に參加したといふことであるが、そは恐く當を得た說ではなからう。いはゆる馬鳴の出世は、如何にするも王の少後と考へられ、從つてこの擧に參ずべくもあらぬと認めらるゝからである。而して世にいはゆる『起信論』の著者が、この馬鳴でないことも、近時の研究によつて、普く喧傳さるゝところである。

滅後六百餘年、即ち紀元第二世紀の後半、龍樹（Nāgārjuna）南印に出でゝ大に大乘空教の法門を唱導した。蓋し大乘教義の顯はに世に出でしは、當時を以て嚆矢とすべく、もとより多少の思想は、從來の小乘教義中にも含有されたれど、まさしく表面の發達は、實に渠龍樹を以て目さるべきである。而して渠の學說諸法實相論は、主として大乘の空門に屬すべきもので、いはゆる中觀宗の名の下に、後世の瑜伽宗と對比して、雙々印度佛教の二大潮流となつたことは、教史を貫通しての一大偉觀といはねばならぬ。資弟提婆（Deva）は、渠を繼いでこの說を高唱した偉人である。なほ、この前後、小乘教にあつても著しき發達あり、主として迦濕彌羅・健馱羅等の北印に行はれ、就中、有部には優波扇多（Upaśānta）・達磨多羅（Dharmatrata）等

の學匠あり、經部には鳩摩羅邏多（Kumāralabdha）・室利邏多（Śrīlabdha）等の巨器あり、更に『成實論』の著者訶梨跋摩（Harivarman）の出世も、また當時を距ること遠くはなからう。惜いかな、これ等に關する文献極めて稀少、加ふるに訛傳重々してその眞相甚だ明瞭を缺くものがある。而してこの間、北印・アフガン等の地方より東方支那に趣いて傳敎翻譯に從事するもの續々輩出し、かの地に於いて、大に佛敎促進の助緣となれる點に徵するに、本土に於ける佛敎盛榮の程も推察さるゝわけである。蓋しこれ、先の迦膩色迦大王の正法發展の繼續餘勢と見るべきである。

滅後九百年より一千年に至る間、卽ち紀元第五世紀中に無著（Asaṅga）出世し、北印健馱羅より中印阿踰陀（Ayodhyā）に來りて大に瑜伽大乘を唱ふ。實弟世親（Vasubaudhu）また北地にあつて敎界の覇者として名聲を馳せた。世親初め小乘敎を鼓吹し、『倶舍論』はその當時の力作の代表であつたが、無著の慫慂によつて大乘に歸入し、力めて摩訶衍の興隆に奉仕した。その外護者として、當時の主權卽ち笈多王朝（Gupta）の超日（Vikramāditya）及び新日（Bālāditya）二王のありしことを忘れてはならぬ。無著・世親の學說を比較するに、もとより幾分の逕庭相違するところなきにあらねど、何れも大乘の有門たる賴耶緣起論を主張するにあつて、特に無著はその創唱者にして、世親はこれが紹述者たるの趣きがある。對法論宗實に茲に於てか勃興し、

かの中觀空宗との雙脈流れを分つに至つたのである。當時はまた、小乘有部に於ても多少の活氣あり、悟入（Skandhila）・衆賢（Saṅghabhadra）等、中に於て顯はる。その世親との挑論の始末は普く世人の知れるところである。なほ當時にあつて特に注意せざるべからざるは、大乘佛說・非佛說問題が大に喧噪を極めしことこれである。無著の如きは、實に大乘佛說擁護の第一人者であつた。而してこの時代には、前代の佛敎支那に入つて、乃ち毘曇・成實・三論等の諸宗が起つたのである。後節支那の敎史の條下を參照して知るべし。

滅後一千年以後、卽ち紀元第六世紀以後にあつては、印度佛敎史中、敎學の最も發展を極めし時代を現出し、かの中觀系統にあつては淸辯（Bhavaviveka）及びその一派あり、瑜伽系統にあつては、護法（Dharmapāla）並にその一門あり、何れも稀代の學匠として、當時敎界の首腦の位置にあつた。特に護法は、かの唯識十大論師の隨一で、後世支那に興れる法相宗は、全く渠の主張を相承せるものである。いはゆる十大論師とは世親の『唯識論』を解說せる代表的十家を指すのであつて、渠以外、親勝（Bandhuśrī）・火辯（Citrabhāṇa）・安慧（Sthiramati）・難陀（Nanda）等、何れも傳法の巨器たらざるはない。なほ淸辯の資に智光（Jñānaprabha）あり、護法の資に戒賢（Śīlabhadra）あり、互に中觀・瑜伽の敎義に立つて下らず。特に戒賢の統率せる那爛陀學園（Nālanda）は、當時敎界の淵叢、學壇の中樞として前後その比なく、洵に學解の百

華燎亂として薫郁し、瑜伽の盛行正にその頂點に達せるの觀があつた。支那の玄奘がこの地に旅行して該學園に投じ、學成りて、その教系を故國に布けることも學徒の記憶に親しい。なほこの期の初めにあつて、瑜伽系統の陳那（Dignāga）出で、幽靜なるアジャンター（Ajaṇṭā）の窟院に禪思を凝し、佛教論理即ち因明學說（Hetuvidyā）の上に一新紀元を劃せることも注意せねばならぬところである。而してこの時代の初頃には、前代の無著・世親の教學盛に東方に流傳され、乃ち地論・攝論等の諸宗が起つたのである。

滅後一千百年、即ち紀元第七世紀の初頭に即位せる戒日王朝（Śilāditya）の戒日は、大に佛教を保護し、上に述べしが如く、當時たま〳〵多くの大乘學匠輩出せることゝて、普く大乘教義の隆盛を見、なほ小乘佛教にあつても、古來の地盤を保有して衰へず、兩教の流布は依然として行はれた。而して當時にあつて特に注意すべきは、即ち秘密佛教の流行であつて、中印の善無畏（Śubhakrasiṁha）南印の金剛智（Vajrabodhi）及び錫蘭の不空（Amogha）等、相前後して、旺んにこれを支那に傳弘した。蓋し當時に於ける秘密佛教の流行たるや、これ佛教が印度教（Hinduism）と朱紫混合せるよりして來せる結果であつて、必ずしも佛教盛榮の證左といふべきではない。果然、滅後一千二百年、即ち紀元第八世紀以後に至るや、佛教次第に衰頽に趣き、殊に中印にその勢力を失してより、南北の各地に幾分餘命を存したれど、特に取りた

てゝ稱すべきものなく、かくして滅後一千七百年、即ち紀元第十三世紀の頃までには、印度の佛教全くその地を拂ふに至つたのである。惟ふに、かく衰滅を來せる原因は、蓋し各種の事情併起の結果たるはいふまでもないところであるが、就中印度教の勃興と異民族の迫害とは、蓋しその最も大なる原因といはねばならぬ。前者にあつては、かの商羯羅（Śaṅkara）の如き印度教復興の偉才あつて、佛教の精粹を偷んで以て自法を莊嚴し、いはゆる敵刀を以て敵頭を截つの態度に出でゝ、著しく佛教衰頽の促進を來し、後者にあつては、即ち回教徒の辛辣なる侵入によつて、過酷なる迫害を佛教に加へし結果、さてこそ正法滅亡の慘事を招くに抵つたのである。その他、內外の事情につれ、なほ幾多の原因を數ふべきも、今は一々これを擧げず、學者宜しく後の專攻に俟つべし。かくして本土の佛教全くその面影を拂ひ、却つて四隣にその面目の維持さるゝ狀態となり、今や內地にあつては、外來僅少の信徒の處々に散在するあるのみ。あはれ佛陀伽耶の高塔、中天を壘摩するの壯觀を呈せざるも、大聖出世の跡、正法發達の史は、國內無關の悲運を辿り、只々絕品たるの至價を示せども、アジャンター寶窟の美術、世界の聖地巡禮（ピルグリム）の、跡を偲ぶよすがとなれるに過ぎないのである。

研究要 以上略して印度佛教變遷の一端を叙したのであるが、もとより略中の略として、た

ゝ初學入門の弄引に擬せるのみ。若しそれ進んで專門的研究に着手するに抵つては、異說反見續出累起、洵にその是非の至難に茫洋の嘆を洩すの餘儀なきに至るであらう。蓋し曩にも一言せる如く(五六頁參照)、歷史の暗黑、文献の缺乏を以て特徵とせる印度に於ける史的現象を討査するにあれば、その困難ももとより當然の次第であつて、正に這般難局の研究に正面する學者の、豫め覺悟を以て向進すべきところである。さらば左に、例によつてその異說の喧しき要項を摘記し、併せて現時學壇の有力なる唱說の一班をも紹介して、以て學者の注意を惹くの一助に供せう。

それ印度佛敎史の劈頭先づ以て異說の提出さるゝものは、即ち第一囘結集の事實に關してゞある。南傳にあつては、經・律二藏の誦出を傳ふるに止まれど、北傳にあつては、更に論藏の編纂ありしことを記し、なほまた窟內の結集に參加するを許されなかつた窟外の大衆が、別に經・律・論・雜集・禁呪の五藏を結集したとも傳へられてゐる。その是非如何は、もとより研究の結果に俟つべきところではあるが、試みにその當否如何を略敍せむか、由來論藏は、佛敎の哲學思辯の一面に立てるものにして、滅後聖賢の述作に俟つべきもの、然るを佛說の編纂に際して、同じくこれを誦出すとは到底考へ得べからざるところであらう。況むやその誦出者も明示すべからざるに於てをや。また窟外の結集に就いても、その史實を推繫するに極めて模糊たり。矧む

や雜集・禁呪等諸藏の編纂の如きも、もとより容易に信じ得べきところではない。尤も迦葉一派に慊らざる衆徒等互に群集合議して、別個の意見を交換せる如き事情はなきにしもあらず、或はそれ等の事情より、界外結集說の流傳を見るに至つたかも知れねど、由つて以て、後代の上座・大衆の系統素地をこれに覔めむとするが如きは、決して當を得たる見界とはいひ難からう。なほ因みに一言すべきは、オルデンベルヒやスミスの諸氏が、この第一回結集を以て單なる發明に過ぎずとして否定せむとせることである。(ref. Oldenberg: "*The Vinaya-pitakam*" Vol. I, Introd. 25-28; and "*J. R. A. S.*" 1901, p. 842.)。さりながら、そは餘りに皮相の見解といはねばなるまい。學者宜しくこれを質すべし。なほ以上の他、この結集に際して、會議合誦の場所を考究し、所集敎法の敎格を査定し、更に當時の語學の如何を檢覈する等、一々の詳細に就かむか、問題の伏在するところ重ねて多きを加ふ。今その要項の一端を指示するのみ。

次の問題は第二回結集に關してゞある。この結集は、既に一言せる如く、主として戒律に就いての討議であつたが、果してそれ以外何等敎義に就いての論談がなかつたであらうか、恐らくは然らず、その戒律を標榜するが如きは、たゞその討議が主項をなしてゐたゝめであつて、もとより敎義に關與せる問題の含まれてゐたものと見ねばならぬ。また討議に敗れし進取黨の一派が、更に別に結集せりとの傳說も、大に考案すべき問題であつて、これまた早計を下すべ

きではない。而して敎團の根本分裂がこの結集に起點を置くや否やに就いての南北兩傳は、その異說の最も主なるものなれば、更に一言を贅するところがなければならぬ。

既に記せるが如く（一一〇頁參照）、南傳にあつては、根本の分裂を、滅後百年吠舍釐會議の十事新說に置かむとし、北傳にあつては、滅後百餘年大天の五事新說に立てむとする。惟ふに敎團分裂の萠兆は、滅後程なく現はれしものなるべく、卽ちかの第一回結集の際にあつても、陰に陽にその傾向の認められたることゝ思はれる。而して十事の新說にあれ五事の新說にあれ、それ等の紛擾はたまたま分裂の事實を現出せしめし助緣となつたと見做すべきである。たゞし五事新說の如きは、主として敎理及び聖果に關し、大衆部成立以後その敎義の整頓されし上にて始めて確定せるものであつて、分裂の當初に既存せしものとは認めることが出來ぬ。されば分裂の根本助緣は南傳の十事新說に置くの合理なりと考へらるゝのである。なほ北傳によれば、大天に二人說を立て、いはゆる舶主兒の大天と賊住の大天とで、滅後第二世紀・第三世紀と世を隔てゝ出世したと異說されてゐる。また南傳によれば、阿育王に二人說を立て、いはゆる黑阿育（Kālāśoka）と法阿育（Dharmāśoka）とで、同じく滅後第二世紀・第三世紀と世を隔てゝ出世したと記錄されてゐる。而して北傳にいはゆる五事新說の大天は、舶主兒のそれであつて、その年代を主として阿育王と同時に置かむとするのであるが、そのいはゆる阿育王とは、南傳

の法阿育を指せるやうである。然らば兩大天・兩阿育を夫々配當對照せしめ、これによつて相互の年代を査定せしめ得べきが如きも、事實は第一大天(船主兒)が第二阿育(法阿育)に配せらるゝを以て、まさしく前後時代の錯誤を招く結果に陷るといはねばならぬ。而も更に怪訝なるは、南傳は兩阿育を傳へて兩大天をいはず、北傳は兩大天を傳へて兩阿育をいはざることである。これ等の事情よりして推考するに、北傳が阿育王を以て佛滅第二世紀の出世とせるは、年代の上に百年の繰上げあり、また南傳が兩阿育を傳ふるは、實は同一人者なれど、その事跡、前後の時代によつて善惡の相違ありしため、黑(惡)・法(善)二名を附せしものが、後世別人の如く傳へられ、更に年代の相違までも釀成されしことゝ思はれる。從つてその同時代の大天は賊住のそれで、かの船主兒のそれの如きは、これその反影と見做すの他はない。何となれば、船主兒出世といふ滅後一百年代には、いはゆる五事新說の如き大衆部敎義の發達せる組織を見らるべくもないからである。學者須くこれ等の討究を盡して可なり。

次の問題は第三回結集の有無に就いてゞあつて、由來この結集たる、たゞ南傳にのみ記して、北傳には何れにあつても述べず。これがため、多少學者の意見も區々たるものあれど、單に北傳になければとて、それのみを以て否定せむとするは、恐らく當を得た說ではなからう。況むやそのこれに至る過程とも見るべき記述が、北傳にあつても既存するに於てをやである。

次に迦膩色迦王出世の年代に就いて異說多きはさることながら、更にいはゆる第四回結集に就いても、各種の問題が提出されてゐる。曰く結集の內容、曰く參加の人々、曰く經典の書寫等、曩に一言記し置いたやうである。而して馬鳴に就いての問題――卽ち主として『起信論』作者問題こそは、印度佛敎史上屈指の興味ある研究として、今なほ學者の討究を迎へつゝあるもの、なほこれに附隨せる大乘經典及び敎理の出現も、また別して重要なる調査事項に屬してゐる。

その後の史實に就いては、一事一件の上に於てはそれ〴〵多少の異說あることもとよりのところなれど、重大なる問題として殘存されたるものとてはない。但し、降つて滅後一千年以後いはゆる瑜伽・中觀の二系相對立し、護法・淸辯の論爭、戒賢・智光の拮抗として、愕々の討議を敢てしたと傳へらるゝ事項は、大に注目すべきところである。特に後者卽ち戒賢・智光に就いては、佛陀所說の敎格に就いて優劣淺深を按配し、後代支那佛敎の一大特色たる判敎の先驅をなしたと稱されてゐる。但し、傳說の是非如何は、もとより研究の結果に俟つべきもので、決してそのまゝ速斷すべからざることは、旣に屢々注意せるところ、稿者また這般の問題に就いて、曾て私見を學界に訴へしことあり。ともれ學徒の耕耘を要する原野は、洵に前途茫漠たる狀態にありといはねばならぬ。

以上、問題の存するところを略示して、以て初心修習の弄引に供したれば、以下、研究の文献資料を列擧して、學者選擇の一助に充てよう。

參考書 先づ初めにわが國現時のこの種の文献資料を列擧せば、次の如き諸書がある。

一　三國佛教略史　上卷　島地嘿雷・生田（後に織田）得能合著（明治二十三年刊）
二　佛教小史　二卷　藤井宣正著（明治二十七年刊）
三　印度宗教史考　一卷　姉崎正治著（明治三十一年刊）
四　大乘佛教史論　一卷　前田慧雲著（明治三十六年刊）
五　小乘佛教史論　一卷　舟橋水哉著（明治三十七年刊）
六　印度佛教史綱　一卷　境野哲著（明治三十八年刊）
七　印度支那佛教史要　一卷　境野哲著（明治三十九年刊）
八　印度支那佛教通史　一卷　伊藤義賢著（明治四十三年刊）
九　印度佛教發達史　一卷　舟橋水哉稿（大正三年刊）
一〇　印度支那佛教小史　一卷　境野哲著（大正四年刊）
一一　印度佛教史　一卷　堀謙德著（大正四年刊）

二三　印度佛教史　一卷　馬田行啓著（大正六年刊）

二三　印度の佛教　一卷　荻原雲來著（大正六年刊）

二四　印度佛教思想史　一卷　橘惠勝著（大正八年刊）

右の中、（二）『三國佛教略史』は、全部三卷あつて、題號の如く、印度・支那・日本三國の佛教教會史實を略述せるものであつて、實に邦文佛教史書の嚆矢ともいふべく、從來、僅に凝然の『三國佛法傳通緣起』等を唯一の資料とせるに對して、とにかく、編年體に敍說して、いはゆる體を具へし點に於て、特殊の意義を見出し得るのである。敍說主として傳承的の範圍を脫し得ざる憾みあれど、そは蓋し當時にあつて止むを得ざるところであらう。（三）『佛教小史』は、曩に紹介せる如く（六二頁參照）、純然たる學究的立場に居して編年體の組織を示せるもの、而してその記事幾多の東西文献を參酌して、博引旁證、穿微析細、包含せる資料の夥多なること、高く群書に擢んで、げに邦文教史の唯一權威として、前後にその比を絕してゐる。著者は夙に學界の先覺として令名を馳せたるの人、當時にあつて今日なほ企圖の困難なる斯業を克成せし眞摯なる崇學的努力の程は、洵に欽仰に値ひするものありといはねばならぬ。後代續出せし幾多の類書は、何れも多少本書にその資料・暗示を仰がざるなく、この點に於て本書は、現時の學壇より見て、設ひ過謬・陳腐に亘らむとする箇處を生ぜりとするも、決してその紀念を薄らぐべからざ

るものであらう。たゞ惜むらくは記事龍樹・提婆に抵つて盡き、識藻一度逝いて復回らず、かくて未完の雄篇として永久に取殘されたることこれである。(三)『印度宗教史考』は題號の如く、廣く印度の哲學・宗教の發達に就いての史實と年代とを明定せむと試みたものであつて、近代の科學的研究に立脚して、燃犀なる批判的態度を示せるもの、所論に多少異議を釀すべきところなきにあらねど、眞摯なる發表として、大に啓蒙されるところがある。後半に佛教史實を論叙せるところ、卽ち今の所要にかゝる。(四)『大乘佛教史論』は、大乘佛教の教理發達の史的考證を試みしものであつて、著者がその該博なる識見を以て、經論を縱横に調理剖檢せるところ、洵に容易なる追蹤を許さぬものがある。苟くも教理發達の一端に着目するものにして、誰か本書を不問に附せられよう。洵に學界を裨益するところ極めて多き良書といはねばならぬ。但し、本書にあつては、秘密教・淨土教の問題は取扱はれて居らぬ。それは、著書が本書執筆當時、それ等の問題に就いて、別書の刊行を期せしためであるらしい。本書は、久しく絕版して、學徒翹望の的たりしところ、近時更に裝を新にして復刊さるゝに至つた。(五)『小乘佛教史論』は、前の『大乘佛教史論』が專ら大乘教の教理史たるに對して、主として小乘教に就いて同一企圖を試みしものであるが、その叙說たゞ普通の教會史を辿るに止まつて、教理の檢討にわけ入らざるは、遺憾の至りといふべきである。さはれ、小乘教史の概要を一見するに於て便宜であらう。(六)『印

度佛教史綱』は、もと雜誌『新佛教』に「通俗印度佛教梗概」と題して掲載されしものゝ增訂單行であつて、教會と教義との兩面に亘り、平易に大綱を摘示してゐる。(七)『印度支那佛教史要』・(八)『印度支那佛教通史』・(一〇)『印度支那佛教小史』・(一一)『印度佛教史』の四者は、主として學徒の教科用書として出されしもの、就中(七)は、前の(六)とはその趣きを異にして、主として教會史の範圍に止まりたれど、記事大に要領を得たり。(一〇)は、先の(七)を更に平易に叙せるものである。(一一)は、その叙說首尾一貫して繁簡取捨の宜しきを得、殊に每章の下、一々參考文書を附してその典據を確示し、更に進んで專門研究に入るの資に擬せるところ、洵に著者の周到なる用意のほどを感謝すべきである。蓋し類書中の出色の一に數ふべきであらう。(九)『印度佛教發達史』は、單に印度佛教史上の事實を羅列せるもので、未定稿の刊行である。(一二)『印度佛教史』は、教史としては、類書中比較的詳細なる內容を有せるもので、その記事通俗、未だ專門の研究にわけ入らざれど、終始一貫して繁簡の偏頗なく、一讀よくその基礎知識を獲得せしめ得る。蓋しまた初心必讀の要書といはねばなるまい。(一三)『印度の佛教』は、もと佛教の講義錄誌上に掲載されしものゝ單行であつて、有繫に著者の深遠なる言語學的知識を以て、幾多の材料を取捨按配して記述され、小冊中、その所含內容類書に勝るものがある。但し、後段筆路著しく窘束され、記事極めて簡單に終れるは、この種定限ある分量の性質上、止むを得ざるところとはいへ、大に

遺憾とせねばならぬ。(一四)『印度佛教思想史』は、題號の如く印度佛教の思想發達を討究せむとし、主として藏經中に幾多の資料を覓めて記述せる大著なれど、論叙紛糾錯雜して甚だその要領を得るに難く、大に著者の眞意を捕捉しかぬる憾みあるは、また殘念の至りといはねばならぬ。

なほ以上の外に、前佛教大學長薗田宗惠氏の起稿にかゝる『印度佛教史要』といふがある。これは曾て講義錄誌上に掲載され、一往完結を告げてはゐるが、纏まつて刊行されてはをらぬ。されば、如上の同一類書として更に一部を加增すべきわけである。

次に右の如き一貫せる印度佛教通史ではないが、同一部類にして、而も特殊の記事を示せるものを列擧せば、左の諸書がある。

一五　佛典結集　一卷　松本文三郎著(明治三十六年刊)
一六　淨土教發達史論　一卷　橋惠勝著(明治三十六年刊)
一七　佛教年代考　一卷　小野玄妙著(明治三十八年刊)
一八　馬鳴菩薩論　一卷　常盤大定著(明治三十八年刊)
一九　原始佛教史　一卷　舟橋水哉著(明治三十九年刊)
二〇　唯識發達史論　一卷　三井淳辯著(明治三十九年刊)

二　阿育王事蹟　一卷　森林太郎・大村西崖合著（明治四十二年刊）

右の中、（一五）『佛典結集』は、四回の結集問題を詳論せるもので、著者の該博なる知識と卓越せる識見とは、縱橫東西の學說を批判剖檢して、事實の眞僞を釋明せむと力めてゐる。なほそれに因める多くの貴重なる關係記事を附錄されたれば、學徒を益するところ尠なからざる良書といはねばならぬ。（一六）『淨土敎發達史論』と（二〇）『唯識發達史論』とは、その題號の如く、特にそれ等の方面に關する研究であつて、その印度の部に屬する史論に於て、參考たり得るものである。（一七）『佛敎年代考』は、印度佛敎の史實と年代とを考定せむと試みしもので、特に、普く漢譯藏經に亘つて出據を綿密に註記せる點は、大に後學の多とすべきところであつて、有爲にこれを使用せば、所得甚だ多きを信ずる。なほ附錄には、旣に一言せし如く、佛滅年代の考證あり、また摩揭陀及び錫蘭王統の研究を掲げてゐる。（一八）『馬鳴菩薩論』は、印度佛敎隨一の問題人物、卽ち馬鳴に關する史的討究である。眞摯なる所論、大に啓發さるゝところがあらう。（一九）『原始佛敎史』は、主として、『阿含』・『婆沙』及び『倶舍』の敎理史とでもいふべきものである。（二一）『阿育王事蹟』は、阿育王の全生を通じ、その事蹟を明瞭にせむと期せると共に、それに聯絡せる關係事項を正確にせむと試みしものである。抑々阿育王の研究は、近時佛敎史の釋明に多大の進展を促し、殊にその碑柱の銘文は年代學上の一大指針となつたのである。さればこれ、實に敎

史研究の上に特殊の至重を値ひするもの、乃ち學者の大に留意せざるべからざるところである。なほ、阿育王の研究資料に就いては後（(二八)—(三一)參照）にも述ぶべけれど、ともあれ本書の價値も從つて知るべきである。書中、幾多の史的資料、例へば石柱・彫刻等の寫眞の多數を挿入して、讀者の會得に便せるもの、卽ち本文と相俟つて、大に初心の了解を助くる所である。

その他、直接間接印度佛敎に關する參考文書として、村上博士の『佛敎史林』（明治二十七年以下刊）、常盤大定氏の『印度文明史』（明治三十九年刊）、高桑駒吉氏の『印度五千年史』（明治四十一年刊）等を見るべく、また特に經典の成立起源の問題を取扱へるものとして、姉崎博士の『佛敎聖典史論』（明治三十二年刊）、村上博士の『大乘佛說論批判』（明治三十六年刊）等を繙くべし。なほ村上博士の『佛敎統一論』（明治三十四年刊）中には、主として敎理方面に就いて、また薗田宗惠氏の『佛敎と歷史』（大正八年刊）中には、敎理・歷史兩方面に亘り、參考に資すべき記事尠なからざれば、取つて以て披讀すべきである。その他、佛敎と直接の交涉を有する印度上代の哲學・宗敎を敍說せるものとして、井上圓了博士の『外道哲學』（明治三十年刊）、高楠博士・木村學士共著の『印度哲學宗敎史』（大正三年刊）・『印度六派哲學』（大正四年刊）等がある。何れも學壇の權威として普く推稱されたる事は、今更いふまでもない。また、松本（文）博士の『印度雜事』（明治三十六年刊）及び山下祥光氏譯『印度太古史』（大正五年刊）中、參考に資すべき記事尠か

らず、以て披讀すべきである。なほ以上單行著書の他、宗教・哲學・史學方面の各種雜誌上、有益なる關係記事の掲載されたること尠なからざれば、學者力めてそれ等の披讀をも心懸けねばならぬ。近く例ふるに、一昨八年、望月信亨氏が一度『佛書研究』誌上『起信論』の支那撰述説を斷叫さるゝや、これが惹いて村上・常盤兩博士の熾烈なる論爭となり、識者の賛否ために喧しく、昨九年に亘り學界の一大偉觀を呈出せし如きは、等しく世人の熟知せるところにして、それ等時々の現象は、如上各種の誌上を逐して提出さるゝ以上、不斷それ等の記事に注意することが至要たるわけである。

さて、以上は主として近代の印度佛敎關係文書を擧げたのであるが、この他に遠く古昔に溯つて、鎌倉時代、

三　三國佛法傳通緣起　上卷　凝然著

の出されしことを洩してはならない。著者凝然は、わが國古來隨一の佛敎史家として名高く、本書のほか『八宗綱要鈔』・『淨土源流章』等にもそれぞれ史的叙説を試みてゐるが、特に本書は、その題號の如く、印度・支那・日本三國の佛敎史實を記述して、(全部三卷あり)、力めて平明にその概要を會得せしめむと試みてゐる。所論たゞ傳承的範圍に止まつて、批判的態度を缺ける事は、蓋し當時にあつては止むを得ざるところであらう。さはれ、敎史上古來唯一の依憑となり、近

時猶且學徒に披讀されつゝあるは、以てその價値の輕少ならざることを證するものである。なほ本書に關して細川千嵓氏の『三國佛法傳通緣起典據』四卷（明治十二年刊）あり、本文の事實に就いて、詳細に經論に典據を尋求したれば、讀者由つて以て大に至便を感ずるところであらう。

次に支那撰述及び印度撰述にあつて、通じて印度佛教の史實を叙說するを目的とせるものを覓むるに、全然缺如して、一の指示すべきものをも見當らぬ。たゞその參考文書が一部特殊の記事に限れるか、もしくは某項に聯絡せる關係記事を以て、參考資料たらしむるに過ぎざるものゝみである。但し、かく一貫せる通史の缺如せることゝて、それだけ這面の斷簡零篇と雖、貴重なる典據たり得べきことも、また當然の沙汰なれば、學者須く綿密なる考究を擅にして、決して輕々に看過すべからざるところである。說明の便宜上、先づ印度撰述のものよりして解說を試みよう。

『縮藏』藏帙に收むるところ、印度聖賢の記傳に屬するものに左の數部がある。

二三　付法藏因緣傳　六卷　元魏吉迦夜・曇曜共譯（藏九）
二四　馬鳴菩薩傳　一卷　後秦鳩摩羅什譯（藏九）
二五　龍樹菩薩傳　一卷　同譯（藏九）
二六　提婆菩薩傳　一卷　姚秦鳩摩羅什譯（藏九）

二七　婆藪槃豆法師傳　一卷　陳眞諦譯（藏九）

右の中、(三三)『付法藏因緣傳』は、略して『付法藏傳』または『付法藏經』とも稱し、佛滅後印度にあつて付法相承せし次第を叙せるもので、初祖摩訶迦葉よりして第二十三祖師子比丘（Bhikṣu Siṁha）に至る二十三祖の相承史傳である。敎史研究の參考資料とすべき記事多くして、普く重用されてゐる。(三四)『馬鳴菩薩傳』は、題號の如く馬鳴に關する記傳であるが、史的價値には乏しい。(三五)『龍樹菩薩傳』も、餘り史的價値の豐かなるものではない。而して、その記事は、前の『付法藏傳』第五に叙せる龍樹の傳記と大に同じくして、たゞその簡略に止れるより案ずれば、本書はかの書の抄出にかゝるものではなからうかと思はれる。(三六)『提婆菩薩傳』は、たゞ提婆の小傳に過ぎない。(三七)『婆藪槃豆法師傳』は、略して『世親傳』といひ、世親及びその實兄無著の傳記を叙せるものである。この書は眞諦の所譯といへど、『麗』・『宋』二藏にあつては、その卷尾に夾註して、「前來、訖レ此記二天親等兄弟一、此後記下三藏闍梨從二臺城一出入レ東至二廣洲一、重譯中大乘諸論上、並遷化後事傳二於後代一」とあるより見れば、恐くは眞諦の自記又は口授にかゝれるものであらう。なほ本書に就いては、高楠博士の英譯あり、オランダのライデン市發行にかゝる一九〇六年度の『通報』（“T'ung Pao”）誌上に掲載された。

二八　（漢譯）阿育王傳　七卷　西晉安法欽譯（藏十）

二九　(漢譯)阿育王經　十卷　梁僧伽婆羅譯(藏十)

三〇　(梵文) *The Divyāvadāna, a collection on early Buddhist legends.* Ed. by E. B. Cowell and R. A. Neil. Cambridge, 1886.

三一　(梵文) *Aśokāvadāna.*

(二八)漢譯は、廣く阿育王の事蹟を叙し、傍ら摩訶迦葉 優婆毱多 (Upagupta) 等の因縁に及ぶ。(二九)漢譯は、(二八)の同本後譯にして、かれの十一品なるに對してこれは八品、即ち多少の異同あり。而してその梵文原本として現存せるもの二部あり、(三〇)・(三一)即ちこれである。兩者何れも一八二八年ホヂソン氏によつて尼波羅に於て發見されしもので、就中(三〇)はケムブリッヂ大學圖書館及びパリ國立圖書館に收藏され、而してその校訂出版がカウヱル・ネイル兩氏の努力によつて完成された。その通計三十八個の譬喩談あり、就中第二十六より第二十九に至る四篇が、即ち阿育王に關する記傳である。これより先、ビュルヌーフ氏の『印度佛教史序論』中に、この記傳を有する全文が佛譯掲載され、近年また榊亮三郎博士によつてその和譯が試行され、『六條學報』誌上に連載され來つた。惜しいかな、和譯はその後中絶されてゐる。また(三一)はベンガル亞細亞學會 (The A iatic Society of Bengol) の文庫に保存され、ミトラ博士の『尼波羅佛教文學』中に於て、その大意を知り得られる。なほ漢譯にあつては、『阿育王息壞目因緣經』

(藏十)といふがあり、如上の部分別譯ともいふべきものである。

その他、小乘律部中にあつて、參考に資すべき重要なる記事が尠くはない。既に佛傳篇の下に於て一言せし(五六)乃至(六二)の諸書(八五頁參照)は、何れも繙讀せねばならぬ要典であつて、殊に結集事件に關する記事に於て大に暗示されるものがある。また同一趣旨の記事として、『婆沙論』第百八十三卷(收七)・『智度論』第三十六卷(往三二)等にもこれを討ぬべく、乃ち學者の隨處注意を拂ふべきところであらう。

次に漢譯以外、敎史研究の重要資料たる原本若くはその歐譯の主なるものを擧ぐれば、次の數種がある。

三二 (梵文) *Kalhana : Rājataranginī.* Ed. by M. A. Stein. Bombay and Leipzig, 1892.

三三 (英譯) *Kalhana's Rājataranginī, a chronicle of the Kings of Kaśmīr.* Tr. by M. A. Stein. 2 vol. London, 1900.

(三二)梵文は、印度內地の迦濕彌羅の史書にして、著者カルハナ氏 (Kalhana) は第十二世紀頭に出でし人、年代上暗黑なる印度の歷史上唯一の光明となれるものであつて、中に敎史關係の諸王の記事あり、その敍說比較的正確を傳へてゐる。而して本書は、スタイン氏が舊版の誤謬を訂して刊行せるものである。(三三)英譯は、スタイン氏が前の原本刊行後、更に努力精勵し

て譯出せるものであつて、渠は久しく迦濕彌羅に滯在して研鑽を積み、本書の譯出に際して、その序論として詳細なる地誌上の論文を添加し、大に學界を裨益したのである。これより先、ダット氏（Ch. Dutt）にも同種の英譯が出されたれど、正確を缺ける憾みあり、今この譯出を見るに至つて、その缺陷を補ひ得ることゝなつた。

三四 （巴文英譯） *The Dīpavaṃsa. An ancient Buddhist historical record.* Ed. and tr. by H. Oldenberg. London and Edinburgh, 1879.

三五 （巴文英譯） *The Mahāvaṃsa. With the translation subjoined, and an introductory essay on Pāli Buddhistical literature.* Ed. and tr. by G. Turnour. Ceylon, 1837.

三六 （英譯） *The Mahāvaṃsa.* Tr. by L. C. Wijesinha. Colombo, 1889.

"*Dīpavaṃsa*"（『島史』）と"*Mahāvaṃsa*"（『大統史』或は『大史』）とは、何れも錫蘭佛教を叙説せる史書であつて、いはゆる南方傳と稱され、古來その雙璧として重要視さるゝものであつて、何れも佛教の由來と錫蘭教史とを傳へ、その記事佛陀の在世より紀元第四世紀の初頭に於けるマハーセーナ王（Mahāsena）に抵つてゐる。就中『島史』はその著者明かではないが、紀元第五世紀の頃の成立と見做すべきであらう。オルデンベルヒ氏が、かの巴利律藏を公刊せる際（八六頁參照）、また本書の刊行をも企圖し、巴利原文並にそれが英譯を併せてロンドンに於て出

せるもの卽ち(三四)である。また『大史』は、『島史』より少し後れて紀元第五世紀の後半、マハーナーマ (Mahānāma) の編纂せるところであるといふ。その記事『島史』に比して詳細に亙り、敎史の參考に資すべきところ最も多い。その(三五)は、錫蘭の知事たりしターナー氏 (G. Turnour) によつて、原文英譯の合刊されしものであつて、氏は本書の印度史上極めて有價値なることを知るや、多忙なる公職のかたはら、不斷これが研究に餘念なく、終に原英兩種の刊行を成就することを得たので、これがために學界の蒙れる潤益は、果して如何ばかりであつたらう。リス、デヸズ氏がこれを讃して巴利研究空前の偉業と稱へしも、洵に尤もの次第である。なほ本書には詳細なる序論を附して、佛敎史書並に錫蘭王統の年代考證を討究し、かつまた巴利三藏の內容の紹介にも力めてゐる。これより先、錫蘭の判事長ジョンストン氏 (A. Johnston) 本書の英譯刊行の企圖あり、乃ちフォツクス (W. B. Fox)・ウッパム (E. Upham) 兩氏に諮り、なほ土地の學僧等と協力して遂にその譯出を終へ、"*The Sacred and Historical Works of Ceylon*" (『錫蘭聖史集』) 中に收載し、ウッパム氏の名を以て、一八三三年にロンドン市にて刊行された。これ卽ち『大史』英譯の先驅であつて、通篇中八十八章を完了してゐる。但し、こは直接巴利原本に據らずして、錫蘭土語卽ちシンハリースより重譯し、かつ創業の困難もありしことゝて、誤謬疎漏尠なからず、茲に於てか卽ちターナー氏の巴利直譯を出さしむるに至つたのである。

タ氏の新譯一度出づるや、ウ氏の舊譯は全く顧みられざるに至り、僅に書史學上の語草となるに止つたのである。然るにタ氏譯にあつては、初め第一卷として通篇の前段三十八章を收載し、その殘章は續卷に收載すべき豫定であつたが、遂にその克果を見るに至らなかつた。後年キジエシンハ氏 (L. C. Wijesinha) 更にその後を繼いで第三十九章以下全部を譯了し、而してこれを先のタ氏譯の部分に併せ、かくて一貫せる全譯として刊行するに至つた。これ卽ち(三六)である。因みにウ氏の舊譯よりして、曾て三十年近く以前、荻原雲來氏及びその他二三の人々によつて和譯されたることあれば、一言附加して置く。

三七 (藏文) *Tāranātha.* Ed. by A. Schiefner. St. Petersburg. 1868.

三八 (獨譯) *Tāranātha's Geschichte des Buddhismus in Indien.* Von A. Schiefner. St. Petersburg, 1869.

(三七)・(三八)は印度佛教史書中の權威であつて普通著者の名により『ターラナートハ氏の印度佛教史』として知られてゐる。著者ターラナートハ氏 (Tāranātha) は、紀元第十七世紀に出でし西藏喇嘛 (Lāma) であつて、當時西藏にあつては、印度佛教の史實に關する議論區々として一定せざるを慨き、普く國内及び印度の資料を檢討し、諸說を組織統一して記述せるもの、これ卽ちこの佛教史である。かくその編成は後代に屬すと雖、資料が主として西藏所傳に覓めた

るため、著しく他傳とその趣きを異にし、學者の參考たるところ尠くはない。その內容は、通篇四十四章、阿闍世王時代より筆を起して、印度佛敎の滅亡に近き卽ち紀元第十一世紀の時代に亘つてゐる。かの『島』・『大』二史の南方傳たるに對して、北方傳の部に屬し、特に西藏傳と稱されてゐる。露國の東洋學者として有名なるワッシリエフ氏（W. P. Wassiljew）の"*Buddhismus, seine Dogmen, Geschichte und Literatur*"（『佛敎・其敎義・歷史及文學』）中これを露譯抄引せるところ頗る多く、ために大に歐洲諸國にその名顯はれ、獨逸の西藏學者シーフネル氏（A. Schiefner）一八六八年を以てその藏文原本を出版し（三七）、翌年更にこれが獨譯を刊行した（三八）。その學界を裨益したことは、いふまでもないところである。而して數年以前荻原雲來氏、これを和譯して『佛敎史學』誌上に連載の企圖あり、最初一二囘揭始されしが、爾後杜絕して出でず。

右の他、別して原始佛敎の分派に關して特記すべき數種の資料がある。由來這般の問題に就いては、旣に一言せしが如く、南北兩傳その所說を異にし、更に北傳また藏・漢諸種の相違を見るを以て、從つてこれが硏究範圍もおのづから狹少たらざるわけである。南傳にあつては、『島』・『大』兩史に討ぬべきは勿論であるが、北傳にあつては、先づ漢藏中に探るに左の諸書がある。

三九　文殊師利問經　卷下　梁僧伽婆羅譯（列一）

四〇　十八部論　一卷　陳眞諦譯（藏四）

四一　部執異論　一卷　天友大菩薩造　陳眞諦譯（藏四）

四二　異部宗輪論　一卷　世友菩薩造　唐玄奘譯（藏四）

これ等の四本は、何れも異部分派の根本資料たるものであつて、古來これを一經三論と總稱されてゐる。就中(三九)『文殊師利問經』は、文殊菩薩（Mañjuśrī）の發問に對して菩薩戒の勝益を示せるものであつて、大乘律部に屬し、その卷下「分別部品」に於て小乘分派の事實を傳へてゐる。但しその叙説たゞ異部の分出のみに止つて、各々所立の義理に及んでゐない。(四〇)以下の三は同本異譯であつて、先づ(四〇)『十八部論』は、また『分別部論』ともいひ、初後二部の合集より成り、初部は前の『文殊問經』「分別部品」の文の全引にして、後部はそれに引續いて「羅什法師集」としてこの論を置き、而して具に諸部の分出より各々所立の義理に及んでゐる。その合集が何人によつてなされしかは明かでない。然るにその初部に就いては異論なけれど、後部即ちこの論に就いては、譯者に種々の異說を立てられる。『麗藏』に眞諦の譯とせるは明かに誤謬と思はるれど（何となれば、次の『部執異論』が眞諦の譯たる以上、同一原本を同人が別譯すとは考へられぬから）、さりとて「羅什法師集」の文より見て、直に羅什譯とも斷定せられない。但し、秦代の所出と考へらるゝ據處なきにあらねば、普通秦譯と稱されてゐる。他の二譯に比して、誤謬・脫文が割合に多い。(四一)『部執異論』は、『宋』・『元』の兩藏共に『部異執論』とあ

り、普通陳譯と稱されてゐる。著者の天友とは世友と同じく、共に Vasumitra の意譯に他ならない。(四二)『異部宗輪論』は、普通唐譯と稱され、三譯中最も完全なるものとして普く依用さるゝところである。而してこれ等の參考として、眞諦の『部執異論疏』十卷、慈恩の『異部宗輪論述記』三卷の對讀を忘れてはならぬ。眞諦の『疏』は、今散逸して求むるに由なけれど、幸に嘉祥の『三論玄義』、中觀の同『檢幽鈔』、鳳潭の同『頭書』等に引用されてゐる。最近この論に就いて、その唐譯を中心とし、秦・陳二譯をこれに對照した和譯が木村泰賢氏によつてなされ、『國譯大藏經』論部中に收攝して刊行され、なほ「結集史分派史考」と題して、普く古今東西の學說を綜合批判せる研究を附錄されてゐる。學者の見遁すべからざる資料といはねばならぬ。次に西藏にあつては、梵本より藏譯されたるこの種の文書數種あり、就中ワッシリエフ氏は、その自著『佛敎・其敎義・歷史及文學』の附錄として、これを露譯揭載し、シーフネル氏は、更に露譯より獨譯した。またロックヒル氏の "The Life of the Buddha" (『佛陀傳』)にも、それ等の資料を本とせるこの種關係記事あり、何れも前に說くところ(九四頁及び一四〇頁)を對照して討ぬべし。

次に支那撰述のものを討ぬるに、これには『法顯傳』・『西域記』等を始めとし、記事斷片なりとはいへ、敎史の參考たるべき寳資が尠くはない。その多くが夙に歐譯されて重んぜらるゝに徵

するも、その價値の程を窺はれ得るわけである。左にその概略の紹介を試みよう。

四三 （漢本）高僧法顯傳　一卷　東晉法顯（致六）

四四 （佛譯）*Foè Kouè Ki.* Tr. par A. Rémusat. Paris, 1836.

四五 （英譯）*Travels of Fa Hian and Sung-yun, Buddhist pilgrims from China to India.* Tr. by S. Beal. London, 1869.

四六 （英譯）*A Record of Buddhist Kingdoms.* Tr. and annot. by J. Legge, Oxford, 1886.

四七 （英譯）*Records of the Buddhistic Kingdoms.* Tr. by H. A. Giles. London, 1877.

（四三）漢本は、また『歷遊天竺記傳』或は『佛國記』ともいひ、法顯の印度歷遊の紀行である。渠は東晉安帝の隆安三年(399)西遊の途に上り、苦心困難、流沙を涉つて印度に入り、各地を巡禮の後更に錫蘭に航し、而して終に海路歸東に就いたのである。實に前後十二年の長時に亙る大旅行であつた。その間見聞せる西土三十餘國の相狀を記錄せるものが即ち本書であつて、洵に當時の史的事實を知る究竟資料たるものである。（四四）佛譯は既に前にも一言々及したが（一四頁參照）、これ右の（四三）を佛文に譯出せるものであつて、實に歐洲學者の、佛僧の旅行記錄を翻譯紹介せる最初となれるものである。（四五）は、『法顯傳』並に慧生・宋雲の西域紀行を合譯せるもので、いはゆる慧生・宋雲の印度紀行とは、即ち『慧生與宋雲使西域記』一卷のことで、北魏の神龜

元年(518)に入竺せる記錄をいふ。(この書は『洛陽伽藍記』中に收攝され、また近くは『大日本佛敎全書』內『遊方傳叢書』中の「慧超傳考」に擧げられてゐる)。これと次の(四六)・(四七)を併せ、英譯は凡て三種あり、就中レッグ氏譯(四七)最も完全と稱せらる。また、ジャイルス氏の譯本出でゝ間もなく、英人ワッター氏(T. Watters)、"China Review"(『支那評論』)にこれが評註を連載して、その研究に便したことも、一言附加を要すべきところであらう。

四八 (漢本) 大唐西域記 十二卷 唐玄奘記・辯機撰(致七)

四九 (佛譯) *Mémoires sur les contrées occidentales.* Tr. par S. Julien. 2 tomes. Paris, 1857.

五〇 (英譯) *Si-yu-ki : The Buddhist Records of the Western World.* Tr. by S. Beal. 2 vol. London, 1884.

五一 (英譯) *On Yuan Chwang's Travels in India.* Tr. by T. Watters. 2 vol. London, 1904—'5.

(四八)漢本は、單に『西域記』の略名を以て通稱され、いふまでもなく玄奘の西域・印度歷遊の紀傳である。玄奘は、唐の太宗貞觀三年(629)を以て入竺の途に上り、同十九年(645)まで前後十七年間、普く西天諸國を遍歷して歸朝す。その親踐せる土地百十國、傳聞せるところ二十八國、凡て百三十八國の宗敎・風俗・靈跡・口碑等、悉く本書に於て詳說されてゐる。その撰號に「玄奘

奉詔譯、辯機撰」とあるよりして、世人屢々誤つて玄奘の親撰ならざるやうに思ふものあれど、こはたゞ玄奘が指授して辯機に編錄せしめしに他ならない。由來、佛僧の西域・印度に往還せるもの極めて多く、從つてその撰出にかゝる記錄尠くはないが、その見聞の廣遍なると記事の精確なるとに至つては、本書は實に古今に獨步して、佛教史學並に東洋學上不朽の寶價を有するものである。かの道宣が『釋迦方志』を撰して、主として本書を依憑に抄說せる如きに徵するも、這般の一端を窺知されよう。近代歐人の東洋研究に從事するもの、何れも本書をその資料とせざるなく、從つて次の如き數種の翻譯が出されてゐる。(四九)佛譯は、ジュリアン氏が十餘年の久しきに亙り、苦心討究して譯成されたるものであつて、實にこの翻譯は泰西幾多の學者を啓發するところ極めて多く、かのカンニンガム氏(A. Cunningham)が、銳意印度佛跡調査に從事するに至りしも、全く本譯の指示に負へる結果といはねばならぬ。尤も現今の學界の進展よりして見れば、その所譯に多少の缺點として認むべきところなきにあらねど、その創試の苦心は大に酌量に値ひすべく、殊に當時始めて漢字音譯の地名・人名等を梵語に複寫するの困難は、洵に譬ふるにものなき有樣であつたらう。渠はこれがために、別に漢書中に現はれたる梵語名辭を解釋音譯するに就いての一書を公にしたくらゐである。この苦心困難の結果、東洋研究に對し幾多の熱心なる學者を誘導せしむるに至つた功績は、決して沒すべからざるところであ

る。（五〇）・（五一）の兩英譯中、（五一）卽ちワッター氏の所譯は大に學界に普遍されてゐる。本譯は、その題號の如く "*On Yuan Chwang's Travels in India*"（『玄奘印度紀行論』）となりをれど、その內容は、『西域記』の英譯並にその考證である。その考證は、西土諸國の言語・地理・傳說等の各種に亙り、該博微細なる討究を示してゐる。されば、啻に譯文の完全なるのみならず、實に『西域記』研究の指南たるものである。なほ附錄に、スミス氏（V. Smith）によつて成れる 'The itinerary of Yuan Chwang'「玄奘旅行日記」を添へ、玄奘所傳の地名を現代のそれに對照せしめたれば、これまた學徒の便宜を感ずるところであらう。なほ附記すべきことは、近時堀謙德氏がこのワッター氏の研究に倣ひ、『解說西域記』（大正元年刊）なる尨大なる雄著を公にされたことこれである。こは從來の泰西諸學者研究の結果を悉く綜合して明快なる批判を施し、更に漢譯佛典に現はれたる佛敎の史實・傳說等を考證して是非の取捨を加へ、『西域記』研究唯一の權威たらしめむと期せるものであつて、その眞摯なる討究と絕大なる努力とに對しては、洵に衷心の敬意を拂はねばならぬところである。『西域記』の研究者はもとより、苟くも東洋學及び佛敎史に染指せむとするものは、必ず先づ披讀せざるべからざる要書である。

五二　（漢本）大慈恩寺三藏法師傳　十卷　唐慧立本・彥悰箋（陽二）

五三　（佛譯）*Histoire de la vie de Hiouen Thsang*. Tr. par S. Julien. Paris, 1853.

五四 （英譯） *The Life of Hiuen Tsiang.* Tr. by S. Beal. 2 vol. London, 1888.

（五二）漢本は、通常『慈恩傳』と略稱し、玄奘の事歷を敍せるものである。玄奘は長安の大慈恩寺に止住せしため、大慈恩寺三藏法師といふ。而してその記事、渠の在天中に亙れるところ、大に『西域記』の所說を補ふに足る。本書は最初慧立の編纂にかゝり、五卷より成つてゐたが、後に彥悰がこれを增補註解して現存の十卷としたのである。（五三）佛譯は、『西域記』のそれと共にジュリアン氏が二大翻譯の隨一であつて、實に譯者二十年間の苦心討究の結果に成れるところである。（五四）英譯は、佛譯より更に後時に譯出されしもので、從つて佛譯の誤謬に亙れる點は訂正されてはゐるが、その成績は佛譯に劣るといはれてゐる。

五五 （漢本） 南海寄歸內法傳　四卷　唐義淨撰（致七）

五六 （英譯） *A Record of the Buddhist Religion as practised in India and the Malay Archipelago.* Tr. by J. Takakusu. Oxford, 1896.

（五五）漢本は、義淨が南海・印度紀行に於ける見聞記であつて、義淨は、唐の高宗咸亨二年（671）廣州より海路ジャワ・スマトラ（Sumatra）を經て印度に航し、前後二十五年を經て、中宗の嗣聖十二年（695）に歸來す。その印度より歸航して室利佛逝國（Śribhoja）卽ちスマトラに滯在せし際、印度及び南海の見聞事項——主として戒律行持の實狀を載錄し、また史實に關する記事を添加

して、これを友人に托し、本國に送附せしもの卽ち今の本書であつて、當時該地の事情を知り得る有力なる資料として、學者に珍重さるゝところである。近代正法律の主唱者たる葛城慈雲比丘が、特にこの書を愛讀し、その註解として『解纜鈔』四卷を述作するに至れるも洵にゆゑあるところといはねばならぬ。(五八)英譯は高楠博士が滯英中に譯出せるものであつて、從來歐洲の學界にあつては、僅にこれが分譯の出でしのみで、未だ完譯のなかりしとゝて、本書の譯出によつて如何に多くの便宜を得たかは、今更いふを俟たぬ。殊に本書は其卷頭に詳細なる關係序文を添加し、周到なる用意を以て研究の至便を計つてゐる。洵に敬重に値ひする功績を認むべきである。

五七 (漢本) 大唐西域求法高僧傳　二卷　唐義淨撰(致七)

五八 (佛譯) *Mémoire composé a l'époque de la grande dynastie T'ang sur les religieux éminents.* Tr. par É. Chavannes. Paris, 1894.

(五七)漢本は、支那・朝鮮・西域の入竺求法僧五十餘人の小傳であつて、先の『南海寄歸傳』と同じく、義淨が、スマトラ滯在中本國に托送せるものである。而して本書は、かく求法僧の印度周遊記事を揭ぐると共に、なほ自己の經歷せる印度・南海の實況をも附記せることゝて、先の『寄歸傳』と共に極めて重要なる資料たり。かの法顯・玄奘にあつては、西域・印度の事情を傳へしのみなれば、南海の記事に至つては、たゞ義淨のこれ等の著書に俟つべきのみ。その特殊の價値

知るべきである。

以上の他、『慧超傳箋釋』は、紀元第八世紀の初頭、五印を歴遊せる慧超の『往五天竺國傳』の殘卷を、藤田豐八氏が考證箋釋せるものであつて、本傳は殘卷ながら實に『佛國記』・『西域記』に次ぐ重要なる資料なれば、これが箋釋も史的討究上の要典たるを失はぬ。明治四十三年上海で出版され、翌年またわが國に於て、高楠博士の校訂を經て『大日本佛敎全書』中の『遊方傳叢書』に收攝して刊行された。その他また、僧祐の『出三藏記集』(結一)、契嵩の『傳法正宗記』(雲九)等に於て屢々參考記事を討ぬべく、もしそれ梁・唐・宋の三朝『高僧傳』(致二――五)並に各種經錄(結一――九)等に就かば、斷片的ながら重要なる指南甚だ多い。これ等は後項支那の敎史を述ぶる下に至つて、改めて紹介することゝせう。なほ近時羽溪了諦氏によつて、『西域之佛敎』なる一篇が公にされた(大正三年)。所說記事主として西域諸國に止り、直接印度の敎史には關係なけれど、また如上諸書とその類を同じうして、中に關係事項の散說されたるところ尠なからざれば、取つて參考に供すべく、即ちこゝに因みに一言する次第である。

次に泰西學者の敎史檢討の成果を見るに、さすがに史的討究を以て學究の面目と思考せる渠等の態度は、その成果に甚だ多く這箇史的討究の報告を提供せるによつても窺はれ得る。先にも一言せる如く、渠等は、わが國人が泰平の夢暖かなる惰眠に耽りつゝありし舊幕時代、既にそ

れ等の檢討に着手してゐた。爾來幾十百年、そが數多の成果は、何れ史的討究のそれならざるはなかりしこと、殊更いふを俟たぬところである。凡そその態度たるや、或は言語學上よりこれを試み、或は考古學上よりこれを眺め、或は審美學上より或は年代學上より、百方その眞相を照灼せずんば止まざらむの方法を示してゐる。その一二の例を擧ぐれば、フェルガッソン氏はその "*History of Indian and Eastern architecture.*" London, 1910.(『印度及東方建築史』)に於て、考古學的見地より印度宗教の史的變遷を論敍し、またスミス氏はその "*The Early History of India.*" Oxford, 1904 (『印度古代史』)に於て、石刻文並に古貨に基いて笈多王統を釋明せるが如き、如何に優秀なる態度を執れることだらう。これをかの單に古典の文々句々をあげつらふのみに止れるわが國從來の佛教學者の態度に比べて、洵に隔世異代の感があるではないか。吾人はこれ等各種の優秀なる成果を檢案して、そゞろ欣仰の至りに耐へざるものである。

さらば、左に、その代表的要篇の五三を紹介せう。

五九 *Introduction à l'histoire du bouddhisme indien* Par. E. Burnouf. Paris, 1845.

六〇 *H. Kern: Der Buddhismus und seine Geschichte in Indien.* Tr. von H. Jacobi. Leipzig, 1882–'4.

六一 *Manual of Indian Buddhism.* By H. Kern. Strassburg, 1896. (*Grundriss der Indo-*

Arischen Philologie und Altertumskunde. Bd. III.)

(六二) *The Chronology of India.* By C. M. Duff. London, 1899.

(六三) *Buddhist India.* By T. W. Rhys Davids. New York, 1903. (*The Story of Nations*)

(六四) *The Early History of India.* By V. Smith. Oxford, 1904.

右の中、(五九)は、先にもいへる如く(一〇頁參照)ホヂソン氏が尼波羅に於て幾多の梵語聖典を蒐集して學界に提供せるに刺戟されて出でし結果であつて、著者ビュルヌーフ氏は有名なる言語學者として、當時學界の明星と輝き、かのマックス、ミューラー氏やセナール氏等の碩學何れもその門下に參集するといふ有樣、本書は、かくの如き著者の該博なる知識を傾倒して成就されしものであつて、洵に千古不朽の名著といはれてゐる。その內容は、佛傳・敎理の優秀なる研究を示せると共に、『華嚴』・『法華』・『般若』・『楞伽』等諸種大乘經典の內容を撮要し、ホヂソン氏によつて提供されし寶資は、實に渠の卓越せる學識手腕によつて心ゆく調理按排を遂げられ、かくして固く梵語佛敎研究の基礎を歐洲學界に築据したのである。當時未だ梵語研究の創草なるに際して、大乘經典の解說を試みるが如き、如何に辛苦を嘗めしことだらう。これぞ實に前人荊棘を拓き、後人道路を造るの例、洵に後來西歐の、佛敎に關する研究は、多少の差はあれ、何れもこれに範を仰がざるなきの有樣であつた。(六〇)は、最初著者ケルン氏が、自國語即ちオ

ランダ文を以て出されしものを、直にヤコビ氏 (H. Jacobi) によつて獨譯されしもので、續いでヒユー氏 (G. Huet) の佛譯も出されるといふ有樣、實に世界的の名著と推稱されるくらゐである。その內容は四篇より成り、第一篇は佛傳、第二篇は敎法、第三篇は僧伽、而して第四篇は敎史であつて、特に敎史は渠の大に注意努力したところで、學者の精讀を値ひすることいふまでもない。(六一)は、著者が前の(六〇)を出せる後、更に孜々としてその研鑽を進め、かくして豐富なる資料を以て、佛傳・敎理及び敎史を論叙せるものであつて、一々その資料を明示し、組織の整然たる、下斷の的確なる、洵に恰好の名著と推稱するに憚らない。殊に著者が英文を以て記述せるが如き、如何にわが學徒に多くの便宜を感ぜしむることだらう。特に閱讀を薦むる。本書は、"*Grundriss der Indo-Arischen Philologie und Altertumskunde*"(『印度アリアン言語學及考古學叢書』)中の一編として刊行されたのである。(六二)は、古代より紀元第十六世紀に至る印度の年代表である。(六三)は、題號の如く、佛敎時代の印度文明を叙せるものであつて、通編十六章、著者が該博なる知識を以て巴・梵の佛典を根據として、詳細の說明を施されてゐる。卽ち佛敎以前の印度の社會狀態より、佛敎時代の文學・宗敎・美術・風俗等を叙說し、何れも明確に典據を指示せるところ、幾分通俗文書の性質を帶びてゐるとはいへ、大に專攻の參考とすべきであらう。"*The Story of Nations*"(『國民譯叢』)中の一編として出されてゐる。(六四)は孔雀

王朝より笈多王朝に至る史實を叙說せるもので、記事主として政治史を本とし、直接敎史に關するものならねど、史實の漠たる印度古代の狀態を明確にせむと期せるところ、從つて敎史研究上多大の參考を値ひすべく、殊にその最近討究の結果たるは、洵に印度史書中の白眉と推稱さるゝに乖かぬ良書である。

以上の他、なほ佛敎美術の史的變遷を述べたるもの、言語學上の系統考證を試みしもの、或は佛敎地理の範圍に屬すべきもの、或は佛敎文學の境界に入るべきものにして、直接間接敎史研究に裨補すべき偉編雄著は極めて多く、一々こゝに叙說するの遑なきくらゐである。曾て堀謙德氏は、多大の注意を拂つて、それ等參考の資料文書を遍く綜攬して、『増訂釋迦牟尼傳』及び『解說西域記』に附載したれば、學者よろしくその所揭を尋ねて、以て詳細を盡すべきであらう。もしまた關係の研究雜誌にして、時々參考を値ひするものゝ如きも、印度西歐の間決して尠なからず。而して既にそれ等に揭載されて、學界の權威となれる研究雄篇も、また十百に餘る多くがあり、堀氏の所揭同じくそれ等を網羅して周到綿密を極めてゐる。本項その繁長ならむことを惧れて、たゞ如上の略說に止め、彼々の所揭にその詳細を讓ることゝする。但し、終りに臨み、敎史研究者に對して、なほ一言望月信亨氏によつて編纂された『佛敎大年表』のあることを附記せねばならぬ。それ年表なるものは、歷史研究の規矩準繩たるべきは今更いふまでも

なく、洵にこれを措いては、這箇研究殿堂の建設は決して望まるべくもあらぬ。されば、本書の須要なることは、論議の限りにあらず。殊にその編纂、一事一件何れも典據を明示して、學者の尋討を指示せる如きは、如何に重寶有益なるかを感ぜしむるものである。吾人は、西歐の學者間にあつてすら、猶且この種專門典藉の出現せざりし間に（單に印度史實の年表の如きは、上述のダッフ氏のそれなどあれど、佛教年表としては覓むべくもあらぬ）、わが佛教學者の手によつて這箇の克成を見しことを幾重にも欣快とせざるを得ないのである。なほ本書は、その卷頭に、東西諸種の資料を綜合して、印度王朝の系統を表示し、一目その關係交渉を明瞭にしたるは、洵に編者の苦心の大なると共に、學徒の便宜を増すところ、決して尠なからざるものである。敢て坐有に具備せむことを薦めて止まない。

二　支那

教史略　印度に興りし佛教は、支那に來つてその軀幹を延ばし、枝葉を張り、よく各種の發達を遂げて、更に延いてまた近隣諸邦に流布さるゝに至つた。實に支那佛教は、佛教傳播史中の中樞をなせるものであつて、從つてその攻學の必要も、また教史研究中の首班にくらゐすべきわけである。學者須く、鋭意研鑽の態度を持續せねばならぬ。

さて支那佛敎史は、その始終を通じて一般に五期に劃される。尤もこれとて、また學者の思考に隨つて、各々逕庭あるは論を俟たないところであつて、專門史家のまさに大に論究をかはすべきところである。されど本項に於ける史實の略抄の如きにあつては、もとよりそれに與るべくもあらねば、今はたゞ簡單なる敎會史實の叙說に止むるを以て滿足せねばならぬ。夫れ支那佛敎初傳の年代を案ずるに、通常佛滅を距る五百五十年、卽ち紀元第一世紀の中葉たる後漢の明帝永平十年(67)と立てらるゝ。されどそれより以前、既に本土に佛敎渡來の徵迹あるは各種の文献上的確にこれを證明さるゝところであるから、いはゆる漢明始來說の如きは、從來の非公式に代ふるに公式の渡來を見たるものと謂つべきであらう。而してその非公式の交涉にあつても、支那佛敎史家が、その始來をなるべく古代に置いて、傳播史實を修飾せむと企圖せる結果、釋尊と殆んど同時に出世せる孔子が、暗に釋尊並にその敎法に就いて指示せるてふ『列子』の記錄はもとより、降つて佛滅後第三世紀、卽ち紀元前第三世紀の中葉、西域沙門室利房等十八賢、佛經を齎して來朝せるの傳說以下、漢明の時代に至るまで、幾多佛敎との交涉を推度せる如き、果して何れまで確實を保し得べきであるかは、大に疑はしきところであつて、決して記錄傳說のまゝに速信さるべくもない。凡そこれ等の討究は、支那佛敎研究の劈頭に迫る大問題であつて、輕々に取扱はるべからざるところ、近時學界の趨勢、從來の漢明公式渡來說

をも拒否せむとする傾向あつて、更に問題を新にせるの觀がある。洵に學者の專攻を期待すること尠なからざるところといはねばならぬ。

いはゆる漢明始來說とは、その始來の年(即ち永平十年)に先つこと數年、たま〳〵明帝が異夢の感得により、卜者の占相を俟つて使徒をして西域に求法せしめし結果、月支沙門迦葉摩騰(Kāśyapa-mātaṅga)・竺法蘭(Dharmarakṣa)の二者の來朝せしことを指せるもので、佛像・經卷等何れもこの時に將來されたのである。二者來朝の結果、寺院の權輿をこゝに見、また道敎との衝突を續起せしことを傳へらる。また『四十二章經』を始め、幾多の經典の譯出があり、後代の翻業の端緖をこゝに示せることをも記されてゐる。(二者譯出の經典中、現存のものはたゞ『四十二章經』のみであるといはれてゐるが、現存の『四十二章經』とて、恐らくは當時のそれでなく、後代の撰出であると考へられる)。

その後約八十年を經て、漢末桓帝・靈帝の交、月支・安息・康居・竺土等の譯經沙門陸續として渡來し、ために翻譯の事業大に進んだ。啻に外僧のみならず、本土の學士の、またこれに與るものも尠くはなかつた。これ等譯家の中、支婁迦讖(Lokarakṣa)・安世高特に名高く、その所出大小兩乘に亘り、また何れも淨土法門の譯成を果してゐる。かくして正法の弘傳は、滔々として上下の別なく尊卑をおしなべて普及さるゝに至つたのである。當時また、儒士牟子が『理惑

論』を著はし、在來固有の儒道二教に對し、佛教との統攝を試みむと企てたと傳へられてゐる。

漢亡んで三國時代となり、就中魏は、漢の後を承けて江北洛陽に都せることゝて、佛教比較的旺んに、江南建業に據れる呉これに次いで幾分の流行を見、獨り蜀のみはその傳播を見なかつた。この情勢はやがて南北佛教分岐の端緒を釀するに至り、人文思想の異色に伴うて、永く兩者の對立を後世に持續したわけである。江北佛教にあつては、曇柯迦羅（Dharmakāla）・康僧鎧（Saṅghavarman）等の外來僧徒のあるあつて、翻業弘法の盛榮を效し、江南佛教にあつては、康僧會・支謙等の傳教沙門のあるあつて、開教化衆の目的を果した。この間、像塔・舍利の崇拜漸く起り、羯磨（Karma）受戒の作法、梵唄諷誦の儀禮また教界の一帶に具備し、一方朱子行の如き講經・求法の篤者を出す等、佛日の光輝いよ〳〵燦然たらむとした。

次の世西晉時代の佛教は、概して譯經事業の旺んなるほか、別に特記すべきものがない。いはゆる譯業のみは有繋に旺んにして、外來沙門・本土諸士のこの聖事にたづさはるもの甚だ多く、就中燉煌菩薩として名高き竺法護（Dharmarakṣa）、譯經・講經並び行へる帛延、その他、無羅叉（Mokṣala）・竺叔蘭・支疆梁接（Kālasivi ?）・聶承遠父子等特に傑出し、密教經典譯出の先驅をなせる帛尸黎蜜多羅（Śrīmitra）また逸すべからず。而してその末葉、有名なる佛圖澄（Buddhaciṅga ?）の來至によつて、弘教の機運は、更に一段の促進を見るに抵つたのである。

晉末五胡・十六國の紛亂を經て、紀元第四世紀の初頭、東晋建業に起り、爾來約一百年餘その時代を持續した。當時の佛敎界は、平靜なる江南の地に於けるよりも、騷擾せる江北の地に於て旺んであつたのは、聊か奇異の感を起さしめる。蓋し非漢人種たる胡族の侵入あつてより、從來の漢人種が、人種的偏見に捉はれ、大に消極的態度を以て外來の佛敎に對せるに異つて、何等這般の反感を抱くことなく、極めて積極的思考を以て自由の措置に出でたから、いはゆる逆緣やがて順緣となり、この鬪爭亂離の裡にあつて、猶且正法の一般普及を見たわけである。而してその弘敎の中樞をなせるものは、上に指示した佛圖澄その人である。澄は當時敎界の偉人として、識衆庶に秀で、德一世に高く、その西來以後、覇者石氏の歸仰を得て、ひたすら興法弘敎に奉仕した。佛敎東漸このかた極度の盛榮を見たるは、洵に渠の努力に俟つところといはねばならぬ。その法資に道安あり、四海の習鑿齒と共に彌天の釋道安としての挿話を殘せるは、普く世人の知れるところ、その經錄の編者として、註疏の輯者として、或は釋姓の創者として、淸規の奠者として、渠の法動は隆々として盡くべくもない。秦將符堅、萬軍を統べ天下を以てするもこれに代へ難しと敬重の極を示せるも、またゆゑなきにあらず。その門下に慧遠を出す。これまた法門の龍象たるところ、洵に澄・安・遠師資三代の敎化は、支那佛敎の基礎を安定せしめしものと謂つべきである。遠は、盧山に據つて白蓮敎團を結びし江南佛敎の總帥、

その虎溪三笑の畫題は、今なほ持律生活を偲ばしむるよすがを示し、また定心念佛の嚴修は、當時の實踐修道を辿るべきゆかりを殘してゐる。『華嚴經』の譯者として名高き佛陀跋陀羅(Buddhabhadra)、赤髭毘婆沙として隱れなき佛陀耶舍(Buddhayaśas)、その他劉遺民・陶淵明等の居士に至るまで、當時想界の主將何れもこの芳香に薫育されざるものはなかつた。凡そ當時の佛敎々學は、明かに一定せる主義・主張を奉持するといふわけではなく、大小に亙じ經律に亘つて、隨持傳譯流布されたのである。『法華』・『華嚴』・『涅槃』『勝鬘』等の大乘聖典より、『阿含』經藏・『四分』『廣律等の小乘經律に至るまで、その所出甚だ多い。特に當時前古未だ曾てあらざりし小乘論藏の譯成を見たるは、最も注意すべきところであつて、小乘の三藏こゝに具備し、別して、對法毘曇によつて、遂にいはゆる毘曇敎學の興起を見るに至つたわけである。

なほ當時、學僧法顯敢然として入竺の先驅をなし、葱嶺を越えて天竺に入り、錫蘭の航より南海に泛び、辛酸あまねく十餘年、佛敎沙門のため萬丈の氣焔を擧げしことも、逸すべからざるところである。その記錄『佛國記』は、東洋學並に佛敎史硏究上の寶資となり、廣く學界に重用されつゝあることは、既に曾て一言せるやうである。(一四三頁參照)。

東晉漸く末期に蒞み、紀元第五世紀の初頭、有名なる鳩摩羅什(Kumārajīva)、長安に入りて支那佛敎の一新時期を劃した。羅什は龜茲の出、厚く姚興の外護を獲て止在十餘年、大に翻

譯の聖業を持續した。門侶三千、何れもその坐下に蝟集し、關中內外、威風煌として旭と輝いた。その翻譯の至妙は、古今に絕してよく儔ふものなく、隨つて誦すれば辭々珠盤の韻を展べ、隨つて翻ずれば句々絢爛の粹を湛ふ。その所出大小・敎禪に亙り、經・律・論藏を盡し、三論・四論・成實・淨土等の諸種敎學勃興の近因を成せるところ、洵に古今の譯聖と稱するに乖かない。而して特に自己所抱の思想としては、かの龍樹・提婆を承繼して、般若皆空に安定し、無想離念に立脚した。由來當時の想界は、前代經學流行の反動より、著しく老莊の虛無三昧に傾向し、恬淡高談天下を風靡せる時代であつた。羅什こゝに無想皆空の思潮を流布す、擧世滔々これに趣入せるは、蓋し理の當然と謂つべきところである。かくしてその地位は、當時敎界の第一人者として、高德佛陀跋陀羅を凌ぎ、その長安學園は、かの白蓮敎團と雙々運行の偉觀を呈したのである。かの關中四傑が師宗を稟けて敎界の偉器たりしことも、普く學徒に知らるゝところであらう。

當時また、中印曇無讖（Dharmarakṣa）の來至によつて『涅槃經』の譯出を見、「如來常住、無有變易」の思想漸く亙り、「一切衆生、悉有佛性」の信念ために普いた。さてこそこゝに涅槃敎學の勃興を來し、判敎批判の特色またその萠を示すに至つたのである。

紀元第五世紀の初葉、江南の東晉亡んで劉宋の代となり、江北の五胡また北魏に統一された。

かくて天下は、南北の二大强國對立の有樣となり、爾來第六世紀の末葉卽ち隋の統一に至る凡そ一百七十年間に亙つて、これを南北朝の時代といふ。就中南朝にあつては、宋・齊・梁・陳を通じ、佛教朝野上下の歸仰を受け、宋初佛駄什（Buddhajīva）・畺良耶舍（Kālayaśas）等の移歸あつて翻業旺んに、齊代僧柔・慧次等の學匠あつて講經衰へず。梁世菩提達磨（Bodhidharma）の西來あつて、武帝との問答は殊に名高く、陳代眞諦三藏（Paramārtha）の活動の結果佛教々學を發展せしめしこと多々。總じて四朝を通じ正法の隆盛極めて順緣を獲、この間、侯景の亂に、金陵七百の精舍一朝烏有に歸するの慘事を見たるは、唯一の逆緣として擧ぐべきであらう。

當時の佛教々學を一瞥するに、成實の興起はその盛榮を極度に達せしめ、いはゆる梁朝の三大法師たる法雲・智藏・僧旻のあるあり、次いで三論これに代りて隆昌を見、後代金陵の吉藏に至つてその頂點に及んだ。而して眞諦の來至は、支那佛教第二の時期を劃するに至り、教學の一變著しきものがあつた。眞諦は西天の人、海路中國に來り、時たま〳〵かの侯景の騷擾あり、紛叫亂離の渦中、流浪痛苦具に二十餘年、この間によく幾多の譯業を克成して、羅什・玄奘に次ぎ、いはゆる四大譯家（羅什・眞諦・玄奘・不空）中の隨一に數へらる。その所出また多岐各種にして一該し難けれど、無著・世親の瑜伽・唯識を傳ふるがその本旨たるものゝ如く、卽ち無著の『攝論』世親の『唯識』を傳へて攝論教學を興起せしめ、玄奘以外別個の唯心思想を發揮した。ま

た『倶舍論』(『舊倶舍』)を譯成して『新倶舍』の先驅をなし、毘曇宗派ために倶舍宗派に轉向するの誘導を起した。更に『起信論』を初出して眞如緣起を闡明し、舊來の敎學界に與ふるの影響實に多々。その『起信論』こそは、僞作・眞譯、學者異見の好材となれるものである。當時また僧祐・慧皎・寶唱等によつて『弘明集』・『名僧傳』・『高僧傳』等が出され、敎史研究上の巨益を學界に提供せることも、特記すべきところである。

次に北朝にあつては、北魏後に東西に分れ、北齊東魏に代り、北周西魏に代つた。この四代の間、いはゆる三武法難の慘事を見たれど、また護法奉敎の君主も乏しからず。北魏道武大に崇佛の念あり、有名なる龍門石洞の偉業は、百世長く時代の信仰及び藝術の表象を示せるものとして、その護法の程を見るべく。たま／＼太武帝、道士の言に盲從して破佛の暴行を敢てし、(三武法難の一)、法運ために稍、杜塞の悲運に向へるも、文成帝以後の興佛は、よくその頽廢を救復することを得て豐かに。加ふるに宣武帝の世印度の勒那摩提 (Ratnamati)・菩提流支(Bodhiruci)の渡來するあつて、譯經・興學に一段の進捗を來した。就中流支所譯の『十地論』は、地論宗派の興起を促し、また『淨土論』は、支那淨敎の源流となつた。前者は『華嚴經』說に因緣して、かの五臺文殊の信仰を育成し、後者は鴈門曇鸞を誘掖して、淨土念佛を唱導せしめしことは有名である。いはゆる曇鸞の念佛たる、かの盧山流のそれに別出せる一派として、後世

の善導流の基本たり。爾來流れてわが國に弘布し、民間の思想に及ぼせる影響の大なりしほどは、取りたてゝこゝにいふまでもない。當時また中印の佛陀扇多（Buddhasānta）の渡來せるあり、その所出の『攝論』は、後の眞諦の所譯に先んじて、攝論宗派興起の濫觴をなせるところ、大乘論藏の譯成は、實に當時の面目とも謂つべきであつた。その他、地論・四分の二宗を宣揚して、學行一代を壓せる僧統慧光あり、周武の破佛（三武法難の一）に直言拮抗して、萬丈の意氣を示せる淨影慧遠あり、宗勢の規模は、かくしてよく敬虔なる沙門の努力によつて維持されたのである。

因みに當時の佛教は、一方道教と相對し、紛擾妥協屢々這般の間に起つた。かの二武法難の釀成されたるも、また道士の教唆によれる結果たることはいふまでもない。

南北二強對立の後、紀元第六世紀の末葉文帝楊堅天下を一統して隋朝を立てた。當時の佛教は、闍那崛多（Jñānagupta）・達摩笈多（Dharmagupta）等のあるあつて、譯業なほ衰へずと雖、特に教學の一面に著しき上進を見た。江北淨影の慧遠、江南天台の智顗、金陵嘉祥の吉藏等、實に當代教界の巨擘にして、慧遠の統一的態度、智顗の包容的措置、吉藏の批判的見界は、洵に支那佛教々學上の一大異彩といはねばならぬ。特に智顗は、前後第一の學匠として普く自他に推稱さるゝところ、その三大五小の偉著は、廣く學徒攻究の對象となり、五時八教の妙判は、

長く敎格査定の洪範を垂れしものである。天台宗派の隆盛は、實に渠を俟つて現はれ、圓頓一乘の弘布は、實に渠を俟つて見たのである。當時また法經等『衆經目錄』を出し、費長房『歷代三寶紀』を撰して、經錄の規摸を張り、よつて以て藏經研究の指針を作れることも逸すべからざるところである。（三二六頁參照）

紀元第七世紀の初葉、李唐隋朝に代つて立つた。爾後第十世紀の劈頭に至るまで、凡そ二百九十年間、唐朝の佛敎はこの間に始終してゐるのである。この時代の敎勢を通觀するに、前代にその萠兆を示せる新宗派の興起の傾向は、當代に來つていよ〳〵その顯現を見、從來の各宗に加ふるに、新興の諸宗何れもその粹を並べ、實に百華繚亂の姸を極むるの概があつた。加ふるに、譯業の隆昌は前後その比なく、佛敎の大系は、この興學と譯業とによつて、完成さるゝに至つた。實に唐朝の佛敎は、支那佛敎を通じての黃金時代として、その盛榮の飽夢に陶醉せるの時代と謂つべきである。

當代の劈頭に於て、先づ特筆して傳ふべきは、譯傑玄奘の宏壯なる事業である。渠は平素修學の傍、從來の譯語の著しく不當なると、經典の大いに不備なるとを遺憾とし、親しく西土に渡つて求法習語し、以てそれ等の缺を充さむと願じ、終に年少單身を挺して、西域・印度大小一百三十餘國を遍歷すること十七年間、多岐なる經卷と豐富なる學識とを收習して歸朝し、以て

その希望を實現することを得た。爾來隨翻隨譯その聖業を繼續すること二十年、所出總じて七十餘部・一千三百四十卷に垂むとし、『大般若』六百卷を初め、『婆沙論』二百卷・『瑜伽論』一百卷、その他浩澣なる部帙洵に驚嘆するに餘りあり、その所出の夥多なること、前後に比儔を絕した。かくて舊來の譯法を不正として新制の譯法を創め、新舊の時期をこれによつて劃するに抵る。これ實に支那佛敎第三の變轉と謂つべきである。先には羅什あつて譯界の第一人者と稱せられたれど、その所出の數量復に奘の下にあり、擧世新佛出現の驚異を以て奘を迎へしといへるもの、實に尤もの至りである。而して奘自らの所宗は、無著・世親の敎學を相承して瑜伽・唯識の上にあり、その翻譯に於て見るも、這面の關係書類最も多く、特に護法中心の『成唯識論』の糅譯は、唯識敎學勃興の機運を促し、先の地論・攝論の唯心敎學以外別趣の面目を發揮した。その思想、その態度、從來の諸種敎學と劃然たる溝渠を作れることは、佛敎敎理史上別して注意すべき要點である。また彌勒崇拜の思想、因明論理の修學等の發揮されしも、奘に俟つべきところ、特に奘が西天紀行『西域記』が、先の法顯の『佛國記』後の義淨の『寄歸傳』と共に、敎史研究上不可缺の南針となれることは、こゝにまたこと〴〵しく贅言するまでもなからう。（一四四頁參照）

玄奘に次いで當時の譯界を賑はせしものに、于闐の實叉難陀（Sikṣānanda）中印の波頗

(Prabhākaramitra)・地婆訶羅 (Divākara)・善無畏、南印の菩提留志 (Bodhiruci)・金剛智、錫蘭の不空、及び本土の義淨の如きあり、その所出各々時代教學に影響を與ふるところ尠なからず。就中善無畏・金剛智・不空等は、專ら密教傳譯に功あり、眞言宗派これによつて現る。實叉難陀・地婆訶羅の所出は、賢首をして華嚴宗派を興起せしめし誘導となり、義淨の渡西は、律部を闡明にすると共に、教史研究に資するところ多々ありといはねばならぬ。

翻つて當代教學の大勢を一瞥せう。譯傑玄奘は、自らその思想を發表して主義の高調を試みるといふことはなかつたが、資子何れも、師說を奉じて教學の上に一段の面目を發揮した。玄奘の門下三千中、一秀の入室として師匠の特授を稟けしは、慈恩その人である。洵に渠は傳法無比の偉器たるに乖かず。その優越せる學解と、高邁なる識見とは、當時の社會を睥睨して儔者なく、大乘基の尊號は、教界の第一人者として内外に普く推稱さるゝところである。法相宗派渠によつて勃興し、從來の攝論宗派を該收して旺んに、爾來慧沼・智周に至る數十年間、滔々として天下を風靡せしめしもの、その起因實に渠の偉器に俟たねばならぬ。慈恩と相並んで西明の圓測あり、また唯識一方の法將であつたが、惜しいかな、所說多くは正系より異義として排斥されてゐる。また『倶舍』の三家と稱せらるゝ光・寶・泰あり、倶舍教學はこれによつて大に隆昌を呈した。

當時また、教界に著しき影響を與へたる賢首法藏の出世せることを逸してはならぬ。渠は通常天台の智顗と並稱さるゝ教學の大成者であつて、華嚴宗派の開立は、實にその努力に俟つべきである。その所見、玄奘・慈恩の瑜伽・唯識に慊らずとなし、乃ち抑相揚性の態度を以て旺んに法界無礙の妙理を高調し、陰に陽に事理隔歴の法相教義に當らむとしたから、さしもの法相教義も漸次衰頽の悲運に傾き、無礙圓融の華嚴宗派、代つてその全盛を極むるに至つた。その地論宗派の統攝もまた自然の情勢の然らしむるところ、蓋しこれみな渠が識見の高邁なるが效すところに他ならぬ。その講經現瑞の奇蹟と金獅相卽の妙喩との如きは、渠の學德の異凡なるを表はすものとして、普く學徒の記憶に親しいところである。後世法資に澄觀あり、また傳法の偉器たるに乖かず、異流の邪義を斥破して圓教の確立を成遂した。

如上記すところの他、なほ當代に開立されし諸宗尠なくはない。先づ慧光の四分律宗は、礪・宣・素の三家となり、更に一轉して南山宗派となり、善導の念佛法門は、道綽を承けて口稱正業を大成せるもの、更に後世慈日三藏慈愍流を唱導した。盧山・善導・慈愍の三流。その所傳に昌微の相違あれど、時代人心に影響せしめしところ決して尠くはなく、特に善導の一流その最尤にくらゐする。眞言密教は、既述の如く善無畏等の外來三藏によつて隆昌を遂げられ、特に不空はいはゆる四大譯家中の隨一に數へらるゝもの、その譯業の盛大にして、密典の多出された

る、實に餘他に卓越してゐる。資子慧果は、わが東密空海の法匠として名高く、孫弟眞・全は、また台密仁・珍の敎師として記憶さる。佛心禪宗に至つては、大に傳ふべきあり。初祖達磨、擁法西來して不立文字の建設以來、法資相繫ぎ、五祖弘忍の下、神秀・慧能の兩足、南北頓漸の禪風を唱導し、特に慧能は、六祖の衣鉢を繼げる人、門下南嶽・青原各々臨濟・曹洞の基礎を立て、潙仰・雲門・法眼の三宗またこれより起る。洵に晩唐敎界の大勢は、唯々禪門の獨壇場たるの觀があつた。而してその思想が、餘他諸種の敎學に著しき影響を與へしことも、もとより論なきところ、禪味の色彩は擧世不偏に瀰漫したのである。かくの如く李唐の佛敎は、特にその敎學に於て盛榮の極に達し、更に四邊に流入して、異國興敎の動機を助成せしこと極めて多々。先づ西藏佛敎は、これが西流して印度佛敎との相會の結果と見るべく、而してその轉流せるもの、卽ち滿蒙佛敎たり、更に朝鮮佛敎は、その東流せし結果に出で、而してその遠流せるもの、これ日本佛敎たるわけである。別してわが國にあつて當時の輸入文物中、佛敎思想を以てその尤とすべきことは、殊更いふまでもないところである。

李唐末葉武宗の破佛（三武法難の一）あり、當代唯一の慘事として傳へらるゝところ、從來隆昌を誇りし佛敎もこゝに一大頓挫を來し、加ふるに、その創傷未だ癒えざるに、たま〳〵更世五代の紛亂を現じ、法運の悲境ます〳〵甚だしきに趣いた。その後周の世宗によつて行はれ

し破佛こそ、かの三武と共に一宗の法難として教界不祥の極を致せしもの、寺像の燒毀、章疏の破棄等、正法まさに地を拂はむとするの概があつた。

爾來幾くもなく、紀元第十世紀の中葉、趙宋興つてまた法運の復活を見るに抵つた。その初頭列帝相次いで崇佛の儀あり、殊に太祖の代、金銀寫字の佛經を作り、また全藏印刻の端緒を開ける如きは、尤も大書して傳ふべきところ（一九頁參照）、その他講經の奬勵、譯業の促進等、弘法に資せる淨事極めて多い。梵漢の交通こゝに於てか旺んに、外來の沙門頻りに踵を亞ぐ。北印の天息災及び施護（Dānapāla）中印の法天（Dharmadeva）等は、その主たるものにして、旺んに翻譯の事業に從事し、所出大小顯密に通じて夥多しきものがある。惜しいかな、それ等の所出は、後世學者の依用するところ尠なかりしため、渠等譯家も、また比較的著名に至らずして終つた。

當代の教學、劈頭先づ見るべきは、即ち台家の復興である。即ち高麗諦觀章疏を携へて支那に來り、山家・山外異義を論じて對抗喧しく、かくして四明・孤山の出世に至つて、圓頓の教旨は愈々精究され、台宗の面目は益々發揮されたのである。更に禪宗に至つては、實に當代佛教の中樞たるの盛榮を致し、傳法の祖々脈々頗る繁衍を極めた。永明延壽は『宗鏡錄』の雄著を出し、佛果圜悟は『碧巖錄』の名篇をものす。五家七宗、法綱の擴張されたること、實に教界第一

の概を呈したのである。その他、華嚴にあつては長・晉二水のあるあり、南山にあつては西湖・靈芝大に顯る。念佛の一門また諸宗學匠に通じて修唱された。

宋代中頃、金軍侵入によつて江北一帶を奪はれ、僅に江南臨安に據つてその餘命を維持するの止むなきに抵つた。いはゆる南宋がこれであつて、國運の衰微は法運の浮沈と始終し、この間たゞ禪法と念佛との普流を見たのみである。

紀元第十三世紀の末葉蒙古起つて國內を侵定し、廣大なる版圖を擁して元朝を立てた。當代の佛教は、前代を承けて、禪宗――特に臨濟・曹洞の兩宗南北に盛榮を見たが、その他の諸宗漸く昔日の俤を失ひ、加ふるに初帝世祖は、西藏僧發思巴（Ba-sz-ba）を帝師として喇嘛教を崇敬せしことゝて、異教の勢力は益々隆昌を極めた。この間佛教々學上、念常の『佛祖通載』、覺岸の『釋氏稽古略』の出づるあり、前代末に成れる志盤の『佛祖統紀』と共に、教史研究の好資料として傳ふべきである。

元朝一百年を經て明朝これに代り、歷代の諸帝何れも佛教を保護せしことゝて、法運幾分の啓隆あり、特に禪門の一宗異教喇嘛と相並んで旺んに、更にその末期に至つて、念佛の一門また普流さるゝに抵つた。官廷勅して南北兩藏を刻せしめしは、民僧奮つて方冊經典を刊せしことゝ共に、特殊の偉業として傳ふるに足る。雲棲株宏・藕益智旭相前後して出で、何れも教界の

首班たり。特に智旭は、偉著『閲藏知津』を出して興學上當代掉尾の活躍を試みた。概して當代敎學の傾向禪淨一致の色彩を有せしことは、注目すべきところである。

紀元第十七世紀の中葉淸朝立つや、從來の喇嘛敎は歷代の保護を得ていよ〳〵旺んに、佛日の餘光はこれに反して益々稀薄となり、加ふるに前代より侵入せる基督敎・回敎等の、漸次國內に周遍せるあり、かくして現時にあつては、佛敎の生命全く失墜し了り、たゞ隨所伽藍殿堂の遺跡を留むるに過ぎずして、かの印度佛敎終末の運路を繰返すの慘狀を呈してゐるのである。

研究要 それ支那佛敎にあつて、その始終を通じて最も著しき特色を覓むれば、實に譯經の史實にあるてふことは、吾人の既に特記せるところである。（一六頁參照）。洵に譯經の事業は、支那佛敎が有せる獨自の面目であつて、而してその成果の如何は、やがて佛敎々學の上に多大の影響を與及せる點より考察せば、げにこの一事こそ、敎史を莊嚴せる最大要項といはねばならぬ。從つて敎史研究の問題となれるところも、主として譯經に關する上にその多くを見出すべきことを心得べきである。

◉

出來譯經の事業は、佛敎始來當初よりして創められ、元代初期に至る約一千三百年間の長時に亘つて行はれしことであるから、これに對するとかくの問題も決して尠くはない。譯經史實

の上よりは、もとよりそれ等の一々に就いて紹介すべきではあるが、今本講の主要とするところは、這般の詳細を盡すべき遑なきまゝ、就中特に問題の論議喧しき新舊兩譯の一面に就いて研究の方針を叙說し、以て初心就學の弄引に擬へたいと思ふ。

いふまでもなく新舊兩譯の區分は、唐の玄奘を以て劃されるのであつて、その本來の趣旨は、譯語の相違にあることもとよりのところなれど、新譯創唱の玄奘その人が、從來の性相融通の敎義に異つて、著しく性相別格の主張に立てるため、その所翻の上に這箇獨自の主張を一貫せしめて、いはゆる新譯は、單なる譯語の相違のみに止らで、大に敎義の異彩を示せるを以て、さてこそ兩譯の區分は、敎學成立上甚大の問題となれるところである。（尤も新譯は、單り玄奘のみに止らで、玄奘以後の義淨・不空等の如きにあつてもまた同樣なれど、これ等にあつては、やはりたゞ譯語上の相違に止り、然く敎義上の相違を見たるところがないから、今はたゞ新譯を玄奘に代表せしめて論ずるのである）。

先づ譯語の上に就いて考察せむに、兩譯の區分は、主として字音を譯寫するときと、字義を翻出するときとの二種として論ぜられる。先づ字音の譯寫とは、例へば『西域記』第二に、天竺の稱呼を說いて「天竺之稱異議糺紛、舊云二身毒一、或曰二賢豆一、今從二正音一、宜レ云二印度一」といひ、天竺の梵名（この梵名の語源に就いては、學者の異說紛紜としてゐる）を、舊にて「身毒」または

「賢豆」と寫せるを、新にては否らずとして斥け、「印度」を以てそれに充てたるが如き卽ちそれである。こは別に意義上の相違ではなく、新譯が舊譯を指して訛傳といへるものに當る。されば、何れの所譯に從ふも、別に意味の上に左右を來せるにあらざることは、もとよりのところ、たゞ字音の寫詮の巧拙をあげつらふに止ると見てよからう。然るに次の字義の翻出に就いては、意義上に相違を見、從つて全篇の綱格に著しき變異を招けるものなれば、敎理の研究上、特に多大の注意を要するところである。例へば「薩埵」（'Sattva'）を譯して、舊に「衆生」といひ、新に「有情」といへるが如きこれであつて、慈恩は『唯識述記』第一本にこの舊譯を斥けて、「梵云二薩埵一此言二有情一、有二情識一故……言二衆生一者不レ善レ理也、草木衆生」というてゐる。また「底栗車」（'Triyagyoni'）を譯して、舊に「畜生」といひ、新に「傍生」といへるが如きも同例である。而してこれ等は、畢竟單なる局限の意義の相違に止れど、もしそれ敎義の中核を詮表せる語句——例へば'Ālaya'を、舊に「阿梨耶」と寫し「無沒」と譯し、新に「阿賴耶」と寫し「藏」と譯するが如きは、單なる字音・字義の相違のみに止らずして、實に新舊敎義全部に貫通せる相違をなしてゐるのである。極言せば、大乘の二流卽ち相性兩宗の相違は、實にこの'Ālaya'の翻譯解說の如何にあるといつて可なるべく、かの三乘一乘の區別、佛果成不の相違、眞如受熏の當否等の問題は、何れもこれより流出されたるものに他ならぬ。曾て唐の靈潤が、新舊兩譯に存す

る十四相違を數へてゐるが、項々何れも諸箇相性兩宗の教義上の相違に他ならぬに徴するも。その趣旨を領得されよう。而してこはたゞ一例に過ぎないが、啻にこれのみに限らず、その他これに類する要語また決して尠くはない。一小微々たる語辭の翻譯の討究も、また決して輕々に附し去るべからざるところではないか。

概して兩譯の特徵を通觀するに、何れも長短の二面を帶びてゐると考へられる。舊譯は、多く、詞辭華麗に富み、音韻流暢を極むれど、字音・字義の上に嚴密なる確正を缺ける恨みあり、新譯は、音義の詮表極めて精密なれど、音韻串長に亘り、詞辭晦澁に陷れる嫌ひある。このことは、兩譯の代表大家たる羅什と玄弉との上を比較すれば、最も明かに首肯されるところである。而して、かゝる譯風を以てせる兩譯の內容が、教義上に然く著しき逕庭を來せることは、何の原因するところあつてゞあるか。曰く、それ玄弉は、從來慣用されし翻譯の語辭に就いては、大に慊らざるところあり、その渡天は主としてこれに起因し、梵語の討究を以てその專攻とした。さればかの地に在留せし長時の努力を、多くこれに傾倒せることはいふまでもなく、從つてその終學歸朝の後、唱說開始せる翻譯上の主張が、從來のそれに比して、事々相違を見たるは、まさに當然の沙汰である。而して、更にまた、かの地に修習稟承せる教義師匠が、特に從來の學派に異れる性相別格の護法系統にありしことゝて、その所奉の教義が、悉く新定の

譯語の上に表現され、かくして著しく教義の色彩を異にせる譯出を結果せしめしことは、這箇原因の要項といはねばならぬ。既に新譯の唱者は、その禀承の學系に、舊來の譯者と相容れざる相違を見たわけなれば、兩者はその立脚に於て融會し難き溝渠を造つてゐるのである。然るを、這般の事情をば顧みず、新譯の徒は、一概に舊譯を不正として斥け、甚だしきに至つては、自己所奉の教説に違せる經論は、これを僞作として否まむとせし傾きさへ見えてゐる。また舊譯の徒は、新譯の教義を以て悉く譯者の改竄と見做して、その價値を覆はむとせし迹さへ示してゐる。何れも單なる感情を先とせるもので、もとより取るべからざるところ、研學の徒の冷靜なる批判を要すべきは、卽ちかゝる點にありといはねばならぬ。古來の喧騷たる三乘・一乘の紛擾、法相・法性の鬪爭も、何れも這箇立脚の相違を無視せる結果に出でしもので、徒らにその比較を論じ、優劣をあげつらふ如きは、洵に由なき徒勞に終歸するものといはねばならぬ。さりながら、かくいへばとて吾人は、決して兩者の比較を徒勞の沙汰といふのではない。否、總じて學究の至極は、實に比較研究に於てその至美を見るべきなれば、這箇新舊の學風も、いかでか不問に附して然るべき。たゞその兩者の相違を釀成せる根柢を無視して、單なる皮相的優劣是非を爭ふ論議を排するのみ。もしそれこの根柢に立脚せる兩譯相違の比較研究は、もとよりその最も須要とすべきところ——恐らく支那佛教研究の首位を占むべきところといふべく、而

も、それだけまた最難の研究對象たることも當然の次第である。吾人は敎史研究の篤士が、從來學者 廻り來りし無意義の態度を一變して、飽くまで冷靜に、飽くまで綿密に兩譯の相違を檢尋し、由つて以て大に支那佛敎獨自の特色たる譯經史領の開拓に努力されむことを望んで止まない。乃ち本項が、特に這般の問題を局限して叙説せる微意も、また實にこゝにあることを領得すべし。

參考書 文献資料は例によつて、わが國近時所成の書籍より列擧せう。

一 三國佛敎略史 上中二卷 島地默雷・生田得能合著（明治二十三年刊）

二 支那佛敎史（愛楳全集所收） 一卷 藤井宣正稿（明治三十九年刊）

三 支那佛敎史 一卷 吉水智海著（明治三十九年刊）

四 印度支那佛敎史要 一卷 境野哲著（明治三十九年刊）

五 支那佛敎史綱 一卷 境野哲著（明治四十年刊）

六 印度支那佛敎通史 一卷 伊藤義賢著（明治四十三年刊）

七 印度支那佛敎小史 一卷 境野哲著（大正四年刊）

八 支那の佛敎 一卷 境野哲著（大正七年刊）

九　上世支那佛教學史　一卷　佐々木憲德著（大正九年刊）

一〇　支那佛教思想史　一卷　橘惠勝著（大正十年刊）

右の中、(一)『三國佛教略史』・(四)『印度支那佛教史要』・(六)『印度支那佛教通史』・(七)『印度支那佛教小史』の四種は、既に印度の教史を述ぶる下にて一言紹介せるところ（一二五頁參照）、(二)「支那佛教史」は、篤學なる著者の努力に成りしとて、叙述簡單なれど、大に學究的態度を示してゐる。惜しいかな所說前半を以て盡されてゐるから、梅田謙敬氏その後を補說して漸く全きを得、島地大等氏これを『愛樸全集』中に收輯した。(三)『支那佛教史』は、編年通史として首尾一貫せるもの、所說幾分通俗に失したれど、教史の大要を窺得するに於て、類書中最も適當せるものと謂つべきであらう。(五)『支那佛教史綱』は、先の『印度佛教史綱』と姉妹書たるの觀あれど、かれの幾分通俗的なるに反し、これは大に學究的たり、その所論微に入り細に亘り、洵にこの種教史中の雄著といはねばなるまい。たゞ惜むらくは、叙說編年通史の體裁を帶びず、紛糾雜然として、讀者をして一貫せる時代思想を捕捉せしめ難き憾みがある。(八)『支那の佛教』は、先の『印度の佛教』と同じく、もと講義錄誌上に掲載されしものゝ單行である。(九)『上世支那佛教學史』は、その題號の如く、佛教渡來の當初より六朝時代までの佛教々學の史的研究であつて、所論大に肯綮に値ひし、專攻の學士の披讀を要すべきところ、たゞし叙說が上世に限られ、支那佛教の精

華ともいふべき隋・唐諸大乘教の教學に言及されてゐないのは、甚だ遺憾の至りである、吾人は、著者が速にその後稿を果されむことを望んで止まない。（一〇）『印度佛教思想史』は、先の『支那佛教思想史』の姉妹書として出されしものである。たゞし、先のは所説甚だ紛糾して、著者の眞意を捕捉するに苦しむ憾みありしが、今本書は首尾大に整頓して、所説に傾聽すべき箇處尠なからず、その尨大なる雄篇は、實に類書中第一の偉觀を呈してゐる。

以上の他、通史ではないが、わが佛教大學よりして最近、

二　支那佛教史之研究　一卷　山内晋卿著（大正十年刊）

といふが刊行された。著者は斯界の權威として名あり、その深遠なる學識と卓越せる識見とは、教史關係の事々要項を捉へて縱橫に檢討を試み、斯面の開拓に照灼たる光芒を放射せるもの、洵に專門學士必讀の要書といはねばならぬ。その他、既述の『唯識發達史論』及び龜谷聖馨・河野法雲兩氏の『華嚴發達史』（大正二年刊）等の如きは一局部内に就いて多少の參考を値ひすべく、並に同樣の類書他に尠くはない。これ等は、今一々こゝに記載するよりも、後の教理篇の下に言及するが便宜なれば、これを省略することゝせう。たゞし、

三　支那淨土教史　二卷　佐々木月樵著（大正二年刊）

のみは、一言紹介するの要がある。本書は、題號の如く、支那淨土教の起源・發達等に就いて

詳細なる叙説を試みたるものであるが、由來淨土敎たる、佛敎々學の各種方面に影響されたるところなれば、本書の如きも、一面支那佛敎の大要に亘つて論及されたるの觀がある。學徒重要の參考たるものである。次に、

一三　支那佛敎遺物　一卷　松本文三郎著（大正八年刊）

は、著者が先年踏査せる佛敎上の遺物に就いて史的討究を試みしものであつて、書中挿入の數多の寫眞と相俟つて、讀者を啓發せしむるところ尠くはなからう。なほ吾人が、本項起稿中、常盤博士によつて『支那佛蹟踏査古賢の跡へ』なる雄著が公にされた。こは著者が昨年九月より本年一月に亙つて試みし支那漫遊の史的記錄であつて、取つてこれを披見するに、さすがに斯界專攻學士の勤勉になりしところとて、觀察奇燗、記事該博、或は石壁山に詣でゝ曇鸞の敎化を偲び、或は廬山を訪うて慧遠の墓塔を調べ、或は房山の石經を訪ね、或は龍門の洞窟を檢する等、凡そ支那佛敎史蹟の調査は、この短時日を以てして十分に果遂されたるを認むる。吾人はこの努力の成果を得て、敎史學界を益するところ甚だ多きを讃せねばならぬ。殊にその流麗なる文辭と夥多なる插圖とは、讀者の感興を惹くところ甚大なるものがあるといはねばならぬ。

その他、直接間接支那佛敎に關する參考文書として、村上博士の『佛敎史林』・『佛敎統一論』、薗田宗惠氏の『佛敎と歷史』等を擧ぐべきは、印度に於けると同じ。特に單行著書ならねど、支

那研究に就いて『東洋學報』並びに『支那學』の如き專門雜誌さへあつて、しば〴〵敎史に關する名說の揭載さるゝを見る。學者は須く披讀を心懸けねばならぬ。

次にわが國古昔に溯つては、やはり史家凝然に覓めねばならぬ。卽ち、

一四　三國佛法傳通緣起　上卷　凝然著

一五　八宗綱要鈔　二卷　凝然著

等これであつて、(一四)『傳通緣起』は、史實の記載を主とせること既述の如く、(一五)『八宗綱要鈔』は、敎義の叙說を主とし、その中しば〴〵史實の逕路を辿る。詞辭流暢、叙事摘要、洵に初學恰好の適書として、今なほ讀習絕えざるところである。また斷片資料に過ぎねど、かの地に求法渡航せる名僧、例へば圓仁・圓珍などの旅行記錄等は、當時の支那佛敎を知る參考として特殊の價値を有するものである。なほ德川時代、洛東堯恕の手によつて成れる、

一六　僧傳排韻　一百八卷　堯恕撰

のあるを逸してはならぬ。こは主として支那學僧を中心とし、外來の譯經沙門等を添加せる傳記であつて、敎史當面のものではないが、またその一部に屬する以上、大に重要を値ひするもの、特にその編述の體裁たる、佛僧の名稱を韻を以て排列し、その一々の名稱の下に簡潔なる傳記を抄記し、更に普く諸種の僧傳文書中に記載されたる各々の書名・卷名を指出して、某僧の

傳記を知らむには、何書何卷を討ぬべきことを教示し、初學研究着手の南針を與へたる點に於て、最も敬重を値ひする便書といはねばならぬ。たゞ惜むらくは、その排列韻字の次第に據れるため、初學の檢出に苦しむところであつたが、近時『大日本佛教全書』中にこれを收輯刊行するに當り、簡易なる索引を附して出されたれば、いよ／＼その至便を加ふることゝなつた。

次に支那撰述に就いて討ぬるに、さすがにこの種佛教史家の尠なからざりしことゝて、その成果に見るべきもの多々あり。但しその多くは、何れも各々所屬宗派に偏頗して、比較的公平を保てる發表を示してゐないのは、大に遺憾とするところである。例へば、『佛祖統紀』の如き偉大なる通史も、撰者志盤が台家の出なるため、叙說著しく天台の風格を帶びたるが如きこれである。さはれ後學は、これ等先覺の努力により、幾多有爲の資料の提供されしを多として、大に冷靜なる批判討究を試みるべきである。

さて、一貫せる通史として先づ第一に擧ぐべきは、左の諸書である。

一七　歷代三寶紀　十五卷　隋費長房撰（致六）

一八　佛祖統紀　五十四卷　宋志盤撰（致八—九・續二ノ乙ノ四ノ一—四）

一九　隆興編年通論　二十九卷　宋祖琇撰（續二ノ乙ノ三ノ三—四）

二〇　釋氏通鑑　十二卷　宋本覺編集（續二ノ乙ノ四ノ四—五）

二一　佛祖歷代通載　三十六卷　元念常集（致一〇—一一・續二ノ乙ノ五ノ二—四）
二二　歷朝釋氏資鑑　十二卷　元熙仲集（續二ノ乙ノ五ノ一）
二三　釋氏稽古略　四卷　明覺岸編集（續二ノ乙ノ五—六ノ一）
二四　釋鑑稽古略續集　三卷　明幻輪彙編（續二ノ乙ノ六ノ二）
二五　古今圖書集成釋敎部彙考　七卷　（續二ノ乙ノ六ノ二）

これ等の諸書は、大抵何れも既に佛傳篇の下に列擧解說せるところなれば（六九頁以下）、彼處を參照してその趣旨を知るべきであるが、今は本項必要の部分に就いて、再び叙述することゝせう。

その中、（一七）『歷代三寶紀』は、十五卷中前三卷に佛陀降生以來の年譜を列ねたれば、特に通史の資料として參考を値ひする。その第一卷には、「帝年上」として周・秦兩代の年譜を列ね、第二卷には、「帝年次」として前漢・新王・後漢三代のそれを、而して第三卷には、「帝年下」として魏・晉・宋・齊・梁・周・大隋七代のそれを列ねてゐる。その各卷、何れも初めに總叙を置いて、簡單に各々時代の概說をなし、年譜には、重要事項を摘記して、敎史の事件を明瞭にし得らる。これ卽ち、通史討究の資料とすべきところである。但し所說屢々過謬なきにあらず、學者の注意を要するところである。第四卷以下は、いはゆる經錄として譯經沙門の傳記を討ぬべく、ま

た這面の研鑽に充つべきである。(一八)『佛祖統紀』は、天台を中心に佛祖傳授の迹を記せるものであつて、佛典中第一の浩瀚なる史書たり。撰者志盤が、實に十年の歳月を經て大成せるものである。その準據するところ、曇遷の『宗源錄』、宗鑑の『釋門正統』にありといへども、更にかれらより統一を整へ顚錯を匡し、修訂刪補甚だ力めたるを見る。その叙狀、史法に倣うて、本紀・世家・列傳・載記・諸志に分ち、先づ四傳より始めて、天台祖々の傳記、著作の目錄等詳細を盡し、或は淨土教史を特叙し、諸宗概史を略說し、または一般佛教を汎見し、支那佛教を通觀する等。その抱懷せる內容實に多面に亘つてゐる。特に「法運通塞志」十五卷は、佛陀降生即ち周昭王二十六年より、宋代寧宗端平三年に至るまでの編年通史にして、古今を類別彙集せる「歷代會要志」四卷と共に、學徒攻學無二の參考に資すべきものとして、その價値極めて豐富、洵に支那佛教史研究者の必讀を値ひする要書といはねばならぬ。これを要するに、本書は、その採集記事極めて廣汎にして、而もその組織叙說甚だ整然たり。これを讀して推すものは、その一糸亂れざる統整を擧げ、これを毀して斥くるものは、その正史を倣へる潜越を數ふ。而もその是非は、本書の眞價をあげつらふ沙汰にはあらで、正史と比肩すべき編體より來れる所以を思はゞ。その權威をして却つて高めしむるものなることを了すべく、よしまた通篇天台に偏注すればとて、ために鼎呂の重みを減ずるものにあらざることは、もとよりいふまでもないところであ

る。(一九)『隆興編年通論』は、編年體の叙說として、通史の參考に値ひするもの、その組織稍々『釋氏稽古略』と類を同じうして、各々時代の名僧に就いて、その事業の始末を指示するに力めてゐる。(二〇)『釋氏通鑑』・(二一)『歷朝釋氏資鑑』また一讀を値ひすべく、特に『通鑑』は、また編年體の佛教記事にして、その組織司馬光の『資治通鑑』に範を取れるものといはれてゐる。(二二)『佛祖歷代通載』は、同じく編年體の佛教史書にして、その內容單なる史實の叙說に止らず、或は高僧の傳記、或は碑序の抄文等、洵に多岐廣汎に亘つてゐる。(二三)『釋氏稽古略』は、記事は大に簡單なれど、また編年體の叙說要領を得しものである。(二四)『釋鑑稽古略續集』は、前の(二三)の續編であつて、卷尾には、その採錄の年代・僧數を揭げて「始レ自二元世祖甲子一、至二此熹宗丁卯一、計三百六十四年、共僧四百三十餘人、釋聞叙畢謹識」といふ。(二五)『古今圖書集成釋教部彙考』は、歷代の佛教史實を正史に對照してその存否を檢覈せるものであつて、大に重要なる資料たり。以上列擧せる中、支那佛教史研究第一の要書として必讀を值ひすべきは、やはり浩瀚なる『佛祖統紀』を指示せねばならぬ。而して、その記事南宋理宗の代に盡くるは、甚だ遺憾とすべきところなれど、それ等は『通載』・『稽古略』等によつて補足せば、よつて以て支那佛教史上の要部を盡し得らるゝであらう。

以上は、何れも一貫せる通史の主なるものであるが、次にこれ等通史とその性質を異にすれ

ど、極めて重要なる史料がある。即ち諸種の高僧傳これであつて、何れも各々時代の名德によつて纂集されしものである。

二六　名僧傳抄　一卷　梁寶唱撰（續二ノ乙ノ七ノ一）

二七　出三藏記集　十五卷　梁僧祐撰（結一）

二八　高僧傳　十四卷　梁慧皎撰（致二）

二九　續高僧傳　三十卷　唐道宣撰（致二―四）

三〇　宋高僧傳　三十卷　宋贊寧等撰（致四―五）

三一　補續高僧傳　二十六卷　明明河撰（續二ノ乙ノ七ノ一―二）

三二　大明高僧傳　八卷　明如惺撰（續二ノ乙ノ七ノ三）

右の中、（二六）『名僧傳抄』は、抄者寶亮が、寶唱の撰したる『名僧傳』中より凡そ四十名の傳文を抄集せるものであつて、その卷首に列せる目錄によれば、原傳は總て三十卷ありしことを知られる。後の『高僧傳』は、これを依憑として輯成されたのである。因みに、わが國凝然の師たる宗性またこれを抄出して、『名僧傳要文抄』といふ。原傳の無き今日、以て學界の珍たるを失はぬ。（二七）『出三藏記集』は、既述の如く（三六頁參照）、現存支那經錄中の最古をなせるものであつて、十五卷中、最後の三卷に於て、安世高より法勇に至る三十二人の傳記を收載してゐる。

これ今の主として參考すべきところである。(二八)『高僧傳』は、通常『梁高僧傳』或は單に『梁傳』とも稱し、(二九)『續高僧傳』は、また『唐高僧傳』或は單に『唐傳』とも稱す。(三〇)『宋高僧傳』をまた單に『宋傳』と稱することもこれに準ずる。この三傳は、いはゆる三朝僧傳として知られ、また、次の(三二)『大明高僧傳』略して『明傳』といへるを合して、四朝僧傳とも總稱されてゐる。かくそれ〴〵時代の名稱を冠せるは、その撰述時代に約していへることはいふまでもない。四傳前後相承け、順次に歷代の高僧を記傳せるところ、僧傳の大綱これによつて見るべし。就中『梁傳』は、古來僧傳史料として最も重要視されしところであつて、その撰者に就いては、正史『隋書』には僧祐とあれど、これ誤謬であつて、慧皎たることと疑ふべくもない。その輯成資材は、右の如く『名僧傳』に據つたのであるが、書中撰者の自らいへるが如く(本傳第十四の自序)、名僧傳は敍傳褒揚の妥當を缺き、重要事項の記述を逸する等、體裁不備のところ尠なからざれば、乃ち本傳の編次を見るに至つたのである。その組織十科に分ち、佛敎始來當初より本傳撰出の年時卽ち梁の天監十八年に至る約四百五十年間に於ける高僧二百五十餘人、傍出附見二百餘人を採錄してゐる。洵に津々たる史料を討ぬべきである。次に『唐傳』は、唐の高宗の世道宣の纂輯にかゝり、また十門に分つて梁の初めより唐の貞觀十九年に至る一百四十餘年間に於ける高僧三百三十餘人、附見一百六十八人を登載してゐる。『宋傳』は趙宋の太宗端拱元年(988)贊寧

等の纂輯にかゝり、また同じく十科を以て、唐の貞觀年代より撰出當時に至る約三百五十年間に於ける高僧五百三十餘人、附見百二十餘人を掲記してゐる。(三二)『補續高僧傳』は、前の『宋傳』に續いてこれを補へるものゝ如く、卽ち宋・元・明三代の高僧を記傳せるものである。次の『明傳』も略々同樣の記事なれど、これに比して、『補續』はその包含内容一層豐富なれば、近代の僧傳を討ぬるに於て極めて重要なる參考たるを知らねばならぬ。

さてこゝに注意すべきは、右の各種僧傳中、その大部分は前の通史よりも先出にかゝるものなれば、(雙方に揭示せる著者の時代を對比してその旨を知るべし)、實にこれかれら通史編成に於ける所依資料となりしもの、その根本價値を有せるものとして、學徒の敬重を促す所以である。特に格段なる專門討究の上に啓示さるゝところ尠なからざれば、それ等專攻學士が必讀の寶典と謂つべきである。

次に、その記傳たゞ翻譯者に限つてはゐるが、極めて重要を値ひするものに、諸部經錄中の傳記がある。左の如し。

(三三) 大唐內典錄　十卷　唐道宣撰(結二)

(三四) 古今譯經圖紀　四卷　唐靖邁撰(結三)

(三五) 續古今譯經圖紀　一卷　唐智昇撰(結三)

三六　開元釋敎錄　二十卷　唐智昇撰（結四―五）
三七　大唐貞元續開元釋敎錄　三卷　唐圓照集（結五）
三八　貞元新定釋敎目錄　三十卷　唐圓照撰（結六―七）

經錄の種類は『縮藏』目錄部に收採のもの、右のほかなほ數部ありと雖、今は錄中所揭の翻譯諸家の傳記を主として、經錄そのものを主とするのではないから、その所要のみを列したわけである。よつて一々の解題はこれを省いて、たゞこの中、(三六)『開元釋敎錄』・(三八)『貞元新定釋敎目錄』の二種のみが最も完備し、就中『開元錄』を以て尤とすることを註するに止める。曩に藏經篇の下、藏經の目錄を敍するところに於て、一言これ等に言及して置いた。對照してその旨を盡すべし。なほ南條博士の『英文三藏目錄』にあつても、譯者の略傳が摘記されたれば、これまた必ず對讀を要すべきところである。

以上、通史・僧傳等は、敎史硏究の根本資料をなしてゐる。而してその他にまた、補助資料としての史的記事を討ぬれば、その數實に夥多し。就中、梁僧祐の『弘明集』十四卷（露四）、唐道宣の『廣弘明集』三十卷（露五―六）、後魏揚玄之の『洛陽伽藍記』五卷等はその最も主要なるものであつて、何れも有爲に調査して、所得甚た多きものといはねばならぬ。洵に僧祐・道宣の如きは、敎史上最も敬重すべき恩人たるを思ふべし。

次にまた、部分的記事ながら、各々種類別に區分して史的材料を討ぬれば、次の如し。

(三九)　大唐西域求法高僧傳　二卷　唐義淨撰(致七)

これは、既述の如く(一四八頁參照)、支那その他の入竺求法僧五十餘人の小傳であつて、義淨のいへるが如く、「高僧求レ法離ニ長安一、去人成レ百歸無レ十」(『翻譯名義集』第三)の慘事を敢てせる求法僧を記傳して、長く後昆に表彰せむと企てしものであつて、既にシャヷンヌの佛譯も出でしくらゐで、敎史硏究の重要資料たるものである。

(四〇)　比丘尼傳　四卷　梁寶唱撰(致十一)

(四一)　神僧傳　九卷　御製(致十一)

(四〇)『比丘尼傳』は、先の諸種僧傳が比丘傳たるに對して尼傳たるもの、(四一)『神僧傳』は、神異を以て知らるゝ名僧の記傳であつて、御製とは、明太宗の勅撰として有名である。

(四二)　僧史略　三卷　宋贊寧撰(續二ノ乙ノ二十三ノ二)

これは主として佛家事物の起源を敍せるもの、先の四朝僧傳と共に普く併讀されてゐる。その他天台・華嚴・淨土・禪宗等に關する史料甚だ多く、近くは『續藏』第二編乙第三套以下に收攝せる史傳部を檢せば、恩ひ半ばに過ぐるものがあらう。個々の人物に於ける別行史書また同じ。本項それ等一々の詳細を盡すの遑なければ、これを略することゝする。學徒請ふ彼々の所明を討

ねて、その委曲を究むべし。

次に泰西學者の教史研究の成果を見るに、この部に屬するものは比較的尠少にして、その調査不振の状態である。その類書としては、僅に數部を數ふるに過ぎない。

(四三) *Chinese Buddhism, a volume of sketches, historical and critical.* By J. Edkins. London, 1880.

(四四) *Notice of the Chinese Buddhism.* By J. Edkins. London, 1885.

(四三)は、著者エドキンスが支那佛教を叙して、基督教の見地より批評せるものであつて、(四四)もまたその評説である。なほ氏には、これより先、一八五九年に "*The Religious Condition of the Chinese*" (『支那宗教事情』)、及び一八七七年に "*Religions in China*" (『支那の宗教』)の著あり、何れも大に基督教的見地を發揮した。

(四五) *Catena of Buddhist Scriptures from the Chinese.* By S. Beal. London, 1871.

(四六) *The Buddhist Tripitaka.* By S. Beal. London, 1876.

(四七) *On Buddhist Literature in China.* By S. Beal. London, 1882.

(四八) *Buddhism in China.* By S. Beal. London, 1884.

右は何れもビールの著書であるが、就中支那佛教の概要を窺ふべきは、たゞ(四八)の一にある

のみ。この書は、記事通俗なれど要を得たり、特に律藏の研究に意を注げるもの丶如し。その他は、或は佛典の抄譯を輯め、或は藏經の解題を加へしもの等、而もそれとて、しば〲誤謬缺點を免れない。なほ、レミューザー・ジュリアン・シャヴンヌ等支那學者の權威尠くはないが、所傳何れも西天方面の史料を傳へて、支那の敎史研究の成果として擧ぐべきものを見ざるは遺憾である。

以上、支那佛敎史に關する參考文書の主要なるものを列ねたのであるが、こ丶に項を結ぶに方つて、特に注意すべき一事がある。抑々上來揭記せる文書は、根本資料たる支那の史書は、何れも佛家の手に成れるもの丶みで、更に少しも正史の記事に就かざりしことこれである。蓋し、支那にあつては、歷代朝家の修史官は、皆固有の儒敎を主とするの餘り、ことさらに佛敎事項の記載を避けてこれを錄せず、その措置大に公平を缺けるものありしため、法運の通塞は、偏に敎家の手によつて記修されねばならなかつた。王曼穎が慧皎に送れる書に曰く、「道安羅什間ニ表秦書一、佛澄道進雜ニ聞趙册一、晉史見レ捨恨ニ局當時一、宋典所レ存頗因ニ其會一」（『高僧傳』第十四）と。以て這般の情狀を窺ふべし。乃ちこの不滿は、崇敎の學僧を驅つて修史編傳の事業に從事せしめたのである。從つて嚴密に論じて、記事に幾分我田引水的の潤色なきにあらず。一例を擧ぐれば、佛敎の始來を力めて上代に置かむとせる如きこれである。これに反して、稀に

正史に這箇記事の掲載されたるところあらむか、そはたとひ片言隻語たりとも、最も珍重すべき正確資料たりといはねばならぬ。これ即ち、冷靜なる事實そのものを傳へたるがためである。されば教史の討究者は、よくこの事情を領得して、如上の資料に加へ、力めて正史の指示するところを檢するの注意あつて然るべし。

三　日本

教史略　日本佛教史も、その始終五期又は六期に區分して論ぜられてゐるが、例により、今はそれ等の穿鑿を措いて、直に史實に入つて、先づ佛教の初傳より考察を試みよう。普通わが國佛教始來の年時を、欽明天皇即位第十三年（552）とする。これ佛滅一千餘年、支那にあつては六朝梁代の末期に相當する。尤もこれより以前、繼體天皇の朝に既にその輸入を見たる形迹を云々するものあれど、そはまた非公式の沙汰と見倣すべく、而して欽明始來を以て公式の輸入と認むべきであらう。いはゆる欽明始來説とは、百濟の聖王が使臣をして佛像・經論を奉獻せしめしを指すのであつて、これが直に政治に關聯して、蘇我大臣・物部大連の爭端を開き、進取・保守、討議紛諍喧しく、その結果蘇我氏の勝利に歸し、よつて漸次崇佛の傾向を呈するに抵つたのである。爾來數十年間、聖德太子の出世の頃までは、正法何等の眉目を備ふるに至らず

して過ぎ來つたが、遂に太子の出世を得て、無比の發展を見るに至つた。それ太子は、いはゆる和國の敎主として、佛敎興隆の太祖たるはもとより、更に時代の先覺として、わが國文化の恩人たるはいふまでもなきところ、その一代の聖業、造寺興法、殖産工藝より、政治改革、外交親修等、文化の促進、國運の隆盛に資せられしところ、擧げて數ふべくもない。その十七憲法の制定は、千古不磨の皇謨を固むる基調を作り、三經註疏の述作は、萬代無限の敎誨を示す先驅をなせるもの、げに一代の偉業洪績は、古今無比と稱せられ、特に異數の法隆學旨は洵に想像に餘りあるところである。げに聖德の尊稱は、宜哉恰好の象徵を垂るゝものといはねばならぬ。

紀元第七世紀の初葉推古・舒明の交より、第八世紀の後期光仁終末の代に至る約一百五十年間は、飛鳥・奈良朝の時代であつて、政敎一致の風潮漸くその顯著を見、從つて佛敎にあつても、その隆昌いよ〳〵高度を加へ、寺像の建造、僧尼の度者何れも繁衍に趣き、維摩・仁王・最勝・御齊等の佛會また續々創起された。而して佛敎始來當時、その敎學的色彩鮮明ならざりしものが、當代にあつてはその面目漸く瞭然となり、就中三論・法相・華嚴・戒律等相次いで起り、成實・俱舍またこの間に附庸して、こゝにいはゆる古京の六宗成り、內外の兩面に亙り、正法の充實いよ〳〵明かなるを見るに抵つた。就中三論は、推古の末、高麗の慧灌によつて傳へられ、次い

で智藏の下智光・禮光・道慈等相次いで名高く、元興・大安の雙流派を分つて榮えた。而して成實の一宗これに附して傳はつたのである。法相は、孝德の朝、南都の道昭の傳來を以て最初とし、爾來六十餘年間に、智通・智達の第二傳、智鳳・智鸞・智雄の第三傳、及び玄昉の第四傳あり、かくて南北の兩寺その系統を分ち、敎理の淺深互に義解を競うた。華嚴は、聖武の天平八年（玄昉歸朝の年）、唐僧道璿の來朝を以て由來し、新羅審祥の講經に於て立宗を見、良辨僧正の興隆によつて、いよ〳〵その基礎を確定したのである。戒律は、また道璿にその因緣を求むべしと雖、まさしく立宗の初祖は孝謙の中に來朝せる唐僧鑑眞に俟つべきである。渠は實に爲法奉身の大士、その東征に際しては、苦心困厄十有二年、具に名狀すべからず、而も克くこの至難に打ち耐へて來朝することを得、爾來白四羯磨の作法は諸國に普く、三師七證の面目は隨所に具はるに至つた。本邦戒律の興隆は唯々渠を指示せねばならぬ。猶當代にあつては、聖武の崇佛、及びその結果として大佛造立の偉業こそは、敎史の記述に逸すべからざるところである。而も政敎一致の餘弊は、かの逆僧道鏡をして不逞の覬覦を企てしめ、天光動もせば暗覆を見むとするの大事をさへ結果せしめた。

紀元第八世紀の末葉桓武の朝より、第十二世紀の末葉賴朝の開幕に至る約四百餘年間は、平安朝より藤原・源平爭奪の時代である。當代の劈頭桓武の英斷によつて遷都の大業を果遂され、佛

敎の中心またおのづから南都より平安に移つた。而して敎界また偉僧最澄・空海の出づるあつて、燦然たる異彩を放つた。最澄はもと南都に修學し、後叡岳を拓いて王城鎭護の道場となし、厚く天皇の信任を受け、自ら入唐求法して、歸來大に一山の規模を張つた。その敎格いはゆる圓・密・戒・禪の四宗を該攝して、日本天台の面目を發揮し、敎義の廣汎深邃なる、實に西天の龍樹の往昔を偲ばしむるものがあつた。その宿志たる大乘戒壇は、渠の入滅少後に認許され、南都佛敎に對する北嶺佛敎に萬丈の氣焔を擧げた。げに各宗の敎學は、その淵源を本宗に湛へ、佛敎の文化は、その根本を當山に基すといふべく、渠がわが國佛敎上に有せる殊勝なる地位を思ふべきである。空海また修學を南都に發し、その入唐は最澄と時を同じうし、歸朝後東寺を創して密敎一宗の傳弘に力めた。金胎兩部こゝに於てますます其の枝葉を張り、高雄灌頂今なほいよいよその盛況を偲ばしむ。野山の開基、また渠に俟つことはいふまでもない。かくして天台・眞言の兩宗は、雙々相對し、延いて、當代を通じての幹流をなしたのである。

最澄の傳へし日本天台は、顯密の兩部を該攝せることゝて、天台密敎即ち台密なるもの起り、最澄の後、圓仁・圓珍前後入唐習學するや、その法門の色彩いよいよ鮮明となり、東寺密敎即ち東密との對峙を見るに至つた。かくて仁・珍の法孫互にその勢力を爭ひ、終に山門・寺門の分立を呈するに至り、特に山門密敎にあつては、五大院安然の大成著しく、爾來谷流以下、三昧・

法曼・穴生等の事相分派いよ〳〵繁衍を極めた。圓教の一面に至つては、慈覺（圓仁）門系良源を出し、その下惠檀二流の法水を湛え、特に惠心流の源信は、支那善導流の念佛を稟けて、わが國淨土敎義の先覺たり、かくてこの二流更に幾多の分派を出し、いはゆる惠檀八流の別をなすに抵つた。東密にあつては、空海の滅後敎相暫く不振の狀態にあつたが、その後源仁門下の二傑として有名なる益信・聖寶に至つて、事相漸く分派の端緒を開き、その門下に至つて小野・廣澤の雙幹を分ち、爾來各々支派を出して、いはゆる野澤十二流を岐つに至つた。

凡そ當代の佛敎は、總じて密敎を以て普遍されしものといふべく、東台の二密はもとより、その他舊來の諸宗にあつても、また多少その色彩を帶びぬものとてはなかつた。從つてその本領たる、祈禱の効果を競ひ、修法の靈驗を爭ふに至り、佛敎の社會的勢力は、その造寺供佛の旺盛なるに見え、宮廷落飾の頻繁なるに顯はるゝに至つた。特に本地垂迹說の發達につれ、山寺の僧兵神輿を擁して橫暴し、寧樂の法師靈木を捧げて跋扈せる如きは、這面の惡果を示せるものといはねばならぬ。かくして當代終期の敎界は、擧世、顰蹙の墮落を極むるに抵つたのである。果然、この反動は、人心を驅つて厭世隱遁の思想を抱かしむるに至り、惹いて淨敎念佛の一門漸くその萌芽を呈するに至れることは、思想の推移するところ、極めて當然の沙汰である。當代末葉空也出でゝ踊躍念佛を高調し、續いて良忍出でゝ融通念佛を弘布す。その他源信

の淨業、永觀の歸依等またその顯著なるものである。かくして世は源平の鬪爭となり、殺伐亂離の中、無常迅甚の考見四周に瀰漫し、終に法然・親鸞の他力念佛の興起を見るに抵つたのである。

紀元第十二世紀の末葉、頼朝開幕の初めより、第十四世紀の中葉北條滅亡の終りに至る約百五十年間は、鎌倉時代であつて、この時代は、その始終を通じて教界の各般に著しき更生を見、舊來の面目全く一新されし特徴を見出し得る。卽ち新宗の興起と舊宗の覺醒とはその主要事項であつて、これ實に前代佛教の凋衰墮落に起因せる反動刺戟といはねばならぬ。而してその新興諸宗中の尤なるものは、實に淨土・禪・日蓮の三教であつた。

淨土法門は、源空によつて大成された。尤も上述の如く、それより以前に、諸宗の學匠にして念佛を唱導するものがないではなかつたが、何れもいはゆる寓宗の域を脫することを得なかつた。實にこれを獨立して、よく一宗を開立せるは、渠源空の力に俟つたのである。渠は初め叡岳に修習し、その聰敏なる智慧と廣汎なる學識とは、夐に四衆を壓し、終に善導所唱の法系を辿り、源信所奉の遺指を訪ねて、念佛易行の一門を大成したのである。その簡明なる教條は、圓滿なる人格と相俟つて、擧世靡然としてこれに傾き、德化の廣澤古來稀有とさるゝところ、洵にわが國佛教史上の一新時期をこゝに劃するに至つたのである。その名著『選擇本願念佛集』

は、當時問題の偉書として幾多の插話を殘せることは、世人周知の事實である。その門下英哲甚だ多く、聖光は鎭西流を開き、證空は西山流を創む。隆寛の長樂寺流、長西の九品寺流またその淵源をこゝに歸してゐる。特に親鸞は、敎義の紛亂を甄別して、眞理の的傳者たり。その法世師匠に連坐して遠流に處せらるゝも、よく這箇逆緣を利用して邊民を化し、已證敎行信證を六軸に綴り、絕對他力易行を唯信に示し、かくして凡夫直入の妙敎は、深く人心を收攬してこれを善導し、淨土眞宗の一門は、こゝに勃然として興隆を來した。洵に緇素相卽の妙趣は、たゞこの敎によつてのみその究竟に到徹し得たるものといふべく、千載の下、渠が長へに見眞の聖者として歸仰さるゝもの、大に然るべきところといはねばならぬ。爾後、これ等の諸派各々法水を流すと雖、眞宗獨り遐代に繁くして、民心に影響するところ第一と稱せらる。因みに、當時證空の法孫一遍が時宗を開立した。また同系の新宗として數ふべきであらう。

禪宗法門は、榮西・道元によつてその興起を見るに至つた。尤も從來とても本宗のわが國學僧に知らるゝところなきにしもあらず、遠くは法相の道昭によつて傳來されたともいはれ、その後屢々流布に趣けるも、そのよく立敎開宗を見たるは、實にこの兩僧の力によつてゞある。榮西の所傳は臨濟禪にして、渠が再度の入宋求法に結果し、道元の所傳は曹洞禪にして、またその入宋求法に由來する。抑々當時鬪爭亂離の世相は、著しく上下人心の不安を抱かしめ、勢

ひ直截簡明なる示教に走る傾向を有するに至つた。直指人心、見性成佛の禪旨が普く一般に歡迎さるゝは、蓋し時機の當を得たるものといふべく、別して武家の信仰旺んなるは、もとよりそのところにして、かくて新興の本宗は、漸次隆昌を來し、後來立派分岐多きにつれ、益々その教綱の規模を張るに至つた。

日蓮法門は、日蓮の開宗たることといふまでもなく、渠はその豪邁なる氣質と熾烈なる信念とを以て、先づ叡岳の顯密雜濫を退けて、妙教の四海統一を期し、國柱の宣言もの〳〵しう、目覺しき破邪顯正を敢てした。その結果法難屢々身に臻ると雖、更に屈せず、高言奮鬪終に唱題成佛の法門を擁立するに抵つた。その活動的生涯は、洵に佛僧中の偉觀といはねばならぬ。弟子大器多く、法門遐代に旺んに趣いた。

さてかくの如き新宗の興起は、從來の古京・平安の舊宗を激發して、何れも多少の活氣を呈せしむるに至つた。法相に於ける貞慶・良遍の學風、華嚴に於ける高辨・凝然の德澤、戒律に於ける覺盛・叡尊の復興等、傳ふべき要項尠なからず、更に台・東の兩宗また振興の見るべきものあり、かくして新舊の諸宗叢々繁衍して天下に周布せるは、まさにわが國佛教の盛榮時代と謂つべきである。

紀元第十四世紀の中葉尊氏執權の初めより、第十七世紀の初葉豐臣滅亡の時に至る約二百七

十年間は、吉野・室町時代より戰國紛亂時代に相當する。前代に於て既に新宗の興起終りたれば、以後はたゞそれ等の起伏隱顯を以て史迹を形成してゐるのである。就中當代の前半は前代新興諸宗の消長を以て始終し、その後半は、戰國鬪爭亂離の渦中に左右されし趣きを呈してゐる。禪門は臨濟特にその隆昌を擅にし、京師・關東の間、五山十刹・二十四流、その繁衍思ふべし。應・燈・關の系統は夢想國師の法流と共に遐代いよ〳〵旺んに、この間一休宗純の奇行、虎關師練の史功等、特に著しきものがある。曹洞また北東邊陬に幾分の盛榮を見た。日蓮は、宗祖の孫弟日像に至つて、始めて京師に布敎を試み、いはゆる三黜三赦の困難を經て、漸く素志を果し得た。爾來東西に亙つて敎化甚だ旺んに、本迹勝劣の論議轉た激しく、異派分流漸次多きを加ふるに至つた。淨敎は、鎭西中特に白旗・名越の二流關東に覇を稱し、西山また多少の面目を保持した。眞宗は、宗祖の後、覺・存の間多少敎綱を張れるも、その後蓮如に至るまで、宗勢微々として何等の發展をも見なかつたが、爾來著しく振興の活氣を呈するに至つた。蓮如は本宗中興の祖、その簡明なる宗風は、普く四周の歸依するところとなり、主として北陸近畿にその法澤を灑いだ。實に本宗の勢力は、渠の力によつてその礎石を築かれたのである。

然るに如上の諸宗も、應仁の爭亂以後、いはゆる戰國の渦中に遭うて、大にその飛沫を蒙り、宗門の衰頽漸く甚だしく、法運の悲境轉たその度を增せることは、蓋し止むを得ざるところで

ある。況むや從來沈滯不振にありし舊宗が、また大にその運命を共にせることは、殊更いふまでもないところである。

紀元第十七世紀の初葉家康開幕の初めより、第十九世紀の中葉大政奉還の際に至る約二百七十年間は、いはゆる徳川時代に相當する。抑々家康の天下を一統するや、大に悟るところあり、卽ち佛敎を以て人心を收攬し、以て社會の昌平を測らむとし、旺んに興法の劃策を樹てたから、正法大にその面目を施した。さはれこれ、徳川政治の運用の具に資せられしところ、かの崇傳・天海の如きは、これが參謀の任に方れる偉僧である。既にかゝる狀態であつたから、各宗に通じて宗勢何れも活氣を呈し、特に敎學義解の發展は、洵に前代未聞の隆昌を來した。各宗學黌・談林の創設は、その最も著しき表象である。かくて學解の達者陸續として輩出し、鳳潭の新華嚴唱說、白隱の臨濟禪再興より、天台には安樂律の興るあり、眞言には正法律の行はるゝあり、その他眞宗には、本願寺の東西分裂以來宗學特に旺盛を極め、日蓮には、受不施・不受不施等の爭議より敎系ます〳〵複雜となり、一方また隱元の外來によつて禪門黃檗の一宗、開立を見た。曹洞宗派また月宗・宗胡を始め、卍山・道白等によつて大に古道復活の擧あり。加ふるに敎學の旺盛は、古來の義解を生命とせる倶舍・唯識等の研鑽を振興せしめ、これ等はいはゆる佛敎の基礎學として各宗共通に修習せられ、特に智・豐兩山その尤に居り、東西本願寺またこれに劣ら

す。かくしてその學解討究、實に百華競姸の趣きあり、一々の詳細到底小紙の盡すべきところではない。洵に當代は、いはゆる佛敎註解の時代とも謂つべき觀がある。

紀元第十九世紀の中葉維新の洪業大成さるゝや、百科文物頓にその面目を一新し、復古思想の影響は、神佛分甄の布令となり、神道偏重の結果は、廢佛毀釋の叫び喧しく、さてこそ維新の當初、正法の頽廢は實に慘憺の極に達した。幸ひに各宗護敎持法に熱心なる道士あり、その忠實なる悃誠は、百方奔走して狂瀾を既倒に回し、かくして一方の活路を開くや、その全身を捧げてこれが復興に奉仕した。爾來星霜五十年、信敎自由の聖旨は、正法の進航をいよ〳〵順調ならしめ、各宗の面目は、また舊態に增すの繁衍を呈するに抵つた。最近佛敎徒の事業は、布敎に興學に、宇內海外に遍く法雨を灑澤し、その他社會上下の世相に順應して、措置活動大に見るべきものあり。げに世界唯一の佛敎國としての面目は、かくして優に豐に維持されつゝあるのである。

研究要 日本佛敎史を研究するに方つて、先づ何人も注意すべきは、その特徵が、大に餘他異域のそれと相違せる點に於てゞある。卽ち佛敎が著しくわが國體に同化され、融合され、かくしていはゆる日本佛敎獨自の色彩を呈するに至れることこれであつて、洵にわが國民性情の

然らしむるところとして、如何なる外來文物をも悉くこれを同化し、何れもこれを國趣を帶びた思想として普遍せしめざるものはない。一例を擧ぐれば、かの本地垂迹思想の如き、その最も著しき恰例であつて、こは卽ち、異域本地の佛陀が國內所在の諸神と垂迹して、神佛不離の信仰對象となれるもの、實に外來思想の日本化は、這裡最も巧みになされてゐるのである。凡そかくの如きは、餘他の佛敎傳播地方には決して見るべからざるところであつて、わが國が、古來唯一の佛敎國として、特殊の地位を占むる所以、實にこゝに存すといはねばならぬ。されば朝文官書にあつても、支那の、法運の通塞を史乘に抹殺せるが如きとは異つて、隨所の古文書類にその參考資料を求め得られる。次に、かくわが國の佛敎が同化されたる點より結果して、一般に實際主義の敎義が普遍された事は、また大書すべき特徵として擧げねばならぬ。由來わが國の國民性情を案ずるに、著しく現實の觀念に傾向して、印度の如き幽玄なる思索に耽り、支那の如き煩瑣なる推究に沒する等の態度は、少しも窺ひ得られぬ。從つて、現在に遠ざかり、實際に離れたる所談には、自然注意を拂ふこと稀に、飽くまで現實を逐うて刻下の問題に觸れむとしてゐる。かの華天一乘の深遠なる學理漸く廢つて、淨土・日蓮等の實際敎義の勃興せるもの、洵にその所由ありといはねばならぬ。かゝる根柢に體達して、而して史實の變遷發達の迹に就かば、希くは日本佛敎の面目を把握されよう。その史上の主要問題の如きは、もとより各

種多々、一々指摘の限りではないから、またこれを省略して、如上研究要領の一言に止め、次に參考書目の一班を羅列せう。

參考書　わが國佛敎史に關する現時の文書は決して尠くはない。たゞしその多くは、主として一宗一派に關する別史、または各々個人に就いての別傳の類であつて、上下古今を通じての一般敎史としては、比較的その類に乏しい。明治の初め、島田蕃根氏等職に敎部省にある際、『佛敎史略』十卷を編し、今なほ漢文にて寫傳されてゐるといふが、始めて刊本として世に顯はれたのは、田島象二氏。大内青巒氏等の著作を指さねばなるまい。爾來續出の同本數種、大概左に列擧するが如し。

一　日本佛法史　三卷　田島象二著（明治十六年刊）
二　日本佛敎史略　一卷　大内青巒著（明治十七年刊）
三　三國佛敎略史　下卷　島地黙雷・生田得能合著（明治二十三年刊）
四　大日本佛敎史　一卷　村上專精著（明治三十年刊）
五　日本佛敎史綱　二卷　村上專精著（明治三十一年刊）
六　佛敎史要（日本之部）　一卷　境野哲著（明治三十四年刊）

七　日本佛教史　一卷　石原卽聞著（明治三十七年刊）
八　日本佛教通史　一卷、伊藤義賢著（明治四十三年刊）
九　日本佛教小史　一卷　境野哲著（明治四十四年刊）
一〇　平敍日本佛教　一卷　藤本慶祐著（大正六年刊）
一一　日本の佛教　一卷　境野哲著（大正七年刊）
一二　日本佛教外史　一卷　菊地亮三郎著（大正八年刊）

右の中、(二)『日本佛法史』は、編年體の敍說を以て、佛教始來より明治十五年までの史實を辿れるもので、當時にあつては、記事比較的整頓せるものとして推さねばならぬ　全部三卷中、前二卷を以て完結し、最後卷は、大德禪寺某僧の記述せる「扶桑伽藍紀要」を收載してゐる。いはゆる「紀要」は、わが國二十一本寺の梗概を記せるもので、玄智の『本願寺通紀』にも、既に採錄されたるものである。なほ本書は、明治三十年これを縮刷刊行し、「紀要」は削除して收めてゐないが、更に刊行年時までの史實を增補した。(三)『日本佛教史略』は、編年體の、極めて簡潔なものであるが、一目大要を知るに便がある。然るに本書は、吾人の知れるところは、たゞその上卷のみに過ぎないが、後卷が續刊されしや否や、これを明かにしない。(三)『三國佛教略史』は、簡潔なる編年體を逐へること既述の如し。(四)『大日本佛教史』は、著者村上博士が遠大の計畫

の下に、境野哲・鷲尾順敬の兩氏を率ゐて起稿されしものであつて、曩にいへるが如く（一〇二頁參照）、博士はこれより先既に佛教の史的討究の必要を高調され、『佛教史林』を刊して大に這面の機運を釀成されつゝあつたが、本書は更にその具體的綜合結果ともいふべきものであつたのである。その最初の豫定では、全部四卷完結の筈であつたが、惜しいかな、所出たゞ第一卷のみに止り、記事僅に奈良朝に於て盡きてゐる。その敍說博引旁證力めたりといふべく、所論の堂々と理路の井然とは、敎史中第一の雄書として他に比儔すべきものがない。加ふるに、附錄として「敎界年鑑」といふを添へ、宮廷の詔勅法令を始め、遍く講經修法・寺像興廢・僧尼存沒・海外往來等の、苟くも敎史關係の注意事項は、一目の下に指摘さるべく表示してゐる。洵に本書にしてその完成を見しとせむか、やがてそは日本佛敎史學の完成といふも過言にあらざるべく、吾人は永くそが初出に止れることを遺憾とせざるを得ぬ。さはれこの一卷は、苟くも敎史專攻の學士の、必ず精讀せざるべからざるところと謂つべきである。(五)『日本佛敎史綱』は、先のに引續いてその完成の豫備として出でしもので、かれの稍々略出抄本たるの觀あり、從つて記事の精密もとよりかれに及ぶべくもないが、而も終始完結せる通史として、大に參考を値ひするものである。(六)『佛敎史要』は、同じく幾分詳細に史實を敍說せるもので、後出の印度・支那の部と姉妹篇をなせるものである。(七)『日本佛敎史』は、博文館發行『帝國百科全書』中の

一編として出されしもので、所論に多少議すべきところあれど、また一讀すべきであらう。(八)『日本佛教通史』・(九)『日本佛教小史』は、何れも學徒の教科用書として出されしもので、共に印度・支那の部と相俟つて姉妹篇をなしてゐる。就中(九)は、叙説通史の要を得、初心の、簡單に教史の概念を捕捉すべく、最も適當なるものである。(一〇)『平叙日本佛教』は、日本佛教と表題するも、廣く印度・支那を併せ、三國に亘つての佛教史實を叙してゐる。就中、日本の部に多分を費せるところ、まさしく表題のよつて然るところであらう。而して、なほ平叙と冠せる如く、その記事極めて平易、何人の了解をも得べき通俗佛教概要である。(一一)『日本の佛教』は、もと講義錄誌上に掲載されしものゝ單行であつて、先の『印度の佛教』・『支那の佛教』と同類に屬すべきもの、而してまた通俗の叙説である。(一二)『日本佛教外史』は、その題號の示すが如く側面より史實を描寫せむと試みしものゝやうで、通俗の記事、讀んで興趣を惹くものがある。而して本書もまた、その記事印度・支那に亘つてゐる。

以上の他、鷲尾順敬氏の『日本佛家人名辭書』(明治四十年增訂刊)の卷首に、「日本佛教沿革略」の標題の下に通史の叙説あり、以て一般概要を會得するに足る。また土屋詮教氏の『日本宗教史』(明治四十年刊)は、その內容主として佛教史として讀むべきものである。

次に記事斷片ながら、教史研究に資すべき主要なるものに、

一三　佛教史論　一卷　境野哲著（大正五年刊）

一四　日本佛教史之研究　一卷　辻善之助著（大正八年刊）

等がある。前者は、主として日本佛教史上の事項に就いて、有益なる記事あり。後者は、近時學界の推稱を受けし雄篇として、普く世人の知れるもの。通部八百頁の大著、擧げてわが國佛教史上の重要問題を精究し、穿徹拆細、洵に周到の極を盡してゐる。著者の該博なる而も透徹せる識見は、這裡隨所に躍出し、高く學壇の權威として重鼎の價値を示してゐる。學者の必讀を要することはいふまでもない。

その他、關係書類の主なるものを搜れば、先づ『佛教史林』・『佛教史學』（明治四十四年以下刊）の兩誌を擧げねばならぬ。前者は、概して三國に亙れる記事多く、後者は、主として日本に關するもの多きを認むる。『佛教統一論』また教理方面に就いて參考に資すべし。

次に記事詳細ではないが、わが國現存各宗の綱要を叙せる文書中、夫々教史を述べたるあり、斷片ながら、相資して教史各般の概要を描出し得べし。その類書左の如し。

一五　佛教十二宗綱要　二卷　小栗栖香頂編（明治十九年刊）

一六　明治諸宗綱要　一卷　吉谷覺壽著（明治二十三年刊）

一七　佛教各宗綱要　五卷　佛教各宗協會編（明治二十九年刊）

一八　通俗佛敎各宗綱要　一巻　來馬琢道編（明治三十二年刊）

右の中、(一五)『佛敎十二宗綱要』は、編者が、わが國現存佛敎十二宗に就いて、夫々各宗の碩學の執筆せるものを纂めしものであつて、各宗の敎史・敎理の大要を知るに便である。本書の刊行に先ち、別にその草稿より南條博士によつて英文に譯出されたるものがある。東京市の刊行にかゝり、"*A short History of the Twelve Iapanese Buddhist Sects.*" 1886 といふ。(一六)『明治諸宗綱要』は、記事先のとその體裁を同じうしてゐる。(一七)『佛敎各宗綱要』は、これ等類書中、比較的最も專門的色彩を帶びたもので、佛敎各宗協會の討議の結果に成りしところとて、記事的確、最も依憑すべきものである。(一八)『通俗佛敎各宗綱要』は、その題冠の如く、專ら通俗を旨とせるもので、重版數度、普く繙讀されてゐる。

次に古昔に溯つて、史實を記載せる文書を覓むるに、やはり史家凝然の著作に俟たねばならぬ。卽ち

一九　三國佛法傳通緣起　中・下巻　凝然著

を主として、『八宗綱要鈔』・『淨土源流章』等、何れも主要なる史書である。曩に解題せるところを見るべし。(一三二頁參照)。また師鍊の『元亨釋書』中には、通史として參考すべき箇處があ

る。後に解題するところのやうである。

然るに、これ等の一貫せる通史、もしくはそれに准せる史書以外、僧傳を叙せる文書にあつて、史的討究に資すべき要書が甚だ多い。それ等は、何れも通史研究の根柢材料をなせるものとして、專門學者の必ず披見せざるべからざるところ、大略次下に記すやうである。

(二〇) 日本高僧傳要文抄　三卷　宗性撰（『大日本佛敎全書』）
(二一) 日本高僧傳指示抄　一卷　宗性撰（『大日本佛敎全書』）
(二二) 南都高僧傳　一卷　著者未詳（『大日本佛敎全書』）
(二三) 元亨釋書　三十卷　師鍊著（『大日本佛敎全書』）
(二四) 本朝高僧傳　七十五卷　師蠻著（『大日本佛敎全書』）
(二五) 續日本高僧傳　十一卷　竺道契著

右の中、(二〇)『日本高僧傳要文抄』は、凝然の師たる宗性の撰抄するところ、婆羅門僧正菩提遷那（Bodhisena）を始め、空海・宗睿以下數十人の紀傳の要文を抄出せるものであつて、中にはその本傳が散逸して他に覓め得ざるものを、本抄にその要文を窺ひ得るごときもあつて實に重要なる史料といはねばならぬ。(二一)『日本高僧傳指示抄』は、同撰者が、空海以下十五人の傳歴の綱目を列記せるもの、また珍重すべき史料である。惟ふに、渠撰者の資凝

然が、わが國佛教史家の第一人者として優秀なる所以は、まことに渠の卓越せる史的識見を禀承せる結果の然らしめしところといはねばなるまい。(三二)『南都高僧傳』は、行表・義淵以下南都古德の事歷を錄し、なほ興福寺別當・東寺長者・園城寺長吏等を列擧してゐる。(三三)『元亨釋書』は、わが國佛教始來以後元亨年中まで、七百餘年間に於ける高僧の事蹟、並に佛教の史實を記載せるもので、撰者師練が十有七年拮据經營の結果に成りしところ、實にわが國に於ける完備せる僧史の權輿をなせるものである。その體裁、支那三朝僧傳並に『釋門正統』等を參酌し、かつかの國の正史に倣うて、十傳(卷一―卷十九)一表・(卷二十―卷二十六)・十志(卷二十七―卷三十)に分ってゐる。十傳とは、高僧の列傳にして、傳智・慧解・淨禪・感進等十科あり、凡て四百三十五人を傳す。一表とは、欽明帝より仲恭帝に至る六百八十餘年間に於ける佛教史實を編年體に記錄せるもの。十志とは、學修・度受・寺像・音藝等の十科に分つ。その主眼僧傳の採錄にあれど、たゞにそれのみに止らで、實にかゝる廣汎なる內容を有してゐるのである。本書は、『碧山日錄』第一によれば、その列傳、もと凝然の稿草せるところであるといふ。されど師練は、これに就いて何等言及せるところなければ、その眞相は明かでない。よしまた凝然の稿草なりとするも、よつて以て師練の功績を沒すべきではない。なほ本書は、延文五年(1360)藏經中に攝せられ、わが國入藏の先驅をなせるものとして、藏經史上に要位を占めてゐる。また本書は、

單行及び『佛教全書』に收められたるものゝ他、『國史大系』にも收輯されてゐる。而して本書に就いては、古來『徴考』三十卷（著者未詳）・惠空の『和解』二十三卷、智逢の『便蒙』三十一卷等の子註あつて世に行はれてゐる。（三四）『本朝高僧傳』は、實にわが國僧傳の巨擘にして、通部七十五卷、目錄一卷、收載僧數一千六百六十八人に上り、かの五百に充たざる『釋書』の收載に比して、到底同日の談ではない。而してその內容は、法本・淨慧・淨禪・感進等また十科に分ち、慘憺たる苦心を以て編錄大成された。記事にまゝ精確を缺くところなきにしもあらざれど、この大著に對しては、畢竟白玉の微瑕たるに止り、依然として學壇の洪寶たるを失はない。（三五）『續日本高僧傳』は、本傳に漏れたる元祿以後の諸德を收載せるもの、また備ふべし。

明治の文運は、以上の諸傳に傑出して、更に廣汎なる內容と至便なる檢出とを具備せる一大僧傳を出さしめた。これ卽ち、

三六　日本佛家人名辭書　一卷　鷲尾順敬編（明治四十年增訂刊）

にして、その收載人員は六千を數へ、上下悠々一千三百餘年に亘つてゐる。洵に斯界唯一の人名辭書にして、學徒の稟くる裨益甚大なるものがあらう。本書は最初明治三十六年に刊行され、その後四十年に至つて更に一大增補を行ひ、卷首に「日本佛家年表」・「日本佛教各宗系統圖」・「諸宗門跡歷代」等を附加し、また本文に大に收載人員を添加し、かくして全くその面目を一新

した。實にわが國僧傳の完美をこゝに見るに至つたといはねばならぬ。

以上の他、各宗各派別々の僧傳文書あつて、以て如上諸傳の遺漏を拾加し得る。而してこの種の文書は極めて多く、而もそれ等の何れもは、大抵各宗各派不可缺の要書たるものである。專門研究にたづさはるもの、必ずそれ等の一々を討ねて、精緻なる考察を遂げねばならぬ。今一々列擧するの遑なければ、こゝには省略することゝする。たゞし、近時刊行の『大日本佛教全書』の史傳に關する部には、それ等の主要なる多數が收載されたれば、學徒就いて容易に披見し得べく、甚だ利便を稟くることであらう。近年また、個人々々の別傳の刊行さるゝもの尠なからず。これ等も、古來の這個別傳と共に須要なることはいふまでもない。なほ敎史の專攻に與らむもの、古來の宗論討議を始め、名家の日記・隨筆・或は寺誌・行事等の各部に亘つて調査する必要あり。而してこれ等に關する多くは、また『佛敎全書』に收輯載錄されてゐる。乃ち就いて見るべし。佛書以外の『群書類從』正續・『史籍集覽』・『大日本史料』等に就くも、またその所要を討ね得る。また一般正史にその記事豐富なることも、支那の事情に比して天淵の差あり。乃ち就いて隨所にこれを探るべし。

以上は、わが國に於て撰述されし敎史研究の主なる資料たるものである。而して今この條を終らむとするに方つて、更に、以上の如き直接間接の資料たるものと稍々その性質を異にすれ

ど、黑板勝美博士によつて提供された『國史の研究』(明治四十一年刊)てふ雄著のあることを紹介せねばならぬ。本書はその名の如く、廣く國史研究に關する研究方法を叙說せるもので、直接佛敎史實の研究に資すべきものにあらず。また間接研究資料の一面に充つべきものでもなく、唯々學徒攻學の指針たるいはゆる書史に他ならぬ。さりながら、著者は古文書研究に於ける學界の權威と稱せらるゝにそむかず、本書に於ては幾多重要なる古文書類を縱横に調理して以て國史研究の資材運用の資たらむと計つてゐる。而してそれ等の資料中には、敎史研究に益するもの極めて多ければ、本書の叙說は、これを有爲に利用するに於ては、一種のわが國佛敎史の研究法と見傚し得べきものである。殊にその記事佛敎關係の人物事項の多きは、最もよく參考に資し得べきものといはねばならぬ。初刊以來、普く學界を益するところ大に、而してその後更に記事を增訂して、一段の完備を期せられた。初學、幸にこれをわが佛敎史研究法としてその指導を憑らば、所得決して尠なからざることは、疑なきところといはねばならぬ。

泰西學者のわが國佛敎に關する著書は、極めて鮮少、況むや特に敎史に限つてのものとしては、もとよりこれを覔むべくもあらぬ。たゞし、總じて學術の史的討究をその研鑽の面目とせる渠等なれば、わが國の佛敎に關する叙說中にも、必ず史的發展の一面を論ずることを忘れてはをらぬ。而も渠等の著書は、何れも純粹の批判的態度に出で、いはゆる異敎徒の眼に映じた

るわが國佛教の論說として、特殊の暗示を附與さるゝところである。從つてその筆勢屢々基督敎との對比に向ひ、頗る國內自敎徒のそれ等とその趣きを異にするものがある。乃ち取つて、大に參考を値ひする所以を領せねばならぬ。尤も中には、渠等が甚だしき誤解より結果せる滑稽に近き過謬に陷れることもあれば、それ等は十分注意して、燃犀なる讀書態度に出づることを要とする。這般の消息は、初心の豫め心得置かねばならぬところである。今渠等の成果の主要なるものを擧ぐれば、次の如し。

二七 *Developments of Japanese Buddhism.* By A. Lloyd. Tokyo. (*Transactions of the Asiatic Society of Japan.* Vol. XXII.)

二八 *Japan; its history, traditions and religions; with the narrative of a visit in 1879–1880.* By E. Z. Reed. 1880.

二九 *Religion in Japanese.* By C. A. Cobbold. 1894.

三〇 *The Religion of Japan.* By W. E. Griffis. 1895.

三一 *The Development of Religion in Japan.* By G. W. Knox. New York and London, 1907.

三二 *The Creed of Half Japan.* By A. Lloyd. London, 1911.

三三　*Studies in Japanese Buddhism.* By A. K. Reischauer. New York, 1917.

右の中(二七)は、日本研究の雜誌 "*Transactions of the Asiatic Society of Japan*" (『日本亞細亞學會紀要』)第二十二卷の一部として出したもので、わが國佛教各宗の發達史實を叙說せるものである。(二八)は、その題號の如く、わが國の歷史・傳說及び宗教の各面に亘つてゐるが、就中佛教に關して記述するところ精細を盡してゐる。特に新興佛教たる眞宗その他に就いて大に注意を怠らざる形迹を認め得る。(二九)・(三〇)は、何れもわが國の宗教を說く、特に後者は佛教の記事が甚だ多い。(三一)は、簡單ながら、新說推すべきものがある。(三二)は、註して、'Historical sketches of Japanese Buddhism' といへるが如く、わが國佛教史實の要項を傳へむとせるもので、著者の該博なる日本に關する知識は、大に傾聽に値ひするところがある。(三三)は、著者が曾てニユーヨーク大學に依つて企圖されし哲學の講座に於て講演せるものゝ修正に成れるもので、實に外人の、わが國佛教研究書として、最新の發表にかゝるものである。その內容佛陀當時の思想界より起筆して、三國佛教々史の大勢を辿り、殊にわが國佛教の叙說に委しく、この間、或は教義を叙し、經典を記し、又は佛教思想とわが國民精神との關係を述べて、過去を顧み、現在を語り、未來を考ふる等、叙說大にその意を得てゐる。實に類書中の恰好書として推稱すべきである。

以上研究資料の須要書類を列擧したわけであるが、その他、なほ探りもて行かば、その關係文書決してこれに止るべくもあらず。殊にわが國敎史の研究に於て見遁すべからざるは、美術方面に關する考察にして、これが資料文書もまた尠くはない。されどこれ等は、更に別途の專攻に俟つことゝして、本項には述べず、たゞその研學に方つての留意を警促するに止める。

四　其　他

既にいへるが如く、(本篇「敎史の範圍」の下參照)、佛敎の傳播範圍は廣汎各地、決して一小限定されたる地域に止つてゐない。從つて上來の印度・支那・日本三國に就いての叙說の如きは、たゞその主要地域たるに他ならず、決してこれで以て敎史の範圍を盡せるものとして滿足することは出來ぬ。されば敎史の專門的精究を遂げむとには、よしそれ等の廣汎なる各々地域の全部を盡し得ずとするも、少くとも如上三國以外、なほ敎史上の重要位置に居る錫蘭・西藏及び朝鮮等の史實を考察するの要を認むる。さりながら、今初學の入門に擬するが趣旨たる本講にあつては、到底それ等各々の詳細を盡すべくもあらねば、こゝには凡てこれを省略することゝせう。たゞし、なほ一言すべきは、既に述べし參考文書中、これ等諸國の敎史研究に資すべき要典のあることである。例へば、錫蘭佛敎の研究に對しては、『島史』・『大史』等のあるあり、

（一三七頁參照）、西藏佛教の研究に對しては、ロックヒル・ターラナート八等の諸書あり、（九四頁及び一三九頁參照）、何れも既揭の解題を案じて、以て各々研究の資料をそれに仰がば、蓋しその方隅は了知されようと思ふ。朝鮮佛教に至つては、曾て今西龍氏が、雜誌『佛教史學』上に「朝鮮佛教關係書籍解題」と題して、懇篤なる指導を示されたるあり、（同誌第一編第一號―第三號參照）、學徒必ず披讀して、以てその指南とすべきである。その他の一々に就いては、こゝに盡すべくもあらず、偏に學徒の勤勉に俟つべきのみ。たゞし、初心もし如上本篇の敍說を適用して、以てその專攻に分け入らむには、希くは這箇各地敎史の討究に就いての方針は、自ら發明會得せられむか。然り、たゞそれ自らの發明會得を尙ぶ、千百の理論的說明は、畢竟これ權假の方便たるに過ぎざることを知るべし。冀くは諸士、眞摯なる努力を這箇敎史の開拓に盡されむことを。

第四部　教理篇

第一章　教理の研究

それ教理の研究は、佛教の研究中にあつて、實に第一義的主眼をなせるものである。こは必ずしも佛教の研究のみに止らず、凡そ如何なる宗教にあつても、その教理の何ものたるかを知ることは、洵にその宗教の全面を盡せるものといはねばならぬ。されば、上來、藏經を敍し、佛傳を討ね、教史を究めし所以のもの、一にこの教理の眞面を明確に把握せむための豫備的研究なりといふも不可ではない。何となれば、藏經の研究は、卽ち教理の由つて立てらるべき聖典の由來・組織等を明かにするもの、また佛傳の討査は、教理の由つて流れ來りし本源たる佛陀の記傳・思想等を委しくするもの、また教史の檢覈は、教理の傳播・弘布、さては變遷・發達の迹を究めて、その內容との交渉を詳にするものなれば　これ等の研究は、何れも教理研究をして、完備圓滿の實を期せしめむがための手段なりといはねばならぬ。もとより、各々獨立して一個の學たる面目を保てることは、いふまでもないところであるが、而もそれ等の綜合の上に眞の教理研究か果遂さるゝを思へば、げにこの研究こそ、實に佛教研究の最須最要、いは

ゆる第一義的のものといはねばならぬ。かくして佛教の研究は、こゝに抵つてその大系を盡せるものと謂つべきである。今乃ちこゝに教理篇の一部を設けて、これが檢尋の南針に擬せむとする所以、蓋し本講中の首腦をなせるものたるを知らねばならぬ。

さりながら、こゝに注意すべきは、凡そ教理の研究に就いて、訓詁的方法と達意的方法との兩面のあることこれである。いはゆる訓詁的方法とは、たゞ研究すべき典籍の詞辭章句を捉へてその意義を論じ用法をあげつらふ等、主として文字の穿鑿に拘はる方法をいふ。いはゆる達意的方法とは、研究すべき典籍の全局を一貫せる思想内容を把握して、その一部の所詮を了得體會するに力むるをいふ。(訓詁的・達意的とは、その名辭甚だ舊套を帶びて、意義の表現に巧妙を缺くと雖、從來の慣用上、姑くその稱呼を用ゐて置く)。この二者互に相俟つて研究の完美を期せらるべきもので、卽ち訓詁的方法は、達意的研究を的確に根據づくるもの、また達意的方法は、訓詁的研究の方向を益々奥深く進取せしむるものなれば、研學にたづさはるの徒、必ずこの兩面の方法を缺いてはならぬわけである。

然るに、從來學者の採り來りし態度を見るに、何れも單に訓詁の一面にのみ滯つて、少しも達意の了得に念ひを須ゐず、從つてたゞたゞ文々句々の解説に腐心努力して、一部の思想を把握し得ず、矧むやその思想の由來するところ、四周の影響するところ等、いはゆる歷史的、側

面的考察の如きは、全く無視不顧の狀態にゐて而も不足なきの有樣であつた。吾人が旣に敎史の研究の劈頭これを絕叫して、その不當を指摘せる所以、洵にこゝに存せるのであつて、かくの如きは、決して研究の當を得たるものにあらざると共に、またもとよりその完美を期せらるべきものでもない。向後の學者が、古來先覺の殘せるこれ等幾多の訓詁的成果を運用するに當つて、特にこの點に意を注ぎ、徒らにその同轍を繰返すに止まることなく、卽ちかの成果を楷梯とするも、而もよく全局の思想を達觀するの態度を忘るゝことなくんば、これ學究の方法を得たるものと謂つべきである。たゞし、かくいへばとて吾人は、決して訓詁的研究を排斥せむとするものではない。近代の學者、かの從來の學風の反動として、動もせば、偏に全局の概觀に面するに止まり、更に深奧なる內面の訓詁的穿鑿を顧みざらむとする傾向の尠なからざるは、甚だ寒心に堪えぬところである。曩にもいへるが如く、總じて訓詁的研究は、達意的研究に的確なる根據を與ふるものなれば、大にこれを尊重せねばならぬところである。もし然らざるに於ては、徒らに私見獨斷に走り、思はざる誤解謬說に陥るであらう。敢て初心の一考を促す所以である。

　因みにいふ、凡そ廣く研究方法として論ずれば、如上の他、なほ批評的・比較的等各種の方法があつて、何れもみな緊要とするところである。さりながら、今如上兩面のみに就いて論述せ

し所以のもの、これ從來敎理の檢尋に方つては、概してこの兩面を以て研究方法として云爲され來つたから、(よし達意的一面は閑却されたとはいへ)、今乃ちその慣用名目に準據して、姑くこの兩面を提示せしまでゞあつて、決して餘他のそれを顧みざるにあらざることを心得ねばならぬ。

第二章　研究の樣式

然るに敎理を研究するに當つて、その順序として、豫めこれが輪廓要旨を會得して、然る後その內奧の詳細に分け入るは、概して這般學路の通規とすべきところである。前者を概論として初學の入門とせば、後者は各論として、更に進んでの專門に擬すべきである。これ恰も、哲學に於て、先づその概論を講じ、然る後諸般の哲學問題に尋討すると、その揆を同じうするところといはねばならぬ。

さて、いはゆる概論(佛敎概論の名稱として立てらる)にあつて取扱はるゝところは如何なる內容なりやといふに、すなはち佛敎の意義・目的・分類等より始めて、經典の由來、傳播の歷史、敎理の綱要、修道の規準等、凡そ佛敎てふ名辭の表現せるあらゆる問題を概論するにある。されば、必ずしもたゞ敎理入門の楷梯とのみに限つてはゐないが、而もこの中に取扱はれたる各

種の事項は、何れも初心佛教入門の須知の要項のみなれば、教理の研究者、またもとよりこれを楷梯としてその進路に向ふべきである。矧むやこの部（概論）に屬すべき從來の典籍は、概して教理の綱要を叙するを以て主眼とし、自餘の諸項を記載する如きは、極めて近代の著書のみに限れば、今、教理の入門をこの部に指示するも、必ずしも不當ではないと考へられる。

次にいはゆる各論（各宗・各派または各系の教理をいふ）にあつて取扱はるゝところは、如何なる內容なりやといふに、これ純粹の教理の專攻にして、先づ教理を、その思想・系統を異にせる部類に區別し、その區別せる各々教理の思想發達・內容組織等の討究より、その各々教理相互の比較に及び、それ等の教理が成立宗派としての諸般の要項を論ずるものである。かの佛教各宗教義として研究さるゝ如きは、まさしくこの部に屬するものである。而してこは、實に教理の面目を專攻するものであつて、佛教研究の首腦はこゝに存し、從つてその困難の尋常ならざる程も、いふまでもないところである。

たゞし、こゝに注意すべきは、如上區別せし概論・各論といふも、たゞたゞ研究上の樣式たるに止つて、決して兩者その性質を異にせるものではなく、畢竟各論は概論を詳細にせるものに他ならない。されば、この兩者を、全然別個のものとして取扱ふべきでは無論ない。――極言せば、概論中にもまた概論と詳論とがあり、各論中にもまた概論と詳論とがある如く、これ

たゞ研學の便宜に備へし名稱たるに過ぎざることを知らねばならぬ。

以下、教理を中心とする關係要項を叙説して、研究の弄引に供へよう。

第三章　佛教の意義

佛教とは何ぞや、その意義如何といふに、凡そ佛教てふ名目のあらはすところは、これを三方面より解釋することが出來ると思ふ。一に佛に依るの教として見れば、佛教なる宗教は、佛陀の人格を如來・世尊と尊んで、その教説を奉ずる義であつて、佛陀を教主と仰ぐ宗教との義である。よつてこれは、佛陀中心の所談となる。二に佛陀卽教法として見れば、由來佛陀の教たる、宇宙・人生の眞理を開示せるものであつて、この眞理に順うて衆生を化導するものなれば、眞理の宗教との義である。よつてこれは、教法(眞理)中心の所談となる。三に成佛の教として見れば、かくの如く、佛陀を教主と仰ぎ、眞理に隨順する所以は、衆生が各々智見を開發し德行を成就して、教主と等しく佛陀覺者たらむことを理想とせるものなれば、卽ちこれ衆生成佛の宗教との義である。よつてこれは、佛教の効果中心――從つて信者の團結たる僧伽中心の所談となる。

佛教の內容は、かくの如き三方面を含んでゐる。而してこの三方面は、順次、佛教の體系を

形成しその内容を充實せしむる佛・法・僧の三寶たるものであつて、この三寶が一體たる所、即ち佛教の綱格たるわけである。よつて佛教の意義たる、即ち左圖の如き内容を含めることを知るべし。

佛教	依佛之教	佛（佛陀中心）	三寶
	佛陀即教	法（教法中心）	
	成佛之教	僧（僧伽中心）	

第四章　佛教の目的

既に佛教てふ意義の顯すところは、かく複雜多樣なれど、いはゆる佛教の目的とするところは、たゞ佛陀の悟境に到達して、その同證を得むとするにある。約言せば、佛陀となるにあるのである。尤も、廣く佛教を信行するものゝ中には、その志願とするところ、なほ他の世間道德の完成に置くものありと雖、それ等は、畢竟するに枝末の目的もしくは附帶の目的にして、決して根本の目的といふことは出來ぬ。根本の目的は、必ず佛陀同證の境地に悠遊せむとするにあらねばならぬ。抑々佛陀は、無漏の正智を以て宇宙の眞理に體達し、その眞理に順應して行動せるいはゆる覺行究滿の聖者にして、吾人がよつて以て最高の理想として歸仰すべきもの

である。從つて吾人がその同證の境地に到達せむことを欣ふは、まさに當然の次第といはねばならぬ。而してその目的を愜へむとせば、須くその佛陀の教法を信仰し、その教法を解了し、その教法のまゝに實行せねばならぬ。その教法を信ずることによつて拔苦與樂の目的を愜へ得べく、その教法を解することによつて轉迷開悟の素志を全うし得べく、その教法のまゝに行ふことによつて廢惡修善の趣旨を達し得べきわけである。而して、この拔苦與樂・轉迷開悟・廢惡修善の三者は、實に佛教の目的の三大綱領にして、前者はその宗教的方面、中者はその哲學的方面、後者はその道德的方面に契當し、順次吾人の精神作用の三面たる情・智・意に對配してその克成を見るべきもので、而もまたこの三者は、佛教の內容綱格をなせるものに相應するのである。されば卽ち、これを前章の所明と綜合して、左圖の如き關係を認める。

佛教	依佛之教（佛）	（信）拔苦與樂	目的
	佛陀卽教（法）	（解）轉迷開悟	
	成佛之教（僧）	（行）廢惡修善	

これによつて案ずるに、抑々宗教は信仰によつて成り立てるものにして、而して今わが佛教は、佛陀の人格を如來・世尊と尊んで、その教說を奉ずるもの、――換言せば佛陀の教說に信仰歸依するものなれば、この信仰の漂ふところ、卽ち諸苦の懊惱を遁れて、悠々の安適を得ら

るゝわけである。またわが佛教は、佛陀の教說卽ち眞理の顯現なれば、この教法を正當に解了するところ、卽ち迷闇の彷徨より轉じて、悟脫の開覺を得らるゝわけである。更にまたわが佛教は、衆生が佛陀同證を希うてこれを奉行するものなれば、その如實に奉行するところ、卽ち諸惡の罪濁を去つて、善根の高德を得らるゝわけである。

　これを要するに、佛教の意義內容は、卽ち佛・法・僧の三寶たり、その目的歸趨は、卽ちこれを信・解・行して、佛陀同證たらむことを期するにある。されば佛教徒たらむもの、先づ以つてこの三寶に歸依して、その信念の確立を計らねばならぬ。古來、いはゆる三歸と稱して、教徒行狀の依憑をこれに取りし所以、洵に尤もの至りである。而してまた、佛教研究者に就いていふも、この歸依の心は、實にその研究の精神根柢にして、もしこれを他にして佛教の眞相を如實に解了せむことは、決して望むべくもあらぬ。されば行——卽ち實際の踐修は、卽ち三歸の隨一たると共に、またその總體とも見做さるべきわけで、洵にこの實踐こそ、佛教が宗教としての最も著しき標幟をなせるものといはねばならぬ。佛教の中には、極めて幽玄なる哲理を談ずるところあれど、哲理の所談それのみを以て、決して佛教の面目とすべきではない。摯實なる實踐ありてこそ、そこに佛教たる面目を認むべきで、これ卽ち、單なる理智を弄ぶ世間の學術と大なる逕庭を存するところといはねばならぬ。往昔、唐の白樂天が、鳥窠禪師に問うて、

如何なるを佛教といふやというたところ、禪師は直に七佛通誡偈即ち「諸惡莫レ作、衆善奉行、自淨二其意一、是諸佛教」といふを以て答へた。すると樂天更に問うていはく、かゝることは今更聞かずとも、三才の幼童も既に知れるところであると。禪師すかさず言葉を繼いで、三才の幼童の知れるところも、白髮の老翁猶且行ひ難しといつたとのことである。げに實踐の必要を說破し得て巧みなるもので、佛教の面目は、たゞたゞ實踐修道にあることを領すべきである。

第五章　佛教の分類

佛教の教說總じて八萬四千と稱せられ、その包含內容の多岐なる、實に各種宗教中の尤にくらゐしてゐる。されば、古來各種の名稱の下にこれが分類按排され、以て相互の秩序及び關係等を明かにせむと力められてゐるわけで、いはゆる教相判釋と稱して、各宗の祖師がその立教開宗に際して教說の組織的判定を試み、よつて以て自己所奉の法門の地位を詮顯せむと力めたるも、またその分類按排たるに他ならぬ。

さて、その分類の形式は、實に各種多樣にして、決して一準ではないが、最も普遍的に認容されたるところは、いはゆる大小・權實・聖淨・顯密・教禪等の名目によつて按排さるゝところこれである。その他、天台の五時八教、華嚴の五教十宗等の如き分類も有名なるものとして廣く知

られてゐるが、これ等は、各々自宗の法門を中心とする特殊の立脚に居せるものなれば、彼此の見解互に乖隔して如上の普遍的たるに比ぶべくもない。而して今本章にあつては、もとより一般分類を標準として談ずるを以て、如上の各種名目に據して、その解説を試みることゝせう。

先づ最初に大小卽ち小乘・大乘とは、凡そ小乘・大乘の目は、佛敎入門の最初に於て聞くべきところであつて、これは主として佛敎の敎理的內容より分類さるゝ區別である。元來乘（Yāna）は運載を義とし、卽ちこれによつて、衆生を運載して生死の迷海を超度し、解脫の彼岸に到達することを意味するものなれば、總じていへば、佛敎の敎理は、直ちにこれを乘といふべきである。然るに、佛敎の思想が漸次發達するに及んで、その思想の淺深によつて、こゝに小乘・大乘の區別を見るに至つた。しかし、それとて、最初は後世にいふ如く、これが褒貶の意味を以て區別されしにはあらず、たゞ對比的の名として稱せられしに過ぎなかつた。よつて、小乘經典中にも大乘の目は存して、たゞ深遠なる佛說の敎理そのものを指示する語として用ゐられてゐたのである。然るに、いはゆる大乘敎の興起するに至るや、この區別に褒貶の意味が附せらるゝやうになり、別して大乘敎徒は、小乘敎理に對して激しき攻擊の矢を放ち、小乘敎徒またこれに默せず、かくして爾來轉た兩者の爭諍を見るに至つたのである。今左に、この名稱が褒

貶の詮表を以て用ゐらるゝ意義を檢覈せう。

さて、大小二乘の相違は、洵に多種異様で、一言を以て盡し難いところであるが、これを大體、その目的・智解・修道・證果の上よりして考へてみる。先づ目的とは、小乘は、いはゆる自調己度・自己獨濟にして、唯々自身の得脫を計るをこれ志願とし、餘他の濟度の如何は、少しも問ふところではない。然るに大乘は、いはゆる自利々他・自他兼濟にして、啻に自身の得脫を計るのみならず、他人の濟度をも計らむとする。さればこれ、個人主義に對する博愛主義として見らるべきであらう。次に智解とは、兩者の哲學的思索にして、先づ世界觀に於て、小乘は、萬有の生滅窮りなき差別のみを認むる現象論に居し、大乘は、生滅差別の現象以外に、更に生滅差別を泯絶せる平等絶對の眞如を認むる本體論に就く。また人生觀に於て、小乘は、たゞ消極的に現世の苦相のみを觀ずれど、大乘は、更に積極的に解脫の樂鄕を觀ず。次に修道とは、小乘は、たゞ見思二惑を斷じて人空のみに立てど、大乘は、更に塵沙・無明を斷じて、人法二空に居す。次に證果とは、小乘は、いはゆる灰身滅智に入り、大乘は、いはゆる妙覺佛果を全うするものである。

これ等の他、佛陀に就いて小乘は生身一佛を立て、大乘は三身多佛を立て、行位に關して、小乘は隔歷不融を談じ、大乘は融通相即を談ずる等、幾多の相違がある。これを要するに、古

來佛敎學者が大小二乘を解して、小に小・少・劣の三義を立て、大に大・多・勝の三義を設け、兩者に截然たる褒貶を劃せし如く、如上の解說は、卽ち、小乘は小機の托する敎、大乘は大機の托する敎たるわけである。而して、更に兩者の概括的面目を見るに、小乘は、嚴肅主義、消極的の態度に傾き、大乘は、自由主義、積極的の態度に出でゝゐるといひ得る。これ卽ち、小乘は、比較的鮮明に原始佛敎の面影を傳へ、大乘は、更に後世の發達佛敎の風格を帶びたるものと認むべきであらう。さりながら、如上兩者の區別は、もとよりたゞ一往の所談に止れるものであつて、決して絕對的儼然たる區別を下すことは出來ぬ。何となれば、小乘中にも、大乘的色彩を帶びたる所談をなせるあり、また大乘中にも、小乘的形式に類せる構想を示せるあつて、這般の相違は、輕々に斷ずべからざるところである。されば、兩者の區別は、もと敎理上のそれなれど、推鑿の窮まるところ、畢竟敎理上の區別を明確に劃き得ざるに至れる趣きがないでもない。學者須く心して、一概にこの名稱に捉はれ、思考の跼蹐に陷ることのなからむには、洵に學幸の至りといふべきである。

次に權實卽ち權敎・實敎とは、權は權假にして方便に亘るをいひ、實は眞實にして方便に亘らざるをいふ。その本來の區別は、華嚴一家に於て、自他敎說の優劣を分つ目として用ゐられ、特に法相・三論を以て權敎とし、自家法門を以て實敎とせるに基せるやうである。さりながら、

爾來この目は、相對優劣をあらはす各種の區別に用ゐらるゝやうになり、例へば、右の大小二乘に就いていへば、小乘は權にして大乘は實たり、また聖淨二門に就いていへば、聖道は權にして淨土は實たりといふが如く、各々自家の敎說を以て實となし、餘他のそれを以て權となすに抵り、その用途比較的廣汎に亘れるやうである。さりながら、大乘中、いはゆる華・天・密・禪を四家大乘と稱して實敎となすに對し、法相・三論を權敎と目せらるゝは、一般に是認されたる稱呼のやうである。

次に聖淨卽ち聖道・淨土とは、主として實踐修道の上より立てし分類であつて、聖道とは、この世界に於て證果を得と立つる法門、いはゆる此土入聖の敎であり、淨土とは、佛力によつて淨土に往生して證果を得と立つる法門、いはゆる彼土入聖の敎である。かく彼此二土の相違よりして佛力加護の如何が分れ、かくてこの分類は、やがて自力・他力の區別となる。卽ち聖道は自力なり、淨土は他力たるわけである。かつまた、自力は修道の困難あれば、いはゆる難行たり、他力は修道の容易を得れば、いはゆる易行たるわけである。よつて總括していへば、聖道は自力のゆゑに難行、淨土は他力のゆゑに易行となる。なほこの分類の中にも、その內容を檢せば、幾多の複雜を釀し、自力中にも他力の形式を談ずるあり、他力中にも自力の要素の認めらるゝあつて、敎義の左右、所談の相違、區々としてゐる。

次に顯密卽ち顯敎・密敎とは、主として眞言一宗に於て用ゐらるゝ分類であつて、總じて佛敎を、その敎主に就いて、釋迦所說・大日所說として區別せるものである。卽ち顯敎は、應身佛陀たる釋迦の說くところ、その說相、對機の淺深高下に順應して施設せるものなれば、勢ひ方便に亘るを免れずとなし、密敎は、法身佛陀たる大日の說くところ、その說相自身內證の秘奥をその眷屬に直說せるものなれば、純乎たる眞實を開顯せるものであるといふ。

次に敎禪卽ち敎宗・禪宗とは、特に禪門一家に於て用ゐらるゝ分類であつて、凡そ大小・權實等の如何を問はず、經論各種の文字說相の上に滯るを敎宗となし、文字說相をからず、敎外別傳して、直爾に成佛の的示をなすを禪宗とする。いはゆる頓敎と稱せらるゝ所以、こゝにある。

さて、上來述べし分類を各々宗派に對配せば、倶舍・成實・律宗等は攝して小乘に屬し、法相・三論・天台・華嚴・眞言・禪宗・日蓮・淨土諸宗等は悉く大乘に屬する。大乘の中、法相・三論は權敎にして、餘他は實敎である。また大小・權實等の如何に拘らず、淨土諸宗以外の各宗は凡て聖道門にして、淨土諸宗のみは淨土門である。また同じく大小・權實等の如何に拘らず、眞言以外の各宗は凡て顯敎にして、眞言のみは密敎である。また同じく大小・權實等の如何に拘らず、佛心以外の各宗は凡て敎宗にして、佛心のみは禪宗たるわけである。

以上は、先にもいへる如く、最も普遍的に認容されたる佛敎の分類であつて、かの各宗祖師

によつて試みられし教相判釋なるものは、これ等の上に立てらるゝわけである。その教相判釋によつて各種の教格が査定され、かくして佛教の分類は、最も微細に盡さるべきわけであるから、それ等の攻究またもとより緊要とするところではあるが、今はたゞ普遍的一面の叙説に止めて、餘他の言及を見合せよう。

第六章　教理の内容

既に佛教の教説は、かく廣汎多岐に亘つてゐるが、もしこれを總括してその體系を立つれば、卽ち緣起論と實相論との二種論脈に結歸することが出來る。いはゆる緣起論とは、萬有現象の依つて生ずる本源を究め、その本源よりして現象の開發する趣旨を說かむとするものであつて、卽ち竪に萬有の緣起する所以を示さうとする。いはゆる實相論とは、既に表現されたる萬有現象に就いて、その實相本體を詳かにせむとするものであつて、卽ち横に展開せる現象そのものゝ本體を探らうとする。されば、緣起論にあつては、萬有の因緣生起を論ずるものであるから、その所談は時間的にして、萬有が、その能生の本源より開發し來れるさまを論理的に說明せむとする態度を取り、實相論にあつては、萬有の實相本體を究むるものであるから、その說明は空間的にして、而も直覺的に實踐主義の態度を取る。

尤もこの緣起・實相の兩面は、啻に佛敎のみに限らず、凡そ何れの學術討究に於ても、必ず思考さるべき態度である。例へば、水を說明して、水素二と酸素一とより成るといふ——卽ち H_2O なる方程式にてあらはさるとの如き化學的解釋を下す場合と、また水は透明の液體にして、浸潤の性質を帶びてゐるとの如き物理的解釋を下す場合との兩面があつて、前者は水の成立因緣を述ぶるものなれば、卽ち緣起論的說明に當り、後者は、水そのものに就いての當面の觀察を下すものなれば、卽ち實相論的說明に當るがやうである。（こゝに化學的・物理的といへるはたま〱例證として擧げたまでゞあつて、これがそのまゝ夫々緣起論的・實相論的といふと同じ意義でないことはいふまでもない）。諸種の經論、その所說、何れもこの兩面の何れかに相當し、而してそれ等の經論を所依として立敎せる各宗の面目またこの二系の何れかに攝屬してゐるのである。

さて、その緣起的方面に據して、試みに、萬有現象は何ものより生じ來つたかといふに、佛敎に於て談ずるところは、專ら衆生の內界に重きを置き、以て諸法の開發を論ずるものであるから、敎理上緣起論系に屬するものを分類して、業感緣起・賴耶緣起・眞如緣起・法界緣起・及び六大緣起等の諸說が立てられる。その業感緣起といふは、卽ち毘曇宗（後に倶舍宗）等の說くところであつて、諸法の緣起する所以は、全く衆生各々の業力の所感であつて、卽ち善惡の

業力は善悪の果報を感じ、その果報のところに更に業力を積んでまた果報を感じ、かくして因果循環盡きざるものであるといふ。その賴耶緣起といふは、卽ち法相宗等の說くところであつて、萬有開發の本源は、衆生の心識たる阿賴耶の中にあり、卽ち賴耶本識中に攝在せる生果の功能たる種子よりして諸法を顯現するものであるといふ。佛敎々學中にあつて、最も唯心論的色彩の鮮かなる所談に出づるものである。その眞如緣起（或は如來藏緣起ともいふ）といふは、卽ち『起信論』等の說くところであつて、宇宙一切の萬有は、みな一心眞如の理體より生起せるものであるといふ。いはく、如來藏心一度無明の妄染に熏せらるれば、湛然たる大海が、恰も風向の緣によつて千波萬浪無量なるが如く、こゝに染淨の諸法が生起さるゝに至る。卽ち『起信論』に三細六麁を以て說けるものがこれである。その法界緣起（或は無盡緣起ともいふ）といふは、卽ち華嚴宗等の說くところであつて、法界の諸法塵々悉く諸法を攝具して緣起し、その關係重々無盡、單に眞如の一法のみを以て緣起の本源とするにあらず、いはゆる主伴相卽、擧一全收の妙趣を說くものである。その六大緣起といふは、卽ち眞言宗等の說くところであつて、萬有の諸法、何れも地・水・火・風・空・識の六大より緣起し、卽事而眞、六大無礙を談ずるものである。

次にその實相的方面に據して、試みに萬有現象の體用を推究すれば、その所談の淺深相違す

るところ、空無論・中道論等の諸說が立てられる。その空無論といふは、これに相對的・絶對的の二種あり、前者は、卽ち成實宗等の說くところであつて、萬有に、假有・實有・眞空の三面ありと立て、而してその眞空を以て究竟第一義となす。而もこれ、たゞ現象上、有空相對しての空論たるに止れば、卽ち相對的空論といはねばならぬ。（これに對する相對的有論は、かの毘曇宗等に說くところであつて、由來小乘敎にあつては、たゞ現象のみを談じて本體に及ばず、而してその現象悉く實有のものにして、その體――本體にあらず――過・現・未に亙つて恒存すといふ。いはゆる三世實有、法體恒有の所談これである。今成實宗に說くところは、これに異つて、その所論の深遠なる、殆んど大乘の累を摩せむとするの觀あれば、古來分通大乘といはれてゐるくらゐである）。後者は、卽ち三論宗等の說くところであつて、諸法の本體は不可得絶想のものとなし、言陳詮表を拂ふところ、これ眞如の妙理であると立つるものなれば、卽ち絶對的空論といはねばならぬ。その中道論とは、卽ち天台宗等の說くところであつて、有空相卽・三諦圓融の妙旨のもと、現象と本體とは鎔融無礙にして、いはゆる中道實相なりと立つる。先の緣起論系に於ける法界緣起の所談と相俟つて、佛敎哲理中の最高最深の極說である。

然るに、この緣起・實相の二系は、本來決して相反せる說にあらずして、たゞその敎理構成の要點を異にするに止るのみである。されば兩者須臾も乖離すべきものにあらず、互に相依り

相俟つて、以てその敎理を賓成すべきものなることを知らねばならぬ。殊に法界緣起・六大緣起及び三諦圓融等の說にあつては、既に緣起・實相の論旨全く調和されて、たゞ敎理の思索、說明の形式を異にするに過ぎざるが如き觀を呈してゐる。學者決して截然たる區劃をこれに思惟すべきではない。

さて、佛敎々理の構成は、大要如上の緣起・實相の諸說に收攝されるわけであるが、先にもいへる如く、佛敎の目的は、衆生が三界の迷境を脫して、佛果の悟地に達せむとするにある。よつて直接這般の目的を主眼として、修道實踐を力說して立てらるゝものに戒律宗あり。また成佛の卽身速疾を期し、これが直截簡明を旨として立てらるゝものに佛心宗あり、日蓮宗あり、更に佛陀大悲の救濟を信仰して、最も宗敎的實際を標榜して立てらるゝものに淨土諸宗あり。これ等を綜合して、いはゆる理論・實際の各般を統ぶ。かくして佛敎の全面、悉く展開されたりと見るを得むか。學者乃ちこれ等の各々敎理を究盡して、以て佛敎を遍學せるものと謂つべきであらう。

第七章　研究の困難

如上略說する敎理の一班を以てしても、佛敎思想の內容の、如何に複雜にして而も深遠なる

かを知らるゝ。而してこれを研究するに、かの浩瀚なる藏經の披閲を先途に、各種補助知識の傾倒を必要として、如何にその困難なるかに嗟嘆せざるを得ないであらう。加ふるに、同一敎相の如く見ゆるものに於ても、各宗各派、夫々獨得の解釋ありて、到底簡單なる一般概念のみを以てよく果さるべきではない。更に加ふるに、古來研鑽の悠久なる、いはゆる屋上架屋の煩鎖なる學說を醞釀して、枝葉紛糾、百出蜂起、洵に初心茫洋の困惑を痛感するところであらう。こゝに於てか、古來學者中にあつて、佛敎の研究に方り、先づその根柢を探り、理想を討ねて、以てこれが綜合統一を計らむと企てしものが出でしわけであつて、近くは、明治の中葉、村上博士が『佛敎一貫論』を著し、更に『佛敎統一論』を出して、その敎理綜合の趣旨を宣言せし如き、最も著しき例である。その學術的の批評は姑く別として、とにかく佛敎に一貫の根柢を探り、その獨自の面目を領して、以て餘他不共の特色を把握することは、初學研究にたづさはるもの〻最も必要とすべきところで、而してこの用意のもと、摯着なる努力をこれに傾倒せば、さしもの困難をも容易に排除して、進行の持續を期待さるゝわけである。かつそれ、啻に佛敎のみに限らず、何れの學術にあつても、その研究は決して容易に果遂さるべきものではない。されば只管誠實なる好學的精神を以て、孜々として勉勵すべく、かくして這箇知識の彼岸は決して遙遠なるにあらず。要は唯々その努力の如何にあるのみ。學者希くはこの趣旨を忘るゝこ

となく、專心研鑽の前途に勇往邁進すべし。

第八章　參考の書目

一　概　論

以下、教理研究に就いての參考文書を列ぬるに方つて、便宜上、既述の概論・各論の區別の下にこれを述べよう。先づ概論の部に就いて、近代著作のものを見るに、明治以來この種の刊行されしもの隨分夥多しきを數へ得る。蓋しこれ、佛徒の信仰情操の亢上より、普く佛敎の流布を期せると、かつまた、一般學術の進運に伴ひ、佛敎々義の科學的研究の風潮が勃興せるとに由來するところと謂つべきであらう。そのいはゆる佛敎概論の性質を帶びたるものとしては、左の諸書がある。

一　佛敎或問　一卷　齋藤聞精著（明治二十二年刊）
二　佛敎一貫論　一卷　村上專精著（明治二十三年刊）
三　佛敎大綱　一卷　村上專精著（大正三年刊）
四　大乘佛敎百話　一卷　加藤咄堂著（明治三十三年刊）

五 佛教統一論 三巻 村上專精著（明治三十四―三十八年刊）
六 大乘佛教大綱 一巻 加藤咄堂著（明治三十六年刊）
七 日本佛教哲學 一巻 小野藤太著（明治三十六年刊）
八 大乘哲學 一巻 井上圓了著
九 通俗講話佛教要義 一巻 加藤咄堂著（明治三十八年刊）
一〇 佛教原論 一巻 釋雲照著（明治三十八年刊）
一一 佛教哲學汎論 一巻 石原即聞著（明治三十八年刊）
一二 佛教概論 一巻 村上專精著（明治四十二年刊）
一三 佛教學概論 一巻 齋藤唯信著（明治四十年刊）
一四 佛教哲學新論 一巻 紹慶密應著（明治四十一年刊）
一五 日本佛教 一巻 井上圓了著（大正元年刊）
一六 佛教概論 一巻 高木俊一著（大正五年刊）
一七 佛教概論 一巻 加藤咄堂著（大正六年刊）
一八 佛教概論 一巻 佐々木月樵著（大正六年刊）
一九 佛教の新研究 一巻 上宮教會編（大正七年刊）

二〇　佛教概論　一卷　金子大榮著（大正八年刊）

右の中、(一)『佛教或問』は、迷悟・緣起・無始・唯心等の十項に分ち、問答體によつて、先づ佛教の目的は轉迷開悟にありとのことより說いて、その結局他力救濟に至つて窮まることに及び、最後に教徒の生活は二諦相資を以て完全たるべきことに終つてゐる。その所說極めて簡潔にして、なほ盡さゞるところ多く、もとより後出の類書に比ぶべくもないが、一篇の組織大に要領を得、當時にあつては、極めて恰好なる入門手引となつたわけである。(二)『佛教一貫論』は、先にもいへる如く、著者が佛教々理統一の企圖を起せる先驅をなせるものと見做すべきで、その內容は、題號の如く、佛教々理の各般に一貫せる理論を敍說せるものである。(三)『佛教大綱』は、佛教の要義を解說せるもので、(一)と同じく、所說簡明なれど、その組織要領を得たるものである。(四)『大乘佛教百話』と(六)『大乘佛教大綱』とは、大乘佛教に就いての名目・要義を解說せるもので、極めて通俗平易に敍述されてゐる。(五)『佛教統一論』は、著者がその自序にもいへる如く、實にその畢世の願望として企圖せるところであつて、洵に明治佛教學界稀に見る名著たるを失はぬ。その通部の綱格五編より成り、「大綱」・「原理」・「佛陀」・「教系」・「實踐」の各面より佛教全體を通觀し、教理の統一を企圖せるものであつて、論旨の堂々と理路の井然とは、洵に著者獨自の壇場と謂つべきである。その所說微に入り細に亘つて、廣汎なる佛教全體

を縱横に論議して餘すなく、特に著者が燃犀なる歷史的眼光と透徹せる批判的態度とは、從來の佛教學界を根柢より轉覆せしめし趣きがある。蓋し今日より見れば、その研學の態度まさにしかあるべく、何等新創の方法と見做すべきではなけれど、研究上、科學的態度の未だ普く會得されざりし當時にあつては、洵に破天荒の新創として世人の驚愕せしところも無理ではない。果然、本書に對する褒貶の世評囂々として盡くるところを知らず、甲は目して佛教を破壞し信仰を無視するものなりとし、乙は呼んで佛教を刷新し學解を大成するものなりとした。水月菴氏それ等の世評を輯めて『佛教統一論批評全集』なるものを編纂刊行し、更に漸次後評の續出を待つてその續輯・續々輯を出さむとし、また江村秀山氏は『佛教統一論始評』を綴り、更に伊藤哲英氏は『佛教統一論評論』を書いて、本書敍說の一々に就いての批評を加へた。特にこの『評論』の如きは、五號活字二百頁に餘る詳細を以てし、優に獨立せる一部著書たるの觀をなした。洵にかくの如きは廣く一般書史上に於ても稀に見るところであつて、本書が如何に問題の雄著たりしかを追想することが出來よう。本書は、かく敍說專門の微細を極め、もとより入門の概論として、餘他のそれと同例に見るべきではないが、著者の明快なる筆致は、よくその專門的難項を平敍して巧みなれば、學者心して精讀せば、蓋しその會得に、さまでの困難を感ずることもなからう。特に必讀を勸むる。因みにいふ、本書通部の綱格は、當初如上五編より成る計畫で

あつたが、漸く前三編の刊行を見しのみで、爾來久しく後編の續刊を見ず、かくして永く未完の名著として、恐らく中絶に終ることゝ思はれるが、洵に遺憾の至りといはねばならぬ。蓋し今日の學界より見て、本書に於ける著者の所論には、異論を挾むべき點なきにあらず、恐らく著者自らに於ても夙にそれ等の點を認知して、乃ちその計畫を中止せるにはあらざるか。さはれ著者の老壯なる、更に捲土重來の意氣を這面に示さるゝことのなしとせず、吾人は讀者と共にその實現を期待して、學界溌溂の活氣を望むや切である。(七)『日本佛教哲學』は、通部五篇に分れ、先づ哲學・宗教・定義より說いて佛教のそれに及び、次に三國に亘つて教理發展の歷史を叙し、更に各宗の判教を述べ、また佛教に一貫せる要義を說き、後に各宗の綱要を示してゐる。その叙說各々の枝葉に亘り、概論として一讀を値ひするところであらう。本書は、上掲の如く最初明治三十六年に刊行されたが、その後大正四年に至り、單に『佛教哲學』と改題して再刊された。(八)『大乘哲學』は、題號の如く大乘教理を叙說せるものであるが、大乘佛說・非佛說に就いて論ずるところ比較的詳細を盡してゐる。(九)『通俗講話佛教要義』は、その題號の如く、佛教の要義を極めて通俗に解說せるもので、概論として初心の會得し易きところといつてよい。(一〇)『佛教原論』は、先の『佛教一貫論』(三)に似て、佛教全般に通じ、その原理特色を叙せるものである。(一一)『佛教哲學汎論』は、博文館刊行の帝國百科全書中の一編であつて、先の『日本佛

教哲學』(七)と同種類、同形式のものである。(一二)『佛教概論』は、佛教一般の要義を詳說せるもので、明快なる博士の筆致は、難解なる教理の核心を表現し得て極めて巧みである。(一三)『佛教學概論』は、佛教々理の各般に亙つて詳說せるものであつて、先づ、佛教の體系として、緣起論と實相論との二面のあることを述べ、而してその各々に就いての諸說をば、廣く經論を援引して精細に叙述されてゐる。入門の概論といふよりも、專門研究の參考に資すべきものとして最も價値の重きを覺ゆる。學者の必讀せねばならぬところである。(一四)『佛教哲學新論』は、佛教々理を、哲學研究の分類に從つて、その範圍所屬を明かにせむとせるものであつて、主として認識論と形而上學論とを叙してゐる。通部七百頁に上る尨然たる大著なれど、叙說過謬に陷れるところ尠なからず、所論またしばしば肯綮を缺く。かのロシアのローゼンベルグ氏(Otto Rosenberg)がその誤解を指摘して揶揄せるもの、洵に尤もの沙汰といはねばならぬ。(『宗教研究』第三年第十二號九十五頁——大正九年刊——參照。)(一五)『日本佛教』は、日本の佛教そのものを叙せるものであつて、その組織大に恰好なるに加へて、記事極めて平明にして、初學の容易く解了し得るところである。入門の手引として、初心の一讀すべきところであらう。(一六)『佛教概論』は、この種同名の書中、最も表題にふさはしきものであつて、凡そ佛教知識として知らねばならぬ要項は、細大洩さず網羅され、就中、餘他の類書がたゞ教理の理論的一面の叙說に止

れるに異つて、大に實踐的方面の叙説にも及び、極めて綿密詳細に記述されてゐる。蓋し佛教の概念は、本書一卷に盡くるといふも不可なからう。また必讀の良書といはねばならぬ。(一七)『佛教概論』は、曾て講義錄誌上に掲載されしものゝ別冊單行であつて、著者の平易なる叙説は、本書に於ても、最も遺憾なく示されてゐる。(一八)『佛教概論』は、佛教概論といへど、餘他同名の諸書と全くその內容を異にし、宗教としての佛教が、吾々に如何に接觸すべきかを主眼として叙説せるもので、行文幾多の插話を織成して、興味の津々たるものあり。學者が佛教思想に對する考察の方程を立つる上に於て、一讀して參考に資すべきである。(一九)『佛教の新研究』は、現在佛教各宗中の代表的のものに就いて、教界知名の學者が通俗解說をなせるものである。(二〇)『佛教概論』は、また佛教を概論せるものなれど、從來の同名書類と全くその形式を異にし、飽くまで新創にかゝる組織と、洗練されし表現とを以て、生命ある研究を示さむと試みしものである。通部三篇。教相學・教理學・修道學これにして、こは卽ち順次依佛之教・佛陀卽教・成佛之教を開顯せるもので、乃ちこの綱格のもと、佛教の全班を見むとせるものである。思惟の形式を教示せる點に於て、先の佐々木氏のそれ(一八)の態度に似通ひ、教理の內容を解說せる點に於て、一般佛教概論とやゝその揆を一にしてゐる。同じく學者必讀の良書といはねばならぬ。

右の他、その範圍特に原始佛教のみに限れど、姉崎博士によつて出されたる、

二　根本佛教　一卷　姉崎正治著（明治四十三年刊）

のあることを紹介せねばならぬ。本書は、著者がその自序にいへる如く、世上佛教の研究とし、いへば、何れもたゞ傳播枝葉の末端にのみ走つて、何等その根幹を顧みざるを慊らずとなし、乃ちこれを叙して、巴漢兩典の比較に基づき、佛陀弘化の眞面目を發揮せむと試みしものである。實に本書は、根本佛教獨自の面目を縱横に檢討し得て豐かに、特に四諦の敎理に就いての叙說は、始終詳細を極めてゐる。またその附錄として巴漢の精密なる參照・引用文句を添加せる如きは、學者に至大の便宜を與ふることであらう。專門の參考として必讀すべきところである。なほ、同じく根本佛教に就いて、記事通俗なれど、

三　根本佛敎講話　一卷　保阪玉泉著（大正七年刊）

てふあり。その他既述の『原始佛敎史』・『小乘佛敎史論』等の中、また同種の記事あり。もしそれ『大乘佛敎史論』に至つては、大乘敎理の史的發展を最も明快に論叙せるものとして、特に披見すべきであらう。また主要經典の解說を知らむには、

三　佛典の研究　一卷　松本文三郎著（大正三年刊）

四　佛典の解說　一卷　常盤大定著（大正七年刊）

等あり、松本博士は、佛典の本文批評に於て學界の權威たるの人、常盤博士は、漢譯佛典の造

稽に於て、餘人の追蹤を許さゞるものあり、されば、これ等の書が如何に價値あるかを窺ふことを得べく、特に(三三)は、純學究的の立場にあつて、著者が深遠なる學識を傾倒したる迹を知らるゝ。なほまた、教理の概說として、先の教史篇の下、日本の項に於て述べし各宗綱要諸書(二〇八頁(一五)―(一八)參照)が、その恰好なる參考を値ひすることを注意せねばならぬ。彼處を對見して知るべし。

次にわが國古昔のこの種の文書としては、凝然の

三五　八宗綱要鈔　二卷　凝然著

を唯一の良書とすべく、今なほ旺んに學徒に修習さるゝを以て見るも、その價値のほどを知らるゝ。從つてこれが講義解說も多種出で、就中、楠潛龍氏の『啓蒙錄』(二卷)は稍專門に亘り、織田得能氏・境野哲氏等の各『講義』は幾分平易に記されてゐる。

藏經中、印度の馬鳴の作と傳ふる『起信論』と、支那の宗密の作たる『原人論』とは、幾分佛教々理を通論せる趣きあつて、古來初學必修の佛典中に數へられたれば、一言紹介を加へて置かう。

三六　大乘起信論　一卷　馬鳴菩薩造　梁眞諦譯(來十)

三七　大乘起信論　一卷　馬鳴菩薩造　唐實叉難陀譯(來十)

この二者は、同本異譯であつて、前者を舊譯、後者を新譯といひ、普通前者が多く依用されてゐる。抑々この論は、一心・二門・三大・四信・五行の綱格のもと、眞如緣起の法門により、巧みに摩訶衍の極理を詮顯せるものであつて、古來繙讀の旺んなりしこと、佛典中の第一にくらゐせるものである。從つて、これが註疏として出でしもの、實に汗牛充棟の觀あり。就中、慧遠の『義疏』四卷、元曉の『疏記』六卷、法藏の『義記』七卷は、古來「起信の三疏」と稱せられて、この論解說の權威と認められてゐる。若しそれ近代刊行の講解に至つては、一々こゝに擧ぐる遑もないほどである。なほ本書は鈴木大拙氏によつて、その新譯より英譯され、"*Aśvaghoṣa's Discourse on the awaking of faith in the Mahāyāna.*" Chicago, 1900 といひ、また基督教牧師たるティモシー・リチャード氏(Timothy Richard)によつて、その舊譯より英譯され、"*The Awakening of Faith.*" Shanghai, 1907 といふ。彼此對見して、以てその會得を深むるところ多からう。

二六 原人論 一卷 唐宗密述(陽三)

この書は、また同じく一種の佛教概論とも見做すべきもので、儒道二教に對比して佛教の優秀なることを高調し、佛教中、淺教より深教に亙り、漸次比較向上して各般の教理を解說してゐる。これまた古來より旺んに繙讀されしところであつて、その註疏の夥多なるほども、いふ

までもない。なほ、これ等の諸書に因んで、廣く一般に繙讀さるゝものに『四十二章經』・『法句經』等多種あり、今詳述するの遑がないから、凡てこれを省略する。

泰西學者のこの種佛教概論の成果は、極めて寥々としてゐる。蓋し曩にもいへる如く、（九〇頁參照）、渠等の討究は、主として南方佛教即ち巴利語系統にある。從つてその對象は概して原始佛教の範圍に止り、後代の大乘佛教の如きには、その調査の筆鋒を進むること、極めて稀有たるわけである。よつて、佛教全班に通ぜる概論として適當なるものは、甚だ覓め難いところである。されば、今左に、二三その主要なるものに就いて叙說を加ふるに止めることゝせう。

二九 *Manual of Indian Buddhism.* By H. Kern. Strassburg, 1896. (*Grundriss der Indo-Arischen Philologie und Altertumskunde.* Bd III.)

三〇 *Outlines of Mahāyāna Buddhism.* By D. Suzuki. London, 1907.

三一 *Essence of Buddhism.* By Lakshmi Narasu. 1907.

三二 *Studies in Japanese Buddhism.* By A. K. Reischauer. New York, 1917.

右の中、（二九）は、既に一言述べしところであつて、（一五〇―一五二頁參照）、啻に教理のみに限らず、佛傳・教史等の叙說もまた甚だ要を得てゐる。立花俊道氏これを邦譯して、『ケルン氏佛教大綱』（大正三年刊）といふ。以て容易に披讀すべきである。（三〇）は、題號の如く、大乘佛教の大意を

示せるものであつて、特に支那・日本所傳のそれに就いて敍說し、その平明なる記述は、大に歐米學界を稗益するところがあつた。(三一)は、また(二九)に同じく敎理そのものを解釋せるものではないが、飽くまで科學的精神に立脚して佛敎思想を敍說せるものとして別趣の價値を存する。著者は、印度マドラス大學(Madras U.)に於て、物理・化學の講座を擔任せる科學者なれば、如上の研究に於て、洵に著者その人を得たりといふべく、この書一度出づるや、歐米の學界は、非常の好評を以てこれを迎へたるもの、實に尤もの次第である。立花俊道氏その第二版を邦譯して『佛敎の要諦』(大正七年刊)といふ。(三二)に就いては、曩にわが國の敎史を述ぶる下(二一六頁參照)に於て、その恰好の良書たることを紹介したれば、彼處を討ねてその一班を知るべきである。なほこれ等の他、主として原始佛敎中心の類書として、かのリス、デヸズ氏の"*Buddhism*"や、ハーデー氏の"*A Manual of Buddhism*"等を始め、幾多の雄著を指示し得らるゝ。それ等の主要なるものに就いては、上來屢々言及せるところであるから、こゝにはこれを省略して置く。

二　各論

敍說要　次に各論の部に就いては、便宜上、如上述べし敎理の各種を面目として敎綱を立て

たる諸宗夫々のもとに、文書を類聚して述べることにせう。さりながら、一宗教義の參考資料に於てさへ、その詳細の擧示を期せば實に夥多しきに亙るべきに、矧むや各宗のそれに於ては、到底小紙のよく網羅さるべきところではなく、かつまた斯くの如きは、徒らに煩雜に陷るのみの嫌ひがないでもない。由來本講は、初心に佛教研究の概要を提撕するが本意であつて、その深遠なる專門討究の如きは、學者が漸次の研鑽を經て會得さるべき自然の啓發に俟つべきわけであるから、その煩瑣なる細叙の如きは、こゝには悉く省略せねばならぬところである。而してその叙說の樣式として、たま〳〵前田博士が、曾て『學佛南針』なる良著をものして、（明治三十八年刊同氏著『修養と研究』中收輯）、書中、佛教各宗正依の典籍を略叙し、村上博士、またその名著『佛教統一論第二編原理論』に於て、幾分詳細に各宗研究の參考書目を列擧されたるあれば、今それ等の綱格を倣似して、各宗夫々肝要なる典籍の紹介のみに止めて置かう。

俱舍宗　本宗は、主として業感緣起論に立脚せるもので、宗旨としてわが國に獨立せることはなく、たゞ法相宗に附庸して存せしに止れど、その學解が佛教の基礎知識を附與するものであるから、古來唯識の研鑽と共に、學解の討究として、最も旺んなる狀態を保ち來つたわけである。その研究要書としては左の如きがある。

一　佛說長阿含經　二十二卷　後秦佛陀耶舍・竺佛念共譯（昃九）

二　中阿含經　六十卷　東晋瞿曇僧伽提婆譯（昃五―七）

三　雜阿含經　五十卷　宋求那跋陀羅譯（辰一―四）

四　增一阿含經　五十一卷　東晋瞿曇僧伽提婆譯（昃一―三）

右を總じて「四阿含」といひ、小乘の根本經典と見做すべきものである。もしそれ南方所傳即ち巴利『阿含』にあつては、更にこれに『小集』（"*Kuddhakanikāya*"）を加へて、「五分」を數へてゐる。

五　阿毘達磨品類足論　十八卷　尊者世友造　唐玄奘譯（冬十）

六　阿毘達磨識身足論　十六卷　提婆設摩阿羅漢造　唐玄奘譯（冬九）

七　阿毘達磨法蘊足論　十二卷　尊者大目乾連造　唐玄奘譯（秋四）

八　阿毘達磨界身足論　三卷　尊者世友造　唐玄奘譯（冬十）

九　阿毘達磨集異門足論　二十卷　尊者舍利子說　唐玄奘譯（秋一）

右の五部に大迦多衍那造の『阿毘達磨施設足論』を加へて、いはゆる「六足論」といふ。

一〇　阿毘達磨發智論　二十卷　尊者迦多衍尼子造　唐玄奘譯（秋五）

この書は、前の「六足」に基いて構成せるものなれば、これを『身論』と稱し、「六足」はその根

祇なるを以て『足論』といふ。

一一　阿毘達磨大毘婆沙論　二百巻　五百大阿羅漢等造　唐玄奘譯（收一―八）

これかの迦膩色迦王のもと、第四結集に於て成りしところである。

一二・阿毘曇心論　四巻　尊者法勝造　晉僧伽提婆・惠遠共譯（冬十一）

一三　入阿毘達磨論　二巻　塞建陀羅阿羅漢造　唐玄奘譯（藏一）

これ等は何れも『毘婆沙』を相承略說せるもので、特に（一三）は『入論』の略稱に於て普く繙讀されてゐる。

一四　倶舍論　これに二譯がある。

イ　阿毘達磨倶舍釋論　二十二巻　婆藪槃豆造　陳眞諦譯（冬一・二）

ロ　阿毘達磨倶舍論　三十巻　尊者世親造　唐玄奘譯（收九・一〇）

これ卽ち本宗正依の論典であつて、前者は舊譯、後者は新譯と代稱され、普通後者が最も多く依用されてゐる。この論は、世親が有部の敎義に、經部の眼光を以て批評的見解を下し、萬有肯定の論鋒を以て、いはゆる三世實有、法體恒有を高調せるものであつて、その撰述の來歷に就いて、極めて興味ある插話の存せるは、普く學徒の知れるところ、蓋し小乘論典第一の代表的名著と謂つべきであらう。

一五　阿毘達磨順正理論　八十卷　尊者衆賢造　唐玄奘譯（冬三―六八）

これ卽ち衆賢が、先の『倶舍論』に對して反駁的論議をなせるもので、もと『倶舍雹論』と名けしところ、世親視て、これ『倶舍』を發明するところありとして、かく『順正理論』と稱ふるに至つたと傳へられてゐる。

一六　倶舍論記　三十卷　唐普光述

一七　倶舍論疏　三十卷　唐法寶撰

一八　倶舍論疏　三十卷（内七卷現存）　唐神泰述

右は、『倶舍』本論の三大註疏といはれ、特に前二者は、いはゆる『光記』・『寶疏』と略稱されて、本論研究の權威と見做されてゐる。また本論の晦澁を平易にせるものに、

一九　倶舍論頌釋疏　二十九卷　圓暉述

あつて、普く依用されてゐる。これ等は何れも、單行のほか『續藏』中に收輯され、容易に披讀され得る。その他、遁麟・慧暉等の註疏あり、またわが國學匠によつて成れるところも甚だ多い。曩にもいへる如く、本宗敎學は、佛敎の基礎學として、各宗何れの學徒にも必ず修習されしところであるから、その學解註疏の夥多なること、夐に餘他に擢んでゝゐる。今一々記述するに遑あらず、たゞその要典を擧示するに止むるのみ。

二〇　有宗七十五法名目　二卷　撰者未詳

二一　有宗七十五法記　三卷　宗禎々山著

右は入門習學の要書として、從來初心に依用されしものである。洵に一讀本論所述の要領を窺ひ得らるゝ。その他近時の刊行にかゝるものとしては、

二二　倶舍哲學　一卷　舟橋水哉著（明治三十九年刊）

二三　倶舍要義　一卷　高木俊一著（大正八年刊）

等あり、舟橋氏にまた『原始佛教史』・『小乘佛教史論』のあること既述の如し。（一二五・一二九頁參照）。また最近、荻原雲來・木村泰賢二氏によつて、『倶舍』本論をその新譯より國譯され、梵語唯一の原註たる稱友（Yaśomitra）の『釋義』を以て、從來の諸註と對比勘考して、精密なる脚註をこれに添加し、『國譯大藏經』中にこれを收輯して刊行された。洵に斯論の新研究書として、學者の必ず披讀せねばならぬところである。

成實宗　本宗は、主として相對的空論を主張せるもので、また宗旨としてわが國に獨立せるものに非ず、たゞ三論宗に附庸して存せしに止まるのみである。その正依として、

一　成實論　十六卷　訶梨跋摩造　姚秦鳩摩羅什譯（藏二一）

あり。傳へいふ、訶梨跋摩は、三藏中の實義を釋成せむとしてこれを撰述したとのことである。即ち我空法有の毘曇宗等の所說に異つて、人法二空を說くを以て四諦の實義と立つるのである。この論の註疏としては、現存のもの一部もなし。たゞ近時『國譯大藏經』に收輯されたる、境野哲氏の國譯脚註を指示するに止まるのみである。

戒律宗　本宗は、修道實踐を面目とし、即ち戒律を宗として立てらるゝところである。もといはゆる『四律』・『五論』に依つて戒律を語られたのであるが、道宣の四分律宗獨り發達して、主として、

一　四分律　六十卷　姚秦佛陀耶舍・竺佛念等共譯（列三一六）

を正依とされ、これに對する、

二　四分律行事鈔　三卷　唐道宣撰
三　四分律羯磨疏　四卷　唐道宣撰
四　四分律戒本疏　四卷　唐道宣撰

を「三大部」と稱せられ、また、

五　拾毗尼義鈔　三卷（現存二卷）　唐道宣撰

六　比丘尼鈔　三卷　唐道宣撰

を併せて「五大部」と呼ばるゝ。更にまた、

七　四分律行事鈔資持記　十六卷　宋元照述
八　四分律羯磨疏濟緣記　八卷　宋元照記
九　四分律戒本疏行宗記　八卷　宋元照述

を「三大記」と稱せらる。何れも一宗必讀の要典とされてゐる。また、

一〇　敎誡新學比丘行護律儀　一卷　唐道宣述
一一　釋門歸敬儀　一卷　唐道宣撰
一二　釋門章服儀　一卷　唐道宣撰
一三　律宗綱要　二卷　凝然撰

等は、何れも入門の必ず習學すべき要書とされてゐる。なほ、は平易に本宗の概要を叙せるものとして、古來廣く繙讀されてゐる。その他四分律宗以外に亙る典籍に就いても多種あり。

法相宗　本宗は、いはゆる賴耶緣起論に立脚せる純粹唯心哲學を高調せるものであつて、古

來倶舍の研鑽と共に佛教の基礎知識を養成するものとして、何れの學徒間にも必ず修習されしところである。よつてその學解の旺んなる結果として、研究註疏もまた實に夥多しく、古來佛教々學第一の難解とされてゐる。今それ等の要中の要を取つて、簡單に紹介して置かう。

一 解深密經　五卷　唐玄奘譯（黄八）

右は、本宗正依の經典であつて、その內容、性相の決擇の井然たるところ、まさに對法論典の趣きを備へ、經典中特殊の地位を占めてゐるものである。異譯數種あれど、たゞこの譯のみ主用されてゐる。

二 瑜伽師地論　百卷　彌勒菩薩說　唐玄奘譯（來一—五）

右は、彌勒（Maitreya）が、中印阿踰陀の講堂に於て、四ケ月に亙り宣說せるものと傳へられ、廣く諸經の要義を採集して一名『廣釋諸經論』の稱あり、性相の決擇一として洩さるゝところがない。實に大乘論典隨一の雄篇と稱されてゐる。本宗は、いはゆる六經・十一部論を所依とすといへど、就中經にあつては先の『深密』、論にあつてはこの『瑜伽』をその正依とされてゐるのである。

三 攝大乘論本　三卷　無著菩薩造　唐玄奘譯（來九）

四 攝大乘論釋　十卷　世親菩薩造　唐玄奘譯（往七）

五　攝大乘論釋　十卷　無性菩薩造　唐玄弉譯（往九）
六　顯揚聖教論　二十卷　無著菩薩造　唐玄弉譯（來七）
七　大乘阿毘達磨雜集論　十六卷　安慧菩薩糅　唐玄弉譯（來八）
これ等は何れも瑜伽・唯識の思想を發揮せるもの、中に異譯數種あり。
八　唯識二十論　一卷　世親菩薩造　唐玄弉譯（來九）
九　唯識三十論頌　一卷　世親菩薩造　唐玄弉譯（來九）
一〇　成唯識論　十卷　護法等菩薩造　唐玄弉譯（往十）

右の『二十』・『三十』の兩論は、何れも世親の唯識思想を高調せるもので、就中『二十論』は消極的に心外無境の旨を力說し、『三十論』は積極的に萬法唯識の趣を主張してゐる。「成唯識論」は、護法を始め、いはゆる十大論師の人々が、前の『三十論』を註解せるものを、玄弉が合糅翻譯せるものであつて、文義の多含と、講解の困難とは、佛典第一と稱されてゐる。而も通部徹底して唯識緣起の論陣を張り、理路の明確、論議の堂々、一糸を紊さずして終始せるところ、洵に慧學對法の面目躍如たるものあり、乃ち取つて本宗正依の本典として重用せる所以である。

一一　成唯識論述記　二十卷　唐窺基撰

一二　成唯識論樞要　四卷　唐窺基撰

一三　成唯識論了義燈　十四卷　唐慧沼述

一四　成唯識論演秘　十四卷　唐智周撰

右の中、初の『述記』は『成唯識』本論研究上不可缺の權威とさるゝ要書であつて、よく本論の深義を抉剔彰顯してゐる。後の三者は、いはゆる「三箇の疏」と稱せられて、また傳統的價値を認めらるゝところである。

一五　唯識論同學鈔　四十八卷　貞慶撰

右は『述記』・「三箇」を相承して、唯識教義の蘊奥を發揮せるもの、古來本宗學解第一の要書として重んぜられ、普ねく依用されしところである。異本調卷同じからず、近時『大日本佛教全書』中に收輯されたるもの、最も學術的良本といはれよう。

一六　觀心覺夢鈔　三卷　良遍撰

一七　百法問答鈔　九卷　撰者不詳

一八　略述法相義　三卷　聞證撰

右は初心入門の適書として、古來普く學習されてゐる。なほ近時の刊行にかゝるものとしては、

一九　唯識要義　一卷　花田凌雲著（大正四年刊）

あり。また『唯識論大綱』・『唯識綱要』等も見るべく、その他、既述の『唯識發達史論』は史的概念を得るに適してゐる。また最近、稿者が島地大等氏の囑を受け、『成唯識』本論を國譯し、『述記』・「三箇」をはじめ、南都古來の口傳を開示して詳細なる脚註となし、『國譯大藏經』中に收輯して刊行した。いさゝか本論披讀の便宜を附與するところと信ずる。その他の一々に至つては、列擧盡くるところを知らず。

因みに、總じて倶舍・唯識の佛典を講讀せむには、佛教論理の方軌即ち因明學、及びそれに關聯して、六合釋・八囀聲の概要を知らねばならぬ。これ等は、佛教研究の補助學科として、何れの教義にあつても必要たるわけであるが、特に性相の決擇を眼目とせる倶舍・唯識にあつてその切要を認むるところである。されば古來主としてこれ等の學者が多く攻究に從ひ、その成果も尠からず示されてゐる。今一々敍述の遑なきまゝ、こゝには省略に從はねばならぬ。

三論宗　本宗は、かの絕對的空論に立脚して、萬有の否定卽中道の開顯と主張するもので、その正依の三論を以てまさしく宗名とせるものである。三論とは、

一　中論　四卷　龍樹菩薩造 梵志青目釋　姚秦鳩摩羅什譯（署一）

二　百論　二巻　提婆菩薩造 婆藪開士釋　姚秦鳩摩羅什譯（暑二）

三　十二門論　一巻　龍樹菩薩造　姚秦鳩摩羅什譯（來十）

これであつて、何れも無相皆空の思想に立ち、古來通申論と稱せられ、これに對して、

四　大智度論　百巻　龍樹菩薩造　後秦鳩摩羅什譯（往一―五）

を別申論といひ、同じくその所依として用ゐらる。いはゆる通申・別申とは、諸經通じての釋義を通申といひ、別して一經に局れる釋義を別申といふ。則ち『智度論』（四）は、『大品般若』の註解なれば、別申論たるわけである。たゞしこの論の說相、浩瀚なる卷軸中よく大乘中の要義を網羅して餘すところなく、宛然佛教百科全書の觀を呈して、先の『瑜伽論』と共に大乘論典の雙璧と稱されてゐる。

五　中論疏　二十巻　隋吉藏撰

六　百論疏　九巻　隋吉藏撰

七　十二門論疏　六巻　隋吉藏撰

右は「三論疏」と稱して、斯學研究の權威とされてゐるところである。

八　三論玄義　二巻　隋吉藏勅撰

右は三論の概要を知るに最も適せるもの、古來普く披讀されてゐる。近時刊行のものに、

九　三宗論綱要　一巻　前田慧雲著（大正九年刊）

あり、これかの『玄義』の講解にして、かつて『三論玄義講話錄』と題して刊行されしところ、初學入門に最も適當せる良書である。その他、なほ類書尠くはない。

天台宗　本宗は、即ち三諦圓融・中道實相の妙旨を主張し、大乘教中深奥の哲理に立脚せるもので、その正依としては、

一　妙法蓮華經　七巻　後秦鳩摩羅什譯（盈一）

二　無量義經　一巻　蕭齊曇摩伽陀耶舍譯（盈一）

三　佛說觀普賢菩薩行法經　一巻　宋曇無蜜多譯（盈四）

を以てし、これを本經といひ、更に、を加へ、前者（二）を開經、後者（三）を結經と稱し、併せて「法華三部經」と稱されてゐる。隋朝の智顗、この經の眞髓を搜討し、いはゆる「三大部」を演暢す。いはく、

四　妙法蓮華經玄義　二十巻　隋智者大師說（呂九）

五　妙法蓮華經文句　二十巻　隋智者大師說（調一）

六　摩訶止觀　二十巻　隋智者大師說 門人灌頂記（陽四・五）

これにして、何れも灌頂の筆錄するところ、本宗教義はこゝにその綱格を成したのである。後湛然これに註解を加へ、

七　法華玄義釋籤　二十卷　唐湛然述(呂十)
八　法華文句記　三十卷　唐湛然述(調一・三)
九　止觀輔行傳弘決　四十卷　唐湛然述(陽五―七)

といふ。

一〇　四教義　六卷　隋智顗撰(陽八)
一一　十不二門　一卷　唐湛然述(陽十)
一二　十不二門指要鈔　二卷　宋智禮述(陽十)
一三　止觀義例　二卷　唐湛然述(陽七)
一四　止觀大意　一卷　唐湛然述(陽七)
一五　金剛錍　一卷　唐湛然述(陽十)
一六　始終心要　一卷　唐湛然述(陽十)

これ等は何れも本宗教義を知る上に肝要なる寶典とされてゐる。初心平易の適書としては、

一七　天台四教儀　一卷　高麗諦觀錄(陽十)

あり、古來、先の『四敎義』(一〇)が『大の四敎義』と呼ばるゝに對してこれは『小の四敎儀』と稱され、また『諦觀錄』ともいはれてゐる。入門必讀の要書である。近時刊行のものとしては、

一六　天台宗綱要　一卷　前田慧雲著(明治四十四年刊)

最も要を得たる良書である。その他の類書羅縷に遑なし。たゞし、茲に注意すべきは、古來、如上の典籍を依憑として攻究するところは、たゞ支那天台の系統たるに止り、少しも日本天台のそれに着手されなかつた憾みのあることである。今更いふまでもなきことながら、由來日本天台は、傳敎がいはゆる四種相承に由來し、大に支那のそれと趣きを異にせるものである。されば學者は、奮つて斯面の啓拓に奉仕し、いはゆる圓頓一乘の眞面を發揮されよ。

華嚴宗　本宗は、主として法界緣起に立脚して、諸法各具、重々無盡の極理を高調し、實に大乘哲理最高の所談たるものといはれてゐる。その正依は、即ち『華嚴經』を以てする。

一　華嚴經　これに三譯がある。

イ　大方廣佛華嚴經　六十卷　東晉佛馱跋陀羅譯(天七—九)

ロ　大方廣佛華嚴經　八十卷　唐實叉難陀譯(天一—四)

ハ　大方廣佛華嚴經　四十卷　唐般若譯(天五・六)

この中、前二者は全譯、後者は抄譯である。通常卷數に從へて、『六十華嚴』・『八十華嚴』・『四十華嚴』といふ。

二　十地經論　十二卷　天親菩薩造　後魏菩提流支等譯（暑九）

三　大乘法界無差別論　一卷　堅慧菩薩造　唐提雲般若等譯（暑一）

これ等は何れも本宗關係の要書である。

四　華嚴經搜玄記　五卷　唐智儼記

五　華嚴經探玄記　二十卷　唐法藏述

これ等は何れも『華嚴』本經の註疏にして、特に後者は釋義の權威たるもの、本宗敎學を研究するもの、必ず檢討せざるべからざる要書である。

六　華嚴一乘敎義分齊章　四卷　唐法藏述（陽二）

これ法藏が立敎開宗の本典であつて、一名『華嚴五敎章』と稱し、一宗敎義の眞髓擧げてこの中に叙說されてゐる。

七　大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔　九十卷　唐澄觀述（歲五―十）

こは普通『大疏鈔』と呼ばれ、本經講解の最も詳密なるものである。

八　華嚴經旨歸　一卷　唐法藏述（陽二）

九　修華嚴奥旨妄盡還源觀　一卷　唐法藏述（陽三）

一〇　華嚴金師子章　一卷　唐法藏述（陽三）

一一　禪源諸詮集都序　四卷　唐宗密述（陽三）

一二　原人論　一卷　唐宗密述（陽三）

これ等は何れも一宗の要典であつて、なほ。この他にも法藏・澄觀・宗密等の所述は甚だ多い。わが凝然の述作中また本宗に關するもの夥多しく、特に『五敎章通路記』五十二卷（『大日本佛敎全書』所收）・『探玄記洞幽鈔』百二十卷（『日本大藏經』所收）等、その最も著しきものである。近時刊行のものとしては、

一三　華嚴大系　一卷　湯次了榮著（大正四年刊）

一四　華嚴學綱要　一卷　齋藤唯信著（大正九年刊）

等を推すべく、特に前者（一三）は、本宗敎學各般の事項を精究して盡さゞるなく、洵に學徒專攻の究竟要書である。その他既述の『華嚴發達史』等によらば、史的發達の一面を窺ひ得べく、並に餘他の類書も尠くはない。

因みに、『圓覺經』及び『起信論』の思想は、本宗敎學と關係するところ最も密接なれば、古來本宗學者によつて旺んに討究されしところである。されば、專攻に入るもの、這般の研鑽を淺

すことが出來ぬわけである。

眞言宗 本宗は、かの六大緣起に立脚して、色心不二、卽身成佛を談じ、大に實際主義を面目とするものである。その正依として次の二經あり。

一 大毘盧遮那成佛神變加持經 七卷 唐輸波迦羅譯(閏一)

二 金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大敎王經 三卷 唐不空譯(閏二)

この中、前者は通常『大日經』の異名を以て知られ、後者とを併せて、いはゆる「兩部の大經」と稱され、更に、

三 蘇悉地羯羅經 三卷 唐輸婆迦羅譯(閏三)

を加へて、いはゆる「三部の密經」と呼ばれてゐる。

四 金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論 一卷 唐不空譯(閏一)

五 釋摩訶衍論 十卷 龍樹菩薩造 姚秦筏提摩多譯(餘十)

右は正依の論典にして、何れも龍樹が密敎思想を發揮せるものといはれてゐる。たゞし、後者に就いては眞撰。僞作の問題あり、卽ちかの『起信論』問題に關聯して、最も論議の多きものである。

六 大毘盧遮那成佛經疏 二十卷 唐一行記(餘七・八)
七 金剛頂經大瑜伽秘密心地法門義訣 三卷(上卷現存) 唐不空造(續三七ノ一)
これ等は、それ〲『大日經』・『金剛頂經』の註疏として根本の權威たるものである。
八 十住心論 十卷 空海撰
九 秘藏寶鑰 三卷 空海撰
一〇 辨顯密二敎論 二卷 空海撰
この三書は、立敎開宗の寶典として最も重要さるゝところであつて、げにこれによつて密敎は一宗開立を見るに至つたといふべきである。なほ空海の撰述甚だ多く、何れも本宗の要書とさるゝところである。近くは『弘法大師全集』(五卷)に就いて知るべし。後賴瑜・宥快等出でて述作甚だ多く、杲寶の所述また尠なからず。近時、
一一 眞言宗綱要 一卷 浦上隆應著(明治三十八年刊)
一二 眞言哲學 一卷 小野藤太著(明治三十八年刊)
一三 密敎綱要 一卷 權田雷斧著(大正五年刊)
等出でゝ、初心また容易にこの秘密佛敎の内奥を窺ひ得らるゝ。

佛心宗　本宗は、一念頓悟卽佛と談じて、不立文字、敎外別傳を面目とするものなれば、正依の經典として擧ぐべきものがない。但し本宗關係の典籍として、『縮藏』諸宗部禪宗下に收むるところ、延壽の『宗鏡錄』百卷、道原の『景德傳燈錄』三十卷等を始め、その數尠なからず。また各祖の語錄に至つては、『續藏』に收むるところ、實に夥多し。その他、圜悟の『碧巖錄』十卷は、古來宗門第一の書と稱せられて重視され、道元の『正法眼藏』九十五卷また最もよく提唱される。もしそれ一々の詳細なる書目は、『縮藏』・『續藏』の『目錄』に就いて盡すべきである。近時の刊行には、小野藤太氏の『禪宗哲學』、加藤咄堂氏の『禪學要義』、秋野孝道氏の『禪學綱要』等數種を指摘し得らるゝ。

日蓮宗　本宗は、唱題成佛を標榜して、同じく實際主義を面目とせるもの、もと天台宗と同じく『法華經』を正依とすれど、主としてその本門開顯に據して一宗の規模を張れるものである。その研究書目、先の天台宗のそれは、自然檢討の要あるべく、それ以外宗祖日蓮の『遺文』錄內・錄外を討ぬべし。小川泰堂氏これを總輯して、『日蓮聖人御遺文』(明治三十七年刊)といふ。最も便利に披見され得べし。その他近時本宗關係の類書の刊行さるゝこと頻々として應接に遑なきくらゐである。さりながら、その根柢みなかの『遺文』を本とせるものなれば、かれの精究を

緊要とすべきわけである。

浄土宗及眞宗　浄土門に屬するもの、浄土宗・眞宗及び融通念佛宗等あり、就中浄土宗及び眞宗を以て主部とする。兩宗何れもその正依の經典は、いはゆる「浄土の三部經」にある。

一　佛說無量壽經　二卷　曹魏康僧鎧譯（地八）
二　佛說觀無量壽佛經　一卷　宋畺良耶舍譯（地十二）
三　佛說阿彌陀經　一卷　姚秦鳩摩羅什譯（地十二）

これ等には異譯多く、今はその正依を擧ぐるのみ。なほ浄土宗にあつては、これに天親の『浄土論』一卷を加へ、いはゆる三經一論と稱して正依に數ふ。また眞宗にあつては、龍樹・天親等いはゆる七祖の著書を以て相承の聖教とする。左の如し。

四　十住毘婆沙論易行品　一卷　聖者龍樹造　後秦鳩摩羅什譯
五　無量壽經優波提舍願生偈　一卷　婆藪槃豆菩薩造　元魏菩提流支譯
六　往生論註　二卷　魏曇鸞註解
七　讃阿彌陀佛偈　一卷　曇鸞造
八　安樂集　二卷　唐道綽撰

九　觀無量壽經疏　四卷　唐善導集記

一〇　淨土法事讃　二卷　唐善導集記

一一　觀念法門　一卷　唐善導集記

一二　往生禮讃　一卷　唐善導集記

一三　般舟讃　一卷　唐善導撰

一四　往生要集　六卷　源信撰

一五　選擇本願念佛集　二卷　源空集

淨土宗の依用するところ、大略また同じく、特に『無量壽經優波提舍願生偈』(五)は、いはゆる『淨土論』にして、かの三經と共ずる一論たり。また『選擇本願念佛集』(一五)は、一宗の本典として、特に重寶するところである。なほ、この宗の所依として、宗祖源空の撰述に成れるもの尠なからず、具に『法然上人全集』中に收めらる。また眞宗にあつては、

一六　敎行信證　六卷　親鸞集

を以て、一宗開闢の本典とすることいふまでもなく、並に宗祖の著述具に『親鸞聖人全集』中に收むるが如し。なほ、淨土宗・眞宗の何れにもあれ、自宗所要の研究典藉は、『淨土宗全書』・『眞宗全書』・『眞宗大系』等に收載刊行されたれば、取つて以て檢討に備ふべし。その他近時刊行の

ものに至つては、村上博士の雄著『眞宗全史』等を始めとして、一々枚擧に遑がない。今は凡てこれを省略せう。

因みにいふ、由來淨土の法門は、最も宗教的實際を標榜して、人間心靈の慰安を誘致するをその面目とせるものなれば、這箇敎義の上に力說さるゝ修養信仰の書類ははなはだ多く、佛教各宗中、夐に餘他に擢んづるところである。就中絕對他力を高調する眞宗その第一にくらゐしてゐる。而してそれ等の書類は、もとより學解そのものを本來の趣旨とせるものではないが、而も一面學解の實際的表現とも見做すことを得て、これを眞摯に玩讀するに於ては、研究と修養との雙々相俟つて會得するところ尠なからざるものがある。學者幸にして這面の注意を怠らざれ。

第五部　參考篇

第一章　補助の學科

抑々學術の研究に方つて、單なる當面の檢討のみに止らず、更に側面・反面よりあらゆる關係の考察を加へ、かくして始めて歸納的斷案に到達すべき態度を示せるは、近代科學思想の普及されし結果行はれたる方法である。こゝに於てか、何れの學術を研究するにも、これが補助學科の必要を云々さるゝわけで、例へば、史學の檢討に、言語學・地理學・系譜學及び古文書學等の知識を必要とするがやうである。佛敎の研究またもとより然るべきわけで、特に佛敎にあつては、その傳播の歷史三千餘歲の久しきに亘り、敎系の分岐十數宗派の多きに達すれば、これが研究に方つては、最も廣汎各種の學識を要すべきわけである。例へば、言語に於ても、佛敎の傳播の區域、印度・支那・日本はもとより、南方にては、錫蘭・暹羅・緬甸等、北方にては、西藏・滿・蒙・朝鮮等の各地に亘れば、從つて、梵語・巴利語を始めとして、それ等傳播各地の言語の知識を必要とすべく、近時、泰西學者の佛敎研究の旺んなるよりして、それ等の諸語もまた必要たるわけである。言語學の知識の必要なること既に然り、その他、考古學・地理學・植物學

等もまたこれに準じて須要たるべく、曩に一言せし因明學・六合釋・八囀聲等、同じく類知すべく、もしそれ美術の知識に至つては、特に佛教研究に不可缺の切要を認むるわけである。本講その當初に、研究資料を文獻と藝術との二面として、佛教典籍の調査に對して、佛教美術の檢討を指示せしも、ひとへにこれがためなることを知るべきである。

かくの如く、眞に研究の周到なる用意を果さむには、まさに各種の補助學科の考察を盡すべきわけで、學術調査の面目は、實に這般の態度に於て窺はるゝのである。本講またその部門を設けて、これが考察を試みるの要あり。さりながら、かくの如きは、格段の專門に亘るべき性質を有し、かつ煩鎖なる一々の詳細は、到底小紙の盡すべきところにあらざると、並に本講書史を主眼とする上に然く適當せざるふしあるとの點よりして、こゝには凡てこれが削除に從ふことゝする。而して、これに代ふる敍說として、凡そ佛教研究に通じて參考たるべき佛教辭書の各面に就き、この參考篇の一部に於てこれが紹介を加ふることゝせう。元來辭書の性質たる、學者をしてその研究の方針を啓示し、その綱格の大概を會得せしむるにある。されば、學術の研究には、必ずしも辭書そのまゝを依用すべきではないが、依つて以て研究の見當を定むべく切要を値ひするものなれば、乃ちこれが解說紹介は、必ずしも無用の沙汰ではなからう。

第二章　參考の書目

さて、辭書として近時刊行されしものゝ主なるを擧ぐれば、左の如きがある。

一　*Hand-book of Chinese Buddhism.* By E. J. Eitel. Tokyo, 1904.

二　梵語字典（枳橘易土集）一卷　慧晃撰（明治三十八年刊）

三　佛敎大辭典　三卷　望月信亨編（明治四十二―大正五年刊）

四　佛敎辭典　一卷　浩々洞編（明治四十二年刊）

五　佛敎辭林　一卷　藤井宣正編（大正元年刊）

六　佛敎大辭彙　二卷　佛敎大學編（大正三―五年刊）

七　梵漢對譯佛敎辭典　一卷　荻原雲來譯（大正四年刊）

八　梵藏漢和四譯對校翻譯名義大集　一卷　榊亮三郎譯（大正五年刊）

九　佛敎大辭典　一卷　織田得能著（大正六年刊）

右の中、(二)はいはゆる『アイテルの梵漢辭典』にして、その內容、既に藏經篇の下（四二頁）に於て叙說せるところである。(三)『梵語字典』は、諸經論中の梵語名辭を取り出し、これを五十音順に排列して譯解せるものであつて、廣く音義を參酌し、普く經論を引抄して詳細を盡し

てゐる。その『枳橘易土集』との題意は、江南の橘を江北に移せば、枳となるてふ語に取つて、梵漢對翻の意を示せるものであつて、もと眞言宗の學僧慧晃の撰するところにかゝり、總じて三十一卷あり。後、葛城慈雲比丘がこれを『梵學津梁』中に收輯したが、明治三十八年、更に『梵語字典』と題し、今冊一卷として單行した。洵に古來學徒の重寶せるところである。(三)『佛教大辭典』は、編者望月氏が大規模の下に編纂計畫せるものであつて、科學的編纂に成れるものとしては、斯界、一の簡易辭書すらもなき時にあつて、始めて企圖せる綜合辭書である。從つてその當初は、學者の囑望夥多しきものがあつたが、不幸、出版の遲延は、刊行當路者の蹉跌となり、かくして本書の運命や、洵に數奇なる變遷を辿り、爾來荏苒遲々として進捗せず、明治四十二年、僅かに假冊分本初卷を出してより、大正五年までに續いて漸く二卷、即ち全部の通計アよりサの初めに至る紙數殆んど一千頁のみに止つてゐる。この間に、この書の附卷たる『佛教大年表』の如き良書を出したが、本文の刊行は、前途なほ遼遠の嘆を禁せざるを得ぬ。さてその編纂の樣式は、斯界辭書に始めて試みたる科學的組織を以て、佛教各種の方面の解説に及び、特に史傳の如き、大に力を注げる迹を窺ひ得る。もしそれこれが完成を見たりとせむか、實に佛教辭書の先驅者として長く聲價を存すべきなれど、恐く終に未成のものとして杜絶し了ることなきやを危惧せざるを得ぬ。なほ、この書と類を同じうする大辭書たるべきもの、他に

(六)・(九)の二種あり。(六)『佛教大辭彙』は、わが本願寺が、その宗祖の聖忌を紀念せむため、佛教大學に命じて編纂せしめしものであつて、その規模の甚大と、費用の多額とは、到底前者の比肩さるべきところではない。本文は、通部三卷、（ほかに索引を附する豫定）、四千五百頁に上り、洵に佛教の綜合辭書の代表として、名實形神共に第一に推稱さるべきものである。殊にこの書の特徴と見るべきは、佛教々理及び歷史の辭書たるに加ふるに、佛教社會辭書たる性質を有せることこれである。則ちこの書は、單なる教理の解釋、歷史の說明のみに止らず、佛教の實際社會に顯はれたる各種事項を說示せる佛教百科辭書（ブッディスト、サイクロペディア）たるものである。而して、殊に佛教解說の主體たる教理の說明に至つては、さすがに同大學所藏の豐富なる佛典を傾倒して努力せるところとて、その詳細を盡し、精緻を極めし成果は、實に斯界獨步にして、恐らく類書第一の雄著たるに乖かぬであらう。大正五年末、第二卷刊行以後、杜絕されてゐたが、近時更に續卷刊行の運びに至り、不日その刊行を俟つて、こゝに全部三卷の完成を見るに至るわけである。洵に斯界空前の偉觀といはねばなるまい。(九)『佛教大辭典』は、編者織田氏が多年その事業に奉仕し、終に病痾を獲て、而もなほその企圖を中止せず、かくして終にその事業に殉ぜる悲慘なる因緣を有せるものであつて、氏の歿後、主として高楠博士の盡力により、同士の扶助を得て完成したわけである。その特色、一卷の中によく佛教凡ての解說を包含せるところにあ

り。別してその內容、教理の一面に力を注げるところ多きが如く、またその解釋に、各項何れも的確なる典據を明示せる如きは、その最も力を注げるところと謂つべく、なほ各項の下、國文學中にあらはれたる文句を引抄せる如きも、またその別趣の特色と見做すべきで、これによつて、國文解釋の用にも供へ得べく、それが專攻方面に利便を與ふるところ決して尠くはあるまい。その外形尨然たる容積を有すれど、一卷を以て始終せるため、解說の極めて簡單にして、專門學者の稍不足を感ずるところなきにあらず。さはれそは止むを得ざるところと謂つべく、而も一々的示せる典據に注視し、有爲にこれを使用せば、また大に專門學者を會得せしむるところがあると思ふ。以上三書の長短・關係等に就いては、稿者かつて『六條學報』誌上に於て論せしことあり、(同誌第百八十四號——大正六年二月刊——參照)、ともあれこの三書は、負かに餘他の類書に傑出して、いはゆる名實形神相應せる大辭書として推稱するに憚らぬところである。(四)『佛教辭典』は、斯界の『言海』を以て任ぜるものであつて、よく小冊中、廣汎に亙れる內容を有するものとして、初學坐右に備ふる適書として推すべきであらう。(五)『佛教辭林』は、その編纂の方針、國文學中にあらはれたる佛語を解釋するにあり。乃ちその編纂の豫備として、先づ佛語解釋に就いての適書たる『法華經新註』・『大智度論』・『翻譯名義集』・『釋氏要覽』・『八宗綱要啓蒙錄』・『三國佛法傳通緣起典據』・『七帖見聞』・『眞宗法要典據』なる八種の索引を作り、而して

その語句を解釋して以てこの書一篇の成立を見たわけである。編者藤井宣正氏事業の中途にして長逝し、更に島地大等氏これを補校して刊行されたのである。同じく初學の參考に供すべきもので、殊に卷末に如上佛典八種の索引を附せるは、學徒を益するところ一層多きを加ふるところといはねばならぬ。(七)・(八)は、共に、梵藏對照の佛教名辭集たる "Mahāvyutpatti" を譯せるもので、(七)の梵漢對譯たるに對し、(八)は更に藏和譯名を加へてゐる。たゞし(八)は、更に續卷を以て、その索引を附し、考證を加ふる豫定であるといふが、未だ刊行の運びに至つてゐない。

以上は、もとより佛教の各面に通じての辭書であるが、その他に、なほ一宗一門にのみ限れる特殊の辭書が尠くはない。左の如し。

一〇　禪宗辭典禪林象器箋　一卷　道忠撰(明治四十二年刊)
一一　秘密辭林　一卷　富田斅純編(明治四十四年刊)
一二　眞宗故事成語辭典　一卷　沼法量・小塚義國編(大正二年刊)
一三　禪學辭典　一卷　神保如天・安藤文英共著(大正四年刊)
一四　禪宗辭典　一卷　山田孝道著(大正四年刊)
一五　本化聖典大辭林　三卷　師子王文庫編輯部編(大正九年刊)

これ等は、何れもその題號の如く、各々宗門特殊の辭書として、その專攻學者に便益を與ふるものである。就中(一〇)『禪宗辭典禪林象器箋』は、德川の中葉、臨濟宗の學僧道忠の撰せるところであつて、原本總じて二十卷あり、卽ち禪家に用ゐる名目を類聚し、一々その典據を擧げてこれを釋せるものである。古來寫傳を以て、大に珍重されてゐたのであるが、明治四十二年に至り、合冊一卷として單行された。(一一)『秘密辭林』は、從來その窺知の困難なりし密敎々義に就いて明晰なる解說を加へしものであつて、實に斯界破天荒の企圖と稱せねばならぬところ、かの敎獨得の事相の說明は本書によつて最も容易に會得されよう。(一二)『本化聖典大辭林』は、田中智學氏主裁の下に編輯大成されしところであつて、日蓮敎義研究上不可缺の大辭書と謂つべきものである。たゞ終始通じて、その叙說の態度に、最も編者が日蓮主義の色彩の露出せるは、研究手引たる辭書の性質上異樣の感を惹かぬでもない。さはれこれ、やがて編者が獨自の面目といふべきであらう。

以上の他、なほ若原敬經氏の『佛敎いろは辭典』、兒島碩鳳氏の『佛敎字典』等、擧げ來らば數種を求められるが、何れも皆舊式の編纂にかゝるもので、現代學徒の要求にかなふべくもなければ、殊更こゝに紹介するまでもなからう。たゞし、上來の解說にともなひ、なほ、

一六　哲學大辭書　三卷(索引一卷)　同文館編(明治四十五年刊)

に就いて一言々及する要がある。この書は、その題號の如く、元來哲學そのもの丶解說を主眼とせるものであるが、就中、佛教哲學として、特にその解說豐饒に記載され、何れも斯道專門學者の執筆せるところとて、說いて極めて精確なるもの、卽ち一面佛教辭書たるの觀を具へてゐる。洵に學徒の參考に資するところ尠なからざるものである。

因みにいふ、凡そ辭書の編輯たる、廣汎なる各種事項を所定の範圍に縮載するを要とし、加ふるに、その事に當るもの、大抵多數協同の所作に俟つあるため、相互意見の不同は、その記事の上にしばしば矛盾・相違を來すところが尠くはない。特に規模の大なる編纂ほどその失を免れ難きわけであるから、如上の各書を以て、決して完全のものとして認むべからざるところといはねばならぬ。さればこれが依用者にあつては、特に這般の點に心を用ゐ、乃ちこれ等に記載の解說を階段とするも、決してそれのみに止ることなく、更に必ず原典に就いて搜討することを怠らず、よつて以て精確なる研鑽を果遂せねばならぬ。かのいはゆる孫引等の態度に止つて、何等原典の檢覈を試みることなからむには、これ洵に研究精神を滅せる辭書の惡用者といはねばならぬ。特に學徒の三省を促す所以である。

次に上代に成りしものにて、猶且佛教辭書たるの性質を備へ、而も如上近代刊行のそれ等の根據となりしものとして、藏經中に幾多の類書を指摘される。『縮藏』纂集部に收むるところ、

次の六種がある。

一七　諸經要集　二十卷　唐道世集（雨一・二）
一八　經律異相　五十卷　梁僧旻寶唱等集（雨二―四）
一九　法苑珠林　百卷　唐道世撰（雨五―一〇）
二〇　翻譯名義集　二十卷　宋法雲編（雨十一）
二一　大明三藏法數　五十卷　明一如等集註（露一・二）
二二　教乘法數　四十卷　明圓瀞集（露三）

右の中、（一七）『諸經要集』は、廣く經・律等より諸種の事項に關する要文を類別纂輯し、以てその檢尋に便ならしめたるものであつて、次の僧旻等の『經律異相』に倣うて出せるものである。いはゆる（一八）『經律異相』は、これ等類書の先驅をなせるものであつて、その前序に、「鈔二經律要事一、皆使下以レ類相從、令二覽者一易上レ了」といへるもの、以てその性質を窺ふべきである。（一九）『法苑珠林』は、また前の二書と同一性質のものであつて、二書を大成せる趣きあり、卽ち最も精細を盡して、恰も佛教百科辭書の先驅とも見られ得る。古來學徒の珍重せること、洵に尤もの至りといはねばならぬ。（二〇）『翻譯名義集』は、梵語翻譯の名義を類集せしもので、また佛教辭書として、廣く依用されしところである。（二一）『大明三藏法數』は、一より八萬四千に至るまで

で、數によつて佛教の術語を列ね、これを解說せるもので、由來佛教には數目の名辭が甚だ多きため、この書はこれが研究に應ずるものである。(三三)『教乘法數』は、また前の(三二)と同一趣旨に出でしものである。なほまた、

二三 釋氏要覽 三卷 宋道誠撰

といふあり、佛典中の名目・故事等を解說せるもので、同じく廣く依用されしところである。かの『佛學三書』と名け、佛教研究の要書として刊行されしものは、卽ち『諸乘法數』・『翻譯名義集』にこの『釋氏要覽』を合輯せるものである。その他、『藏乘法數』等、類書なほ尠なからず、而してそれ等の中には、近代翻刻されしものもあり、かくして普く、學徒の間に需要され來つたわけである。さりながら、凡てこれ等は、概して辭書風の性質を帶びてゐるとはいへ、到底現時の科學思想を基調とせる編纂法に成れる各種辭書と同日に語らるべきものではない。たゞ所詮は、何れも現時のそれの根柢となりしところとして、專攻學者の披見の要を認むる所以である。

結　論

上來、章節を重ね、いさゝか書史の體裁に擬して、佛教研究の方法を敍せるわけであるが、今や篇を終らむとするに方つて、なほ、一部に通ずるいはゆる結論として、現存經典の成立に關する問題を敍說するは、必ずしも無用の沙汰ではなからう。蓋し、先にもいへる如く、現存の經典、いはゆる藏經こそは、佛教研究に於ける文獻資料中の首位を占めゐるものであつて、而してこれが成立問題たるや、各々經典の價値、および、それに伴ふ敎學の上に最も密接なる關係を有するものなれば、學者の、須らく潛心討査すべき緊要なる研究對象といはねばならぬ。然らば、この問題こそは、實に本講最初の藏經篇と呼應して、佛典研究に關する結論の概念を構成するものといふべく、希くは、初心の、よつて以て、經典上の一般知識を會得さるゝ所以であるとおもふ。

さて、經典の成立たる、その由來は、かの數度に亙る佛說の結集に起因せることは、いふまでもない。さりながら、釋尊自らにあつては、もとより現今の成形の如き經典を著述されしわけではなく、たゞ隨時隨所に散說されたるに過ぎない。その、これを編纂し結集せる結果すら、そのまゝ現今の成形に於ける經典と見做すべきでは、決してないのである。そもそも佛陀の入

滅に際して、その亡き後は、專ら說き遺せる法と律とに依れと訓誡されし(五五頁參照)金言は、いたく佛徒比丘の腦裡に銘されしものゝ如く、渠輩は、これを以て佛陀の法身として尊重し、相承奉持して以て後昆に傳へたわけである。併しその當初は、かの結集に於ても、たゞ佛說を合議組織するといふに止り、卽ち口誦で以て相傳するに過ぎず、決してこれを書寫し記錄するといふわけではなかつた。その書寫記錄を見たるは、確たる年時は知られねど、とにかく遙か後代のことたるは、疑ふべくもない。既に述べしが如く(八頁參照)、『錫蘭島史』によるに、紀元前八十八年に卽位せる錫蘭のアブハヤ、ヴッタガーマニ王の時、從來口誦を以て相傳されてゐた土語の聖典が、始めて記錄されたとのことであり、また『西域記』によれば、第四結集、卽ち迦膩色迦王が『毘婆沙論』の編纂を終るや、赤銅の板にその論文を鏤刻し、これを石函に密封して奉持したと傳へられてゐる。蓋し、これ等を以て、印度に於ける經典書寫の最初の事實と見做すべきであらう。而して、迦膩色迦王の出世は、紀元第二世紀の初頭なれば、卽ち經典成立の基準を、紀元前後と定めて大差なからうとおもはれる。

さりながら、かの四回に亙れる結集の史實はもとより、それ等の經典成立の消息の如きも、いづれも小乘經典のみに就いての所談であつて、大乘經典に就いては、何等確たる史實を認められぬ。普通大乘經典の出現は、馬鳴の時代、卽ち佛滅後六百年頃(紀元第二世紀の中葉)に至

つて、忽然として流行せるもの丶如く傳へられ、而してその消息としても、極めて奇怪糢糊たる沙汰に出でゝゐる。たまたま結集の所談あるとするも、そは極めて現實に疎き傳說たるか、または、明かに小乘のそれに模倣して揑造せる妄說たるに過ぎない。玆に於てか、佛敎硏究上の一大問題とされた、いはゆる大乘非佛說の論議が釀されたわけである。げにこの問題こそは、經典成立に關する重大なる事件として、各々經典の價値、および、それに伴ふ敎學の上に密接なる關係を有するものなれば、古來、敎徒の、辯難論議甚だ努めたるところである。されば吾人は、經典成立問題として當然逢着すべき這般の消息に就いて、いさゝか考察するところがなければならぬ。

それ大乘非佛說の問題は、近代に至つて喧しく論議されたところであるが、これが濫觴は、極めて上代にあつたので、卽ち佛滅後餘り遠からぬ當時よりして唱道されたわけである。傳說によれば、佛滅後程なく擧行された五百結集の際にあつて、既に保守と進取との兩系相對立して、異論の色彩を示したといふ。その事實の是非は姑く別とするも、とにかく、當時よりして系統の立派のあつたことは、否まれぬところであり、而してその色彩の分岐が漸次濃厚となつて、終に顯然たる敎團の分裂を呈するに至つた、―いはゆる上坐。大衆の兩部となつてあらはれたのである。その形式的分裂の動機に就いては、南北の兩傳所說を異にしてゐるが、既に分裂

せる以上、自他互に反目批難を交すことは、いふまでもないところである。即ち、兩部が互に自說を眞として是認し、他說を僞として否認したので、この眞僞是非の態度こそ、やがてこれ、佛說に契應せると然らざるとを揚言せるものと認むべく、更に明確にいへば、佛說・非佛說の問題がこゝに起り來つたことゝなるのである。然らばこの問題の萌芽は、實に佛滅後程なき往時に溯つて討ぬべきものといはねばならぬ。たゞし、如上の佛徒分裂のことたるや、齊しくこれ小乘敎中の事件なれば、その中にて、今のいはゆる大乘の佛說・非佛說の起源を云爲することは、一見非理の沙汰と早計されぬでもない。さりながら、かの小乘進取派の思想は、やがて後代の大乘敎義を釀成すべき素地をなせるものなれば、保守派の敎徒よりして、これを目して非佛說と斥けたることは、即ち大乘を非佛說と罵れることゝ同一の意義たるわけである。

その後、大乘佛敎興起してよりは、それ等の論師は、いづれも口を極めて小乘佛敎を罵倒した。これがそもそも小乘敎徒の反感を買うて、終に大乘を非佛說呼ばゝりする聲を高めしむるやうになつたわけである。上述の如く、大乘敎の興起は、普通佛滅五六百年代に置かれてゐるが、一方支那にあつては、當時、ほどなく幾多の大乘經典が譯出されゐたる點より推考せば、本土にあつては、大乘敎流行と同時にその經典の成立したることも知り得らるゝ。されば、現今成形の大乘經典は、少くともかの迦膩色迦王時代に成れる小乘經典と餘り時代を隔てぬ後代に成

立せるものたるを窺はるゝのである。たゞ、這般の消息に關する文獻の確たる明徵なきは、甚だ遺憾とすべきところなれど、如上の事情より推して、大小兩乘その思想の新舊はとにかく、その經典の成立に於ては、さまで距離間隔がなかつたことゝ思はれる。

然るに、この兩乘の間に於て、激しき反目を來し、佛說・非佛說の論爭の釀されたのは、雙派異計の確執もさることながら、上の如く、大乘論師が極力小乘佛教を罵倒せるため、小乘教徒の反感甚だしく、終にこの現象を見るに至つたことゝいはねばならぬ。見よ、爾後の龍樹・提婆等の大乘論師は、その著書の上に、極めて辛辣に小乘教義を罵倒してゐるではないか。(『十住毘婆沙論』第五。『智度論』第六十三。『外道小乘涅槃論』等參照)。小乘教徒がこれに對する唯一の防禦武器として、大乘非佛說論を放言したことは、蓋し極めて自然の沙汰といはねばならぬ。惟ふに、大小兩乘を比較するに、その教義の淺深、理路の高下に就いては、小乘はもとより大乘に抗すべくもあらぬが、もしそれ史的考證の一面に就かむか、小乘は大に大乘に優先して、現實に契卽せるものがある。何となれば、大乘經典の由來たる、既にその結集に於て曖昧なる上に、或は卷籍龍宮に潛在してゐたといひ、或は邊陬の山巓より墜下して世に現はれたといふが如く、到底、常途にては首肯し得ざる奇蹟が傳へられてゐる。加之、その內容に於ても、藻思華麗典雅にして極めて詩的風趣を呈し、到底素朴質實なる表現とは認められぬ。然る

に小乘經典にあつては、既にその成立の上に確固たる史實を有せるに加へて、その內容極めて如實單純なる敍說に出で、一見謹しも、その何れが原意の直傳なるかを認むるに難くはない。かくして與起せる大乘非佛說論は、實に小乘敎徒の大乘敎徒に對する敵愾運動と見做すべく、而してその目的の、或る程度まで成效せしことも、またまさにしかあるべきところとして首肯され得る。宜なるかな、小乘敎徒のこの來難に辯護せし人々は、龍樹・提婆の後にあつても、無著・世親・護法・堅意等、何れも大乘敎徒中の錚々たる偉人であつて、而もそれ等の偉人を以てして、なほかつその辯護に、苦心の遮蔽なるものあり、甚だ曖昧不通の辯疏に止まるのやむなきに至れるより見るも、這般の勝敗是非は大概察知さるゝわけである。

凡そこの佛說・非佛說の問題たるや、これ明かに歷史問題であつて、決して敎理問題ではない。卽ち、大乘敎が果して釋迦佛によつて說かれしや否やを檢覈するものなれば、これ疑もなく歷史上の問題でなければならぬ。非佛說論者は、さすがに歷史的の考察よりして佛說論者の牙城に肉迫して來たのであるが、佛說論者は、何等這般の性質を辨へずして、全然史的考證を無視せる辯護を執れるため、到底非佛說論者の攻擊に耐へ得らるゝわけではなかつたのである。試みに思へ、歷史上の釋尊が一代の敎說中、何時、何處に於て大乘を說かれたであらうか、はた如何なる記錄に、その大乘說法を傳へてゐるであらうか。これを歷史問題として考察する

とき、そこには、何等這般の消息を探ることが出來ないではないか。かの普通いひ傳へらるゝ一代五時の教說たる華嚴・阿含・方等・般若・法華涅槃の次序の如きは、もとより天台大師が思索討究の結果になれる考案に他ならず、況むや、これを年時に配當するが如きは。(華嚴は三七日間の說法、阿含は十二年間の說法との如く)、無論一往の假說に過ぎない。然らば、釋尊所說の史的事實より推せば、大乘非佛說に對する辯護は、何人が試みるとも、極めて困難の沙汰といはねばなるまい。

さりながら もしこれを教理問題として取扱はむか、大乘は立派に佛說といはねばならぬ。何となれば、由來大乘教理にあつては、佛陀は決して釋尊一人のみならずして、實に無量の諸佛あり 而してそれ等の諸佛は、各々甚深の妙理を演說して 衆生教化を行はせらるといふ。然らば、眞理に契應せる大乘の極說は、たとひ釋迦佛の說法にてこそなけれ、餘他の佛陀の說法といふに憚りなかるべく、さてこそ、大乘の佛說たることを優に揚言さるべきである。況むや、佛々同證の點より見て、他佛の說法、そのまゝ釋尊の思想と見做すべく、――否むしろこれ釋尊の思想の開顯されたるものと見做して然るべきではないか。かつそれ、大乘教理は甚妙至極にして、到底小乘教理の、よく談を共にすべきところではない。されば、一往は、歷史的釋迦佛の說でないとするも、何ぞその價値に傷くるところがあらうか。世上幾多の佛徒、大

乘を非佛說とだにいはゞ、愕然として、大乘敎理の崩壞さるゝが如く危惧するものあるは、洵に迷妄の見解といはねばならぬ。

かくて、印度以來の這箇佛說・非佛說の問題は、その後の繼續幾久しく、支那を經てわが國に來り、近世德川の中葉、かの富永仲基等によつて、またもや歷史上より非佛說の批難あらはれ、ために、敎壇多少の論議を見たが、更に明治時代に至つて、博士村上專精氏等、大に愕々の論陣を張つて歷史的非佛說を云爲し、これによつて、敎界・學界上下に震撼し、洵に目ざましき論戰が釀された。同氏の『大乘佛說論批判』は、這般の問題に綜合的批判を下せる名著であつて、如上の歷史問題と敎理問題との區別の如き、最も明快に敍述されてゐる。

さりながら、かくこの問題を取扱ふに方つては、歷史と敎理との兩面を甄別して論議すべきわけではあるが、凡そ釋尊の如き至聖の思想を窺ふに際しては、單に飽くまで史實の上のみに拘泥して、狹量なる忖度を恣にするが如きは、決して正鵠なる解釋に就けるものといふことは出來ぬ。何となれば、元來歷史は、事實の眞相を傳ふべきものなれど、その事實の皮相外面はとにかく、もしその思想內面に至つては、これを傳ふる史家は、尠くともその眞相を的傳し得る思想と識見との所有者でなければならぬ。然るに、釋尊の如き衆人に超越せる至聖にあつては、誰かよく、如實にこれが思想內面を把握し表現し得られよう。恐くそは、極めて困難

の沙汰といはねばならぬ。然らば、今の佛說問題の如きも、單にこれが記錄・史實になければさて、よつて以て早計に佛說を否定し去る如きは、極めて淺薄なる獨斷といふべきではないか。洵に、思想討究者の潛心三考すべき點は、這般に存するわけである。されば、從來の非佛說論者が、史的背景に倚つて攻擊せし論議の如きも、一往は、如何にも尤もらしき態度と見做すべきわけではあるが、更に再往細考を逐すに於ては、實に由々しき缺陷を應せることを認められる。されば渠等が論撓の態度も、更に深刻なる思索の洗練を加へむか、早晚一變せざるべからざる破目にあつたのである。かくて學界の趨勢は、その後、大乘の非佛說たることは、一往既定の事實の如く是認され來つたわけであるが、果然、最近これに關する學者の見界に、甚だ從容たる解釋が示され、その思索の逕路、大に圓熟せる結果を認めらるゝに至つたのである。卽ち、かの非佛說論の主將であつた村上博士の如きは、『哲學雜誌』第四百八號、及び"*The Eastern Buddhist*" Vol. I, No.2 に書を寄せ、從來の單純なる非佛說論を捨てゝ、凡そ佛陀釋尊の說法は、これを小乘ともいふべからず、大乘ともいふべからず、强いて名くべくんば、たゞ根本佛教。原始佛教といふべく、その兩乘の名義の如きは、何れも後代の稱呼であつて、これ卽ち發達佛教を意味せるわけであるといふに至つた。その說くところ、殊更新奇な點を認められるといふではないが、これ卽ち、總じて偉大なる思想は、その含蓄極めて多ければ、正反

何れとも解し得て、決して早計なる批判を下すべきにあらざる如上の見地よりかゝる結論に出でしものといふべきで、洵に思索討究者の到達すべき尤もなる結果と云はねばならぬ。この意味を布衍せば、いはゆる大乘教理の如きは、たとひ歷史的に釋尊の說法と認むべき面影を探り得ざるにせよ、釋尊の思想中には、もとよりこれが思想が含蓄されしところであつて、從つてこれを開顯せるものに他ならざれば、これを稱して釋迦佛の教說といふに何等妨げなかるべく、されば、かの天台五時の說明の如きも、釋尊所懷の思想を巧みに分類按排せるものといふに憚りなきところである。あゝ佛說か非佛說か、その何れにあれ、凡そ現今成形の經典たるや、これみな原始の素型より漸次發達せることは、否むべからざるところであつて、要は、原始金口の直說なるを以て尊崇すべく、後代發達の結果なるを以て輕視すべしといふのではない。眞理は、說者の如何によつて輕重を測るべきでないことは、近時問題となれる『起信論』の作者が、たとひ印度の馬鳴にあらずして、まさしくは、支那に於て僞作されたものであるとしても、該書の價値に、少しも變るところなきがやうである。アリストテレースいはく、「プラトーンは尊むべし、されど眞理はなほ尊し」と。わが佛教にいはゆる「依レ法不レ依レ人」の言と併せて、深く省慮するところなければならぬ。かくして、經典の成立問題を訊ねて吾人の教へらるゝところは、現今の藏經中に、佛說として收められたる經典の何れもは、たとひ、その小乘たると大乘たる

ことに論なく、何れも佛說のそのまゝにはあらずして、後代に、漸次の發達を經て、潤飾加增されたるものに相違なけれど、而もこはこれ、悉く佛陀の思想を體會し。これを如實に表現せる佛說として、いよいよ尊重すべき至敎たるを了知する點にある。徒に歷史にのみ拘泥して、至聖の思想を狹量に忖度し、以て經典の價値にまで左右を及ぼさむとするが如きは、かの非佛說論の叫聲に、ひたすら驚愕の眼をみはつて、ゆゑなき杞憂の態度に出づる如きと共に、決して正當に佛敎を理解せるものといふことが出來ないのである。

佛教研究法　畢

ラ　行

ワ　行

──(終)──

マ　行

ヤ　行

ハ　行

ナ　行

タ　行

サ　行

カ 行

人名索引

ア　行

ワ　　行

——(終)——

ヤ　行

ラ　行

マ　行

ナ　行

ハ　行

タ　行

サ　行

カ　行

索　引

1. 書名は、本書に出でたる殆んど凡てを網羅した。中には、餘り必要と認められぬものもないではないが、その取捨は差控へることにした。書名中歐文名稱は、特殊のものゝ外、便宜上邦語に譯して擧げた。その「巴文」、「梵文」、「英文」等といふは、夫々の所詮の言語を示し、また「英譯」、「獨譯」等といふは、原本より夫等の語に譯されたものであることは、いふまでもない。
2. 人名は、書史を語るに必要なるものを主とし、これに加へて、佛教史上有名なる人々をも擧げておいた。

書 名 索 引

ア　行

大正十二年二月七日印刷
大正十二年二月十日發行

佛教大觀第十編　佛教研究法

定價　貳圓五拾錢

著作者　深浦正文

發行者　高島米峰
東京市小石川區原町六番地

印刷者　柴山則常
東京市本鄉區駒込林町百七十二番地

印刷所　合資會社杏林舍
東京市本鄉區駒込林町百七十二番地

發行所
東京市小石川區原町六番地
電話小石川一二八番
振替口座東京一五六八六番
丙午出版社

please
keep
this
page

(5)